大正八年七月二十日印刷
大正八年七月廿五日發行

不許複製

第六輯奥附

非賣品

編輯者　東京市麻布區新網町一丁目廿二番地　足立四郎吉

發行者　東京市神田區通新石町十六番地　矢野惣次郎

印刷者　東京市神田區鎌倉町三番地　百目木智璉

印刷所　東京市神田區鎌倉町三番地　株式會社共榮舍

發行所　東京市神田區通新石町十六番地　大日本風教叢書刊行會

事務所　東京市神田區南神保町三番地日新閣内　同會事務所

ば、先づ我が本心を知らねばならぬ事でござる。我が本心を知りて見ますれや、我といふものはござらぬ、我といふものがないによつて、我を愛せうやうがござらぬ、ハイ我を愛せいで、その外に何が欲が起らふぞ、欲がなけれや、今いふた通り、善事だらけでござる、ハイかうじやによつて、皆本心を御知りなされといふ事でござる、返す〳〵もすておかず、急々に志をおこして知るやうにさつしやれい、此時満座の聴衆悉く感歎作禮し去る。

齋之某謹述

いふ程は云ふたがよい、ハイそれもかくべつめつそふに、人の難義するほどねぎらひでも大事ない事でござる、ハイ又滅法界にかけねをいふ事が、利口なことでもござらぬ、此人欲を捨てゝ見ますりや、第一我といふものがないやうになります、我がないゆゑ、我身を愛しはしませぬ、我身を愛せぬによつて、自然と家業に無精な事はござらぬ、ハイ其通り家業に精が出るゆゑ、身を榮耀榮華に持たぬによつて、殖ふとはしませねども、おのづから錢かねが殖ゆる道理でござる、ハイ元來身の欲がないによつて、大食大酒をし、身持を惡うせうやうはござらぬ、その通り養生がよいゆゑ、壽命を延さうと思はねども、おのづから長うなりますハイ扨又身を愛せぬによつて、我が勝手づくがない、勝手づくがないゆゑ、家内では人遣ひに無理もござらず、世間へ出ては人交りに、無理非道がない、ハイじやによつて家内でも世間でも、誰が惡まふやうがござらぬ、これでは善事だらけじやによつて、どのやうなむづかしい兩親でも、微笑はぬ人はござるまい、まして世間並の子を、大切に思召す兩親なら、猶以て悦ばしやれいでかなひませうかこの通りでござつて、人欲を捨れば、善事だらけでござる、ハイ之を捨ふと思へ

ると、おもふて居るが、それと同じ事でござる、ハイ皆人も其通りで、我がこれほどにすればこそ、金も殖へれとおもひ貪るが、愚かな事でござるハイ我がする〳〵と一切我手ですると思ふて居るが、其味好いたのは、それは我が肩のよいといふもので、我が力で是がどうしてゆくものでござるぞいの、そうじやござらぬか。さうじやといふても、我が力でゆかぬものじやといふて、精も出さんと置てはゆかぬ、只隨分精を入る事は、いれねばならぬ、ハイ只欲を深うして、物を貪つたり、無理非道な事をする樣な事は、止めたがよいといふ事でござる、ハイ商賣の利も取るべき程とるを、非道とはいひませぬ、又紀州の椀屋のはてじやといふた乞食がござつたが、これは通らしやれと、どのやうに慳貪に云ふて、、唯といふて忽ち通りました、ハイそれでもみごと食て通つたが、却て皆人が憐みをかけ、後には、大かたどこでも、米錢をやる樣になりました事でござる、ハイ商賣も其通りでござつて、欲心を捨て出來ぬといふ事はござらぬ、とるべき程の利をとるを欲とはいひませぬ、掛ねもいふが欲心といふ事ではござらぬ、直段をねぎるを欲とはいひませぬ、大槩ねぎるべき程の事は、ねぎつたが好い、ハイ掛直も

六ッ　むごい事知らず、
七ッ　なさけがないゆゑに、
八ッ　家内がばた〳〵と、
九ッ　小言のたえまなく、
十で　とんと仕舞た。
貪欲に色と酒とに朝ねせば、
いのらずとても神や守らん。

虚白齋

朝倉新話（廿四丁目）

東郭子曰、多く世上の人は、欲を捨てゝは商人は、商賣はならぬやうに思ふて居さしやるが、大きな誤りでござる、ハイそれを譬へていふて見よなら、彼鳥邊野へ行く道に、申〳〵何卒〳〵下されませといふ盲乞食がござつたが、柳ごりを人の通られぬ程手を伸し、つき出しまして、我が斯うすればこそ、米錢をもらへ

五ツ　いつゝの人のみち、
六ツ　むりせず無理いはず、
七ツ　なかよくまじはれば、
八ツ　やうちがうれしがり、
九ツ　子たちや孫までも、
十で　富んでさかえた。
　福太極を見なさいな、

　貧乏神のいはく、
一に　いぢりきたなうて、
二に　苦がい顔つきで、
三に　先ぐりばかりして、
四ツ　欲がふかさに、
五ツ　いつもたらはひで、

堵庵

(チ)詩書。詩經と書經とのこと。

て物の命を害する勿れ、不義の財を見ては取ること勿れ、合義の事に遇へば則ち從ふ(チ)詩書は學ばざる可からず、禮義は知らざる可からず、子孫は敎へざる可からず、奴僕は恤まざる可からず、我の分を守る者は理なり、我の命を聽く者は天なり、人能く是の如し、天必ず之を相みる、此れ乃ち日用常行の道にて、衣服の身體に於けるが若く、飲食の口腹に於けるが若し、一日も無かる可からざるなり、謹まざる可けん哉。

○

貧福の功能

福の神いはく、

一に　一切すなほにて、
二に　にうわで慈悲ふかく、
三に　さからひあらそはず、
四ッ　よしあしわきまへて、

百行の廣略は之を身に實にし
萬善の大本は之を口に語たる

父の貴ぶ所の者は慈なり、子の貴ぶ所の者は孝なり、君の貴ぶ所の者は仁なり臣の貴ぶ所の者は忠なり、師長に事へては禮を貴ぶなり、朋友に交りては信を貴ぶなり、老者に見えては之を敬し、幼者を見ては之を愛す、德ある者は年我よりくだると雖も、我必ず之を尊ぶ(ソ)不肖者は年我より高しと雖、我必ず之を遠ざく、愼みて人の短を談ずる勿れ、切りに己の長を矜る勿れ、讎將さに義を以て之を解かんとす、怨みある者は直きを以て之れに報せよ、人小なる過ちあれば(タ)含容して之を忍べ、兄の貴ぶ所の者は愛なり、弟の貴ぶ所の者は敬ひなり、夫の貴ぶ所の者は和きなり、婦の貴ぶ所の者は柔なり、人大なる過ちあれば理を以て之を責め、善の小なるを以てして爲さゞる勿れ、惡の小なるを以てして之を爲す勿れ、人惡しきこと有れば則ち之を掩ふ、人善あれば則ち之を揚ぐ、公に處しては私の讎なく、家を治めて私の法なし、人を損して己を利する勿れ、賢を妬みて能を嫉むこと勿れ、怒りを逞くして以て横逆に報ゆること勿れ、理に非ずして以

(ソ)不肖者。親に似ぬ馬鹿者のこと
(タ)含容。ふくみいれること。

（七）かてば。克てはにて、私欲をおさへること。

志

問、我諸人を救ひたき志あり、然れども先づ無二學文一、無二錢金一、無二知惠一、無レ力、如レ此にても、無造作に三千世界を救はるゝ事ありや。

堵庵答、いかにもこれあり、或秘傳に云、苟も仁に志さばあしきことなしと、又一日己が私欲に（七）かてば、天下の人其仁に歸服するとあり、これ又佛も同じ彌勒菩薩の願はわれ一切の衆生の貧苦の無きやうにしてやりたし、不孝の子不忠の臣なく、不慈なる主親なく、夫婦兄弟朋友、諸人無理非道にて互にくるしむ事なきやうにしてやりたしと、骨髓に徹して思ふとのたまひしとかや、一心は自他のへだてなきもの故、儒佛とも唯だ我一人の志が、直に世界と一體なるによつて自然に世界をすくふになるとなり。

○

新實語教

恕といふは、我天より受け得たる直なる本心にひきあて、その忠の所より思ひはかりて、いやとおもふ事は人もいやなりと知りて、其いやなる事は人へしむけぬ事なり、故に先づ本心を知らねばならぬなり、本心を知らねば、忠といふ地面平かになき故、物の長短をくらぶるに、根本にくるひありて、末のところわかりがたきが如く、人欲の身勝手にひかれて、心の地めんくるひて、善悪に無理が出來る也、然れば主君に事ふるに、我家來のしかたあしきとおもふ事は、必ず主君へさやうの事をいたさず、親に事ふるには、我子のしかたあしきと思ふ事は、必父母へさやうの不孝いたさねば、きつと主親の御心に合ふなり、又主君親へ子や家來が、かやうに致しくるれば、うれしきと思ふ事を以て、其通りを能く盡して主親へ事ふれば、自ら忠孝となるべし、夫婦兄弟朋友、其外世間の交はり、皆此恕をおし弘めて、用ひよと聖人もをしへたまひしなり。

○　　　　　　　　　　堵庵

ぞ、手まへに孝行盡せども、向ふに機嫌のわるいのは、きげんのわるいのではない、手前の孝行がたらぬなり、手前にまことをつくせども、向ふにうけの悪いのは、うけのはるいのではない、手前の實のたらぬなり、ずゐぶん心のしゆぎやうめされ、とり分婦人は、ぐちなきものにて衣裝のよごれ垢づいたをば、耻なる事におもへども、行跡のよごれたり、身持の垢付いたをば、耻づる人はすくなく、髪かたちの見くるしきをば、はぢとおもふて、朝夕に摺り磨き、鏡にむかひたしなめども、心のきたなくみにくきをば、耻かしいとはおもはぬにや、たしなまんとする人まれなり、淺ましきことにあらずや。

歌にも

我心鏡にうつるものならば、
さぞやすがたの、見にくかるべし。

○

恕

（ス）なめ。無禮の意。

も腹の立つものはないに、何ものが腹を立てたぞ、何もひがんだ物はないに、何ものがひがんだぞと、恥しいやら、おかしいやら、こわい夢の覺めたるやうに、今では氣樂に成りました。男も女も、誠の道をしらざれば、我身でわが身をくるしむるのみか、人までを損ひます。

　嫁顏をあかめていはく、おはなしを聞きまして、わが身のわるひといふ事を、少しは得心いたしました。今おもひ合しますれば、わたしが姑御にかぎり、つゆほどむりな事はいはれませねど、じうとめは嫁を憎むはづの物じやと心得ちがへておりますゆゑ、何角につけて氣がひがみ、嫁いりした當座の愼みはどこへやら名染がかさなればそろ〳〵と（ス）なめが出て、憎むやくの姑には、憎ましておいたがよいと、みづからひがみ、何事も口先斗りで間にあはせ、孝行する役の、孝行は棚へ上げあまつさへ、しうとめを譏つて聞かす人あれば、味方にして馬があひ、ほむる人には心をおき、嫁の方からへだつるゆゑ、佛のやうな姑でも、中のよからうはづはない。

　老女の曰く、なるほどそなたの言葉どほり、我よきに、人のあしきはなきもの

(コ)さがない。わるきこと。

(サ)有るべかゝり。あつた其とほりのこと。

(シ)佐平治。人の名。馬鹿にすること。

かあいそうに嫁のわるいはすくない物じや、若い身なれば、たしなみも有て、口の(コ)さがないは、聞きにくいものじや、腹立つる顔は見ともない物じやと、流石に恥る所もあれど、年よれば其ひつぱりもぬけ。物事に堪忍情なく、少の事も見て居ず、聞いて居ぬやうに成り、夫とても(サ)有るべかゝりにいふてしまふか呵つてしまへばよい事を、底氣味わるう、じゆつながるやうにいひ、第一に恥かしきは、此はうに憎む心が有るから、己が死だら悦ぶであらふの、嘸死るのを待兼るで有ふのと、向ふに根からおもはぬ事を、みな此方のひがみから、能き事すれば、又(シ)佐平治をしやると思ひ、仕損ひすればすねるとおもひ、嫁が憎けりや、我子迄憎うなり、夫婦中がよければ、はな毛よまるゝとおもひ、けふは天氣もよし、少と野遊びにでも御出なされとすゝむるにさへ、心をまはし、女房に氣ばらしをさせんとて、めつたに己をおひ出しやるとひがみ、此ひゆるにあまりおせわなされずとも、炬燵へおあたりなされといへば、はや女房のひいきして、己に口を明さぬとひがみ、ねるに付け起るにつけ、氣のやすき間はなかりしが、此秋去る先生様の御しめしをうけたまはり、道の端を知て見れば、腹の内には何に

身　手過ち、しやすき物は、色と銀、
　　身用心せよ、これぞこわもの。

業　もろ〳〵の、病のおこる、そのもとは、
　　家業ぶ精で、おごりふ和合。

○

繪本雨やどり嫁姑の部

老女餘所の嫁に向ひて曰く、高きも低きも、姫御前は唯辛抱が大事なり、若いお人の目からには、私等が様な年寄をば、生拔の姥のやうにも思さんが、私も若い嫁であつたが、いつの間にやら姑になり、其方の様な嫁が有る、去年の秋の比までは、本にほんに、中がわるうて、互にしゆらをもやしました、我身爪つて人の痛さを知るといふは、我等を初め人のよういふ事なれども、我身爪つて人の痛さをしらざるゆゑ、姑といふ姑に、嫁可愛がるは稀な物じや、これとても上つかたさまや、よいしゆにはない事ならんが、下々の嫁姑、たがひに中のよからぬも

からずと思ひめぐらして、毎夜裸になりて、父のかたわきにふしければ、親の方へ、蚊の行く事なく、我身に皆とまりけり、いとけなき心に、かやうの事は、ためしなき事ども也。

無二膏や、萬能膏の奇特より、
　親孝行は何につけても。

○

五　用　心

水　海川で、のり急ぎすな積雨に、
　山と沖との鳴るは大事よ。

火　よく聞けよ、ほたるほどなる、たばこの火、
　心ゆるせば、はやかねのこゑ。

心　(ケ)意必固我、もとなきものを、こしらへて、
　凡夫づきんを、かぶるかなしき。

(ケ)意必固我。論語に意なく必なく固なく我なしとて此一つあれば聖人

それをうりて、葬禮をあつくすべし、其うり物といふは、我身なり、妻あらば妻だけうりものおほし、まづ其所にて、金もちの買ふてくれそうなる人へ、相たのみ、そのわけをかたり、忌中は身も火もけがれあれば、五十日の間は御ひま下され、其後は死するまで、一生いかやうに成りとも、なされ、御つかひ下さるべし外に何も望みなし、たゞ此度の葬禮の入用だけ御かし下され候へといひて、此たびの入用だけかりうけ、さて在所近在まで、なじみのかたへ廻り、此度親相果、葬禮にぎやかに仕たし、何とぞ御なじみの事に候へば、近頃御苦勞ながら、葬禮に御出下され候へと、そこらぢうをたのみありくべし、これこゝろ一ぱいの志ざし、ありだけのしかたなり、ゆきとゞかぬところはせんかたなし。

二十四孝第十二

呉猛は年八歳にして、孝ある人なり、家まづしくして、萬心にたらざりけり、されば夏になりければ、帷帳もなし、呉猛おもひけるは、我衣をぬぎて、親にきせ、我身はあらはにして、蚊にくはせたらば、蚊は我身をくひて、親にとまるべ

（キ）われを出かせば、我慢を仕とぐれはの意。

（ク）としへて。年たちてのこと。

天と地、父母の外我はなし、

（キ）われを出かせば不孝とぞなる。

堵庵

○

問、或田舍に孝子あり、甚だ貧きうの人なりしが、其親まさに死せんとする時、孝子へ遺言いたしける、我死せば念頃にあつく葬るべし、葬禮にぎやかに賴むよしいひける、孝子快くうけあひ、少しの山ありしが、それにて漸くほそ〴〵と世をわたりしに、その山を賣て、親の望みのごとく、にぎやかに葬禮し、我身は其のち、手と身にてかせぎ、また（ク）としへて、かせぎいだし、かの賣りし山も買ひもどしけるとなり。

右の親のごとくいふ時、其山とてもなく、何すこし賣るものなく、躶身の孝子ならば、其時はいかゞすべき、いかにもあつく葬禮すべしとうけあへば、親を僞るになる。さればとて、一錢の才覺も出來ずば、しかたなきなり、いかゞせんや。

手島先生答曰、その時いかにも快くうけあふべし、幸よき賣ものあり、我は

ども。人めを恥ぢて、顔つきは。案じぬふりし、世間へは。運のかたのと、つよ口の。胸のいたみは、たれか知る。子を持てこそ、あはれをも。知るといひしは、こゝのこと。殊に心を、ふかくいれ。おもひめぐらし、味ひて。母にまされる、父うへの。心のいたみ、思ひやれ。常のことにも(カ)やむめより。見るめがつらき、その實の。ふかき見るめに、なぞらへて。身に引あてゝ、思へかし、鳥は父母、よく知れど。獸は父を知らぬなり。唐のゑびすの、その國は。母のみおもく、たふとみて。父をかるしめ、いやしめば。獸にちかき、ふるまひと。聖の道の、きらひもの。異國こそ、是非なけれ。此の日本の、みをしへは、父母とゝなへて父うへを。重く尊び、母うへを。父になぞらへ、おもくして、尊びたまへ、子ども達。かくいへばとて、母の恩。かるしとなさば、あやまりよ、月日のごとく、おもへたゞ。一かたならぬ、ふた親の。御恩は高く深かければ、海山とても、似もつかず。かぎりなければ、たとへなし。孝行ばかり、しすごしはなし。

天は心すなはち父のかたみなり、
身は地にして母のかたみぞ。

(カ)やむめ。病人の身の上のこと。

すに似たりとも、心は花のみやこなりけれ」と、たゞ人は心なり、顔容のけはひは、おほかたにして、心言葉をよくけはひたしなむべき事なり。

親の恩

兩親の、恩をば知れよ、子たる身は、父母にうけたる、もとを知れ。父は天なり、母は地。天なる父に生れゐて。地なる母に、身をなして。十月の後に、此世へは。赤子の姿あらはれぬ。おろかなる身も、母の恩。みやすきゆゑに、よく知れど。みえがたくして、父の恩。母よりすぐれ、おもきわけ。知らぬはをしへきかずして。道辨へぬ科ぞかし。父は天にて、みえがたし。母は地にて、見えやすし。天はかたちに、あらはれず、地はかたちに、あらはれて。苦勞の姿、いちじるし。父の苦勞は、こゝろにて。まだ子のできぬ、まへよりも。子孫のために、妻をゑらび、愚痴の女を、あしらひて。行儀をゝしへ、引まはし。心持より、身持まで。よかれと思ふ。氣あつかひ、これ子を思ふ、もとゐなり。扨胎内に子をやどし。產るゝまでは、妻と子の。無事息才と、神ほとけ。心のうちに、たのめ

(オ)志眞多。こゝろざしまこと多きこと。

古歌に、

世の中のはかなき事を見きくにも、
はげみて親にねんごろにせよ。

又

今日とのみおもひて親につかふべし、
明日はたのみぞさだめなき世に。

○

佛教に女人を指して、外面は菩薩に似て、内心は夜叉の如しと云ふ也、髮首をつくろひ、外をかざらんより、内心を(オ)志眞多に持ちたきもの也、たとへ色白く、眉目かたち美しき女なりとも、其の心ひがみがたくならば、錦の袋に糞を包みたる如くにて、一旦人の目に入るといふ共、終に見落さるべし。又色くろく、見めわろき女房なり共、其物いひ立ちふるまひ神妙にして、心すなほに正しからば、太布に金をつゝみたるが如く、當座は男の氣にあはぬやうなれ共、後には奥ふかくたのもしく思はるゝ事、必定なり、古き言葉にも「すがたこそ、島のゑび

喧嘩の出來るも、間々ある事、喧嘩口論怪我過は、とりわけ親の氣を痛め、おやの心を苦むる第一の不孝なり、殊に童子の怪我過は、一生の病になるもあり、用心せねばならぬ事じや、偖又人に云はれぬ事や、人に隱す事などは、必々せぬ物じや、隱す事やいはれぬ事には、能い事のないものじや、よからぬと思へばこそ人にも隱す、譬へ人にはかくすとも、我が本心にはかくされぬ、能い事はよいと知り、惡い事は惡いと知る、これを地知る天知るとも、閻魔大王ともいふ、又常張の鏡ともいふ、明かなものじや、惡い事はならぬぞや、合點か〳〵。

年々歳々花相似、歳々年々人不レ同、花は根に歸れ共、またはる毎には咲くなり、人は花に似ず、中歳以後は、年々におとろふる也、世のはかなき老少不定の習ひ、有ば無く無きは數ふと讀みし理り、我も人も知らぬにはあらねど、驚く者なし、父母共に存命ならば、三樂の第一也、此たのしみ天下に王たれ共あづかり存せずと、孟子にいへり、今我幸に此樂を保てり、人の命はあすをも期せぬものなれば、忽ち思ひの外なる事にいたり、樂をむなしうしなば、悔ゆ共益有るべからず、只速かに志をはげまし今日ばかりつかふる日ありと、思ひとるべしとぞ、

（ウ）反哺。はみかへしのこと。
（エ）三枝。上枝に親鳥居れば兒鳥は下枝とやらに、父子兄弟夫婦の禮を知ること。又三枝の下に止りて敬ふの説もある。

を知らざるものは、かたちは人で有りながら禽獸にもはるか劣る、鳥の中にも、小づらの憎い鳥でさへ、親の恩をよく知つて（ウ）反哺の孝とて、親を養ひ、反すといふ、鳩に（エ）三枝の禮ありとて、巣の内の恩を忘れず、三枝さがつて親を敬ふ、鳥類さへかくのごとし、必親の恩を忘れて鳥獸におとるまいぞ、幼少の時は孝行とて、別に盡しやうもない、唯親の仰を背かず、諾々と機嫌よう、うそつかぬがまづ孝行、扨端々の幼童には、穴市などして遊ぶもあれど、必ず立寄て見るも惡いぞ、童のときの疵は、生長に成ても、除きにくい、少さいとき曲つた樹は大木に成ても、曲んで居る、穴一終に博奕になり、ばくゑきがかうじては、何にならうも知れぬ、強いものじや、扨又愼むべきは、喧嘩口論、町人百姓の喧嘩口論は、何國でも勝つたら負けじや、勝うとさへ思はねば、けんくわは出來ぬぞ、無理が通らばよけて通し、只何事も負けてゐるを、勝たざるの勝とて、人がはむる、扨又常々用心すべきは、怪我過、怪我あやまちは、せうと思ふてするものはひょとりもない、必ず危い所へ行かず必ず殆い事をせず、急ぐとも、辻々は必ず大きう廻るがよい、荷物にあたつて、怪我したり、怪我さしたり、或は人に行き當り

（イ）前訓。まへのをしへ。

誠に先入の言主となることの先賢の語、たがふべからず、幼稚の比より早く善道になれしむべし（イ）前訓尤も益あり。

教訓弄の貳丁目

閻魔さん〳〵、あゝ帳面消せよ、合點じや〳〵、幼童衆、久しう御目に掛らぬ、無理いふと、鹽付けて天窓から、がり〳〵と噛むぞよと人は萬物の靈といふて、あるとあらゆる物の中にて、人ほど尊い者はなけれど、惡ふ習ふと禽獸にも劣るといふ事、必ずうか〳〵聞くまいぞ、犬や猫の子を見るに、親の乳を放るゝと、はや親の世話いらずに、面々我身で我身を持つ、鳥類とても同じ事、巣立の後は親の世話に預らず、それ〴〵に我身を養ふ、人の子は產れてから親の膝を放れて後も、只假初で人には得ならぬ、喰ふも飲むもきるも卷くもねるも起るも疱瘡はしかはいふに及ばず、寒いに付け暑いに付け、親の苦勞を放るゝ間は暫しもない、五歲や六歲で親に捨られて見たがよい、乞食もようするものじやない、夫よりだん〳〵我身で我身を持つまでの親の御苦勞、海にも山にもたとへがたし、其大恩

敬ふといふは眞實あつくして、
おそれ背かずいふ事をきけ。
あはれむといふは實義にじひふかく、
幼きものゝ身がわりとなれ。

右は少し成長の奉公人子ども中へ申きけ侍る。

手島信拜

芝龜助のこと

河内の國國分村、芝氏十平の息龜助、八歳にしてよく前訓をよみおぼえ、身に行ふておこたらず、一日自らおもふ所をのべて之を書す。

其言に曰く

人と生れ來るは、おやかう〳〵の爲也、孝行にすれば、天からふくを下さる也、不孝にすれば、神佛のばちあたる也、孝行にせねば、犬猫もおなじ事也。凡そ一切の敎誨、勸善懲惡の外なし、八歳の童子の語、神聖佛の要道に合へり

はやう歸りて用をわすれな。
よその子をせぶらかすなよ我はまた、
　せぶらかされてしかへしをすな。
何事もうそをばつかず無理をせず、
　人と中ようせねばならぬぞ。
大口をいはず女子にざれあはず、
　男女の行儀覺えよ。

右

安永庚子（ア）季夏何某の子者へあたふ。　　堵庵書

守

傍輩は上をば兄とうやまひて、
　下は弟と思ひあはれめ。

（ア）季夏。なつのすゑ。

教訓我守

高田重充編

宋丞相文天祥語

忠

上事於君
下交於友
內外一誠
終能長久

孝

敬父如天
敬母如地
汝之子孫
亦復如是

子者いましめ五首

御主様の仰あることよくきゝて、
へんじ、ようして口ごたへすな。

使には、じやうだんをせずはやう行て、

教訓我が守

序

道はちかきにあり、事は易きにあり、見やすきかな、文章の身に切なる教戒を、謹んで拾ひ集め、小冊に編み、我がまもりと題して、常に懐にす。

高田重先

とからねば、外の藝はなくとも、人はわらふまじ、よしや笑ふとも、はづかしからず、親のじひには家を譲らば、身持心持我行ひの如くせよとて、此三つをゆづるべし、此三ッさへ立てば、家はおのづからたつべし此三ッなくば針を藏につみ富士を十づゝ十かさねたる財寶をゆづりたりとも下り坂に車をおすごとく成りはつべし、唯おもへ〳〵。

おとろへば、したしきだにも、うとければ、
余所人いかで我をとふらん。

子弟訓 終

（わ）にが異見。にが〳〵しきいけんのこと。
（か）穿鑿。せんさくものとて、おさがしものゝこと。

いとふゆゑ、次第〳〵に日にとけゆく氷のごとく、おとろへはてゝ後は、親のつくりみがきし家にはなれ、こひ求めし財寶を賣りはたし、一家諸人に見離され、親の位牌をも吊ひがたくなるぞ、あさましき事の限はなし、是本を忘るといふものなり、しかしながら、是ひとつは子のとが而已にもあらず、親の智の不足所よりおこる事也、親のおろかなるは、子のかわいさに、後先も見えず、身體もよくなれば、本を忘れて小袖に身を纏はし、己が職にあらざる藝を敎へ只高上なる事を見ならはせ、人のほめはやす事を悅びて、いよ〳〵外の事を長ぜさせて、遊友にまじはれば、惡所を居所として、金銀を費し、近くは親存生の內にならず者となりて、日々に惡所を好めば、其段には親も前のかはゆさはさめて、信實に憎くなり、（わ）にが異見しても聞き入れずして、後は耻かしき勘當（か）穿鑿に成り、遠くは親死して三年もまたずに、家を破却する事、目前のためしいくばくぞや、之を思ふに子を育つるは、其子のおとなしく、身をもたせ、善人を賴みて引きまはさせ、己が職を旨とし、學に心を入れ手習するも、己が職のためぞ、仁義禮智をあきらめ、理をきはめ、信をつくし、敬にう

に君子は、其獨を愼むとは、此いはれなり、人前をかざり、かげにて怠るものは、つくらひ者にて、信實の人間にあらぬぞ、よく思へ〳〵。

一、善人とならんに、我れ苦勞するが金銀の入る事ならば、なりがたきも、しかり、諸人に憎まれ、父母はいかりかなしまば、成りがたきも然り、善人に成るに苦勞する事にあらず、金銀の入る事にあらず、諸人は、之を譽め羨み、父母は悦びいさみ、其身は一生やすく、かくの如くなるに何とて善人にはならぬぞ其善人となりたくば、別の事にあらず、口にては惡事をいはず、身にては惡事を思はず、善事を學んで口に言ひ、善事を學んで行ひ、善事を學んで思はゞ自然に善人とならん。

一、人の富み榮えるは、先祖の其身をいやしくしておごらず、費をなさず、信あつて其職を勤めて、一生身をやすきにおかず、庶人の道をつくして、後榮ゆるぞ、然るを子孫の身をたかぶりあなどり、金銀を水の如くにつかひ捨て、律義を忘れ身を安樂にして、其職商を怠り、あるひは位高き人にまじはり、己が類にあらざる者としたしみ、遊人をまねき、しかも我が職を、ちりあくたの如く

一、人の身の分限をしらず、故らば、我もわらひそしるべし、それをおもひて、我が分限にしたがひて行ふべし、これ則ち禮なり分限を知らざれば、不足あり。

一、此三ッの物を、能くわきまへ、是非をたゞし、惡によらず、善にうつるこれ則ち智なり。

一、此四ッの事を、身にきりこむごとく、信實にするがこれ則ち信なり、四ッの物、人より我をおかさば、我心の至らぬ所ありと、身にかへり、身にかへり見て、彌々つとめはげめ、人をうらみいきどほる事なかれ、これ則ちよく敬むといふものなり、事々物々の、理のなきといふ事は、なきものぞ、其理をよくわきまへて、理に違ふことなく行ふべし、理に違ふて行ふ時は、わざはひあり、あやまちあるものぞ、其理の我がわからぬ事は、人に問ひ、我も考へて行ふを理をきはむるといふなり。

一、人はかげこそ大事なれ、我れ獨り居て行ふ時は、猶しもつゝしむで理を明らめ、信をつくすべし、人の見ぬ所にては必ず怠りの出たがる物なり、人不知といへども、我みづから心に覺えあるなり、是れ甚だ耻かしき事にあらずや、故

(ろ)居敬窮理。何事も常に敬ひて天理をきはめること

(た)仁恕。仁はひろくめぐみ恕はおもひやりのこと。

亦其筋になれたる人にとふべし、かくの如く、心得て朝夕に我が身持の實におこたりなく、放埒なく、色におぼれず、酒を好まず、おごる氣なく、人を敬ひ、言葉すくなく氣をしづかに持ちて、其あたる所々に敬みを持てつとむべし、仁も此内にあり、義も此内にあり、禮も此内に有り、智も此内にあるぞ、只我身をよく修めて、人を引きまはせ、我いやなる事は人もいやぞ、身を以て人の事をかんがむべし、何事も〳〵問ふて知るべし見て知るべし、仁義禮智(ろ)居敬窮理を一時も忘れずもて行ふべし、かくのごとく心をもたば、神へいのるひまなくとも、佛の道をねがふいとまなくとも、いのらずとも守り、ねがはずともすくひ給はん。

一、人なさけなく、我を憎まば、我うれしからんや、それをおもふて、人をあはれみ、じひをなせよ、則ちこれ(た)仁恕なり。

一、人に物を約束するに、人其約をたがへなば、我心よからんや、それをおもひて、約束を違へな、されば其はじめに、理非を考へ、なるまじき事は約束すな是則ち義なり。

れ、されども其魚一種のもてなしならば、かへしてもしかるべし、引物なんどに、我かたを引おとしたりとも、求めいふ事なかれ、飯を箸にてかきあげてさまして食ふ事なかれ、其味の善惡をいふ事なかれ、なます皿持て食ふな酢を吸ふ事なかれ、生魚は箸にて割れ、干魚は手にてもわるべし、貴人の相伴するは、まづ我はやく食掛りて、遲く仕舞べし、小口に食ひて、はやくのみ、音高くする事なかれ、酒ははかりなし、亂るゝにおよばざれ、亂るゝはわざはひの本也、是等は一事〳〵の敬みぞ、平生此の如くならはねば、人前にてにわかにはならぬ物なり、此あらましに限らす、推しはかり思ひつけて、何事も知りたる人に尋ね覺ゆべし、つとめに餘りの隙あらば、書物をも見るべし、文字つたなくば、かな文あり、なにをか見て便にならんと、たゞ人に問へ、惣じて學問といふは、詩をつくり文字を能く覺ゆる斗りを、學問とはいはぬぞ、敬をはなれず、その物その事　理をあきらむるを、學問とはいふぞ、古き書物にて學ぶも、敬の實をしり、理をきはめんためなるぞ、今日の勤に、其いとまなくば、一事をなすとも、理をつくすべし、我があたはぬ事は、老たる人、智有る人、

（り）かたん。勝つをいふ。

（ぬ）てんがう。手慰みのこと。

りあらば、能事にはほどこしつかふべし、何事も人とあらそひて（り）かたん事を求むる事なかれ、我がすかぬ事を人にあてがふなかれ、居所はうや〳〵しくして取りさがし置くべからず、平生行儀正しく身を持つべし、一の事を修するとも、そろ〳〵と油斷なく、心を靜めて致すべし、あるひは又人の宅へ行きても、心のまゝに、我が宅での如く、萬の物を求むる事なかれ、人の聲せぬ座敷などへ入る時は、聲おとなひて入るべし、人のさゝやき物語する所へはゆくべからず、人の文は見るべからず、足のかたちは重く、手のかたちはうやうやしく、みだりに（ぬ）てんがうすべからず、目のかたちは正しく、よこめしりめする事なかれ、口のかたちはうごかさず口なめずりなどをせず、聲はしづかに、頭のかたちはなほくしてゆがまず、氣はしづまりてうはつかず、座すればひざまづき、立てば腰をすゑ、衣類諸道具、我が分限に過ぎて美麗を好む事なかれ、食するも大食する事なかれ、汁を吸ふとも音高くする事なかれ、舌うちする事なかれ、楊枝をつかふとも、貴人の前にては、口をおほひ、首を少しねぢむきて、齒をさすべし、魚類の骨をかむ事なかれ、魚肉うらがへして食する事なか

（へ）せちな。せちにの意。心に深くものこと。

（と）しと〳〵。しづかにの意。
（ち）そゝらず。さうぐ〳〵しくせずの意。

一、敬といふは生れるから死するまで、離るゝ事ならぬものぞ是を離しては、人間は立ぬ事ぞ、一事に限らず、萬事にわたる事也、親に孝行にするも、敬んで愛し敬んでうやまふぞ、君に仕へ、夫婦兄弟朋友、皆此一字にてまじはる事也敬といふ字の心はそまつにせず、大事にかけて、それ〳〵の宜しきにしたがひて、只信實あるといふ事なり、（へ）せちなも忘るゝ事なかれ。

一、敬のうちに、とりわき身を惜むを大なりとす、身は親の枝なり、身をつゝしまざれば、これ其親をそこなふと同じ、親をそこなふは、木の根をそこなふものなり、根を損ずれば、枝忽ちかれるなり、されば聖人賢者の教を見もし聞もして、あした夕べに、習ひ行ひ敬むべし。

一、言葉は（と）しと〳〵と、せかず（ち）そゝらず、うそをつかず、かた言をいはぬ樣に、いひ習ふべし、人をあなどり横柄にすべからず、欲を恣にすべからず、志は滿つべからず、賢者には狎れちかづきて敬ふべし、我が愛する所は惡き事ありても氣がつかぬものぞ、それをよく知りわきまへよ、我が憎む所は、能事ありても、氣がつかぬ物ぞ、それをよく知りわきまふべし金銀積りて、餘

（ほ）辭儀のことわりのこと。

たしなみには、能く人の意見を聞き入れて守れ、異見する人には、常にちかづきしたしむべし。

一、尊き人の來り給ふとき、家來などをしかり、その外何事につけても、腹立つべからず、是無禮なり、惣じて常にもにこやかに、よりそひ有る人ぞよき。

一、尊者また何れの人にても、物語すとも、氣のつかれ給はん事をはかりて、あくびのびなどし給ふか、また退屈の色目を見ば、必ず、やめて其席を去るべし何にても尊き人の給はる物あらば（ほ）辭儀する事なく、いたゞきて納むべし。

一、尊者にふるまひなどの相伴するは、尊者のことば出でぬうちに、料理などほむべからず、我がためのもふけにあらず、是を推してあいさつすべし。

一、友は互によからぬ事を、異見仕會ふて親むべし、只信をつくすを、朋友のまじはりといふぞ、誠に人は善惡の友によるとかや、能く心得てともなふべし、少しにても我におとれる友には交るべからず、只我にまされる友をしたしむべし、友とすべき者には、物しりたる人、智惠ある人信ある人、へつらひのなき人、又兼好の云ひけん、醫師も友にしかるべし、是を推して損友を知るべし。

からん、唐の風俗にて、かくはしるせるなり、又三のさらざる有りと、娶る所ありて、歸す所なき者はさらず、親の忌中三年忌も勤めたらん者はさらず、前まづしく、後富貴ならば、其まづしき時のつとめあれば、さるべからず然るに此三つ内にもせひなくてさるべき事あらば、其心得あるべし、とかく今の世はまた今の世のよろしきを以て、さばけよ、かくのごとくしるしあればとて、一遍にとるべからず。

一、妾を置く事は道にあらず、一夫一婦は庶人の職とかや。

一、兄弟は至てしたしき者也、兄には親と同じくつかふまつれ、弟は子よりも大切に愛すべし。

一、我より年たけたる人は、兄につかふるごとくせよ、師は猶しも尊ぶべし人は三つに生きる物ぞ、親生んで主人に育はれ、師に教へられて惡人とならず、親なければ養はれず、主人なければ命をつがず、師なければ、主親につかふまつる道をしらぬぞ、　三つの人には、いのちをも捨つるとなん、昔の教なるぞ、只年たけ智ある人の言葉は、敬で承り、あらそひ無禮する事なかれ、若き者の

(は)そゞろはなし
坐談のこと。
(に)さがなき。善
ならぬこと。

んに行儀を正しくあつかふべし。

一、かりそめの(は)そゞろばなしにも、夫は妻の(に)さがなき事をいはず、固より女のなすわざをいはず、妻は夫のつたなき事をいはず、是敬のひとつなり惣じて妻は食物縫ひせんだくを事とすべし。

一、妻を娶るは其娘夫の氣にあふべきもの、詞すくなくおとなしきものをえらみめとるべし、金銀威勢にかゝはらず、末長き了簡を專一にすべし、さればむかしの教にも、娶に五のとらざる有りと、逆家とて、家に道德なく、さかさま事の多き家の女は娶らず亂家とて、人倫を亂し、おさまらぬ家の女は娶らず、世々刑人有りとて、數代罪をおかし、仕置などに合ひたる家の女は娶らず、世々惡疾ありとて、代々惡きやまひの有る家の女は娶らず、喪レ父長子とて後家そだちの女を娶らずとなん、是等は當時富貴威勢あるとも、娶るまじき事なり、又妻に七の去ありと、父母にしたがはざる者は去る、無レ子者は去る、言葉多き者はさる、ぬすみする者はさる、是等はとくにさらざれば、わざはひの本なりされども無レ子者、言葉多き者は、外に惡き事さへなくば、去らずともしかるべ

一、主人につかふまつるは、親に孝行をする心を持て勤むべし、主人のために命を捨つるも、直に親への孝行なり、身をまかせ、一毛の私なく、又諫をむねとして奉公せよ。

一、主人の用を承はらば、たゞちに行ふべし、滞ふる事なかれ、そまつにする事なかれ。

一、我れ主人となりて、人を使ふとも、年長けたるものは家來といふも、是をうやまひ、いけんを能く聞き入れよ、みだりに人をしかり詈る事なかれ、固より無理はいふべからず、能き事は褒美せよ、あしくともしづかに異見せよ、甚だしきは退けよ、惣じて常に家來の氣を能く見定めよ、疑はざれ隱さゞれ、我れ明白にして見せよ、我れ身持あしくて、家來はまはされぬ物ぞ、世間を見よ、家來は主人の氣に似るものぞ、只あはれみて、能く養ひ、身を立てさせよ、家來榮えて、年たけたる者の多きは、家繁昌なり、わざはひもなし。

一、夫婦は五倫五常のはじめなり、ゆるかせにすべからず、女の性はむつびやすく、愛をすごせば夫をあなどるものぞ、されば夫婦の間はむつまじく、ゐんぎ

の也、ゆだんよりもしもの事あらば、いか斗り(ろ)ほいなかるべし、少も〳〵怠るまじきは、此事なり、親のやまひをもかへり見ず、遊興を事とし、酒宴を好み、かたちつくり、常の如くなるは罪の第一なり、其罪目前に來るべし。

一、親死して、三年父の道を改むる事なきを孝と言ふべきと、むかしひじりも敎へ給ひしぞ、親なきとても、善をなせば、父母の名をもきよくし、また惡をなさば、死したる父母をはづかしめるぞ。

一、父母を弔ひ供養するは、夫婦みづからすべし、その日は親の存生にいませし聲居所、常にすき好給ふ事など、おもひ出しかなしみて弔へよ、心にもかけずして、猥りに怒り笑ひ、そらつとめにせば、弔ふ甲斐のなきのみならず、必ず冥加につきぬべし。

一、天の道を用ひ、己が職をつとめ、身をほこらず、金銀をみだりにせず、ほどよく用ひ、父母をやしなふ、是れ庶人の孝とかや。

一、我が生れ日を祝ひよろこぶ事は、父母ある時の事也、父母果て給ひし後は、甚だかなしむべし。

(ろ)ほい。本意。

（い）充てる。水にても器に充分に入れたるをいふ。

をとるごとく（い）充てるを捧ぐる如し、一時も親の事を忘るべからず、又うやまひがちに愛のなければ、親にしたしみなし、愛かちに敬なければ、あなどるに似たり、愛敬ふたつながらかけずして、父母につかふまつるべし。

一、父母、衣服或は調度食物などを給はらば、いたゞきて悦ぶべし、若し我心に好まぬ物なりとも、まづ悦びて納むべし、必ずあざける事なかれ、人に物をおくるとも、まづ父母に窺ふてつかはすべし、外より物きたらば、まづその初を父母に奉りて後、餘りあらばもてなすべし。

一、妻の我が氣にいらずとも、父母によくつかへば、出す事なかれ、容色ありて我が氣にかなふたりとも、父母にくみ給はゞ、必ず出すべし。惣じて父母の愛しうやまひ給ふ所は、我もまた愛敬すべし、たとひ父母果て給ひし後も、いよ〱愛敬すべし。

一、父母病あらば、必ずみづから看病しあつかふべし、藥は元より手にかけてせんじ、先づなめてのち進めよ、人にまかす事なかれ、親の病にかはる品あらば書き付けて醫者に申せ、醫者をばよく〱吟味すべし、親の生死をあづけるも

給はゞ、機嫌をうかゞひ、寒暑をたづね、御用あらば承るべし扨其日の用事を勤むべし。

一、父母召し給はゞ、其聲に應じて答をなし、即時にまゐるべし、若し去りがたき用事あらば、參りて其斷りを申すべし、何事も父母の氣のさからふべからずたとへば道にあらぬ事をなし給はゞ、言葉をやはらげて諫むべし。怒り詈り給ふとも、聊かうらむる事なかれ、たゞ幾度も〳〵きげんをうかゞひ柔和にして諫むべし、元より我が惡事ありて、父母を患ひ怒らしめば、大なる罪のがるゝ所なし。神佛も見おとし給ふべし。

一、父母老衰し給はゞ、猶しも起臥に氣を付けて、御心のやすからんやうにと心をつくすべし、用事ありて、他所に行かば、先その譯を申して出づべし、歸らば其まゝ御目にかゝれ、無用の事に、遠き國、近くとも、數日歷ては行くべからず、又常に、假初に近所隣家に出づとも、其行先を申出づべし。

一、父母有る者は其身をおさめたもち、健にして孝をつくすべし、罪をおかし喧嘩口論をなすべからず、不養生をなすことなかれ、危きに近づく事なかれ、玉

子弟訓

手島宗義 著

夫れ人は生得善なる者にして、一毫の悪もなき物ぞ、されども敎なく糺す事なければ、己が欲にふけり、色におぼれ、或は悪き友に導かれて、終に悪人となる端多し、悪長ずれば親一類に見捨てられ、諸人にうとまれてあさましく成り行くことぞ、能く心につけて、敬むべし恐るべし。

一、人として食にあき、衣をあたゝかにして、家に居て風雨をやすくしのぎても、人の道をしらざれば、禽獸に同じ、其人の道に、まづ勤むべき事は、親をうやまひ愛し、主人あれば忠をつくして、義を思ひ、夫婦はうやうやしく、兄弟睦じく、年たけたる人をうやまひ、いとけなき者をあはれみ惠み、友に交はるには、只信實をつとむべし。

一、親につかふるの道は、夜明なんとするころ、鷄はじめてなき、起て手洗ひ口すゝき夜着をとり置き、掃除をなし、髮をゆひ一日のなす業を究め、父母起き

疑ざるは天を知るなり、天を知り人を知らば修行至かるべし。

道之栞終

司馬徽は蓋老莊の流なり、故に生死貧富を度外におきて只天理の妙用をたのしめり、自分に是を楽をもつて又人にもをしへ及ん事を欲が故に、毎に人に對して好々といへり、或人其子の死したるを悲んで已まざるがゆゑに、司馬徽大に好といふて是を喩せり、其妻是を咎るに至つて婦人の性情もとより斯思ふは最理なるがゆゑに、汝が言も又大ひに好といへり、其心に滯る所なきを見るべし、然るに天地の間に生を受る者は、みな生々の理を具ふるがゆゑに、自然に我人ともに愛して其安からん事を願り、故におのづから生を喜び死を傷み安逸を願ひ勞苦をいとふの情行れて、自ら身を安じ人を濟ふ、是自然の人情にして仁なり、されば右のごとく天理に安ずる中より仁愛の情行はる、されば天理に達し生死貧富の理に明かにして、且其中にして自然の慈愛に任すべし是學者の心得なり、されば司馬徽子を喪たる人に對して大いに好といへるは、其惑を解き心を慰ん爲なれば、是即自然の仁愛なり、されば右のごとく道理に達したる上にて仁心おのづから行はるれば、是仁知兼盡本末相濟の道理明かなり、但し慈愛の及ぶだけを人に及して人を濟身を濟は、人を知るなり、及ざるところにいたりては天を樂んで

人君は徳ある事を知りて子の死したる事を告、然るに君大に好といふは如何なる事ぞや、司馬徽聞て、汝が言も又大いに好といはれたり、右司馬徽が言道理ある事にや。

答。いかにも道理ある事なり、凡人生の、或は生れ或は死し、或は榮或は衰へ或は順或は逆、或は善或は惡、みな一理自然の妙用にして毫も人の作爲にあらずみなか様なくて叶はぬいはれありて成事にて、一々皆至極の道理にして、少しも差ぬ處なれば、何事も好々といふは最至極の言成るべし、彼の莊子の所謂、鶴の脚長けれども、是を切ば哀ん、龜の足短けれども、是を續ば憂んといへるがごとく、鶴の脚の長も至極の道理にして、龜の足の短も又至極の道理也、若龜の足を鶴に著、鶴の脚を龜に著ば双方ともに不便利なるべし、されば何事も皆一理の妙用にて、至極の道理ありて差ぬ所也と知るべし、されば人に取りては勝手不勝手あれども、天理には少しも無理なし、何事も安んじ受けていとひ嫌事有べからず、如此なれば心に取捨愛憎の私なくして、常に安心無事にして諸のくるしみなし、是誠に天理に通じたる達人なるべし、但老莊のをしへは專ら此處に力を用ひ

なども手習するど異なる事なく、座禪するも常の獨座と異なる事なく、經行するも常の歩行と異事なく、看話觀法すると世間の雜事を思惟すると異事なし但其意業心思を定靜し、出塵離欲の想ひあるが故に、毎に是等の事を作ば自然に藏識に薫習して出離の基と成也、其他佛家に鐘や卒塔婆の功德を演佛像神咒を賛するも、皆此意なり、我儒に於ても、程子の曰、吾作レ字時甚敬 非レ欲二字好一是此學と、しかれば持敬の意趣ある人に在ては、修日行住坐臥所作所爲、手を上足を動すも是習敬の功德あるべし、能々心得べき事也、偖又曰く、持敬するにも其人の意趣によりて又其功德の深淺あるべし、たとへば未心體に透徹せざる人、事々敬畏して誠意を存すれば、心志を靜定して散走を收るの功どくあり、又既に徹する人、常に敬して此心を守るときは、直に聖賢の心に等かるべし、是亦用心の精粗に因れり、佛家の習定 看話念佛唱咒誦經 書寫等の、用心の精粗もまたこれにおなじかるべし。

漢土に司馬徽と云る人は、何事をも皆好々といはれたり、或時人來りて子の死したる事を語りしに、司馬徽手を拍て大ひに好といへり、其人歸て後、其妻諫て曰

にして存心の功を假ず、衆人其心の誠を失ひて、外物に馳放て妄となるがゆゑに存心の功をかりて是を其初にかへすのみ、故に中庸に誠者天之道也とあり、是聖人の位にして人功を假ざるところなり、又誠之者人之道也とあり、是存心の功を假て聖人の地位にいたるゆゑん也、右存心すれば智みな良なる事を喩を以ていはゞ、唐人の詩に、青靄入レ看無といふ句あり、青靄とは霞なり、霞は遠くみればあり、近く其中に入りて見ればある事なし、妄は猶霞のごとし、存心は猶入レ看がごとし、霞既になき時は山色水光歴々として眼にあり、是智の良なるがごとし。

問。佛家に護摩を焚といふ事あり、其所作をみるに人家の竈下を焚と異なる事なし、然るに護摩を焚は降魔の功德ありといふ、いかん。

答、護摩を焚は我心中の魔を燒却するの義なるよし聞けり、我心の魔を降し得れば、外來の魔自ら消するの功能あるよしなり、元來護摩を焚く竈を焚とは其所作に於ては一なり、只其意業の向ふ處異なるに因て護摩を焚に功德あり、且護摩に限らず、凡佛敎に誦經念佛するも、他の書を讀み歌など唱ふと異事なく、寫經

なくとも懈怠して沈著すれば、又昏暗して無記となる、是又放心の類なり、常に惺々として昏沈すべからず、則無心の道に合べし、我儒に敬は收斂不レ容二一物一之謂といひ、又敬は常惺々法也と云是也。

問。孟子に人之所レ不レ學而知者良知也といへり、明の王陽明先生は、專ら良知の二字を以て學問の肝要とせり、如レ斯良智を觀じて道に至るべきや。

答。凡人の智一々良ならずといふ事なし、是人の性善なるゆゑん也、但し其良ならずして惡なる者あるは、心眞實ならずして妄なるによれり、ゆゑに朱子中庸の注に、誠の字を解して眞實無妄といへり、心眞實なるとは心の性體のまゝにて明靈成時をいふ、此時心外に弛て昏亂詐僞に墮事なく、自然に正明にして物に應じて一々道理に差ふ事なし、是を誠といふ、心一たび馳動て外物に奪る時は、其心横に散亂して譬ば根を離たる浮草の行ざる所なきが如く、不義不忠の事を爲に至る、然るに其心の妄なるは放心するにより、其心の誠なるは存心するによれりゆゑに學者常に念々存心して良智の體を觀察すべし、則其智一々良にして善ならずといふ事なし、身を修人を治る事掌にあるべし、然るに誠の心は本眞實自然

して暫時も放事有べからず。

問。無心は佛家に尊所にして、老莊の虚無も又是に外ならず、放心は儒教の最も惡處にして佛家には亦散亂昏沈等の心を戒めり然るに無心と放心と未熟の學者に在ては渾然として分難如何心得て可ならんや。

答。放心は心外境に奪て己を忘却するもの也、たとへば芝居狂言を見て烟草の火の膝に落るを知らず、芝居の看板に見入りて巾着切に懷中のものを取るゝを覺えざるがごとき是也、常に如此放心すれば心根柢する處なく、浮草の波によりては東西に漂泊するが如く、酒色喜怒に奪れて反る事を知らず、遂に心を失ひ身を喪すに至る、無心とは木石の如くなるの謂にあらず、心外境にも着せず、亦身內にも任せず、總て住着する處なくして虚明自照する者也、ゆゑに目前の外境常に歷々分明にして一毫を遺失せずして、內實に湛然不動なり、故に己を失ず又物を失ず、心常に明靈にして昏暗せず、靜定にして躁動せず、元來心は著する所あれば躁にして昏、著する處なければ靜にして明らかなり、故にその本を究れば放心は物に著する者也、無心は物に著せざるもの也、然るに心若著する處

之妙用也と觀じ、如此觀察して須臾も忘ずんば、凡世にあらゆる者皆天理之妙用と成て、悪人の悪をなし善人の善をなすも、みな天理の妙用なればいとふべき事もなく喜ぶべき事もなく、心常に虚明靈通にして己も安く人も安し、此に至て身も修り家も齊也、但如此觀察してもあるひは損失にあひ又は人より悪名を付られなどするとき、以前の迷ひ起り天理の妙用と斗にては制しがたきときは、亦天命の定數といふ事を觀ずべし、定數とは定たる運命にて逃ぬ所といふ事也、凡世に所有事、何事も皆天理之定たる運命にて人の料簡分別にて逃るゝ事にあらずされば、佛も因縁と說、儒にも死生有レ命富貴在レ天と說玉へり、されば何事によらず、損するも德するも、仕合するも不仕合に逢ふも皆天命也と知りて、安心して其事を取斗ふて、別に求め望むべからず、如此なれば自ら心安らかに急ず怠らずして、其宜きに合ふ取斗も有べし、扨右にいふ通、常に天理を觀ずる時は、其觀ずる間は心も智も明かにして先は君子の徒なり、若須臾も此觀を作ざる時は忽ち本の凡俗に落、又は怒りの心哀の心など強く起りてやみがたき時、一度心づきて右の觀をなせば右怒の心哀の心忽ち湯を雪に沃が如くならん、能々觀察

諸々の妄念を拂て無物心を觀じ、亦はぶら〳〵と野邊をあるきて行々其心を觀ずべし、此行々心を觀ずる事甚よろしき者也、如此心がけて修行して次第に心の安らかになるを樂とすべし、心安らかになるに從つて智も明らかになり、身も修り家も齊へ、家業もよくとゝのふ者なり、此に至て修行の益の廣大成事を知るべし、猶觀心の方便くわしく後にしるす。

一。念々唯天理の妙用といふ事を觀ずべし、天理の妙用とは天然自然の奇妙なるはたらきといふ事なり、常に此天理の妙用といふ五字を以て念々觀察するなり、人に對する時は其人の笑物がたりし立たり居たり喜だり怒たり無理をいふたり道理をいふたりする、皆此其人の作には非ず、一に皆是天理之妙用なりと觀じ、野山に向ふ時は雲の行も風の吹も、山の峙ち川の流るゝも皆是天理之妙用也と觀じ草木や鳥獸を見る時は花の咲たり實の成たり、枝の長たり葉の散たりするも鳥の飛獸の走も皆是天理の妙用也と觀じ、我身をかへり見ては、壽命の長短も身分の貧富も、仕合の吉凶も生質の智あるも愚なるも、醜も美しきも、さては見たり聞たり立たり居たり寐たり起たりするも、又は思案分別の流行るゝも、皆是天理

して、本の木阿彌に成ゆくなり、つとめざるべけんや。

問。田舍に居て師友なく、殊に心遣ひ多して修行おこたり勝にて歎しく候、いかゞ相心得修行いたすべきや。

答。御尋尤も至極の事に候、かやうの處にては修行怠り候事、貴君にかぎらず古今の學者皆しかりと相見え申候。さればか樣の處にて修行しおゝせ候はゞ、尤も有がたき事にて候、能々御勵なさるべく候、扨修行の心得は心を觀ずるより他の方便あるまじく候、師友なくして志し怠るときは、この怠る心は我怠るにはあらず、是矢張天理の妙用の行るゝ處なりと觀じて、此怠る心に安心し心遣多して苦き時は是我くるしきにあらず、やはり天理の妙用の行るゝ也と觀じて此苦みの心に安心し、如此朝より暮に至り立時は此立心是天理の妙用也と觀じ居ときは此居る心是天理の妙用なりと觀じ、如此觀じ觀じて少も間斷なくんばおのづから氣も平にこゝろも安く、智も明かに事も辨ふべし、如此ならば常に安樂妙明の樂みあるべし、偖此上にも尙おこたりがちならば、暇あるときは儒書佛書は勿論假名書の法語敎訓本など讀て心の友とし、又靜に坐して手を膝に置きて

其外腹の立とき其腹立の心を拂ひ、憂患するとき其憂患のをもひを除て無事にかへりて事に應せば、是に勝る修行やあるべき、若よく如此修行せば目前に來る處の世事順逆ともに皆心を磨く研草なるべし、詩經に他山之石可以爲錯といへるも是なり、若夫玉を磨に同じやうなる玉を磨合ては光を發べからず、必他の山の粗石をとりて以て是を磨き得べし、されば人常に善事にのみ遇ては心おこたり弛で次第に道に遠ざかる者也、唯折々難澁心配の事にあひてこそ、心も明に義も精く辛防も強く日々に道にすゝみ、遂に大なる業をも成得聖賢の場所にも至るべしされば孟子にも人之有㆓徳慧術智㆒者常存㆓於疢疾㆒といへる是なり、但し道の修行に二ッの心得あり、世事に接るときは世事に就て修行をなす、是を事上に於て磨練すといふなり、又暇あるときは心を收て虚明の體を觀ず、是を靜所に於て體認すといふ也、されば世事に障られて修行なりがたしといふは、是世事に接るとき靜所體認の工夫をおもふなり、豈誤まれるにあらずや、若世事に間隙あらば靜坐などして體認するも亦佳し、但靜處體認よりは事上磨練の功は其益殊に大いなりとしるべし、併し小子斯はいへども世事競ひ起る時に於ては覺ず修行の心得を忘却

ら現前すべし、是逆境に處するの骨髓なるべし、凡人心は疑貳によりて苦惱を生じ決定によりて安貼する者なればなり。

問。人多くいふ、我事多く忙くして道を工夫する事能ず、又いふ我世事に因て心を苦る事多くして心を澄して心學する事能はずと、此言實に去事に候や、但忙敷中心を苦る中にも道の修行はなる事で候や、右其中にて修行のいたしやう承たく候。

答。此言大なる心得違ひなり、人多く道と世事を以て別々の樣に思ひ、世事を放れて心を澄を以て道の修行と思へり、若世事を放れて心を澄んと思はゞ、是異端の教にて聖人の學問に非ず、此世事が卽ち學問の種也、世事を捨て更にいづれの所に向つて修行をなさんや、譬へば用事繁して忙しき時は心轉倒するものなり、此時轉倒の思ひを忘れて心無事に歸するとき、是道の修行也、如此なれば心明にして、何程忙しき中にても狼狽過事なし、是れ心學最上の工夫に非ずや、また心に叶ぬ事ありて辛氣なるとき、此辛氣は私心なる事を知りて無事に歸るとき、心安らかにして累なく事に應じて障なし、是最上道の修行にあらずや

得たる所なり、偖此觀法を形容せんとならば唐の王摩詰の句甚だ佳し、曰行到水窮處坐看雲起時、水の窮る處は無爲の心體なり、雲起る時は善惡の諸念なり、程子亦曰、心通天地有形外思入風雲變態中、天地有形外は無爲の心體なり、風雲變態の中は卽ち善惡の諸念なり、予力を此に用る事久、もし能熟する事あらば逆境またわれを轉ずる事あたはじ。

一。右の條々若よくいづれなりとも一法を受用せば、亦以て逆境を轉ずるに足らん、然れども若魔强法弱して猶憂苦を免ずんば、力て勇猛心を起牙根咬定して以て一刀截斷すべし、是又果斷の法なり、順逆の境は本天命なればすべて人力の及ぶ處にあらず、其及ざる事を逼々思惟すれば實に愚痴の至也、故に大丈夫の志を立て是を截斷する也。

一。右の如く心を用て猶舊習にまとはれ思放事能はざる一大事あらば、其時は心を一轉して前の條々の工夫を假ず、直に妄心妄念とおなじく生おなじく死し、たとひ是によりて身を果し家を亡し人に愚人妄人と笑るゝとも、少しもいとふ事有べからず、如斯決定する所より覺して煩惱自ら消し、求ずして樂境自

此に是を詳する事然り。

一。心體の虚明なる事は猶明鏡の如し、鏡は萬物千差萬別の影像に於て、少しも照さゞるなうして、然も千差萬別の外に明かなり、心は一切善惡の諸法に於て一々分別せざる事なうして、然も善惡諸法の外朗なり、されば鏡は萬物にあらず心は善惡を分別して心は善惡にあらず、故に心よく萬法を分別して、六度十界皆其中に具足せざる事なし、桀紂盜跖の心より聖賢佛祖の境界まで悉く備れども、其本體に於て一些しも關渉る事なし、されば學者常に心を無爲の地に置て、一切善惡の諸念に於て少しも是をとらず、また是を捨ず、但是を觀察すべし、如此して暫も間斷なからん事を要す、若し如此觀察して行住座臥忘失なくんば、善惡の諸念常に我手裏に有て扶起放倒自ら自在ならん、如此なれば、順逆の境界すべて我爲に用ひられて、長く我れを轉ずる事あたはじ、是禪家に使二得十二時一といふゆゑんにして、古聖佛祖多くは此中より修行をなせり、是佛家に觀心の法にして、即我儒中和を致の工夫なり、中は即喜怒哀樂の情未發せざる所にして心の本體なり、和は即喜怒哀樂發して節に中る所にして、即善惡の諸念を用ひ

本實體有事なし、梅を談ずれば口中に津を生じ、高に登を聞ば足心に酸を覺るが如し、されば昨日の喜は今日の嘆となり、けふの憂は明日の樂となれり、またたとへば、不義の富貴のごとき貪る心になれば喜、廉直の心になれば穢はしきが如し、唯時に從つて變化して定れる體ある事なし、されば此心を放ちすて、無念無爲になるとき、天然の仁性其中より生々して大慈大悲の心窮已事なし、故に人より何如樣なる無理を爲懸言掛ても少しも怒怨る事なく、但是を利益せん事を思ふ、彼釋尊の珂利王に身を割碎れて、反て其人を憐み是を濟度せん事を誓玉ふがごとし、是卽六度の中忍辱の修行也、さて如此しても間斷ある事なき是卽ち六度の中精進也、偖如此して心動轉する事なき、是卽ち六度の中禪定に合り、既に心動轉する處なき時は則天然の良智自ら行れて照さるゝ處なく、物に應じて利生接物の用滯る所なし、是卽ち六度の中智惠に當れり、されば心身の二つを捨をはれば、六度の行おのづから其中に籠れり、既に六度の行其中に籠時は、我儒仁義禮智信の性其中に全うして少しも缺る事なし、如此心を用ひば順逆の境に臨んでこひねがはくは顚倒を免れん、我嘗て此に於て益を得たり、ゆゑに今

及べきにあらざる事を決定せば、顚倒の思ひなかるべし。

一。我亦嘗て心身の二を捨る事を修行せり、先身を捨るとは此身より妻子眷屬金銀財寶に至るまで都て捨畢て、一切執着せざるなり、人只此身を執着する所より諸の煩惱をも起し、種々の罪をも造、今此身より妻子眷屬金銀財寶迄捨畢は、心に一點の累ひなく心常に靜閑無事なる所より、其作所自ら義に合ひ仁に合ひ齊家治國平天下は掌の上に運すべし、是即佛教六度の中布施の修行なり、但此に捨るといふは實に其物を敗り捨るにはあらず、唯心にをもひすてゝ執着せざるなり、是即家に有て心は出家するもの也、さて如此おもひ捨る事能はずして、ひたすら貪り存るとも若天命到來せば亦捨ざる事を得ず、たとへ如此心におもひ捨るとも、天命身にあれば少しも損亡あるべからず、また右の通一心無着なる所より成ところ一々其宜きにあらざる事なく、少しも爲まじき事をせず、爲すべき事をおこたらず、是即六度の中の持戒にあたれり、扨又心を捨るとは、凡人我心に思ふ處の善惡是非得失榮辱をみな實事にして動ぬ事と思ふがゆゑに世を恨み人を咎る心只管已事なし、然るに此こゝろ實境に因て轉化する者にして

一。萬事は皆一理の至妙なる事を知らば、苦樂の境に臨んで庶幾は心安然たるべし、譬ば大鵬の九萬里の外に飛も、斥鷃の蓬蒿の間に翱翔するも、皆倶に造化の至樂なれば、聖賢佛祖の盡レ知極レ玄も鄙夫凡俗の至愚至陋なるも、皆一法之所印なれば又何れを貴びいづれを賤まんや、如此しれば蝴蝶の花に遊ぶも蟋蟀の霜に吟ずるも、皆至妙至樂の境界なれば、凡一切の順逆苦樂皆我遊戲三昧の處なるべし、是達人の心胸にて、老莊の徒の其心を養ふゆゑんなり、彼司氷鑑が何事をもみな好々といむれしも此心なり、若能如斯ならば事に臨んで少く顛倒の想を免んか。

一。萬事はみな天命の定數にて、たえて人力の及ぶ所に非ざる事をしらば、亦以て逆に臨んで顛倒を免かるべし、孟子魯の君に見んとせし時、嬖人臧倉がために妨られて少も恨玉はず、是天命也臧倉がなす處に非ずとの玉ひ、孔子魯に事へ玉ひし時、公伯寮といふもの子路を季孫に讒言せしとき、是命なり公伯寮の知る所に非ずとの玉ひ、釋尊も五百の釋種瑠璃太子の爲に殺害せられし時、是宿世の因縁にて救べからずと仰られしがごとく、萬事はみな天命にて毛すぢ斗も人力の

孟子此語によりて常に直を以て心を養ひ、義を積集て浩然の氣を全うし、至大至剛の心に至玉へり、是董仲舒の所謂、正二其義一而不レ謀二其利一者にて君子の心を養ふゆゑん也、學者是を以て法として順逆の境に應接すべし、然れども唯是斗にては中々其心を制しがたし、ゆゑに猶數條の心得を後に錄せり、但曾子孟子の如きは既に道德を心に得て是を樂しむ事深きゆゑに、死生貧富等の外物其心を動すに足らず、周子の所謂其內重き者は外輕しといふ是なり、されば孔子は食二蔬食一飮レ水樂在二其中一、顏子は一簞食一瓢飮在二陋巷一不レ改二其樂一然るに此處は初學の者の及ぶべきに非ず、但し勤て怠ずんば遂には此境界にいたるべし。

一。人身の虛幻なる事を觀ぜば、又以て世の執着を薄して順逆の境に顚倒せざるべし、夫此身の眇なる事は、大虛空に一毛を吹よりも墓なく、此世界の小なる事は、大海に一微塵を流すよりも微なり、且人壽の須臾なる事は電の閃よりも速に、石の火の消るをも待がたし、されば假令帝王の富を極百年の壽を保とも唯一場の夢なるべし、如此しらは貪着の心日々に薄らぎ順逆の境に處して稍心易かるべし、是佛敎の肝要とする處なり。

或は皆邪智邪謀なるべし、先我に虚明無爲の體たしかなれば、因の用は思はずしておのづからかなふべし。

卷之下

問。凡人情逆境に逢ふときは心顚倒するものなり、其時顚倒せざる心得いかん。

答。是孟子に所謂四十不レ動レ心といへる所にして、實に大難事なり、若此處に於て安心し得ば、學問の工夫大半は成就すと知るべし、予嘗て力を此に用る事久し今其嘗て修行せしあらましを一々後に擧て、初學の人の一助とせん事を欲する事しかり。

一。孟子浩然の氣を養ひ得て不レ動レ心に至る者は、其本曾子の大勇に原けり、曾子の大勇を養ふゆゑんは、曰自反而不レ縮雖ニ褐寬博一吾不レ惴焉、自反而縮雖ニ千萬人一吾往矣といへり、言は吾に反見て不義なくんば、百萬の敵たりとも吾何ぞ恐んや、身に反見て過あらば假令鄙き下郎たりとも吾豈畏入らざらんやと

の神道を立玉ふ、神代の習によりて日本の國風人情に從しもの也、然るに古今によりて人情易りあるがゆゑに、敎もまた時に因て異なる事あり、但本意は同うして只其術の異なるのみ、されば周の末、文に流るゝの弊有によりて、老莊の敎あり、漢より以後博學詩文に流るゝに因て、程朱專ら性理の學を唱ふ、佛の敎も後に至り本意を失ふて言句に滯るがゆゑに、祖師敎外別傳の示しあり、今に至り日本にも神道おとろへ儒佛の敎さかんなり、近世に至り儒は文に流れ、佛は方便に流る、されば石田先師性理の學正に行るべきの時なるべし、是等の類皆因也物見の亭を作んには高所によるべし、水を蓄んには卑によるべし、如此なれば功有て勞少なし、是に反するものは勞して功なし、されば水に形なうして器に因て形をなすが如く、家を治め渡世をいとなみ、人に交り事を執斗ふ處、我よりおもはくを立ず、其向ふ處の宜きを見て、是に應ずる事鼻木を作りて牛をつかひ轡を製して馬を使が如く成べし、如此なれば我心を勞せずして自ら過ちなかるべし、但し是は物に對する所にて敎を垂るものなり、されども先我にもろ〳〵の妄心を盡し、虛明自照の定木なくしては此因の實意に合ひ難かるべし、因を思ふ所

子平旦の氣に原けり、學者に於て最大益なり、是平旦の氣を習て慥にするもの也畢竟養氣は氣に天理の癖を付て、人欲の癖をなすものなりと知るべし。

問。管子曰、因といふ事あり己を捨て物を以て法とする事のよし、願くは其詳なる事を聞也。

答。因とは物に接し人を治る上にていひしものにて、己に法なくして物の自然によりて是を導事なり、譬ば衣服を仕立るには其人の長と身幅を見て夫に合やうに仕立、頭巾を縫には頭の大小により、足袋を拵るには足の短長に從ふが如し、世の諺に獵は鳥が敎るといふが如く、其性格に因て是を制す、昔禹王の洪水を治玉ふは、水の自然に隨ひて行くべき方へ導き、庖丁の牛を割は骨のつがい目、肉の合せ目より切ゆゑ刄物少も損せざるが如し、是に因て思ふに堯舜の五常五倫を立て人を導き玉ふも、漢土の國風人情に因しものにて、孔孟又是によりて人を敎玉ふ、釋尊の人倫を棄世間をいでゝ人を導き玉ふも、過去の七佛より以來敎へ來玉ふ敎に因て是を中興し玉ふものと見えたり、猶孔子の群聖人の道を取り集て大成し玉ふが如し、偖其敎はまた天竺の國風人情に因たる者也、我朝の舍人親王

養を集て氣を養の修行明なり、扨此義を集るの外に、氣を養の心得今一條あり、即ち孟子牛山の木の章に夜氣平旦の氣を養といふ是也、是義を集の助となるものなり、夜氣平旦の氣とは凡人早に起て未人に接らず事に臨ず、喜怒哀樂等の情いまだ起らざる以前、何ともなく只靜に明かなる心也、此時其氣も一向に靜にして少も動す、安らかに快なり、此氣を終日持て假令事に臨み人に接して喜怒すべき時にも此氣を持ちおほせて少も動さぬなり、氣動ざれば心自ら清明也、是養氣の說に因て起る所なり、是中庸に戒二愼於不レ睹恐二懼於不レ聞といふ所也、然るに中庸には專ら性情を以ていひ、孟子は專ら氣を以ていふ、然るに心明なれば氣收り、氣收れば心明なり、故に氣を養ふには心を以て養ひ、心を明にするには氣を收て助とす、されば氣を養ふといふも、中和を致すといふも、畢竟は指處の違ふ分なり、其實は一つ也、佛家にも定惠といふ事あり、定は氣を收るなり、惠は知を明にするなり、白樂天の偈に如二珠走レ盤定是盤慧是珠といへる甚よし、譬へば氣は波也、心は舟也、波荒ければ舟覆るが如し、されば佛家に座禪習定なり、是氣を收て惠を明かにする也、儒にも宋朝に至りて靜坐をいふ、即孟

時愛に溺れ、物をほしく思ふとき妄に貪る等すべて皆此過ちなり、又斯するが義なりと知りても心に思ひ切なく、何にも恐しき筈はなしと知れども膝が振ひ、斯悲むは愚痴としれども跡から悲くなて止ず、此損失は天命なりと明めても猶々忘れがたき等は、是皆知は明なれども氣を養立たる功がなきゆゑ氣の弱して物の間に合ぬなり、故に孟子に氣を養の修行あり、是も知を以氣を養ひ立るなり、常に不義をなさず心の內人に對して少も恥き事なく、我にかへりみて少もむさく未練事なく、常に私なうして心の內すつぱりとして磨ぎすましたる鏡の如く常に慊からしむ、如此なれば修行久うして氣おのづから慥に成て、生死の際に臨んでも少も顏色變ぜず心神泰然たるに至べし、是孟子浩然の氣を養ふとの玉ふ處なり、されば氣を養ふには義を積んでなるといへり、是集義の工夫なり、故に亦行心に慊からざれば、此氣餒といへり、されば養おゝせて心の動ぬ樣になりたるを浩然の氣といへり、浩然は正大流行貌と註し、又其爲レ氣也至大至剛といへり、是なり、其天地の間に塞といふも我に私なく、心常に障なければ此氣卽天地の氣、此心にして天地と我と無二無別成をいふなり、偖是にて心と氣との差別

なきをいふなり、是文王武王皆一たび怒つて天下の民を安んずといふ處なり、但怒て見せ玉ふ時は顏色言動にも其氣色を顯し玉ふ事もあるべし、王赫として こゝに怒るなどいふ是なり、されども底には曾て動ざるなり、我等如き者も心に怒らざれども丁稚兒孫なんど叱る時は、必ず顏色や聲氣を勵して傍から見ても怖しい程にみゆれども心の曾て動ざるが如し、右の如義理より出る怒は氣が治て居て知に從つて宜き程に起つたり止だりするなり、是知が氣を使なり是志は氣の帥なる處なり、又凡夫血氣の怒りは氣が逆立起つて知を昏ます故に、いふまじき事をもいひすまじき事をもして、跡では後悔するなり、是氣が知を冐し昧して氣が知を使ふやうに成なり、夫故少し氣が付て、我ながら怒りを靜めたく思へども一向靜まらず、一時二時も過て靜まるなり、是孟子に氣壹則動ㇾ志といふ處なり、是顚倒して其位を易るものなり、されば知が氣を使ふは君子にして、氣が知を使ふは小人なり、中庸の序に道心を主として人心命を聽といへるも此事なり、偖怒りにかぎらず凡七情皆しかり、志を物に奪れて流れて反事を知らぬ、皆氣が知を使ふなり、恐しきときうろたへて度を失ひ、哀き時哀みに過、愛する

患難ニ行ニ乎患難一、君子無三入而不二自得一焉の處にも至るべし。

問。氣と心との差別いかん。

答。心は理に屬して理より出たり、氣は身に屬して身より起れり、身は即ち此血肉の身なり、但氣をもて心に對していふは、但氣血といふときの氣といふのみに非ず、氣血より發して動はたらく者をいふなり。譬ば飯や汁より湯氣の立が如し飯や汁は血肉なり、湯氣は氣なり、心も只心と計にてはむつとして知がたく、此に心といふは知といふがごとし、孟子に志氣帥といふて知が先に立て陷は知について動なり、譬ば聲の跡に響の付が如し、此に何ぞ無理をいふて來るものあれば、是は無理なりと知て此人を惡む心の起るは知なり、此知起るについて目も鋭く顏も怖しうなり、氣昇て面赤く聲も勵く剛なるは是血肉の氣動きおだつなりこれ此所にいへる氣なり、ゆゑに朱文公も小人の怒を血氣の怒りといふ、是なり又君子の怒は義理の怒といへり、是君子は義理によつて人を責咎て、人の爲家の爲め國天下の爲になるべき時は是を怒り退けたまふ、されど內心人を惡に憤り玉ふに非ず、心仁の餘りて一殺他生の理を行ひ玉ふものゆゑ、血氣の動き逆立事は

遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿にむかしを忍ぶこそ色好とはいはめといふがごとくならば、庶幾は此語にかなふ事を得ん、又次に佛教に人身の無常なる事を觀じて、執着を去り欲念を除り、人身の微妙なる事は大虛空の中に一ツの微塵を吹がごと、人命の須臾なる事は蜉蝣の夕べを待朝の露の日に乾よりも墓なし、譬ば漢土四百餘州の天子となり、百年の壽命を持ち榮耀榮華に驕るとも、又夢の如く幻の如く泡の如く、影の如く、露の如く又電のごとしと知りて、其身の分に安んじて世上の歡樂をねがはず、如此ならば又庶幾べし、また次に、天命の定りて逃べからざる事を知つて世上の禍福得失に心を動さず、孟子魯の穆公に見へんとして嬖人臧倉の爲に沮れ、孔子の門人子路が公伯寮が讒言に逢し時、孔子是天命なり公伯寮が作す所にあらずとの玉ふが如く、何事も天命の定數なる事を觀ぜば又以て此語に及ぶべし、但孔子の如きは天命を假らで決斷し玉ふ事をからず、これ門人の爲にの玉ふ處なりといへども然れとも實理まことに如此されば老莊の書にも每に命に安んずる事をいひ、佛教にも專ら因緣を說り、若よく心を此等の數事に潜めば則、中庸素二富貴一行二乎富貴一、素二貧賤一行二乎貧賤一、素二夷狄一行二乎夷狄一、素

ければ不足止事あるべからず、然れば天下第一の富人に成よりも人を羨まぬ心になるが百倍勝れりとすべし、されば此素二其位一而行不レ願二其外一といふ語は實に安樂の法門なるべし、偖此人を羨まぬ事又甚容易ならず、實に道の體を見得して是を樂しむ事深して、外を願ざるにあらざれば能ず、孔子の食二疏食一飮レ水曲レ肱枕レ之樂亦在二其中一不義富且貴於二吾一如二浮雲一との玉ひ、顏子の一簞食一瓢飮在二陋巷一人不レ勝二其憂一回不レ改二其樂一といふが如き是なり、故に周子も其內重者外輕といへり、其次は天理の妙用を觀じて是を樂み、凡天地の間一物として天理の妙に非ずといふ事なく、梅櫻の麗しきも薺の花の微なるも皆同一天理の妙にて、梅櫻も貴からず、なづなの花も賤からず、堯舜も桀紂も皆天理の自然なる事を知り、陶朱公が富も範丹が貧も皆一理の妙用なる事をおもひ、其居る所をたのしみて外をねがはず、漢土の司馬徽が何事をも好々といふが如く、我邦の兼好が四季の景を演ていづれの景をも皆好々といふて讃嘆し、又月は隈なく花は盛をのみ見るものかは、雨に向つて月を戀ひ垂こめて春の行衞しらぬもまたあはれに情ふかし、男女の間も偏に相見るをばいふものかは、逢て別しうさを思ひ、

るべく候。

答。人を羨の心なき時此語に合ふべし、此言至て淺言なりといへども能々味見れば深甚の意味あるべし、譬へば芝居を見物するに上棧舗下棧敷割合追込等の場所ありて、貴賤群集して見物するにいづれもみな凡夫なれば、貧きは富を羨み麁末なるは花麗なるを羨み、只目上々々を羨まざるはなし、扨上を羨む心になれば我身を辱かしくもいひ甲斐なくも覺えて、但富貴の人はさぞかし樂しからん我らもあのごとくにして見物せば十分の樂しみならんと思ふより、己が身に不足出來て十分の樂しみも忽ち大半を失ふなり、若人を羨むのこゝろなくして見物すれば、一日面白狂言を見て割子屋らの物を給て心に何んの物思ひもなく終日よき慰なるべし是にて身分の貴賤貧富等より家居衣服の麁末華麗等の品も推して知るべし、若人を羨むの心なくんば此身此まゝ大名にも勝るべし、偖又花麗にして芝居の中にて我こそ第一なりとおもふ人も凡夫なるがゆゑに、只借上を樂む心にて誠に芝居を樂むに非ず、心常に四方に散亂して收ず豈眞の樂みを知らんや且富貴の人も常に我より上の富貴を羨み、假令天下第一の人たりとも欲に限りな

また心を短命に安じ置て、扨長壽も我爲家内の爲惡からねば常に養生に心を付べし、是卽此語の心に合ふ處也、是を此語になぞらへていはゞ、家業は富貴を不レ厭身命は不レ厭ニ長壽一といふべし、されば萬事に付て其惡き底の所をもつて本直として、偖當日前の處は其宜處を保やうにすべし、如此なれば心常に安樂にして貪る心薄く、惡しき嫌ふ心なく自ら事に當て不義におち入事少かるべし、譬ば腹からの乞食が乞食の境界に足納して居たる所が、思はず百貫目持に成たるが如く身の爲父母妻子の爲宜く且は人の世話等も心のまゝに出來て宜けれども、俄に損失ありて百貫目皆失ひてもやばり本直の乞食にかへれば、此百貫目に使れて心を苦る事はなきが如し、元來人は天命によりて死生榮辱する者なればいかなる難義に逢んも測がたければ、底の底に心を安んじ置ねばならぬ事なり、偖底の底に心を安じ置ば底の底に出逢しとき狼狽ぬのみならず、平日安心して一生を送るべし、若底の底に安んじ置ねば、底の底に逢し時狼狽るのみならず、今日常に得ん事を憂へ失ん事を憂へて、一生苦んで死ぬる也能々考へて見るべき事なり。

問。中庸に所レ謂素ニ其位ニ而行不レ願ニ其外一といふ、事心易く手短に御說聞せ下さ

なべてでる月の光にさま〴〵の、影こそかはれ野邊の秋草。

智

すむ水のおのづからなる鏡より、さくらは花の影もまがはす。

信

僞のなき色なれや春きては、松のみどりに花の白妙。

問。論語に食不厭精膾不厭細をあり、是言心は、孔子飯を召上らるゝに米のしらげたるを嫌ひ玉はず、魚の膾を召上らるゝに細く切りたるを嫌ひ玉はずといふ事なり、但し米は隨分しらげたるが味もよく、食して身の養ひとなる、膾も細は味よく身の養ひ成なり、されば飯はしらげたるがよく膾は細がよし、然るに是を厭はずと仰らるゝ意はいかなる事に候や、右不厭の義うけ玉はりたく候。

答。不厭は猶惡からずなといふが如し、蓋聖人の心麁飯惡食に安んじ居玉へども精の飯細き膾は身の養にも宜しく、且つ味ひもよけれど是れ惡からずとの玉ふ也是を以て思ふに、我等平日此心得忘るべからざる事なり、譬へば貧賤に心を安じ置て、富貴も我爲家内の爲宜しければ是も惡からずと思ふて渡世に心を付べし、

なり、然るに右無私無依の體は卽ち是先々の答にいへるごとく、やはり天理渾然の體なり、されば仁義禮智信少しも異なる事なく只是一體なり、されば仁義禮智信五ッの名あれども但是一性なるがゆゑに、性の名に二ッなし、元來道の本は一ッなるがゆゑに、一に歸せざるは大道に非ず、故に孔子も一以貫レ之との玉へり、能々工夫あるべし、さて先より仁義禮智信段々に解説せり、今再び其大略を記し拙き和歌につらねて其趣を述ぶ。

無私にして自然の慈愛あるは仁なり、此慈愛事の宜きにかなふは義なり、此義親疎貴賤に應じて和をなすは禮なり、此仁義禮、見識分別に涉ずして自然に明なるは智なり、此仁義禮智僞りを絕して眞實なるは信也。

仁

うれとしもなき天地の、惠より生ふる草木の限しられず。

義

山河に浮て流るゝ紅葉ばの、よどむも波の折に社よれ。

禮

（ア）惻隱。あはれみのこと。

答。信は眞實にして僞りなきのいひなり。たとへば赤き絹をもつて火に作れば形ちは火なたども、僞りなるがゆゑに物を燒の功なし、白き布をもつて水に作れば形は水なれども物を浮すの德なきが如し、眞の火眞の水は眞實なるがゆゑに、物を燒き物を浮すの意なけれども自らよく物を燒き物を潤すがごとし、されば天地の間森羅萬象一々皆信ならざるはなし、日月のてらし風雨の行はれ、山の峙ち川のながるゝより、櫻に櫻の花咲、梅に梅の實を結び、菊の香、紅葉の色までもいづれか信にあらざらん、人を以ていはゞ目の物を見耳の音を聲く、鼻の香を嗅ぎ舌の味ひを辨じ身の觸を覺し意の萬法をてらす皆是信なり、信なるがゆゑに分別をはなれ思はくによらず、無心にして常に忘れて行はる、是眞實にして僞なき所なり、只凡夫妄想を起して分別思慮するがゆゑに信を失ふて僞りとなる也、譬へば自然に起る（ア）惻陰の心は眞の仁なり、我が惻隱の仁なけれども、世間の聞を憚り人前をつくらふて施し作すは仁の樣なれども、仁の心なきゆゑ僞りにして其効なきが如し、義禮智の類も是に準じてしるべし、されば信とて仁義禮智の外に別に一物あるにあらず、右の仁義禮智僞りなく無私にして眞實なるところ是信

佛家には專ら智の一字を重んじて、妄智をさつて本智に復を以て道とす、さて本智に復り得れば自然に大慈大悲の心を發して、一切衆生を濟度して少しも漏す事なし、儒家には專ら仁の一字を重んじて仁の體に至らんことを要す、既に仁の體に至得れば卽ち妄心自ら盡きて本智獨り朗かなり、されば儒佛の敎其專らとする所各異なれども、其實は一にして少しも變る事なし、仁の體と智の體と其本一體なるが故に、本智に至れば仁に合ひ、仁に至れば卽本智なり、其外道敎又は我邦の神道といへども又此道理に異なる事なし、然るに凡夫は此利智を捨て本智に至る事を知らず、專ら私智に私智を積んで、智を求るほどますます道に遠し唯よく聖人の敎を知るもの私智を去れば廣大の本智に至りて、聰明前に百倍し且安樂自在なる事を知る、貴べく崇べし、右本智に至るの法他なし、無私の心體を識得して常に返照すれば、本智自ら明かなり、若また無私の心體に於て未分明に識得せざる人は、只二六時中行住坐臥取捨愛憎是非善惡なき處に向つて心を置くべし　本智おのづからあきらかにして過ちすくなかるべし。

問。信の意味如何。

ざれば鏡明かならず、雲消ざれば月光あらはれざるがごとし、是を程朱は私心をさるといひ、張子は其成心を捨といふ、成心とは幼少の時より智恵づきて、見聞覺へ知り來りし事を總ていふなり、此心を捨るなり、禪家には無量劫來の全心を死却するといへり、右の如く一切の心を捨了ば無私無著の本智自然に現前して照さゞるところなく見ざる所なき事明鏡の無心にして萬像を照し明月の無念にして萬物をてらすが如し、聖人人を喩んが爲に假に體用を分つて敎をなす、右無私無念なる處をもつて智の體となづけ、照さゞる所なく見ざるところなきを以て智の用と名く、然るに此の智の體卽ち是天理渾然といへるところにして、卽ち仁の體なり、仁の體卽ち是義の體、禮の體にして、仁義禮智其體本同一にして毫髪も異る事なし、畢竟其物に應じて用をなすなす、所に因て各其名を異にせり、右無私の體より發する念はみな人を濟ひ物をなすの念也、此物を濟ひ人を成のところより仁と名付、右物を濟ひ人を成の念輕重大小を量りて宜きに合ふ所にて義と名け、右念貴賤親疎に接て各其和合を得る處にて禮と名付け、右の如く物に應じて辨へ知る所にて智と名付け、されば仁義禮智一體にして四用ありと知べし、

より國家天下に至るまで和順せざる事なし、凡家國の亂は皆人我を爭ふより起れり、近く一家の内にても物いひの起るはみな互に人我を立るによれり、人家なくんば何の物いひかあらんや、故に論語に能以二禮讓一爲レ國乎何有不下能以二禮讓一爲上レ國如レ禮何との玉へり、されば讓を主とし人の和合をなすものなりと知るべし、さればとて巧言令色にはあらず、巧言令色は己れに利を貪る心深くして人に諂ひ事るなり、禮は己の人我慢心を捨て仁に復るものなり、然るに世上には世間を張り義式を張、萬折目高にして子細らしきを禮と心得て、自分も苦く人にも心遣ひを懸て人に否がられ厭るゝに至る者あり、大なる過に非ずや、又有職家などは古き格式のみ禮と心得たる人あり、是は禮の末を知りて本に達せざる也、物識となりて人に古實を教るは宜しけれども、國家天下を治るには古實を知たる分にては益に立ぬ事とするべし、されば論語にも禮云禮云玉帛之謂哉との玉へり、能々心得べき事なり。

問、智の意味いかん。

答。一切の妄念分別取捨愛憎善惡是非等の心利かざれば本智現前せざる事、垢盡

ゝき其宜きに叶ふが故に其交るところの人皆和合を得て怒り咎る事なし、是禮の和なり、ゆゑに身も修り家も整國天下と平かになるなり、されば唯一つの天理渾然の體よりいでゝ、人を憐所より仁と名付、輕重大小宜きに叶ふ處より義と名付け、尊卑親疎に交て各其品に應じて和合をなす處より禮と名付たり、されば朱文公禮の註に、天理の節文、人事之義則といへり、天理の節文とは、右天理渾然たる心より物に應じて其程に合其もやう取廻しあるをいふなり、人事之義則とは、人倫に交る掟作法といふ意なり、然れば學者ひたすら心を無私無爲になすべき事也、心無私無爲にさへなれば仁義禮おのづから其中に備り、偖右のごとく無私無爲に成得たる人は最高し、未無私無爲に至らざる人の心得をいはゞ、禮は讓りを主とするものなりと知るべし、讓とは身を高ぶらず己を謙り人を敬ひ己を卑め、善事をば人に讓り惡き事をば身に引き受やうにする事なり、故に禮は人我慢心を挫き無我になる事なりと知るべし、されば作業はたとひ禮に似たる事有とも、少しにても己に誇心か負惜み等の念あらば禮には違へりとしるべし、此如無我に成得て人に讓り敬へば、自然に人の和合を得て親子兄弟夫婦君臣朋友の間

過て事を起しむづかしくなりて大きに害をなす事あり、又加樣の人は常に人の非を咎る心止ず、鎖細の事にも小言をいふゆゑ人附合惡しく、町内又は一族の中にても加樣の人あれば大に持あますものなり、されば家内の不和合も常に此義を善とおもふより互に人の非を咎合ふより起れり、若少しにても人を咎る心あればこれ不仁なり、不仁なれば義なり、義として仁に原ざれば以義とすべからず、されば先にもいふが如くこしらへたる義は皆義にあらず、ゆゑに益すくなうして害多し、唯仁より自然にいづる義は眞の義なるがゆゑに益ありて害なし、よくよく心得べき事也。

問。禮の意味いかん。

答。禮の體はやはり天理渾然として無念無爲なるものなり、即ち義の體と同一なり、右無念無爲の心より自然に慈愛の心出るは仁なり、この慈愛事の宜きにかなふは義なり、此事は既に前の答に詳なり、扨右仁義の心人に交るとき貴きに交れば自然にこれを敬ひ、賤に交れば自然に是を憐み、高下尊卑親疎に付て各其品に應じて是に交る、如此なれば我心やすし、かくして仁の存念も其程々にと

は少ばかりも益なく、反てあつたら武士を殺して主人の損となりても是を不義とならず、自分も義なりと思ひ他よりも義と思へり、是を日本の武士の風といへり是應仁亂の頃より以來世上に合戰絶ず、武勇を尙む風俗より起たる事と見えたり本より日本は人氣剛强なる事餘國に勝たる所より起れる風とはいひながら是勇氣の益にあらず、是勇氣の癖にて弊なりと知るべし、我願ふ所は武士たる人は其身は主人のものなれば、常に大切に敬み主人の御用に立事を宗として奉公を勵み、私の宿意を募ず、秦怯二私鬪一勇二公戰一といふが如く、私の爭には臆病にして御上の御用にはいかにも勇決ならん事を欲す、又常に堪忍つよくかの趙藺相如が車を回して廉頗を避しごとく、唯私の宿意を捨て一命を主人の爲に捨ん事を思ふべき事なりと思へり、初にいへる武士の風は人我の私より起るが故に害多して益少し、後にいへる所は忠義より出るがゆゑは益ありて害なし、右忠義は卽ち仁義なりと知るべし、又町家などにも偏屈に正直なる人又は陋見の儒者など事の筋道を立ぬくを義と心得たる人有、此人もまた事によりて律義にて善事もあれども、又大いに害ある事あり、譬ば理を枉て了簡すればつい濟事をも、筋を立

といへば義禮智を兼ぬとの玉へり、さて右の體を未だ知得ざる人は凡萬事を行ふ處少しにても人に益あり、我に害なきやうにするが事の宜きにて義なりと知りて常に是を行ふべし、若其中に少しにても人我名聞利欲等の心あらば決して不義也と知るべし、しかるに世人此義を誤りて事の宜きに從ふ事を知ず、我に一箇の義といふものを設へて是を立ぬくを善と心得違たる人あり、是少しはよき事もあれども又大なる害あり、譬へば侠者などは我顏を立るを義と思へり、是義を立るには非で顏を立るなり、さて其顏の立やうには人に敵對して引けをとらず臆病といはず、又は分達を善して金銀に切放れあるを義と思へり、此分達のよき處偶まぐれあたりの義にかなふ事もあれども達過て害ある事また多し、且人我の心ふかく我慢增長して爭をこのみ鬪諍を事とし、遂には身を亡し家を破り父母妻子に嘆を懸るに至る、其不義いづれか是より甚しからん、又武士は人に對して引けをとらず命を惜まず、少しにても人より耻辱をとらぬを義と思へり、是も此に因て善事もあれども其害又甚多し、或は少しの無禮を咎又は瑣細の事をいひつのり遂には互に打果し又は切腹などし、父母妻子を苦め家名を斷絕し然も主人の爲に

理の事は先に仁の答に詳なれば今再び演る事を用ひず、さて朱文公義の註に心之制事之宜といへり、心の制とは心の判斷といふ事也、事の宜きとは萬事のよきに叶ふ事なり、心の判斷とは輕重大小を計る事なり、譬へば君を敬ふは義なり、然るに辨慶安宅の關にて判官殿を打しは、君を愛するの心より輕重大小自然に判斷して宜きにかなふ者なり、如何となれば今君を打は其無禮小也、君の命を救ふは其仁大なり、是を以て思案に渉されども自然に少を捨大を取て君を禍に免れしめたり、是義なり、また人に詐をいふは不義なり、然るに辨慶僞りて勸進帳を讀しは又よく輕重を量りて宜きにかなふなり、如何となれば僞りて勸進帳をよみては其不義輕し、是に因て君の命を救ふは其義重し、是を以て萬事は推して知るべし、されば修行人の肝要は唯心を無依無住にすべし、無依無住にさへなれば其發する處おのづから仁義に叶ふなり、此無依無住卽ち中庸不偏不倚の義なり此不偏不倚卽ち未發の中なり、此未發の中に叶ふとき其發する所皆節に中る、是已發の中なり、未發の中は仁義の體なり、已發の中は仁義の用なり、畢竟仁と義との別は、慈愛と判斷とのさし處違ふ分にて其實は一なり、されば程子も專ら仁

へり、然りといへども放逸無慚の人に比せば雲泥の違ひなるべし、但し先にいふところ無念無物なるときは、二六時中心に思ふところ身に行ふところ慈愛惻怛の外にあらざる事なしといふを聞て、無念なるものが何をおもふやと疑ふ人もあるべし、是無念の味をしらぬ人なり、無念に成得るときは自然の正念自在に行れて少も滞る事なく、親に仕へ君につかへ世間の勤家業を治るに於てすこしも礙る事なし、されば道にこゝろざしある人は唯ひたすら無念になりたまふべし、おのづから其味ひを得べきなり。

問。義の意味如何。

答。義の體は即ち仁の體なり、天理渾然たるところなり、右天理まるかせにて少も人家名利の情にかたより留る事なき時は、其心の發するところ一々皆天理のまゝにして人を濟己を濟の外なし、是義なり、但し此天理より發するところ其人を濟、己を濟處をもつては是を仁の用といひ、其人を濟己を濟ところ輕重を計り、大小を酌んで其宜きにかなふ處を以ては是を義といふ也、然るに此輕重大小を較るも又思案造作にあらず、其心天理のまゝなる時は自ら宜きにかなふなり、右天

（ア）惻怛。かなしみいたむこと。

けり、圓相は無念無物の體なり、此太極即ち是仁の體なり、されば天理渾然といふは無念無物の義と知るべし、右無念無物になり得るときはもろ〳〵の累ひなく、安樂にして然も其心常に明鏡の如くにして明かなること晴天の如し、此地位に至る時は事に應じて感發する所みな慈愛（ア）惻怛の念のみなり、更に利欲人我名聞等の念なしゆゑに、父に發して孝となり兄に發して悌となり、君に發して忠となり友に發して信となる、みな一箇の慈愛惻怛の念是仁の用なり、されば仁の體にかなふて無念無物なるときは、二六時中心におもふ處身に行ふところ盡く慈愛惻怛の事にあらざる事なし、此に至て體用一致にして更に二つなし、故に中庸に此仁の體を未發の中といひ仁の用を已發の中といへり、元來體は本なり用は末なり、本立時は末おのづから行る、行るゆゑに修行人はひたすら此仁の體に心を用ふべし、此仁の體を知るを悟りといひ此仁の體を持つを養といひ、養ひ得て體用一致に成得たるを修行成就の人といふ也、されば仁の用ばかり知りて體を知らざるは皆門外の人なり、未だ體を知らざる人も自然に用にかなふ人もあれども、其智昏がゆゑに自分も骨を折然も過ちのみ多し、是を佛家に有爲の功業とい

（ア）渾然。まつたく。

（ア）渾然として自然の仁心を生じて大悲の心やむ事なし、されば釋尊も身を珂利王に切くだかれて反てかれを濟度せんと誓玉へり、されば此人たらん者此旦那を恨ずして、其邪見なるを憐て折もあらば慈善の道に引入たしとおもふ願ひを起さば、是希くば聖人の心にも合かとおもへりといへり、右五人の論いづれも一理あり其中に於て第四人目の論最よろしとみゆ、第五人目の論は至て高し至れり、然れども是凡夫の遽に至りがたき所なり、只よくこの第四人目の論を守りて失はずんば大いなる過ちなくして、遂には第五人目の所にも至るべし。

卷之中

問。仁の意味如何。

答。仁に體用あり仁の體を天理渾然と言へり、天理渾然とは天理のまるかせといふ事なり、天理のまるかせとは少しも思案分別のなき處なり、思案分別のなき處は無念なり、この無念の處天理のまるかせなり、思案分別のある限は皆私心なり右の私心なきゆゑに天理渾然といふなり、周子の太極圖說に太極の圖に圓相を書

今此旦那に逢ふて無き事の始めて出來たるやうにおもふて憤るは少き心にあらずや、猶是に十倍する逆境もあるべし、豈是等の事を以て心を勞すべけんや、其上人は常に順境に馴れて何にても如此ものと思ひしみて自然に愼も弛み恣に成ゆくものなり、か樣の逆境に逢てこそ怠をもいましめ道心をもます／＼堅固にすべし、然れば此旦那は我仇にはあらで反て我善友なるべし、心の中には伏拜て禮謝すべき事也、豈あへて是を恨んや、且人多くは其身の程を知る能ず、誰にても多くは我程よりは拔群に善きやうに思ひをれり、世に是を己惚といへり、人もまた眞の直打よりは善やうに待へり、是によりていよ／＼我身を善と思ひこみ居るなり、此時人我眞の直打をいへば、我いかつてこれをうらむ、譬ば穢多を穢多といはれて腹を立乞食を乞食といはれて憤るがごとし、もし又我直打を見ぞこなひて我を鄙とも我過にあらず、彼人の目がねの暗ゆゑなれば我何ぞこれを怒んや、また一人の曰、子が論最至極せり我又非とすべき所なし、併ながら聖人佛の心にくらべば猶いまだ至らざる所あり、但聖人の心は無事也、無事なれば喜怒に奪れず、喜怒に奪れざるによつて心常に間暇なり、心常に間暇なれば胸中天理

の也、喜怒哀樂とも皆しかなり、是大學に忿懥するところあれば其正き事を得ずまた其親愛するところにおいて辟すなといへるゆゑん也、蓋人情は多は偏なり倚所あるもの也、偏なり倚ときは必ず事に害あり、大いに偏なれば大に害あり、少き倚れば少き害あり、大小とも總て害なき事あたはず、譬へば一身の氣血一身に周流して一處に滯らざれば病なし、若一處に滯れば少きなれば痒をなし、大いなれば病をなし、腫物等をなすがごとし、ゆゑに中庸に喜怒哀樂の未發所を中といへり、偏なり倚ところ無きの謂なり、又喜怒哀樂といへども其情に溺ずして、義を顧て其宜を制すればみな節に中て害なきのみならず、反て大いに益ありて以て家を齊へ國を治て天下を平かにすべし、これ道の用なり、文王一たび怒つて天下の民を安ずといふゆゑん也、されば凡人情凝ところあれば何にても事に害ありとしりて、無事の心に返て其よろしきを制すべし、されば子の論可なりといへども、只我心に隔といふ是猶怒に凝たる所あり、不如怒を休、無事に歸りて唯何となく今迄の通りに出入すべき事也、且夫人の世に居るや、一生の間には色々の人に附合樣々の順逆の境にも遇べき事なれば、兼て此事は覺悟あるべき事也、

貧賤ニ而行ニ貧賤ニ素ニ夷狄ニ而行ニ夷狄ニ素ニ患難ニ而行ニ患難一との玉ふ所なり。

問。或人家内を引伴上下の者を連て參宮す道にて上下の者と爭論す、上下の者大いに辱められ此旦那に當りて其夜旅宿に於て自害せり、此旦那大いに難澁せり、この上下の者一朝の怒りに其身を忘れ父母妻子に嘆きをかけたるは因より論ずるにたらず、しかし此上下の者に成かはりて其よろしきを度らばいかゞして可ならんや。

答。或評して曰、此旦那無理なる人に　憤にたへざる事あらば、其身死して父母妻子迄難儀を掛んよりは、其所より暇をもらひ歸るべし、如斯なれば身に損なうして志も通れり、又一人曰、子の言善、然れども其よりは虫を死して都に歸り、其上にて出入を辭いふにしかず、如此なれば老成くして事を傷らず、短氣者の名を取ず身に損なし、また一人の曰、子の言先の言には勝れり、然れども未善盡さゞる所あり、不如是迄の通り出入して唯心の中にをいて是を隔べし、如斯なれば得意にも離れず人にも惡くいはれず、豈善からずや、また一人の曰、子の言また未善盡さゞる處あり、凡人情に任せて事をなし、義を思はざれば必過あるも

るべからず、其人柄に感心し皆道に入らん事をおもひ玉ふべし、然るに今の心學者多くは如此ならず、實に己を愼む心は薄く物知り貟に成、議論を好んで人に言勝事を樂とし、針程の見識を棒ほどに振舞し、高慢の心前に十倍し、然も行政は心實せざる以前と指して易たる事なし、責て肝積氣隨なりとも直らば人も許すべきなれども、夫も直らず、如此なれば人の厭嫌ふも理なりと知るべし、元來人情は我に勝を猜むならひなれば、學問なき人の前にては書物をひろげまたは儒家などに寄因ば早高慢臭くみえて猜心出來るものなり、鄙き藝淨瑠璃三味線などをこのめば朋輩に笑れ君父に叱るゝ切にてすめども、學問の方は結句猜み惡まるゝ事淨瑠璃三味線よりは其害甚し、されば學問をなす者は此人情を能合點して、假にも向上の論をなし學者貟すべからず、最初にいへる如くして行ふべし、若如此行ひても君父朋輩獨御嫌なされ候はゞ、早速相止てたゞ獨り心の中にて脩行すべし元來道は定たる形なし、但其境界に應ずり計也、ゆゑに論語に君子思不レ出二其位一との玉ひ、中庸に君子素二其位一而行不レ願二其外一といへり、されば學問の出來る時は成し出來ぬときはせぬなり、是學問の骨隨也、是所謂素二富貴一而行富貴素二

ば自然に心老成なる者也、別して婦人は移易き者なれば其付合所を愼むべし、但此心は妻を導に限べからず、兄弟子供都て家內の者乃至父母なりとも善人に交り玉ふやう計ひ度もの也、如レ此なれば人々心和て家齊ふべし、併しかやうの機動の根本は主人の心一なれば、先にいへる如く家を齊ふるとは唯己の心を研事也と心得べし、構て他人に目を付る事なかれ。

問。主或は親兄凡上に居人道を好事なくして世間併の時、其下に居る臣下子弟の者は常に志ありて學んと思へども、主君父は親兄學をゆるさゝれば良師ありても隨身成がたく、又學ばざれば心得違あらん事を恐る、かやうの時はいかゞ心得て可ならんや。

問。夫心學は己を愼み心を治るの道にて、心中に人我の念を斷名利のおもひを拂ひ、心を無爲に歸し取捨愛憎をなさず、君父を敬ひ兄弟を親み朋輩友達に信實を以て交り、常に人に謙り假にも己を高ぶらず、善事は人にゆづり惡き事は我身に引受、慈悲善根を先として目下を憐み、人の苦勞に易り假にも人の是非をいはず議論を好まず才覺を翔はず、如此ならば若父も朋輩も心學を嫌ひ惡み玉ふ心はあ

茶屋狂ひ下女に戯等の事固禁ずべし、此身持堅ければ妻の心安堵する也、扨又身分相應の事は妻の望の通りいたし遣すべし、如此なれば妻の心足納する也、但此事は夫の心得なり、妻たる者惡く心得て致くれぬとて夫を怨べからず、但身上の相應は夫計知て妻は知らぬもの也、妻は夫の賄ひに任て金銀を遣て帳面の出入を知ぬ者なれば、今年の帳面いかほどの損失あるや又いかなる借財あるやしらぬ者なれば、身上の相應不相應は夫に問て知るべし、さて此二箇條の行政出來て妻の心足納せば折に觸縁にふれて妻を柔和忍辱にして善根を知る事を致べし、且又儒道佛道の敎へ ありとも因ちなむやうにしたき事也、凡夫の心は儒道佛道の御蔭にあらざれば安心慈善成がたし、最あがめ貴むべき事也、扨夫一人の導きては中々至がたき者也、隨分善友に交らせ善師に從しむべし、佛者の上にても貴き知識などに見ゑしむるは最益あり、少にても邪ある知識には近付しむべらず、此目利甚大事也、若倚たる偏見出來ぬれば是又大きなる害あり、元來人の心は移易ものにて富家に付合は心奢氣が高く成也、貧者に附合ば心鄙なり人事をいひたがり心拙く口さがなく成也、又佛道者に付合ば自然にしん心おこり篤實者に付合

夫と心を合せて氣を付ば何も和合し如在なく勤べし又夫質素を守り儉約を勤め家業を出精し家を興さんと思へども、妻邪見にして從はず、或は衣服を美にする事を好み遊山を嗜また取締なく自墮落ならば、夫やたけに思とも此事成がたし、譬ば湯を沸して水にするが如し、是妻夫の福分を破り出世の道を挫終には自分も夫と共に借金に追れ逼塞する類世間に多有、若また妻心を合せて倶挊せばいかなる家も興べし、元來婦人は僣上の心深き者也、其里方身上宜ければ一生それを鼻に懸人に矜心あるものなり、夫ゆゑ夫の心に從ひ身をさいて倶に勤事なりがたし、妻たる者は此所を能々合點すべき事也、夫たる者又よく是等の人情を知て善に導べし、是を以て知るべし家を齊ふるの本は夫にて、其夫を助て家を齊ふるものは妻なり、されば夫婦心あへば萬事思ふやうなるべし、易に曰、二人同レ心其利斷レ金同心之言其臭如レ蘭といへり、此言心は二人心を合せてすれば其鋭事は金鉄をも斷その言の香き事は蘭麝の如しと也、他人と心を同うしてだに如此、況や夫婦心を合るに於てをや、されば一家の主たる者、我心既に明に其身脩らば先妻の心を服從ふべし、妻の心を服するには先自分の身持を堅うすべし、妄狂

孝成がたく、親子嫁姑の間に小言絶ず心を痛ましむる事のみ多し、此を以て家治らず若夫婦心合て倶々心を合せて父母の氣をとり心を付て事へば此孝成就して親子嫁姑のあひだ親しく睦して家治るべし、たとひ頑なる父母たりとも夫婦だに心合はゞ、如何樣とも氣の取やう有て父母の心穩なるべし、また夫兄弟抔ありてよきに世話したく思へども妻邪見にして從はざれば、此友愛成がたし、此を以て家治らず兄弟　嫁弟嫁なんどものいひ絶ず終には破斷の本と成べし、若また妻夫と心を合して世話せば萬事行屆　其間　和睦して家治るべし、又夫我子を善に導き育善友に交らせ善師に付け、質素實體にして家業に疎からぬやう育度思へども、妻或は奢者にて花麗に育高慢に導き遊藝に長ぜさせ遊山に驕せなどする時は此子野良者に成りて相續成がたし、若妻夫と心を合せて善に導かば少々六かしき生質なりとも大方はよく生立べし、若又夫婦心を合せ力を盡ても子の生質惡して及ざる時は此上は天命なるべし、また夫家内の者下女下男又は出入の者に至まで心を付情をかけて懷安せんと思へども、妻邪見にして情を知ず或は肝積つよく氣隨氣儘なれば此事成難、奉公人育ず出入の者誠を思はず家衰べし、若また妻

其氣質を變化し玉ふべきなり。

問。家齊とはいかゞいたす事に候や。

答。家を齊ふるとは卽ち身を脩る事也、身を脩るとは卽ち心を正し意を誠にする事也、心だに正しければ身も脩り家も齊ふべし、されば誠意正心の外に別に脩身齊家治國平天下の法ある事なし、然るに力を深く心法に用ひざる人は此味を知らず、脩身は唯身の行作を脩る事と思ひ、齊家治國平天下は只人を治る事とのみ思へり、不知身も家も國も天下も皆一心の中のはたらきに因る事を、又譬ば心は燈の如し、脩身齊家治國平天下は燈の光の如し、燈明かなれば光照さゞる所なく、心明なれば萬事おのづとと〻のふ、故に學問の要は初學より終に至る迄唯一心を明にするにあり、能々心得玉ふべき也。併ながら斯斗にては初學の心得に成がたきに似たり、ゆゑに今且第二義に下りて齊家の心得をいはん、家を齊るの要は夫婦和合を本とすべし、夫婦和合だに心合ば他にむつかしき事有ても如何樣とも計ふべし、若夫婦心合ずんば他にむつかしき事なくても家治りがたし、譬へば夫父母の心を足納させ喜び暮させたく思ても、妻邪見にして從はざれば此

り、されば知りても得爲ぬ人は何ほど知ても一ッも知らざるにをなじ、また一ッ聞ば一つ行ひ二ッ聞ば二ッ行ふ人はしらざれども知る人にをなじ、扨知れども得せずして衰微する人は知あるやうなれども實は愚人なり、またしらざれども能人に向ひて行ふ人は愚なるやうなれども實は知者なり。

又問。知ある者は己が知をたのみて怠慢なる故に衰へ、愚なる人は敬み恐れて大事におもふが故に榮ふるにあらずや。

又答。左樣の道理も無にしもあらず、然れども精く論ぜば人の知に二ッ有、但才智のみありて恐れ守る事の出來ぬ人あり、彼衰微する人是なり、是は唯當座の利口を喜んで期しての所を恐れ愼むの氣象なき人也、蓋知あつて行なき人ともいふべし、また愚鈍なれども深く恐れて固く守る人あり、是は必ず事を濟し家を興す人なり、蓋知は薄して行厚き人ともいふべし、されば人の才智の勝たるは深く恐るゝに足ず、只敬んで守る人こそ眞の剛者なるべし、此事世上の身上持ばかりにあらず諸藝學問より家國天下の政事武邊等に至るまで皆しかなり、是を以て敬の一字の大切なる事を知るべし、若此事我身におもひあたり玉はん人は、深省て

其上名聞我慢は戒むれども止がたく、但酒は嫌なれば酒の過ちはなし、其かはり付合あしく人和なし、何れ埒もなき事ども也、此以後心を付て少しつゝなりとも直したきものなり。

問。世間に至つて發明にて諸商賣の懸引諸職人の仕事又は金銀の應對公事訴訟の入譯等に至るまで知らずといふ事なく甚人の重寶になる人あり、然れども自分は身上を持こと能はず、次第に衰微逼塞に及ぶ人あり、また至つて愚鈍にして何事も人に問てする人あり、然れども身上次第に繁榮せり、か樣の事間多き者也、いかなる者に候や。

答。昔齊桓公(十六)郭の國に行老分の者に問て曰、近頃亡びたる郭の君はいかなる人柄なりしや。答曰、善を好んで惡を惡む人柄にて候ひし。桓公曰然らば名君也何として亡びたりや。曰善を好ども善人を擧用ひる事能はず、惡を惡めども惡人を退る事能はず、是を以て亡びたり桓公大ひに恐れ玉ひ早速國に歸り佞人を退け賢人を擧玉ひしとなり、されば世に譯は知つても少しも得せぬ人あり、また譯は知らねども一ッ聞ば其一ッを大事に行ひ、二ッ聞けば其二ッを必ず行ふ人あ

(十六)郭。春秋莊公二十四年、赤歸ニ于曹一郭公なり左氏傳、穀梁傳、孟子には號に作る、公羊傳には郭なり

無レ魚、人至察無レ友といへり、且また小智の人のまはり氣は多くは人の思ぬ事を知顔にて、我こち明智にして人を見拔たりと思へり、か様に思はれたる人は大きに迷惑するもの也、最戒べき事也、また氣の付ぬ人は隨分世間の人の仕內を手本にして氣を付ならふべし、自墮落なるは本より宜からぬ事也、尤戒むべし、されどまた丁寧過たるも事によりて害あり、丁寧を棄てよき時あり必ず丁寧を善事とばかり思ふべからず、常にくつろぎ有やうにすべし、下戶は勿論德もなし損もなし、上戶は失多し戒むべきの甚しきものなり、又親切は最善事也、然れども是も程よく用ひざれば世話仕過て反て人にいやがらるゝ事あり、不實にして實情なき人僞をいふ人などは固論ずるにたらず、世の廢ものなり、孔子も人として信なくんば其可なる事を知らずとの玉へり、此外人々癖多かるべし、一々には述がたし、おの〳〵自吟味して是を改むべし忽にすべからず、愚老如きは丁寧過て惡き事あるかと思へば、また自墮落にて惡事あり、性急にて害あるかと思へば、また頓と物を捨置事有、結構にみゆる事もあれどもまたむくろ腹立る事あり氣の付ぬ癖に邪推を廻し、氣の少くて吝は常なれども又世帶持にとりじめなし、

す、また董安子といへる人は性緩なる人ゆゑ腰に弓の弦を佩て戒とすといへり故に二人ともに過なし、また賈誼といへる人の語にも、聰明なるものは物を見過ぬやうに戒め、智の昏き者は物に心を付る樣に心懸、氣の弱き者は負ぬ樣に强者は强きに過ぬ樣にせよといへり、されば人々我氣質を能々知りて癖をば少し宛にても直し度もの也、されば題にいへる氣の大なるは善樣なれども、常に大き過て過ち多き者なり、か樣の人は隨分氣を小く持てよし、また氣の小き人は夫にてよき事もあれども餘り嗇なりて、用ひべき金銀も用ひざるに由てまた大ひに害ある事あり、か樣の人は用べき所にては隨分張込で用ひべし、優成人は隨分氣を引立て事に後ぬやうにし、暴躁ものは急て事を仕損ぜぬやう肝要也、肝積もちは本より大なる疵也、戒ても戒め愼ても愼むべし、是身を害し家を亡すの兆なりと知て恐れ愼むべし、結構仁はまた柔弱に流れぬやう是又肝要也、結構過て附合を張り奢を改めず遂に家を亡す人あり、古人も優柔の君は何事も仕來の儘にして決斷なきゆゑ天下を失ふに至る事をいへり、また此類なり、されば結構も害なき樣用べし、氣の廻る人は毛を吹て疵を求め、人をも病めわれも苦めり、古人水至清

からざるなり。

問。人々麁草粗忽多くまたは物忘れするは氣質の性に候や。

答。本より氣質の性なり然れどもまた其由所あり、物事麁草粗忽の多きは多くは氣をせき急によれり、物忘れ多きは固より、氣のせくとまた心の物、馳動ひて躁く落付ざるによれり、されば常に氣をせかす心を落付て、目前打向ふたる事に念を入れゆかば此二ッの疾少なかるべし、是又氣質を變化するの術なり、且是持敬存心の法にて心を治るの肝要也、但麁草物忘の害まぬかるゝのみならず、實に德に至るの法也、愚老幼少より常に此病あり、ゆゑに存心の功また密ならず、やう〳〵此頃此事に心づきたり、誠に晩心付なり御一笑下さるべく候。

問。人常に癖あるものなり、氣の大きに手びろげなる人有、氣の少く吝人あり、ぬるく優なる人あり、いらちて忙き人あり、肝癪持あり、結構仁あり、氣のせまる人あり、氣の付ぬ人あり、丁寧者あり、じだらく者あり、下戸あり上戸あり、これらの癖いかんして直すべきや、いかむ。

答、昔西門豹といへる人は至て性急なる人なるゆゑ常に韋を腰に付て戒と

妙なるものにて心變るときは氣もまた從つて變せり、されば貧賤の人も富貴になれば其人相自ら易り、不德の人も學で德を成就すれば顏色容貌目付迄、自然に昔の人に非ず、されば人相家の說に怠惰の人は筋肉ゆるまり、敬愼の人は筋肉よくしまる者といへり、されば敬する時怠慢散亂の氣自ら凝集して、身體もおのづから健に根氣も自ら强、堪難事にも能堪細些の變事に逢ては妄に動顚せず、心氣も清明になりて能利害得失を辨じ、目も自ら明かに耳も自ら清く、知も自ら哲なる也。如此精神清明嚴肅なる時は壽も自ら全く果報の感通する所も自ら善成べし、是一心によりて氣質の變化するゆゑなり、且又敬の中に於て、生質和緩の者は少く嚴急を心懸て、生質嚴急の者は反て和緩を心懸て聰明の者は大察を戒め、昏冥の者は明察を學ばゞ、是鹽を加へ砂糖を添るの類なるべし、譬へば一種の酒なれども日を經ては醋とも成又苦もなるが如し、一心の心得にて一種の氣質惡とも成善とも成、吉とも成凶とも成こと實に疑ふべからず、是敎の已べからざるゆゑん也、然るに氣質を變化する事は專ら敬の一字に因るべし、既に敬する上はまた自由の所ありて剛柔緩急其よろしきを制すべし、敬の一字ゆるがせにすべ

度事也。

問。同じ人に堯舜の如き聖人あり、桀紂盗跖の如き惡人あり、又は愚駭の人有發明の人あり、剛强なるあり柔弱なるあり、是如何成故ぞや。

答。是所謂氣質の變なり、譬へば蒸菓子なんど手製するに數十遍する中に自然にふしぎに能出來る事有て、我ながら驚て今再びこの通り製せんとする事も中々及れぬ程の出來あり、是聖人堯舜の如し、又一向不出來にて苦いやら辛いやら、惡臭やら食ふに堪ざる事有、是桀紂盗跖の如し、また中出來の人は發明者なり、下品の出來は愚昧の者なり、味ひの濃は剛强の人なり、味の薄きは柔弱の人なり又一向の安本丹は出來損にて片輪者なり、されども至て不出來の者もふたゝび砂糖なんど加へて製し直せば少しはよき味ひにもなるべし、其ごとく人も氣質の偏あれば學で改むれば、下愚も中人と成り中人は上知にも至るべし。

又問。成ほど心は取直せば少々は直るべし、されども生れ付し氣質は直るべからず、人は蒸菓子と違て砂糖を加へ鹽を添事成べからず、如何。

又答。此疑ひ一通は聞えたり、然れども未至らざるところあり、夫れ人の心は至

べからず。第四には町內得意先買先等に至迄大切にいたし少も不實あるべからず第五に家內奉公人下女小者より出入の者に至るまで少も如在なく愛敬ありて情深かるべし。第六に家業を出精し少も油斷あるべからず。第七に奢を戒め儉約を守り美服珍器等を用ふべからず。第八に酒宴遊興に耽り大酒飽食等すべからず、色狂賭の諸勝負等勿論の事也。第九に短氣肝積無禮高慢氣隨吝嗇等をいましむべし是等の過あれば家內も歸服せず、一家親類得意先出入の者其外附合中迄も疎み惡で立よらぬ樣に成行也、如此なれば家を贔負する者は我斗なり、世上の人皆敵と成也、是を孟子に獨夫といへり、獨夫とは獨の男といふ事也、元來人は獨にては立ぬものなり、餘人の精にて立つもの也、若餘人に惡み疎てはいかほど賢き人にても身の立ものに非ず、終には淺猿敷身分と成行ものなり。第十に元來我等如き凡夫は兎角一分の了簡にては身は保がたき者なれば、儒道か又は佛道を信じ學で是を一生の仕事とし樂として朝夕心に懸くべし、扨如此十箇條を愼んで相守らば假令運命拙く生れし人なりとも、相應の果報は保べし、若また此愼みなくんば運命强き人なりとも、數年の內にはかならず此果報を失事必せり能々工夫有

者は一生無事に險き者は種々の艱難にあへり、然れども又出生の後身の養生心の愼にて、貧賤を轉じて富貴を得短命を變じて長壽を得る事もあるべし、また身持放埒心得あし　によりて、富貴長壽の果報をやぶりて困窮短命なるもあるべし。されば此善果を持に道あり、先第一に先祖父母の墓をあらしとひ吊ひを打捨おけば、其家必衰微すといふ事いにしへより言傳る事にて實に違はぬ事なり、先祖は家の根本子孫は枝葉なり、根本枯るゝときは枝葉必ず衰ふ、況や今目前に存生なされ候父母に於てをや、少にても麁末に思ふ心あらば其報逃るべからず。第二に神佛を尊敬すべし、少にても不敬無禮の事あらば其冥罰違ふ事なし、然に世の生賢き者は神佛をなきものと思ひ、又先祖父母の罰もなき事と思へり、是を以て次第に果報薄くなり色々故障等出來たれども、たゞ偶然出來たる事と思ひ己の過より招たる禍と言事を知ず、是孔子の玉ひし積善之家有餘慶、積不善之家有餘殃との玉ふ事を、たゞうはの空に聲なして其理を實知せざるが故也。老父此ごろ窮理緒言といふものを著して精くかやうの道理を述たり。閒暇の節には御覽も下さるべく候。第三に兄弟夫婦一家親類緣者の末に至るまで無禮不實の事ある

實體にして父母の命を背ず能家業を相讀するをいふなり。第六に、安心とは種々の災難に逢ず、一生無事にして心痛の事なきをいふなり。此六ッ揃たるは善き果報の人なり、但此六ッ盡く揃事は希なり、此中三ッ四ッもあらば先善き果報の人なり。さてまた此裏にて、物事乏く不自由にして、あるひは借財に追れ、或は先祖より持傳への家に離れ妻子離散するが如きは貧賤なり、中年にて氣打腎虚または色々の病にかゝりて死するは短命なり、人に惡まれ指し笑れ或はごくとうといはれ泥坊あはうなんどいはるゝは惡名也、種々の難病にあひ一生くるしみ、不自由するは病身なり、子孫或は惡黨又は銅脉ものにて家名相續成がたく、娘なんども氣隨徒ものにて屢片付置てもまひもどり〳〵するは子孫の頑愚なり、一生種々の心配たえず常に心を惱すは苦惱なり、此六ッそろひたるは惡果なり、たとひ皆々揃はずとも二ッ三ッあるは先果報拙人なり。さて此善き果を得たる人は人間にあれども天上の樂なり、又この惡果に逢人は地獄に落たる人なり、偖如何してこの善果を保んとならば、元來人間出生の始天氣を受るに、厚あり薄有平かなるあり險きあり、厚き者は一生富貴尊榮に薄き者は貧賤夭殃に平かなる

道の衍

卷の上

問。人間のよき果報とはいかやうの事をにて、また何をつて、是を保申べきや。

答。人間のよき果報といふは、第一には富貴、第二には長壽、第三には芳名、第四には無病、第五には子孫の孝順、第六には安心成べし。第一に富貴といふは、あながち王候大臣または長者となるといふにはあらず、其人の身分相應に事足りて不自由なく、人にも賤しめ慢ることなきをいふなり。第二に長壽とは、必しも九十歳百歳の壽を保にもかぎらず、大概六十を過て終るは先は長壽なるべし。第三に、芳名とは是又必しも名を末代に留るにも限らず、人に善き人賢き人といはるゝは芳名を得たるなり。第四無病とは、種々の難病に逢ぬをいふなり、第五に、子孫の孝順とは是も必しも郭巨孟宗のごとき孝子を持といふにはあらず、

またさして爲がたきことにあらず。元來人の心德生れつきて、無理はきらひなれば、少し無理をいひ無理をじても、忽心身安樂ならず。然るに此不孝不弟は、無理の極巓なり。故にこれを直し習ふ事なり。先づ遠く知りがたき死の道は、しばらくさしおきて、さしあたり無理をやめねば、安樂にならず。忠孝愛敬は手ぢかく爲ねばならぬ、日用の所作なり。上をうやまひ、親へ孝行につかへ、兄弟妻子從類睦まじく、ものやはらかにて行義よく、家業を大切にし、人に慈愛ありて信實あつく、假にも無理をいふまじ、無理をせまじとつゝしみ、(十五)不斷善師友などにまじはりて、心得違身の過をも直してもらひ、かくのごとくして平常くらし習ひ、其功つもらば、何も彼も疑ひのはるゝ時あるべし。かへすぐも脇目をふらず、己があしもとを見て歩み習ふべし。實にかくのごとくならば、遠きをはからず難をさけて、力行も亦安樂ならんものか。

安樂問辨終

(十五)不斷。つれのこと。

聖人偏に說かず示さずと、のたまふにはあらず。人或は志を遠にはせ、意を難にまどはん事を、憂ひたまひての事なり。むかし(十三)子路死の道を尋しに、孔子答て、汝いまだ生を知らずば、何として死をしらんとのたまひて、いひきかせたまはざりしなり。是いひきかせたまはざるにはあらず。死生一なるを示したまふなり。道に志あるものは、現在目前の人倫をよく勉るを事として、死後の事は謀らず。然れども前にいふごとく、生に明らかなれば、死もまたあきらかなりと知るべし。語に君子謀レ道不レ謀レ食學也祿在二其中一矣とのたまひしごとくにて、道を學ぶ君子は、人の道をあやまらぬ事ばかりを心がけて、奉祿の事は少しも思はねども、人の道をよく盡して勉るものは、天祿とて天の惠みに、奉祿は何となく、その中に具りてあるなり。死生の譯も、これを推して見らるべし。我が門には、死後の事強て沙汰に及ばず。これはやむ事を得ず對ふるのみ。孟子曰、道在レ近而求二諸遠一事在レ易而求二諸難一人人親二其親一長二其長一而天下平也と。これを以て見るべし。　父母として、親しく孝養を盡し(十四)尊長を尊長としてうやまひ、弟の道をよく守るは、人の身にとりて、これより手ぢかき事なし。

(十三)子路。孔子のお弟子の字(あざな)にて仲由といふ人。

(十四)尊長。めうへと年うへのこと

（十二）舊跡。ふるきあとのこと。

うく心安樂ならず。ゆゑに善師を撰びて性理を明らめ、聖人の（十二）舊跡にしたがひて、心苦をのがれ、身の害をまぬかれ、萬古不易の大安樂をきはめんとての事なり。されば道を學ばずして、くるしからぬものは、草木鳥獸はいざしらず、人は君あり親あり、夫婦兄弟朋友あり、人交りはせねばならず、たとひ道を學ばずとも、あしき事をいひ、無理をしては、人がゆるさず、我もこわし、こゝを以て見れば、いやでも道によりて居る也。故に易の繫辭にも、百姓日用而不レ知ともも、のたまひしなり。所詮無理のならぬ世界なれば、尋常に正しき道を學びて、心身ともに安樂にならんと勵まるべし。

問、用の安樂はきこへたり。死の安樂はいかに。

答へ、語に、朝聞レ道夕死可矣とあり。道をきくとは道をきゝ得て、生の理をあきらむるをいふ性を知れば、死の理も亦外ならず。故に程子ものたまふ、人の道をあきらめしものは、君父によくつかへ、人交り和順なれば、死しても必安しとなり。易の繫辭に原レ始反レ終、故ニ知二死生之說一とものたまひしなり。然れども、我儒門は先大體生を說て死をとかず、日用を示して幽隱をさゝず。これ

(十一)宰我。孔子のお弟子の名。

り。然るに我はあしき事はせず、これでよしと思ふ。人我を意とするは、座敷の眞中に、大火鉢を置て、御火焼するに異ならず。何と大きに恐ろしき事にあらずや。かくいへば、それはあまりへた念といふものなり。世間を廣く見よかし。滅他な事もなきものなりと、いふ人もあるべけれど、それは火の手のあがるを見るまでは、驚かぬ不覺人といふものなり。火事に成てはむづかしく、聖人有レ憂レ之使三契爲二司徒一敎以二人倫一とあるも、此大難をいたみたまひての事なり。むかし(十一)宰我、三年の喪を一年に縮めては、いかにあるべきと尋ねしに、孔子曰、君子の喪に居るは、世間を思ひて勤るにはあらず、食レ甘ども甘からず、聞レ樂ともたしまず、居處安らず。それ故にせざるなり。今世は心にやすく、何ともなくば勝手にせよと、甚惡みたまひ、人生れて父母の懐に抱かれ、三年の間ことに苦勞い恩あれば、それゆゑ責て三年の喪を、實心より勉る事なるに、宰我ばかりは、親の恩をうけざりしにやと仰せられて、つよくいましめたまひしなり。此一事にて聖人の學問を味ふべし。惣じて道を學ぶは、世間の義理にかゝりて、する事にはあらず。人は本心義理正しく、生れつきしものゆゑ、道に違へば、身あや

り、善人の好くものは、惡人はきらひていやがるなり。これが眞の道理なり。然るにもし錯りて、何の辨へもなく、たゞ人にきらはれぬを手柄とし、不忠はせず不孝はせず、渡世はよくする、家業に不沙汰はせず、身上お算用につまらぬ事はせず、人に物はかせども、此方へはからず、相應に繁昌はしてゆく、何の不足なければ、我はこれでよし、道をまなべば、却て人にきらはるゝなどゝ、思ふ人もあるものなり。これが前にいふ、我とこれでよしと思ふ、人我の大兆なり。衆惡これより起るなれば、道を學ばずして、よしといふ事うけられず。及ばずながらも、少し道を學び、人我の私にかちざらんとしてだに去がたき人我なるを、其人我を身のあるじとして、くらす人こそあやふけれ。たとへば、人我は火のごとし顏子克己復禮を以て事としたまふも、其火の用心をしたまふ事なり。視聽言動につけても、悉く禮に立かへりたまふとは、禮は即天理にして、本心なり。本心に背きたまはぬをいふなり。本心は元來虚にして、火の氣なきがごとし。ゆゑに物にもえつく事なし。あしき事をあしきと知ながら、視聽言動たくなるは、人我といふ火氣なり。聖人の學問は、此火の用心をよくして、火事を出來さぬばかりな

はあらず。然れども、細工の道を學びしものゝせしとは、必違ひあるものなり。
諺に餅はもちやといへるがごとく、ましていはんや、人にはさま〴〵の品ありて、打見に忠孝をよくし、家業を大切にするに似て、人みな善人なりとおもふ人柄に、大きにあしき人あるものなり。これ孔孟のきらひたまふ、愿人といふものなり。此愿人は其志の向ふ所、只己が譽をもとめ、忠孝に似ざれども、これも人にあしくいはれまじきがために、つかへをよくするなり。善人に逢ひては、惡人をいやしめ、善人の間に合せ、惡人に逢ひては、善人をそしりて、惡の加黨人となり、老人にも、若き人にも、子どもにも、女にも、一人ももらさず、あれはよき人なりと、いはるゝを手柄とする、面諛ものをいふなり。むかし、子貢問けるは、一鄕のうち、皆あれは善人なりといはゞ、其ものを善人とせらるべしやと孔子答へて其分にては、定めがたしとのたまふ。又問、然らば一鄕の中皆惡人なりといはゞ、それはいかにといひしに、孔子對て、それも其分にては定めがたし。たゞ一鄕中の善人、これを善人としてよみし、惡人は不善人として嫌はゞ、それこそ實の善人ならんと、のたまひしなり。惣じて一樣に好る事はならぬものな

（十）語勢。ことばのいきほひ。

まひなきやうにとつゝしみ、言にいひ過なきやう、あしき事をいはぬ様にと、乾と守り、猶も我があしき事は、見知りがたきものなれば、道ある正しき人を師匠とし、錯まりあれば、それを直してもらふべし。若かくのごとくする人あらば、それこそ眞實に學問をすき好むといふものなりと、のたまひし事なり。已とのたまひしは、限りたることばにて、甚をもし、かやうの人柄でなふては、學問をすくとはいはれぬと、限りてのたまひし（十）語勢にて、古への學問のしかたは人本心にまかせて、五倫のまじはりをする外なき事を見るべし。

問、いまだ道は學ばねども、忠孝をよくし、家業をも大切にし、繁榮にてくらす人あり。左様の人は、自別に道を學ぶに及ばずといへり。其人は學ばずとてもよかるべきや。

答、其人は、聖人か、賢人か、もし聖賢なりといはゞ取らず、聖賢は我これでよしと思しめさゞるゆゑ、聖賢なり。我と、これでよしと思ふは、人我の大兆衆悪の根本なり。たとひ質美にして忠孝をよくするとも、聖賢の道を學ばずして、自己の才覺より出るものは、譬ば素人の細工をよくするがごとし。あしきといふに

ず。堯舜の事跡をしるせしより、漸書籍は始まれり。經書といふは、聖人の言行をしるし、人其舊跡によりて言行を錯らざるための、鑑とする便にあつめしものなり。されば書籍をも用ゆべき事なり。子曰。弟子入則孝出則弟謹而信汎愛レ衆而親レ仁行有ニ餘力一則以學レ文と。これは人の子たる身、弟たる身は、先親へ孝行の事へを大事とし、上たる人へ忠義を存じ、大切につかへ、惣じてつゝしみあつく信あり押なへて人を愛し憎ます、仁者の德ある人に近より、懇につかへて師匠として身の及ばぬ所をたゞし習ひ、凡是等の事を少しも怠らずして、其上隙いとまもあらば、其時はたゞ居せずして、聖賢の書籍をも拜見し、五倫を行ふ助けとせよと、のたまひし事なり。此文書とのたまひしは、聖賢の書の事にて、詞章文辭の書にはあらず。又曰。君子食無レ求レ飽居無レ求レ安敏ニ於事一而愼ニ於言一就ニ有道一而正焉可レ謂レ好レ學と。此君子とは、道を學ぶものはとのたまふ事なり。先第一食もの、衣もの、家居等の物好もとめ、望あるは一向望なきものにて、いふにたらず。學問の志あるものは、君につかへ、親につかへ、己が家業、身の職分を大切にして急々によく勤め、身にあしきふる

問、道を學ぶには、本心を知るを先とするよし、さもあるべけれど、書籍によらずしては、學問とはいはれまじ。

答、いかにも、學問の事は書を廢べきにあらず、然れども、古への學といふものを知るべし。孟子曰。人之有レ道也飽食暖衣逸居而無レ教則近二禽獸一聖人有レ憂レ之使三契爲二(九)司徒一教以二人倫一父子有レ親君臣有レ義夫婦有レ別長幼有レ序朋友有レ信、舜命レ契曰。百姓不レ親五品不レ遜汝作二司徒一敬敷二五教一在レ寬と。これ道を學ぶのはじめなり。道は外の事にあらず。親へ孝行に子を愛し、上として驕らず。下として背かず。夫婦中よくして亂れず。兄をうやまひ、弟をあはれみ。朋は、たがひに眞實厚く、かくのごとくするは作意にあらず、本心の生れつきなり。それゆゑ是に背けば、中あしくなりて、人くるしむなり。本心に、忠孝の道理生れつきたるは、身にとりていはゞ、手は物を持、足は地をゆくがごとし。されば心忠孝にさかふは、手にて歩み、あしにて物を執るに同じ、轉覆してくるしきを知るべし。聖人の教は、生れつきの安樂なる本心に任せしめて、轉覆のくるしみを救ひたまふのみにて、他事なし。堯舜の時、多の書ある事をきか

(九)司徒。今の文部大臣のやうな役人のこと。

無作とあたへず、高きに昇れば、落るぞ、降よと制し、深さに臨めば、溺るゝぞはまるなととゞむ。物見に出れば、よき程に歸れと、呼につかはし、戲て雜禮あへば、それは過ると呵り、眞面にして引込居れば、誰ぞ何とぞせしかと、尋聞、少しも由斷せず、世話をやき通せば、子ども心には、唯彼人も物をくはせたり、くれらるゝ所はよきが、それはやめ、これはすなと、小ぜはしく喧しく呵り廻らるゝ、小意地のわるき男哉と、思ふものなり。年經て成人の後おもへば、食たきまゝ食ば腹痛して興さめ、終日の遊びならず、見たいものも、見まゝにして招よせねば、見とれて物も食ず、腹損じて目をまはし、終日の遊びならず、高きも深きも、のぼりまゝはまりまゝにすれば、手足打折、溺死もはかりがたくして、終日の遊びならず、飲しだい、食しだい、見しだい、落しだい、溺しだいが好にてそのまゝにして置ても、怪我も障もなきものなれば、よけれどもそれなりにしては、惣高に安穩ならぬゆゑなりといふ事を、思ひ知るなり。これは甚知れたるやうなる事なれども、此所吃と、骨髓に徹しなば、聖人佛の御恩德を、少し有がたく思ふやうにもなるべきは、熟これを思ひ見るべし。

らずや。

問、これは卑劣の事にて尋るも辱しけれども、諸人、聖人佛の教を口には有難しのかたじけなしのといへども、心底に、それをもするな、これはならぬのと、のたまふことと實は小意地のわるいやうに思はるゝと、いふもの多し。我もはづかしながら、それに同心する氣味あり。此所いかゞして、思ひひらき、眞實にかたじけなき志になるべきや。

答、善かな、これは甚實問なり。聖賢の意味、我らごときの窺べき所にあらねども、先聞おける所をかたるべし。聖人佛はいふに及ばず、仁厚慈悲の御さばきなれば、中々諸人の所欲希望を、少しも指とめたまふ御心なし。唯心身快樂にして萬の災難なり、生涯はいふに及ばず、未來までも、何の障もなく、安穩に、くらさせたしと、思召すばかりなり。それを譬ていはゞ、こゝに一人大勢の子どもを集め預りて、遊山に伴ひしものあらんに、その子どもを終日快く、遊ばせたしと思ふ外に他念なし。此人は、聖人佛にたとへたり。子どもは、小人衆生のたとへなり。時にその子どもに、食物を年輩に應じて、程をはかり、くはせ菓子をも

(八)琢磨。とぎみがくこと。

習を、えすてぬゆゑなり。本心を知れば、此氣習を、用ぬゆゑ、滯りなくつとまりやすし。

問、もし人欲の氣習をすてさりなば、人のたのしみは、なくなりて、活て世にありとも、詮なきやうに思はれ、道の志發りがたし。

答、これ本心を知らざるゆゑの疑ひなり。人欲の氣習、中人以下は急々には去りがたし。然れども、本心を知れば、前にいふごとく、安樂の實體を知るゆゑ、人欲虛假のたのしみに、本心をしかへる事がいやになるなり、左はいへども、馴染し人欲の氣習ありて、何とやら其方へ引れ安し。これ本心の光不明なるによれり故に日々内には、明德(八)琢磨の功を用ひ、外には克己戰兢の力を勵せば、いつとなく本體の安樂あらはるゝやうに成ゆくなり。樂は各その類によりて違ひあり。糞中の虫は、穢をたのしみ、清水をにくみ、芻豢の獸は、草穀を愛して、肉を悦ばず。いにしへ、麗姬といへる美女、江に立よりければ魚恐れてにげしとかや。孟子曰。不仁者可二與言一哉安二其危一而利二其菑一樂下其所二以亡一者上不仁而可二與言一則何亡レ國敗レ家之有と。これ小人の安樂なり、恐るべきことにあ

むれば、道を學ぶ人數の內に入る也。然ば、いかほど、下根下劣の人にても、下根は下根、下劣は下劣なりに、道は學ばるゝものなり。

問、身分の器量だけ、如在なく盡して勉ればよしとの事、一應聞えたれども身をつゝしまば、後の心は安樂にもあるべけれど、さしあたり、鼻をつくやうに、窮屈におもはれ勉りがたかるべし。

答、その窮屈におもふは、世間の氣習といふものなり。何もかもすることとならぬといふ事にはあらず、見まじきものを見ず、聞まじきことをきかず、いふまじき事をいはず、せまじき事をせなとの事なり。たとひ道を學ばねばとて、見まじきを見、爲まじき事をして、よかるべきや。大かたのあしき事は、道を知ぬものも世間がこわさにせぬなり。さほどあしき事の覺えあらば、迚の事に、道を學びてこわげのなきやうにしたきものにあらずや。窮屈におもふ、氣習をたとへていはゞ、爰に、貧窮なる人、二三日も精進日つゞく時に、何やら肴を食ひたきやうに思はれて、精神日の過るを待つがごとし。元來貧なる故、精進にあらぬ日にも、肴は食はねども、忘れて常の氣で居れば、何ともなきに、食ふ事ならぬと思ふ氣

たる人の、苦行を厭ぬに譬へたり。これをもつて見れば、苦行のしがたきにあらず、志のなき也。又さほどにこそはなけれど、世間を見るに、己が欲の好むかたには、寒中にも裸になりて、朝夕のものさへ食はずして、しかも他人に、いやしめられ、腰膝をかゞめ、物を乞ひ、面目も、かまはず、恥辱も怪我も、かへり見ず、或は博奕し、或は酒を好み、又は藝能につきても、よからぬ事を好むは、人目を忍び、夜も寐ず、何かに心をいたましめ、折にふれては、ものも食はず、ある時は身の骨をも打くだかれ、或ときは、さけびて、咽より血をも吐き、晝夜水に(七)ひたりて、蚊蛭などの、責にあひて、事ともせず、凡是等の類ひしげくして、筆にも及びがたし。平常の所作より、これを見れば、いづれも甚難行にて、なるべき事とも思はれねども、それをもいとはず、爲す人幾人もあるものなり。かやうの事を引合せて見らるべし。人の道にしたがひ、本心の通に背かぬ苦行は、それほど難義は、なきものなり。其上人々、器量に不同あれば、十分道に合ふ人もあれば、九分八分、合ふもあるべし。乃至一分一厘にても、道に合へばそれほどの德なり。ならぬ事をせよとの教はなし。己が器量相應に如在なくつと

(七)ひたりて。ひたすの音便、ぬれること。

中人以上の、美質の人は、七情をも、氣まゝにせず、我欲をこらへて、怒を押へいやなる善をも、勉て學ぶ事もなるべし。今日體の我等ごとき下劣の身にては、左樣の事は一向及びがたきにあらずや。

答、此うたがひさもあるべし。故に本心を知るを、學のはじめとす。實に心德を知れば、廣大深遠の美（六）萬象森然の富これにまさるものなし。此勝れたる事をあつく知るは、いふに及ばず、少し知りても、既にこれをしたひて、苦行をも、いとはぬ志となるなり。其理を譬を以ていふべし。或所に壯年の男ありしがよしある人の娘、美目かたち、すぐれしかば、彼の女に掛想し、何とぞして、女に逢ひ見ん事を願ひけるが、便宜なくして、只夜も寐ず、涙の露やむときなく、歎きくらしけれが、深く思ひ入たる志やとゞきけん、よき便を得て、文など送りければ、女其返事に、樣々の、無理なる難行苦行を書きつらねて、これらの事を一々に、し盡したまはゞ、いかにも、あひ見んといひこしをりければ、彼男、世にうれしく覺えて、艱險苦痛のいとひなく、書つらねたる通を、殘りなく行ひ盡して、終に女に逢ひて、志を遂げしとなり、此事は、ふかく心德の美を知り

（六）萬象森然。よろづのものかずおほきこと。

（四）槁木。かれきのこと。

（五）土塊木頭。つちくれきくずのこと。

いふ事を知るゆゑ、此くるしみを、作らぬ志起りて、日々に安樂にすゝむなり。

問、本心を知れば、道理分明にして、志たち、身勝手の求めを、やむるゆゑ、心のくるしみを、のがれて安樂なるわけは、きこえたり。然れども、人皆七情あり。いかにも、此七情を斷除なば、（四）槁木死灰のごとくにて、安樂にもあるべけれども、たとへ本心を知りたりとも、身のあたゝまりある間は、中々及びがたき事と思へり。さはいへども、亦儒佛とも、知をたち、情を捨て、土石の如くなるをも、きらふよしなれば、知も情も、さらずして、安樂になるべきや。

答、儒はいふもさらなり。老佛とても、自性の靈覺本分の良知をたちて、（五）土塊木頭のごとく成は、故人の惡む所なり。形氣の身、天理の本心にしたがふ時は其知、善を善と知り、惡を惡と知り、其情、喜ぶべきを喜び、怒るべきを怒り哀むべきを哀み、懼るべきを懼れ、愛すべきを愛し、惡むべきを惡み、欲すべきを欲す。聖人佛もかくのごとし。靈知眞情は、さらに妨げなし。

問、善を善としてすゝみ、惡を惡として退け、情欲を制する事は、甚難行なり。

（三）腫物。はれものゝこと。

べし。萬のをしへ時所異なるゆゑ、趣には異なれど、大意は、儒老佛とても、畢竟拔苦與樂の外なし。

問、扨安樂にはいかゞしてなるべき。

答、先自己の本心を知るべし。前にいふごとく、我が生れつきの本心は、元來安樂なり。安樂は、求めて外より來るにあらず。萬の求めなき時、生れつきの安樂あらはるゝなり。譬を以てかたるべし。我が身に腫物にても、出來て、大きにいたみ惱むとき、其腫物平癒し、いたみさりぬれば、腫物の事は忘れはてゝ、別にまた樂といふものもなき、これ、眞の安樂なり。此樂、外よりいたるにあらず、（三）腫物のいたみを、のがれたしと樣々の事を、求めし念慮、忽忘却せしゆゑなり。こゝを以て、元來安樂が生れつきなりといふ事を知るべし。一度、本心を知りて見れば、たゞ天心のみにて、我身といふものなし。我身なければ、萬の求めなし求めなきゆゑ、安樂なりといふ道理明らかに通ずるなり。人我といふもの元來はなけれども、身勝手といふ、己が物好にて、時々にこしらへしものなり。此人我を、少しも、作り出せば、身が出來るゆゑ、それより、くるしみ始まると

（二）觀經。觀音經のこと。

者流は（二）觀經によりて、善導和尙の往生安樂國の語を稱なる等の事をきく。儒道には、かゝる事をきかず。

答、予不學なれども、近くきける所を以てかたるべし。論語に、子曰。脩レ己以レ敬。脩レ己以安二百姓一と。又曰。飯二疏食一飮レ水。曲レ肱而枕レ之。樂亦在二其中一矣。不義而富且貴於レ我如二浮雲一。又曰。仁者安レ仁。知者利レ仁。又曰。知者樂。仁者壽などともかゝれたり。又曰。內省不レ疚。夫何憂何懼ともあり。これは己に立かへりて、少しも私欲をせざる時は、其心內やみいたまずして、但もなく憂もなく、大安樂なるべしとの事にあらずや。孟子曰、仁人之安宅也と。又曰。萬物皆備二於我一矣。反レ身而誠。樂莫レ大レ焉と、これ亦本心の生れつき、安樂なることを說たまひたる證據なり。人の本心は、一切萬物の道理、何ひとつ不足なく備はり居るゆゑ、身にたちかへりて、本心の通にさへ身を動きはたらけば、それが、生れの儘の有體ゆゑ、そこを誠といふなり。其ありていなる、誠を少しもあやまらねば、身心ともに、大安樂なるゆゑ、たのしみこれより大なるはなしと說きたまへるなり。例せば言句は、老佛に似たる事、多ある

安樂問辨

手島堵庵述

一日若輩つどひ來り、始學の人進で。
問、人の道を學ぶは何のためぞ。
翁答、安樂ならんが爲なり。
問、いかなるをこれ、安樂となす。
答、本心卽安樂なり。安樂は、本心の生れつきなり。
問、いかなるをか、くるしみとする。
答、人欲卽くるしみなり、人身、欲なき事あたはず、然れども、欲本心にしたがへば、害なし、少しも本心に背き、私の身勝手をするを、人欲と名づく、人欲は內に本心うけぬゆゑくるしむなり。
問、安樂を宗とするは、佛者の學にあらずや。法華には、安樂行品をとき、淨土

安永八年亥二月

堵庵

（一）轉覆。さかしまのこと。

安樂問辨序

乾の道は、易にして、坤の道は簡なりと、誠なる哉、何の造作もなく、出來る萬物を見るに、各々其かたち、亦無造作なり。人も頭は上に、あしは下に、誰か才覺にてかくあるにはあらず。よろづ實にかくのごとくなれば、安樂といふことさへ忘れはてゝくらせり。これが人の本然にして、生れつきの德なり。然るに衆人、此外に利をとりたがりて、うつむくに似たり。俯とは、心の（一）轉覆なり。轉覆とは、主親を下とし、いやしめ、をのれが、私欲を上として、たふとむをいふなり。漸々うつむけば、終には、足は上へ立のぼり、頭は下へさかさまに、足上頭下になりて、此世から、目くれ耳くれ、黑闇へ落ゆくもの多し。故に聖人これを深く、あはれみたまひ教て以てひきをとし、安樂にしたまはんとなり。されば血氣の若無者、きまゝがならぬとて、かならずわろう心得違へしたまふな。聖人佛は意地わるではないぞ。早く本心を知りて、五體の方角をわきまへたまへと若輩の友だちへ、少しく志を述るのみ。

（八）感歎。かんしんすること。

欲がないによつて、大食大酒をし身持を惡うせうやうはござらぬ。その通り養生がよいゆゑ、壽命は延さうと思はねども、おのづから長うなります、ハイ。扨又身を愛せぬによつて、我勝手づくがない、勝手づくがないゆゑ、家内では人遣に無理もござらず、世間へ出ては、人交りに無理非道がない、ハイ。じやによつて家内でも世間でも、誰が惡まふやうがござらぬ。是では善事だらけじやによつてどのやうなむづかしい兩親でも、微笑はぬ人はござるまい。まして世間並の子を大切に覺し召、兩親なら、猶以悦ばしやれイでかなひませう歟。この通りでござつて、人欲を捨れば善事だらけでござる、ハイ。是を捨ふと思へば、先我が本心を知らねばならぬ事でござる。我本心を知りて見ますりや、我といふものはござらぬ。我といふものがないによつて、我を愛しやうがござらぬ、ハイ。我を愛せいで、その外に何が欲が起らふぞ。欲がなけれや、今いふた通り、善事だらけでござる、ハイ。かうじやによつて、皆本心を御知りなされといふ事でござる。返すく\も、すておかず、色々に志をおこして知るやうにさつしやれイ。此時滿座の聽衆悉く（八）感歎作禮し去る。

は、止たが善といふ事でござる、ハイ。商賣の利も、取べき程とるを非道とはいひませぬ。又紀州の椀屋のはてじやといふた、乞食がござつたが、是は通らしやれと、どのやうに慳貪に云ふても、唯といふて忽ち通りました。ハイ。それでもみごと食て通たが、却而皆人が憐をかけ、後には大かたどこでも米錢をやる樣になりました事でござる、ハイ。商賣も其通りでござつて、欲心を捨て出來ぬどいふ事はござらぬ。とるべき程の利を取を欲とはいひませぬ。掛直もいふが欲心といふ事ではござらぬ。直値をねぎるを欲とはいひませぬ。大概ねぎるべき程の事は、ねぎりたが好い、ハイ。掛直もいふ程は云ふたがよい、ハイ。それも格別めつさうに人の難儀する程、ねぎらひでも大事ない事でござる、ハイ。又滅法界に掛直をいふ事が、利口なことでもござらぬ。此人欲を捨て見ますりや、第一我といふものが、ないやうになります。我がないゆゑ、我身を愛しはしませぬ。我身を愛せぬによつて、自然と家業に無精な事はござらぬ、ハイ。其通り家業に精が出るゆゑ、身を榮耀榮花に持　てはござらぬ。身を榮耀榮花に持たぬによつて殖ふとはしませねども、おのづから錢かねか殖る道理でござる、ハイ。元來身の

のぼりなされまするぞ。
東郭子對て曰、直じやとする私案も、直でないとする私案もない時は、どんなものじやぞ。予が老友富岡氏もいはれたことがある。七まがりの坂は、七まがりの道の道をのぼるが、それほど直に登る事はないぞと。
東郭子曰、多く世上の人は欲を捨ては、商人は商賣はならぬやうに思ふて居さしやるが、大な誤りでござる、ハイ。それを譬ていふて見よなら、彼鳥邊野で行道に申〳〵何卒〳〵下されませといふ、盲乞食がござるが、柳籠裏を人の通られぬ程、手を伸し、つき出しまして、我が斯すればこそ、米錢をもらへと思ふて居るが、それと同じ事でござる、ハイ。皆人も其通りで、我が是程にすればこそ、金も殖ると思ひ貪るが愚な事でござる、ハイ。我がする〳〵と一切我手ですると思ふて居る　、其味好いたのは、それは我が肩のよいといふもので我力で是が如何してゆくものでござるぞひの。さうじやござらぬか。さうじやといふても、我が力でゆかぬものじやといふて、精も出さんと置てはゆかぬ。只隨分精を入れる事はいれねばならぬ、ハイ。只欲を深して物を貪たり、無理非道な事をする樣な事

じや。是は直に天の流行じや、ハイ。御ことばの絶てない、御言語じや。如何も仰られねば、人は知らぬによつておッしやッたもので、孔子には別に斯せうとおぼしめすは意ない、ハイ。

東郭子或時、宗建と玄統とに、談話の次にいはく、邈大古、今の暦の始りは、故跡を見て知りた者じやが、其大全體は、何を見て知りたものじやぞ、いふて見やれイ。

宗建、玄統共に曰、何を見て知りた者でござりませうぞ。私等がために仰られて御聞しなされませ。

東郭子答曰、先最初、暑から次第に寒うなり。又暑うなれば又寒うなりして、大概夫程づゝ往ば、亦どうでも始へ復るものじやそふなとおもひ、暑いから寒いまでの日の數を、何ぞで驗を付置て、毎日〳〵の凡の日數で年を知り、それより月の盈虧で月を知ッたものでがなあらん。皆何もかも故を推きわめて知る事じやと孟子も仰られた、ハイ。

或問曰、七まがりの坂を、すぐにのぼると中事がござるが、あなたは如何してお

ざりますれば、顔子も善に伐らしやる所がござりまするか。

東郭子對て曰、是はよい問じや。なるほど顔子でも、善に伐るの幾が腹の中に動くと見ゆる、ハイ。さうじやけれども、身共等が善に伐るやうなものではない、腹の中に實の毫の末ほど、僅きざすのじや。それでも善に伐るのに異はなひ、ハイ。それ故また意を用ひさッしやる事をば、得まぬかれさッしやらぬ、ハイ。孔子の非レ禮勿レ視、非レ禮勿レ聽、非レ禮勿レ言、非レ禮勿レ動、と仰られた時に、顔子の此語を事とせんとおッしやるので、いまだ意を用ひさッしやる私の事を知りしやれイ。

又問曰、孔子にも、意を用ひさッしやる所があるやうにござるが、それでもないのでござりまするか。忽老者をば是を安じ、朋友をば是を信ぜん、少者をばこれを懷けんと、おッしやりたなれば、是では、どうやら意を用ひさッしやる所があるやうにござりまするか。

東郭子對て曰、孔子に何で意があらうぞ。孔子は直に天じや、ハイ。老者安レ之、朋友信レ之、少者懷レ之と仰られたは、我は知れた通りじやと、おッしやる事

がひてござる、ハイ。たゞ一心にしりたい〳〵と、信實心に晝夜おもひづめにさッしやるれば、つひにしれます。其靜座して居る時、皆の衆のおもはぬと居るような所が、やはり、しりたい〳〵とおもふて居る所でござる、ハイ。又思ふて居るような所が、私案でござる、ハイ。たゞ信實にしりたい〳〵とおもひづめ、思ひどほしにさへなれば、早知れますほどに、さう心得て工夫さッしやれイ。さうして爲るを工夫といひます。外に工夫といふことはござらぬ。たゞ何事に卽ても如此したいとおもはずに、出來る事はござらぬ、ハイ。ちよと煙草を呑にも、茶をのむにも、初に呑とおもはずに、のむといふ事はござらぬ。飯をくふ時も、あるひは汁を吸ひ、あるひは飯を食ひ、或は菜をくひするにも、別に此次に菜を食此次は汁を吸とおもひはしませねども、おもはずにあれを食、是をくひする事はござらぬ、ハイ。思ひは、思はずにゐるやうなものでござる、ハイ。されば片時もおもはねば、暮されませぬものでござる程に、かならずしも私案と思ひとを取ちがへさッしやるな。

或諸生問曰、顏淵曰、願はくば善に伐る事なく、勞を施す事なけんと、論語にご

のも結構な物じやけれど、天の目で見りや、女の着かざつたよりは、男のかざらぬ體が盛大で光輝のあるものでござる、ハイ。鳥獸で能しれます、見やッしやれイ、人も男は、天から自然に受得て、面に鬚もあり、全體逞て盛大な、ハイ。女は自然に天から受得たかざりもござらず、全體遍小て光輝がない、ハイ。さうじやござらぬか。

東郭子曰、道は兎にも角にも、思はねば得られぬものでござつて、又おもはずに道を得るものがござる。それは聖人計でござる、ハイ。身共が平生いひます、私案と、おもひとを、かならず〳〵取違へさッしやるな。思ふは本心の通で、すぐなものじや。それを私が出て枉るを、私案といひます、ハイ。私案こそ惡るうござれ、人はおもはねば、人じやござらぬ。人の身が磽々然て働かずばよいものか心も磽々然ては迷惑じや、ハイ。思ふは心の働のじや。おもふべきを、おもふは私案じやござらぬ。思ふましい事をおもふは、それが私案でござる、ハイ。(七)靜座する時も、知りたい〳〵と、おもひ通しでなけりや、本心は知れませぬ、ハイ。さうなれと皆の衆思ひ續にすると知れると心得て、別におもはッしやるはち

(七)靜座。しづかにすわること。

道は如何でござります。

東郭子曰、先汝が道は如何ぞ。

彼僕曰、御話しをしておりまする。

東郭子答て曰、予は隱居の身なれば、本家の世話になりてゐれば、隨分邪魔にならぬやうにするが、予が道じや、ハイ。汝は奉公の身なれば、奉公を大切に勤るが道じや、ハイ。

或問曰、盡レ心と盡レ性とは如何でござります。

東郭予對て曰、盡レ性といふは、聖人の事でござる、ハイ。盡レ心とは、心を用る處がござる。夫で賢人の事でござる、ハイ。さうではござれども、心を盡し得れば性を盡した所となんにも異事はござらぬ、ハイ。

或問曰、男は外をかざる事はいたしませぬに、女は外をかざりますは、如何した事でござりまする。

東郭子答曰、男は陽體じや。それで外をかざらず、陽を外に求めぬ、ハイ。女は陰體じや。それで外をかざッて、陽を求るのじや、ハイ。人の目で見りや、織も

ッしやッたが、是も面白うはござれど、それではもそッととときませぬ、ハイ。次信は判官殿へつかへた、其最初に身をすてきッつた人じや、ハイ。或問て曰、一軒の家の治りてあるは、なんで治つてござります。一口におッしやッつて下さりませ。

東郭子答曰、忍の字一字而已でござる、ハイ。往古唐土にも、此例がござる、ハイ。張公藝といふ人は、唐の世の人でござッつたが、先祖から九世迄、親類九百人あまりも同居して、何のいひ分もなう暮されたといふ事でござる、ハイ。其時分、時の帝王が、泰山を御祭なさるゝ事がござッたが、其次に彼張公藝が宅へ御幸なされて、張公藝を召出され其事をお尋がござッたれば、張公藝其まゝ紙筆を請ふて、忍の字を百字書て奉られたといふ事でござる、ハイ。

或僕問曰、近頃或禪僧の話で承りましたが、往古或知識が稲を刈て居さッしやる處へ、或僧が來まして、和尚の道は如何じやと問ましたれば、其知識が此鎌は三十錢で買得來と答られましたれば、或僧が又もとの通に問ましたれば、今ではつかひ馴て快うござると、其知識の答られたと申事でござりますが、先生の

(六)判官殿　九郎判官源義經のこと

或問曰、主一不適といふ事は、如何した事でござります。

東郭子曰、主一といふ事は、とんと私案のなきときは、天地と我と隔はござらぬハイ。また隔はないといふ私案もござらぬ。そこで、一ッといふ事もござらねば二ッといふ事もござらぬ、ハイ。それを強ていふ時は、まア一ッでござる。是を主一といひます、ハイ。其私案のない所には、適事もなければ、來る事もござらぬ。是を不適といひます、ハイ。

或會の夜、東郭子會合の衆に問ていはく、むかし、八島の合戰の時、次信の討死は、此上もない忠臣じやと思はッしやる歟、又さうもないと思しやるかと。

會合の衆曰、誠に此上もない忠臣じやと存ます。

東郭子曰、あれほと此上ない忠臣はござらぬ。其時、絶而深いむつかしい私案はござらぬ。又身代にたふといふ心もござらぬ、ハイ。(六)判官殿に矢を不中とした、ばかりの事でござる、ハイ。謡にある通り、さしもの辨慶も、おくれたかと、皆々ハアあたるが〳〵と踟躕として、私案するうちに、早おくれたのでござる、ハイ。ある禪の和尚のおッしやるは、あれは奥州を出る時、討死した人じやとお

ひはなひといひます、ハイ。是も麁いふ時は、又それに違ひもござらぬ、ハイ。

或問曰、身心ともに生死なき物と、むかしからいふてござれども、まさしく生たり、死たりいたす、此身を生死ないとは、どうも合點がまいりませぬ。是はどうした事でござります。

東郭子答曰、それは本心を知らにや、合點がゆかぬはずじや。生死は、根から絶ないものでござる、ハイ。其證據はねから私案せずに、其時身といふものがあるか、有ならどこにあるぞ、其身を爰へ對來れイ。

東郭子曰、親に孝行といふは、親の心を安んずる計でござる、ハイ。たとひ我心に否と思ふ事があらうと、爲さへすれば、それはやッはりしたので、ちがひはござらぬ、ハイ。心に爲と思ふたれど、不爲といふても、そりや不爲のに違ひはござらぬ、ハイ。人の頭を叩ておいて、こちは心にさうはおもはねども、叩たといふてはすみませぬ、ハイ。内外、別なものじやござらぬ。手を擧たら、それは擧たの、手を低たら、それは低たのでござる、ハイ。その證據は、身を浴でもしますりや、心も共に洒々とします事でござる、ハイ。さうじやござらぬか。

夫は撃ぬになり、撃にならぬやうなものでござる、ハイ。物のきもせぬに移り、又物がきても移りませぬは、只むかふへ心が宿がへしまして、それへ心が著ます故、あとへ殘りとゞまりて自由ができぬのでござる、ハイ。

又問曰、夜寢た時は、たれにても放心して居るといふものでござりまするか。

答曰、放心か放心でないかは、夢見るので、知れる事でござる、ハイ。聖人は、見たなり、聞たなり、動たなりで、物にとゞまりやしませぬゆゑ、正體もない夢を見さッしやるといふ事はござらぬ、ハイ。それも親をおもふかなんぞ、思はねばならぬことがござれば、それは聖人でも夢に見さッしやる事がござる、ハイ。凡夫は常住正體もない事にとゞまりますゆゑ、正體もない夢見ます事でござる、ハイ。又ねから夢見ぬ時は、それは放心ではござらぬ、ねたのでござる、ハイ。

又問曰、私でも夜る夢見ずにいます事がござるが此時は放心ではござりませぬか。

答曰、まアさうでもござれども、是も細にいひますりや、常々聖人と異や、皆差誤でござる、ハイ。是ら人をおしへ導くには、何事もなき時は、聖人と何もちが

に味ふやうにさッしやれイ。とかく如是話して居れば、如是話して居るばかりにならぬ故、放心でござる、ハイ。

又問曰、私も先日竹内の能を見るに、其時は、能ばかりに成て居るやうにござりましたが、夫でもやはり放心して居るやうに存じます。

對曰、いかにもさうでござる。能を見るに、皆の衆は、むかふへ心が移りまして此方は無主でござる、ハイ。夫は能を見るばかりに成たのではござらぬ、ハイ。心がむかふへ宿がへしますのでござる、ハイ。聖人の心は、物について宿がしませず、一方へ偏倚て、此方の無主に成事はござらぬ、ハイ。其心は鏡の如くにして、どこ迄も充塞てあき地はござらぬ、ハイ。それ故、聖人と凡夫との差は、心がむかふへ移ると、此方へうつるとのちがひでござる、ハイ。聖人の心は、むかふの物がこちへ移りて、物來は物移るばかり、物去は去た迄でござる、ハイ。目なし草にとへばいふ、とはねばいはぬだるまどの心のうちに何かあるべき、といふ歌の通りで、何でも端的撃ば鳴らたねば鳴ませぬと同じ事でござつて、跡へ物の殘りとゞまるといふ事はござらぬゆゑ、心が自由自在に能働きます、ハイ。凡

しやりませぬ、ハイ。實に食しやれぬものを、誰がどういはふが、はて食たゞはいはれませぬ、ハイ。さうじやござらぬか、一休は、そりや蛸は正く嘔吐しやッたでござらうが、決而根から食はさッしやれませぬ事でござる、ハイ。

或問曰、聖人は夢なしといひますが、夜る夢も見さッしやれぬ事でござりまするか。

東郭子答曰、聖人には、私案はござらぬ、ハイ。私案がない故、ひるの夜るのといふ隔はござらぬ。晝もよるも同じ事でござる、ハイ。

又問曰、私も本心を知りましてから、兎角此事と、不斷味ふやうにいたしましよと存じますことでござれども、是を忘れて居る事がござりますが、其時は(五)放心したと申ものでござりまするか。

對曰、いかにも、放心して居るのでござる、ハイ。實に忘れていればよけれども其時は晦盲で、うか〳〵と無益いろ〳〵の私案してゐて、取しまらぬことゆゑ、我とおぼえぬものじや。何と放心であるまいか。若い時分に物わすれするのも、大かた放心でござる、ハイ。私案なしに、見聞動くは、いかにといふ事を、不斷

(五)放心。おもひすてること。うちやること。

やうなものでごつて、天地萬物皆出る計にして、いへば程子も生々而已とおッしやッた。生じては生じ、生じては生じ、暫時の間もやまず、いつまでも生じて行ばかりでござる、ハイ。世の人が死ぬと思ふてゐる、其しぬるのも、生ずるのや。物の形出來るは、物の生るのじや。形なくなるは、空の生るのじや。何とかういへば、また生ずるばかりじやござらぬ。

或問曰、一休和尚が、内で蛸を食ふて、ある所へゆき、さきで食傷して、蛸を嘔吐されたれば、亭主の申まするは、こなたは、坊主の姿して、蛸をくふものかと、さん〴〵にいはれましたれば、一休が、身共は蛸はくやしませぬとおッしやッたれば、亭主が申すに、それでも、まさしく食しやッたりやこそ、嘔吐しつやたと申ましたれば、一休のおッしやるは、こなたは、淨土宗の善導見さッしやれぬか、あれも佛を食やしませねども、口から嘘しやッた。身共も食はしませねども、はきましたと、おッしやッたといふ事でござるが、是はたはむれに、おッしやッた事でございますか。

東郭子答曰、いや、たはむれにおッしやッた事でござらぬ。一休は虚言を吐さッ

といふ歌がござるが、其通りでござつて、誰でも爰に一瞬の間も、殘り住るものはござらぬ、ハイ。今如是いふも、早消まして、一瞬も殘り住る間はござらぬ、ハイ。扨程子は、生々而已とおッしやつて、又如是いふ時は、段々と生じては生じ、生じては生じまして、いつまでも生じて、往ばかりな者でござつて、盡期はござらぬ、ハイ。是がよう合點がゆきや、利欲を發して、物を求め貪らう樣はござらぬ、ハイ。

或問曰、人の嘘吸も、風も同じ事でござるに、風は吹ばかりでござるが、人の嘘吸は、嘘て吸ます、是は如何した分でござります。

東郭子答曰、天には口がないによつて、吸やしませぬが、天も風のやんである時が、吸ふようなものでござる、ハイ。扨それは、左樣じやが、人の氣息は、やはり、嘘たり吸たりすると思ふていさッしやるか。

曰、なるほど、能おもふて見ますりや、人の氣息も出る計な樣な者でござります。

對て曰、さうでござる、ハイ。人の氣息も、全體は出る計といへば、出るばかりないやうなものじや。外へはくは、外へ出るなり。内へひくは、内へ出るといふ

て居やしませぬ、ハイ。是を能心得さッしやれイ。又曰、人は應ずるばかりなものでござる、ハイ。また煙草呑と欲ひますりや、直に煙管が爰に在るいひます、ハイ。そこで煙管を取れば、煙袋が爰に在るといひます、ハイ。すれば煙管の火皿が、こゝへつがしやれイといひます、ハイ。一切の事が一ッとして、此通でないものはござらぬ、ハイ。萬物が喚呼ますを除てしまや、其外には何もありやしませぬ、ハイ。畢竟來る物〳〵に、應ずる而已なものでござる、ハイ。是を能思ふて見さつしやれイ。

又曰、こなた衆、能心得さつしやれイ。むかし〳〵から暫時今までの事も、皆消て去ひました、ハイ。これから後の事はまだきませぬ。即今而已なものでござつて、端的即心でござる、ハイ。扨長いといはふなら、昔から這様もので、いつまでも盡期はござらぬ、ハイ。そんなら短かいといはふなら、短いとこそいへ、今如是いふも消ました。段々しりから消て來て、一瞬の間も住る事はござらぬ、ハイ。

目なし草にも、朝露はきえのこりてもありぬべし。たれか此世に、殘りはつべき

ら問て、みづから答て、能究めさッしやれイ。

東郭子、本心を知りたる門人に、不斷示して曰、大かた誰も常住扨も私案なしに見るものじや、私案なしに聞ものじやとせわをします。左樣せずに、ひとり私案なしなものじやのに、夫では、私案なしなものとする程の目が殘ります。然れども、先初心のうちは、それなりに、ひたと我なひことを究めさッしやれイ。是も初は省案なしなものじやとする目がござれども、それから入らねば、私案なしの目と、離るゝ事はなりませぬ、イイ。我といふは、私案の造作じや。此我なひことを究て居るが、直に敬でござる、ハイ。程子も敬をわすれて敬せずといふ私なしとおッしやッて、私案なしなものじや〳〵と、涵と究めりや、後にほ、私案なしなものじやといふ事も忘れて、行住座臥、せわいらずに、ひとり私案なしになります。ハイ。扨往古から、暫時今までの事は、皆消てしまひました、ハイ。是から後の事は、まだひとつも來ませぬ、ハイ。是端的今ばかりなものでござる、ハイ。たゞ如是して居りや、如是して居るばかりで、何も奇怪事はござらぬ、ハイ。又誰でも、よべば唯とひひまして、よばぬ先から唯諾せうと、おもふ

(四)微塵。すこしのこと。

(四ノ二)たしなひ、たしなみのこと。

は、心の中に(四)微塵も恥しきことを言たり、行たりせぬをいひます。もしその不義をすれば、本心にものを食さぬ様なものでござッて、大切ない本心を、つひ饑かして失ひます、ハイ。じやによつて、常に何事をいふも、するも、義か不義かと、本心に問ふて、不義をせぬやうにさッしやれイ。是を故先生も、不斷に大事じやとおッしやつた事じや。常々(四ノ二)たしなひて、大事にかけて、腹の中に少しも恥しきことの、ないやうにさッしやれイ。

又曰、本心と知りた衆は、此本心の貴い事をひたと能究めさッしやれイ。此貴い事が、とくと究まらぬ故、盤桂和尚も、佛心を外の物に、しかへなとおッしやッた。貴う思はぬから、つひ外の物に仕へます、ハイ。此本心の貴い事さへ能究まれば、外の物に仕替る事はござきぬ、ハイ。とかく餘の物が貴うて、求め望む心があるから、外の物にしかへます、ハイ。是は皆此貴い事がとくと究まらぬ因でござる、ハイ。涵と究めねばならぬ事じや。

東郭子、本心を知りたる門人に示して曰、眼まなこを見ず、ゆび指をさゝずといふ事を、能々工夫さッしやれイ。又示して曰、不斷に我は何者ぞ〳〵と、みづか

(三)隱遁。かくれて世をのがれること。

に成ていやしませぬ、ハイ。是が表へ見えぬものじやけれど、我獨りは、能しれるものでござる、ハイ。商人が商ひぎらひで、(三)隱遁などすれば、人があの人は奇怪ものになつたと、見る人、聞人が評判します、ハイ。皆人がなんぼでも、氣がすまぬゆへ、聞たなり見たなりに成ていやしませぬ。ハイ。皆見る人、聞人も心に滯り留まります、ハイ。さうじやござらぬか。

又曰、本心を知りた乘は、故先生の御恩を有難う思はッしやれイ。這樣な事が又何方にござらうぞひの。何方でも知れる事じやとおもはッしやるであらうが、左樣じやござらぬ、ハイ。是も幸に其筋へ出あふて、御恩を受にや、如此事を知る事はなりませぬ、ハイ。こちの方では、彼も知り、是も知るによつて、澤山に思はッしやれうが、縱令千人や萬人知つても、天下への人では何ほどもござらぬ、ハイ。それほど大切な事を知るといふは、有がたい事と思ふて、不斷此事を忘れぬやうにさッしやれい。本心を知ることは、誰も相應の若勞して知ッて、それを何方でも誰も如是したものじやと、つひ澤山さうに思ひまして、折角知りことは知ッて、育養はぬものが多うござる、ハイ。本心は義が食物でござる。義といふ

こゝまで始終來々とおもふて、いさッしやれども、思ふたやら、おもはぬやら、覺えさッしやるまい。なんとさうではござらぬか。其時不圖、途中で誰ぞが通す事はならぬと沮たら、何卒行たい事じやがと、そこで思ふて居る事が顯れましやうが、只皆の衆に、本心と知らッしやれといふは、別の事じやござらぬ、ハイ。本心を知てからは、はじめいふたおもひは、流るゝ水のやうなもので、私案は、其水の氷ッたやうなものじやと、わきまひます。そこで其水のこほらぬさきに、氷らぬやうにする事でござる、ハイ。本心を知らにや、なんぼでも氷らぬまへにこほらぬやうにする事ができませぬ、ハイ。

東郭子曰、我本心には、ねッから逆はれぬものでござる、ハイ。本心を知らぬものは、本心は直なものなれば、どのやうにも枉らるゝものやうに思ふて居ますは愚な事でござる、ハイ。其本心に逆はれぬ事を、譬ていふて見よならば、本心は流るゝ水のやうなものでござる、ハイ。そこへちよッと細物をつければ、夫程細浪が起ち、巨物をつければ、夫程巨浪が起ますやうなものでござる、ハイ。少でも私をすれば、それほどづゝ、腹の内になんぼでも合點しませず、ずッと其通

（二）安排布置。ほどよくくばりおくこと。

或問曰、私案とおもひとは、異ふとおッしやるが、それは如何した事でござります。

東郭子曰、此方の私案といふは、（二）安排布置の事でござつて、何事も此方から作意するをいひます、ハイ。何事も、私ごとは皆私案でござる、ハイ。また本心を耳らと思ひ、修行するうちに、本心は如此ものじやの、如彼ものじやのと、色々に思ふは皆私案でござる、ハイ。さうではござれども、信實にしりたい〱と思ふじやござらぬか。此おもふは、私案と異ふて、少しも滯らぬものでござる、ハイ。其思ふものと、私案とを、譬ていはゞ、思ふといふものは流るゝ水の如なもので、常に絶ぬものでござつて、しかも思ふたやら、おもはぬやら、覺えぬやうなものでござる、ハイ。また私案といふは、其流るゝ水の氷りたやうなものでそこに凝り滯ります所で、必ず心に覺えます、ハイ。又他所へゆかんならぬ用があつて、行ふとおもひます、それは私案じやござらぬ、ハイ。又そこで解惰が出て、けふは行ともない事じやがと、おもふのが私案でござる、ハイ。づひ思ふ、其思ふたことの覺えぬわけといはゞ、こなたも、こゝへ來と思ふて門を出るから

ず、方器に入ますりや、方になり、圓器に入ますりや、圓うなる。此樣々の道理をふくみ具へていますれども、其道理は、どうも出して見せられませぬ所は性でござる、ハイ。其水の樣々にあらはれた働きを合せていふ時、本心といひます、ハイ。人の本心は、水が至極能似ましたものでござれど、水にはまだ水といふ色形がござるが、本心には色形といふ者は、絶ござらぬ、ハイ。これは外にたとへ物がなさに、やむ事を得ず、水にたとへていふまでの事でござつて、水に何も用はござらぬ。もしあやまりて、水のやうなものと思はしやつならば、それは大きに差ふ事でござる、ハイ。扨水に少しも無理はござらぬ。そこが本心の仁德と、同じ事じや、ハイ。水は流れてゆく谷の方へ行流れられぬ時は一とどまり、方器へ入ては方になり、圓器へ入ては圓くなるが、卽本心の義と同じ事じや、ハイ。又水は高い方へは少しものぼらぬは、本心の禮じや、ハイ。水に知惠はありそふに見へませゐど、此一々の差別、よく分りまして、ちッとも誤ませぬは、本心の知と同じことじや。何と水は能本心に似たものではござらぬか。本心を知て、本心にしたがへば、水と同じやうに成ますれば、何とそれでよいではござらぬか。

ハイ。又神儒佛ともに、道は一ツでござつて、此本心を知るより他の事はござらぬ、ハイ。いまだ知らぬ衆は、皆左様心得て、どうぞ知る様にさッしやれイ。又知りた衆は、煩多いことはござらぬ。其知りた私案なしの本心に、たがはぬばかりでござる、ハイ。不斷是を大事とさッしやらば、我器量次第で、聖賢にも至らるゝことでござる、ハイ。

或問曰、本心を知らずとおッしやりますが、性を知と申とは、ちがひまするか。

東郭子曰、本心といへば、性と何も異たことはござらぬ、ハイ。性といへば、とつと心の根本で、天のまゝの所でござつて、是を天理といひます。其天理を人の身に具へていまする所で、そこを性といひます、ハイ。したが、此性は、いひあらはされぬものでござつて、少しでも顯れました所は、情といひます、ハイ。又つひ心といひますりや、善心もあり、惡心もござれども、本の字をつけて本心といひますりや、根本の性の通にあらはるゝ心ゆゑ、皆善心ことに成りまして、性と何もかはる事はござらぬ、ハイ。これを水にたとへていふて見よなら、水は冷い清いものでござつて、能物をうつしまする。又ながれて高いかたへはゆきませ

朝倉新話

門人 有山玄統謹識

東郭子曰、道を學ぶは、知れた通するをいひます。別に奇怪事ではござらぬハイ。百姓ならば、田畑を作り、職人ならば、其職を精出し、商人ならば、商ひに精を入れ、何でも皆それ〳〵の道を盡す而已で、他の事はござらぬ。是を學問といひますハイ。今多くは、商人などの學問するといふと見れば、博書籍を見て、文學の(一)穿鑿而已して、容儀を矯飾したがつて、今までの商をも止ますは、いかひ差錯な事でござるハイ。商人なら商ひをして、たゞ我家業をよう勤むるを學問といひますハイ。

又曰、此方の學問は、本心を知らして、其知た本心に、違はぬばかりで、何も煩多いことはござらぬ、ハイ。本心を知てからは、孝弟が行ひ易うござる、ハイ。本心と知らねば、行ひ難うござる。それで、ま 先へ本心を知らす事でござる、

(一)穿鑿。さがすこと。

ち、吾輩聞ことを博むるの一助とせんは、又よからずや。何とてかく拒める事の固き、玄統辭するに語なく、遂に(ウ)剞劂氏に命ず。見る人、言辭の拙きを捨て、其意の深きを味はん事をねがふ。先生始めの居を、平安の東郭華頂山の下に卜し、終に堵庵を結ぶ。因て、ひ・東郭先生といひ、或は堵庵先生とよぶ。久しからずして、居を朝倉の街に遷し、教授大に行はる。故に此書を題して、朝倉新話といふ。維時安永庚子五月望門人有山玄統謹序

(ウ)剞劂氏。はんほりやのこと。

朝倉新話序

守ること約にして、施こと博きものは、善道なりとかや。吾堵庵先生人を敎ゆるや、學者をして固有の本心を知らしめ、是に率はしむるの外、他事なし。是を存する時は、自ら敬となり。是に率ふ時は、施處、行として義に合はずといふ事なし。其導處、至簡にして、人從て學易く、其切甚多し。こゝを以て嚢を擔ひ、笈を負て、四方より至るの徒、宛市に歸するが如し。日毎に益を請ひ、競て疑を問ふ。先生これと語て倦ことなく、其兩端を叩ひて竭せり。玄統側に侍りて、竊に聞處を輯錄するに、覺えずして冊をなせり。頃日、友人何某、これを梓に上さん事を勸む。玄統曰、先生の言辭、これを翫ぶ時は、其中自ら深意あり。こゝを以て、今この冊子を錄するに、其意味を失んことを思ひ、只俚しき諺を（ア）もてす。もとより、玄統が不敏なれば、聞處、猶誤謬あらんことを恐る。何ぞ他人に示すべけんや。何がしの曰、學は道を學ぶのみ。何ぞ（イ）浮華の文辭を事とせん。且これを、世に公にせんといふにはあらず。只二三の兄弟に頒

（ア）もてす。もつてすること。
（イ）浮華。はでやかなこと。

師曾て、或田夫のために數語を説くことあり、予傍に侍りて、ひそかにこれをしらすに、一卷となれり、頃日書林某氏來りて、これを梓に上さん事を請ふ、予其求め果さず、同志の人も亦いふ、我が輩廣く傳へ寫さば、或は（一）烏焉馬の誤りあつて、その意を失はんことを恐る、請ふこれをゆるせと、故に止むことを得ずして、（二）剞劂に附すと云ふ。

（三）辛卯の春

有統謹記

（一）烏焉馬。似たる文字にて間違やすきこと。
（二）剞劂。はんぎにほること。
（三）辛卯。明和八年のこと。

坐談隨筆終

んさくばかりであつたりして、そなた衆の身だめになる事はあまりござるまいすりや、いそかしい身のひまつぶしでござるワイ。こちの講釋は、身どもが文盲なによつて、文盲にとくゆゑ、そなた衆のために、聞よいでござらぬか。
又曰惣體人が、書物でもよみかね、あるひは多くの書を知らぬものを文盲といひますれど、まアひととほりは、そふでもござれかし。信實の所は、古人は其を文盲とはいひませぬ。文盲とは、聖賢や佛ののこしおかれた、書物の意味にくらいといふ事でござつて、みな身に、うみつけてもらふた、本心明德不生な所をしらぬと、信實の文盲と云ますワイ。すりや此明德を知て、父母には孝行にし、主人ある人は忠義に奉公し、夫婦兄弟なかよく、人のまじはりに不實な事がなけりやそれが文盲でないのじやと心得さつしやれイ。
又問つとめねばならぬ大事を、みじかう書てもらひたうござる。
東郭子書して曰家業を精にいれて、不實なく、私の事に金銀を遣はねば、先は貪ずして危からず。人を愛し、恤ふかければ、先は色におぼれず、人を捨ず。人を敬て、あなどらねば、先は怒らず、人に捨られず。

がゆゑに十方が空になるといふわけは、私案のいらぬ明德を知てみれば、すなはち虚明で、どこもかものこらず、なにのさしつかへなく、大自在なといふ事じや。本來無東西何處にか有二南北一といふは、私案なしに成たれば、もとより東西をしらず。東西をしらねば南北も又しらず。なに事もしらぬむかしの赤子に、なつたといふ事でござる。此しらぬが不生じや、其不生が萬の音聲を聞くあるじなるゆゑ、こゝを合點した人を、直に觀音といひます。それで觀音が我を信仰するものゝ笠に、これをかゝせて、是を見て觀音になれとの事でござるワイ。

又問　我には此かな說法を見さへすれば、外に何も聞事はいりませぬか。

東郭子曰いかにも其通りでござる。そなた衆は、隙もなく、四角な字はよめぬによつて、それでその通りじやといふ事でござる、そなた衆もひまなときがあらば、聖賢のをしへは聞がようござる。身共が講釋でもせば、精出して聞にござれ。世間の講釋は聞にゆかしやることは、無用でござる。それは世間のが、わるいといふてとめるではござらぬ。多くはむづかしかつたり、文字言句のせ

やしなはれませうか。

東郭子曰他力の信といふは、私案なしになつか名でござるほどに、本心のやしなはるゝは、おなじ事でござる、他力とは、こちでいへば、天理まかせ、天理まかせとは、佛まかせ、佛まかせとは、不生の佛心にまかせてゐるといふ事でござる。少しも私案があらば、私案は皆自力でござるワイ。やしなふといふは不生な他力を、自力の私案で、邪魔せぬばかりで、外の事はござらぬ。

又問順禮の笠に、迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有㆓南北㆒とあるはおもしろさうな事じや。これははしぢかい文で、人も此やうな事ゝら志も起るものでござれば、女や子供でも聞えよいやうに說てきかして、はしうござります。

東郭子曰もつともな事でござる。はなして聞かせましよ。よう聞かつしやれイ迷がゆゑに三界が城と成といふわけは、あとかたもない私案をとめて、己じやの我じやのとしてゐるものは、ひろい世界が、唯五六尺の、からだといふ城になつて、ながく生死に輪廻して、不自由な、かなしい事じやといふ事じや。悟

こちのをしへも其通りでござる所で、おなじ事じやといひます。すりや氣づかひなしに、和尚の説法をくりかへし／＼よう見さつしやれイ。そなたの知らしやつた、明德を長養ために至極ようござる。説法のとほりさへよう用ひさつしやりや、こちが何もいふ事はいりませぬ。

又問こなたは明德をやしなふは、敬と義とでなければ、やしなはれぬとおつしやるが、それはどふすることでござる。

東郭子曰これをそなたの聞つけたやうにいはゞ、不生の佛心でゐる名を敬といひます。其不生の佛心を、身のひいきをせず、餓鬼畜生修羅にしかへぬ名を義といひます。何のをしへでも心德をやしなひますのは、これより外のしやうはござらぬ。一生これでくらす人を、道をたのしむ人といひます。この通にしてやしなひくらし、はらのうちに、けしほどもはづかしみがなければ、なんと此上もない、たのしみではござるまいか。しんじつの樂といふは、少しも樂らしい事があらば、樂じやござらぬ。何共ないを極樂といひますワイ。

又問淨土門の、他力の信心といふ事を、實に決定しましたら、それでも本心が、

事しれた事には、私案なしに事が濟ませる所で、相談はいりませぬ。私案は腹のうちの獨相談でござるワイ。最初相談のはじめは、みな私案でござるゆゑ二度めのおもひかへしは、又皆本心でござる所で、季文子もふたゝびせば可也と仰られたことでござるワイ。又孟子もこゝろの官はおもふと仰られて、人はよく思ふといふ、心の善な、はたらきがあるゆゑ、本心にそむかぬと仰られたも、此思ひが、惡な私案を、よりわけまするゆゑでござるワイ。又佛家にも、正念と申は此思ひの事でござる。有念といふは、皆煩惱で私案の事でござるワイ。無念といふも正念の事でござる無念といふは念のないといふ事ではござらぬ。念のないに、無念といふことはいりませぬ。正念なれば、念を覺えぬゆゑ、無念といひますワイ。無念と覺えたら、何のそれが無念でござらう。なんとそうじやござらぬか。

又問こなたのやうにおしやれば、禪學と儒のをしへと、おなじ事でござるが。

東郭子曰世間の禪學は、しりませぬ。和尚のは、こちの教とおなじ事でござる。和尚のは、たゞ人を、うまれのまゝのもとへ、たちかへらすばかりでござる。

ワイ。又身にとりて、ためして見さつしやれイ。朝寢所で目のあきたる時、其のまゝ起れば、こゝろの内に何ともござらねども、彼惡な私案が出まして、今朝は寒いの、夜前夜ふかししたのと、身勝手をすゝめて、引とめます。そこで又本心が、寢てゐても氣のすまぬ正直ものゆゑ、思ひは善なもので、さやうの私案は無用といふて、起んといたせば、又私案が左樣にしては、身がつゞかぬの何のかのといふてとめます。しかれども本心の光は強もので、またそれをしかりまして、起んとします。此せりあひの時が、そなたのまぎらはしがらるゝ所でござるワイ。そこで世の人が、よい私案と覺えてゐるが、此本心の思ひの事でござるワイ。惡な私案の出た時、又もとの本心の善な思ひにかへす故、其思ひも、私案のやうに覺ゆれ共、それは私案ではござらぬ。本心のひかり、善のはたらきでござるワイ。これ我らが一分了簡で申事ではござらぬ、むかしの聖人孔子も、季文子といふ人、一切の事をさはくに、三たびおもふて、三たびめの了簡にて、事をさばく、これはあしく、二たび思ひて二度めの了簡にて事をさばくが、可ぞと仰られた。これが則私案とおもひの分辨でござる。惣たい

ワイ。私案がみな惡なわけをいふてきかせませう。ようきかつしやれイ。先いづれも、少しも私案せずに、今こゝで、何ぞわるい事をして見さつしやれイ。さアでけませうか。私案はたくみでござる。少しもたくみなしには、わるい事は出來ますまいが、なんとそうじやござらぬか。まだそれで、がてんがゆかずばたとへてきかせませう。人形を、ぜんまいのからくりにして、火事見廻にやつたならば、火事場で、喧嘩したり、盗をしたりしませうか。事の埒はあかねども、私案なき德には、惡はしませぬ。こゝをよくきかつしやれイ。人に人形と違ふて、みもふといふ活構な、こゝろのはたらきがござる所で、火事見廻にやりましても、向ふの人だめに成て、老人子供にても助け、財寶道具などにてものけてやりまして、大きに益にたつたものでござるワイ。しかれども其火事場で、出來心で盗するものがござる。其出來心といふものが、私案でござるワイ火事場は、せわしき物ゆゑ、大かたの人が、私案はすくないものでござる。それゆゑ出來心の盗人といふものは、五百人か千人に、一人あるなしでござる。火事場の盗人は、大かたあたまから、ぬすむ私案で來た、信實の盗賊でござる

や。修羅をもやしてあらそふは、瞋恚のはらたちからじや。取てもならぬ、あつてもほしいと、むさぼるは、貪欲の餓鬼かたぎじや。くるしむものは、又此外はござらぬ。すりやおなじ事でござらぬか。

又問こなたは、私案なしで居よと、おはせらるれども、私共が、私案なしに、物事を、とりさばき、いたさば、如何やうな、あしき事を、いたさうも、知れませぬ。それでも、私案なしになつて居るか、ようござりますか。

東郭子曰これは善不審でござる。惣じて何事も、おもはぬといふ事ではござらぬ思ふと、私案とは、大に違ふた事でござる。人は活物ゆゑ少しの間も思はぬといふ事はござらぬ。これをたとへば、本心は五體の如し。首も、手足も、身うちが、少しの間も、動ずにゐませふか。おもひは身の動くとおなじ事で、心の動くはたらきでござる所で、本心の通りにしたがひ、はたらいて、善なもので微塵も本心の害はしませぬ。私案といふは、此思ひを邪めるといひますワイ。むかしから、私案を惡じやと、いふた人は一人もござらぬ。これは何もの、心得やすきために、身共が初て、私案はみな惡じやといふて聞せます事でござる

がきにしかへ、畜生にしかへ、修羅にしかへると、おしかりやつた事でござるワイ。不生の佛心といふは、明德の事でござる。身のひいきをする者は、何ものぞといへば、私案でござるワイ。餓鬼畜生修羅といふは、こちでいふ人欲の事でござつて、かの私案が、身勝手のかたへ、つれてゆく名を人欲といひますワイ。その人欲といふ、身勝手をするといなや、明德が受つけぬによつて、はらのうちが、はづかしうて、くるしうござる。これを地獄といひますワイ。此地獄といふは、苦の惣名でござつて、まアそのうち大きなはまり所を、餓鬼畜生修羅といひます。こちでも大がいは、おなじものでござる。色の欲と、利る欲と、名の欲と、此三つは、老人でも、血氣さかんな人でも、年若な衆でも、三つながらのがれぬものでござるほどに、孔子も、此三つともにはまらぬやうにせよ、中で年若なものは、うか〳〵と氣がさだまらぬ所で、三つとも大事なれども、色の欲を、つよくたしなめよ。血氣さかんになりたるものは、名を立てあらそふ事を、つよくたしなめよ。老人たるものは、おとらふる所で、むさぼる事をつよくしたしなめよと、おほせられた。愛着は、畜生同然の愚痴からじ

といふ人があらば、どこにござつた云ふて見さつしやれイ。ありやしますまい我がなければわたくしといふものはござらぬ。ゆゑにこゝを名づけて仁といひます。我がなければ惡といふ物はござらぬによつて、又性善共いひます。此性善といふは、すこしも善らしい事があらば、それは私案で、本然の善と云根元の善ではござらぬ。たとへば人初無病なとき、快ともこゝろわるいとも、何ともかともおもはぬやうなを、根元の善といひます。凡夫の善といふは、もと無病な人が、はじめてわづらふて、本復したを、ようなつたと、いふやうなものでござるワイ。やまひといふ、あくがでた所で、其惡に對して、ようなつたといふやうな善は、すゑの善で、性善の善ではござらぬ。したほどに、道をまなぶといふは、外の事はござらぬ。此明德にそむかぬをいひまはワイ。大學には、みづからあざむく事なかれといふてあるは、人のせまい事するはみな私案が身の勝手をさせる事でござる。さすれば私案は本心にそむくゆゑ。何事でも私案が出たらば、其時はよく／＼思ひわけて、私案にながれなといふ事でござるワイ。これを和尚は、親にうみ付てもらふた不生の佛心を、身のひいきをして

ざつて、和尚は我身のあまり苦勞した所から、人をふびんにおもふて、さて〳〵人は思案なしでさへゐれば、それで何も申ぶんないのにと、おしやれども、今は中々それを、まつすぐに、うくる人はありにくうござる所で、身共はすこし苦勞をさせて、まづ思案のない所を一度知らします事でござる。そなたも、かやうのことをとひ、和尚のせつはうをも信實ありがたいと思はしやるは身どもがいひぶんを聞て、一度思案なしの明德を知らしやつたかげでござるワイ。これは全く身どもがぞんじた事ではござらぬ。ひとへに古先生のかげでござるほどに、大切なことぢや。ありがたうおもうて、其恩をわすれさしやるなおんをしらぬものは、禽獸におとるではござらぬか、一度この思案なしに見聞動く所をしつた人は、いかにも和尚の假字ぜつ法をくりかへして、見るが至極ようござる。一度此思案なしを知らぬ人は見てもやくにたちませぬソイ。

又曰聖人の道は、思案なしの明德を知て、此身を其明德しだひにまかせるばかりで、外の事はござらぬ。人はもと思案なしに見聞動て、事かけはござらぬ。思案なき時、我といふものはござらぬ。もし私案なき時、われといふものがある

目のあいた人でござるほどに、こちのいふこと少しも違やしませぬ。おなじ事でござる。しかも和尚の初發心が、明德にふしんを立て、かれこれ苦勞めされたが、廿六の歲はじめて明德を悟られた人でござる。則不生といふが、明德のかへ名でござるワイ。人の本心は虛靈なもので、名のつけやうがなさに、あきらかなものじやといふて、明德と名をつけたものでござるワイ。其虛といふは、どのやうなものぞといへば、不生でゐるといひますワイ。靈といふは靈明なといふ事でござつて、不生で何事でも埒のあかぬ事はござらぬ。見るも、聞も、動も、知るも、みな念をおこさずに一つもすまぬ事はござらぬ所で、ふしぎ奇妙にあきらかなといふことで靈明といひますワイ。此不生といふはすなはち身共かつねにいふ思案なしのことでござるほどに、和尚の說法もおなじ事でござる。不生といへば、まだきゝつけぬ人もござるゆゑに、身共は思案なしのところを知らしやれイといふ事でござるワイ。

又曰和尚はみな人にちきに不生で居よとおしやれども、身共はまづ思あんなき所を、一度知らしやれと說きます。こゝは人を導やうの、おもはくのある所でご

坐談隨筆

手嶋堵庵述

或問曰私頃日、磐珪和尚の法語（和語說法ともいふ）といふものを見ましたが、とんとこなたの說せらるゝとおなじ事のやうで、ありがたう思ひまする。それで精出して、くりかへし〳〵見ようと思ひますれど、もしこなたの說せらるゝ所と違ひまして、見て爲にわるいやら、そこが分りませぬ。見て爲にわるいとおもはしやらば、こうでわるいとか、おなじ事ならば、こう〳〵じやによつて、おなじ事じやといふ事を、和尚のやうに、ひらたく我々がきゝよきやうに、はなしてきかさつしやれイ。

東郭子曰これはもつともな尋でござる。なるほどそなたは田舍人じや、和尚のおしやるやうにいふが、きこへよくば、何をいふもきゝよいがよいじやによつて、和尚の口眞似でいふて聞しましよ。ようきかつしやれイ。あの和尚は至極

は知らんとするには便なし。故に本心の發用聰明によつて、其求を求めしむるのみ、些も作意をさしはさむべからず。萬思案は皆妄なりといふ事をあつく信じ、只思案を打捨て、一途に(ネ)語默動止、少しも間斷なく、見るはいかに、聞はいかにと、前にいひし如くいろ〳〵に工夫たゆみなくば、必其しるしあるべし。若功成發明の時は、速に其達人に逢ひて、直に正しもらはるべし。自己の決定は、(ナ)先哲の大きにきらひ、いましめたまふ所なり。此事言句にだも及びかたし。況や紙筆をや。これ止事を得ざるの其大略也。

此編者、予が友手島氏或人の疑ひに答し言を聞まゝに記せり。いまだ校正をへざるを以て、慢に傳へん事を欲せず。然るに近日同志切に寫さんと請ふ者多し故に其煩しきを厭ひ、竊に梓に雕て、同志が採錄の一助となす而已。

典信識

(ネ)語默動止。かだる、だまる、うごく、とゞまること。

(ナ)先哲。むかしのかしこき人。

(レ)ひたと。ひつたり、又すぐのこと。
(ツ)端的。てきめんのこと。
(ツ)聰。み丶さときこと。

もなく、聲臭にもあらはれず、ありともなしとも覺えず知らぬものなり。又覺えず知らねども、背れぬもの丶あることを、猶譬を以てかたるべし。各面といふもの丶なき人はなし。然れども、つね〴〵誰にても、我には面ありと思ふてはゐぬなり。面は我が自身には見えず、其上わすれて居れば、面はなきやうなるもの也然れども、何方へ逃げも去りもするものにあらず。本心も面と同じことにてあれども更に覺えぬなり。これを以て本心の工夫をせらるべし。耳目はあれども我とは見えず、忘れて居れば、我は卽虛空の如し。其虛空のごとくなる者が、何もなくして物を見、音をきくは、何にてき丶、何にて見る、空なる我が何として見る何としてきくぞと、一向に他念なく、色々のものを一色づ丶出して見、又は樣々の物を打た丶きて、其聲をきく思案をやめて、如何〴〵へためして見、ためして聞かるべし。(レ)ひたと右の如く、ためし見、ためしきけば、終には忽然として扨は音をきくは往て聞くにもあらず、來りて聞かすにもあらずと、不圖聞得て(ツ)端的疑ひのはる丶時節あるべし、これあやしき事にあらず、聞うれば(ツ)聰によつて本心の體を知り、見得れば明によつて本心の體を知るなり。本心の實體

といふて、何ぞ固りたるものがあるやうに思ひなれたるよりのまちがひなり。腹の中に、其やうなるものは少しもなし。元來天地の外には何もなし。人も天を以て心とし、地を以て體としてゐる也、一切萬物も同じ事也。固りたる物は皆地、空なる所は皆天なり。目に見えぬ所は皆天、目に見えたる所は皆地、目に見えぬ所と、目に見えたる物と、知れたる所と、知らぬ所とより外は何もなし。天といふは各の鼻の前より青く見ゆる空は、かぎりも知れず、地の下も、人間の腹の中はいふに及ばず、一切萬物の中にも入充ぬ所なきものをいふ也。かやうのことをきゝて、早智辨な人は頓に心得て、扨は心といふは、空じやの、何もなきものじやのと了簡をつくるなり。それは、かの思案といふもの也。此見えぬ所を無きものじやと心得たる者を、小人又は凡夫ともいふなり。此からだは地にて、其地といふも天の固り、目前の空は天の固らぬ所にて、同じ天なり。何と其天の固りの腕をねちあげたらば、痛くはあるまじきか。心は見えねど、無理なる事をすれば忽心がねちれて苦しき也。腕のねちれたると何もかはる事なし。これを無といはるべきか。かやうに訖と背れぬ、明らかなる本心は身に備りてあれども、色形

るべし。人の本心は、虚にして靈明なる故、これを明德といふ也。人の心德は、形どるに形どるべきなく、聲臭にあらはれず、指すべきに所なし。故に虚といふ此虚といふは、何もなしといふ事にあらず。有とも無とも、何とも思はぬ時を虚といふなり。此虚なるつかまへ所もなきやうなる心德が、少しも何とも思はぬ以前に向ふ所、一切の事がよくわかり、さばける故、靈明なるを以て、其德用を靈といふなり。惣じて思ふといふは、一段おくれて出るものなれども、これも直に靈明の德用なり。かくいへばとて、一念不起何ともかとも思はぬ時が虚じやと思はゞ、はや、それは思案にて、虚にあらず。本心を知るには、兎角この思案が邪魔をなす也。此虚を知らんと思はゞ、少しも思案なき地位を知るべし。其思案なき時が卽虚也。念は起りても、其念にとりあはねば、かまひにはならぬもの也。誠に思案なき虚にて一切がさばける證據をいはゞ、各何とも思はずに居らるゝ時後にて啼烏の聲を雀の聲とも聞かず、犬の聲を猫の聲ともきゝまがへぬは、聖人も、佛も今日の人にてもかはる事はなし。然るに、其本心を何として失ふてゐるぞといへば、一切諸人幼稚の時より、人の話や繪草紙などを見聞て、腹の中に心

（カ）虛假。うそこと。
（ヨ）妄語。みだりこと。
（タ）提撕。ひつさげること。もちだすこと。

不善によつて、地獄極樂の說あり。然るに、今聖賢の敎とて說を聞けば、善をなしても不幸にして仕合あしきもあり。是は天命なりといひ、又善人惡人ともに死しては、天に歸するやうに聞ゆ。是等の事甚うたがひあり。

答、不審尤なり。元來聖人に（カ）虛假の言なく、佛に（ヨ）妄語なし。かやうの事も本心を知られなば、辨を待ずして能分明ならん。故に其事は暫さしおく也。本心を知れば、志定り、他に少しも疑惑なき故、たとひ不善を知れば、現世には富貴となり、未來は極樂に生るといふとも、不善はせぬなり。本心を知りたるしるしは、卽今孔子積善の家には餘殃ありとのたまふとも、不善はせず。現前に佛善をなす者は、忽捺落に墮すと說法す共、不善はならぬと心得たるばかりなり更に他念なし。

問、是まで年月の疑惑（タ）提撕說話により、積欝一時に散じ、本心を知るの大旨ありがたく思へり。今にては、我も何とぞ本心を知り明らめん事を希へり。いかゞ工夫を用ひ然るべきや。

答、此工夫文句の及ぶ所にあらず。然れども、懇望により、先始學の趣をかた

（ワ）省察。かへりみておもひやること。

問、然れども本心を知りたりといふ人を見及ぶに、何の功しるしも見えざるはいかん。

答、疑ひ至極せり。本心は、古今差別なし。本心を知るには、古今の差別あり。古人は志あつて、今人は志薄し、今人とても、志厚くば、古人に同じかるべし。先づしばらく、譬を以てかたるべし。古へ志厚き人の本心をしりたるは老子の誕生せしが如く、生れ落るより言行自在にして、事かけなし。今の志薄き人の本心をしりたるは、赤子の出生したるがごとし。何の益に立べしとも見えず、然れども、乳をふくませ介抱し、撫育あつくして、とし月を重ね養ひそだつれば、年々成長し、漸く十四歳にも成りたる時、いかさま少しは名代にもつかはれ、益にも立から覚えぬべし。我が師弟子に示すに、此養育を肝要とせり。養育とは、所謂（ワ）省察存養也。赤子ゆゑ片時も養ひをかけば、即時に死するなりとは知りながら、此養育をつむ人まれなり。故に足下其功を見ずといはる事さもあるべし。止事を得ずこたふといへども、我甚恥入所なり。

問、聖人積善之家必有二餘慶一積不善之家必有二餘殃一とのたまひし事あり、佛は善

（チ）涵養。したしやしなふこと。

すし。其いはれ、いかなばれ初より我すくなし、我を拙しとして用ひず、師を恐れ信ずる事厚く、又教示を庵に聞す、指南により彼思案を捨て、偏に師に歸するを以て也。尤本心を知る事、輕き事にはあらず。然れども、今我師の人に本心を知らしむるは、其辨前にかたりしごとく、本心を知るを以て入徳の初とす。故に知るを難とせず、知て後本心を養ふを重しとす。（チ）涵養は、學者終身を期して、勉強むべきの大事也。

問、本心を知れば、無我無知の本體をしると。其本體を知りて何の益かある。

答、益もなく、又損もなし。知る所の本心は、吾生れつきの本分にして、曾て損益なし。諺にいふ、本直なり、益を求むるは皆利心なり。然はいへども、大學に利を以て利とせず、義を以て利とすとあり。本心を知れば我なし。我なければ天地萬物を吾とす、何物をか愛せざらん。愛すれば私なし。君は君のごとく愛し、親は親のごとく愛す。君を愛すれば忠となり、親を愛すれば孝となる。夫婦兄弟朋友にいたりても、又々かくのごとし。これを人の義といふなり。其義に率ふばかりなり。誠にこれをや實の利益ともいふべきか。

(ル)博識高才。物ことをひろくしりなみより高き才あること。

し、身をありとせば、いかなる不善をなさんもはかりがたし。我が師の說はしらず、本心を知れば、身なき事を知るなり。この身なければ、內外なし。內外なければ、一本也。一本なれば、則萬種也。天地萬物のみにして、科をなすべき根なし。此身本心に隨ふときは善也。身本心を蔽ふ時は不善也。身なくば何か不善をなすべきぞ。然れども此譯は、本心を知らぬ人は、わかちがたし。早く本心を知りて見るべし。其時こそ、日中に黑白のまぎれなきがごとくならん。

問、本心を知るは、甚重き事なり。然るを、翁はたやすく知らるゝ如くいへり。其上傳へきく、奴婢童子も本心を知るものありとかや。(ル)博識高才の人にあらずして、容易に知らるゝ事大きに心得がたし。

答、不審さもあるべし。勿論の事なれども、足下火は博學秀才にて、上へ燃、水は強記多識によつて、下へ流るゝと思はるゝにや。皆無知にして然り、人の仁心あるも亦ことなることなし。大人は赤子の心を失はずとものたまひしにあらずや人之所レ不レ學而能者其良能也。所レ不レ慮而知者其良知也。本心を知るは外の事にあらず、此無我無知の本心を知る事なり。故に女童却て甚近く發明しや

（ヌ）奸曲深刻。あしくまがりつよくしのぐこと。

答、善人は捨るとも、惡人は猶すつべからず。人皆性善也。本心を知るは、善に移るの根本也。聖門善に移らざるを下愚とす。若し本心を知らば、何の惡人といふ事かこれあらん。（ヌ）奸曲深刻なる氣質にて、人をも殺しかねぬ者も、一度本心を知る時は善にうつりやすし。たとひ其後本心をうしなひたるに似たりとも、先は人を害さぬ程には至りぬべし。又かりにも人を打擲する程の氣質は、拳を握り齒をかみても、人を打ぬほどには變ずる也。何人にもあれ、必一等は變ずべし。然れば、大なる益ならずや。これ本心ザ明蔽ひがたく、性善の力剛なるしるしなり。

問、世間を見るに、本心を知りたりとて、萬事を無に歸して、神佛禮法をも無する輩あり、誠に因果撥無の見とやらんいふものか、唯無心を示して、向上の言をなし。其行跡を見るに、大に其意得がたし。故に本心を知らんとせは、過て空無の邪見に陷らんも、はかりがたし。甚だあやうく、好ましからぬ事に思へり。

答、否本心を知らざることのあやうしさよ。忽それは無心といへば、必心は無きものと思へると聞えたり。若心をなしと思はゞ定て身をありとせん。心をなしと

(リ)戒謹恐懼。いましめつゝしみおそれること。

和せざる事を覺え、已後漸にして(リ)戒謹恐懼し、自欺く事を禁ずるの志發るがごとし。語曰信而諫未レ信則以爲レ謗レ己也となり。人信ずる時は隨ひやすし。

問、翁の同門の中に、本心をしりて後、大きにあしき人などを見及べり。尤習ひ學ぶうちは、或は過又は少しの差失はあるべし。人目に立程の甚しき不善あるを見ては、畢竟本心を知りても益なしと思へり。

答、これ全本心の科にあらず、人の科なり。本心は、善の丸むくにして、一毫の不善ある事なし。人の不善をなすは、先づ本心を蔽ひて後不善をするなり。然れば、我が師、人に知りがたき本心を諭し知らしむるといへども、弟子不善をなさんとする時は、必先づ其本心を師に戻し置て後、不善をする也。折角知りたる本心をもどして後する不善は、我が師いかんとも救ふべき術なし。されば、本心を師へ戻さぬものは、少分たりとも相應の益あるなり。子曰、操則存舍則亡、出入無レ時、莫レ知二其所一レ郷、惟心之謂歟。

問、然らば、若極惡人なりとも、本心をしらば其分の益あるべきか。

(チ)怡悦。よろこぶこと。

と示すは、病人頑にして、醫も又素也。故に汝あしき病あり、服薬補養せよなどゝ禁忌をいふとも、聊用ゆべきよしなく。されば、醫更に他事をいはずして、病人に諭していふ、汝若眼見ゆるならばよからんやと。病人曰はく、われもとより欲する所なり。然れども、凡夫の重病何としてか此眼の開くる期あらんと。醫曰汝憂ふる事なかれ、少しく辛勞をせば、我一方の奇術を傳受したり、必開てやるべしと。其時病人曰若眼の開く事違ひなくば、少しの辛苦は我とても忍ぶべしと。漸病を彼醫に委ぬ。則奇方とは、本心を知らすの一術なり。それより病人法によりて、本心を知る事を學び、終に法によつて法を出つ。唯一旦の辛勞にて眼闢らけ、大きに驚き、且(チ)怡悦して初て醫言の違はざる事を信せり。其時醫何にてもあれ、物を持て病人の眼にさしあて、今までのごとくなりや、又見ゆるや否を問ふ。病人見ゆるの實をこたふ。又其見せたる物を少し遠のけ、見ゆるやと問ふ。病人見へがたしといふ。其時醫具に病人に毒忌身の養生を第一とし、服薬鍼灸一もかくべからず。これを用ひて功を積累とき、次第に眼よく見え身體も惣じて調ふべしと示すに、病人初て自ら眼のうきのみにあらず、身體悉調

かば定てかくのごとくなるべしといふ事を明らめたり。書物を見きゝて理を談ずるは、彼嚴島を繪圖にて見きゝたるが如し。本心を知りたるは、往きて直に見たるに同じ。

問、翁のいふ　ごとくならば、本心を知る時は、いにしへ曾子一貫の道理に達し玉ひしと同じ事か、又異なるところある歟。

答、近く譬を以てかたるべし。曾子の一貫は、前にいふごとく聖人を師として、弟子大賢たり。いへばきゝ、導ば從ふこと、直なる病人の名醫を信じたるがごとし。服藥鍼灸按摩はいふに及ばず、かくはせまじ、これは飲まじ、食ふまじと禁ずる事、一々少しも怠らず、錯らず、養生を盡せし時、既に全快し身體健に眼もあきらかに成て、今はさらに他の求なし。然るに、名醫いまだ全快をゆるさずこれによつて病人疑ひあり。時に一日名醫病人をよびて、汝元來無病とゆるしをうけて、忽うたがひはれたるがごとし。それ故曾子後に同門の問に、忠恕とこたへ玉ふは、病氣をつくらぬことぞとの示しなり。服藥鍼灸とは、聖賢の書を講習するにたとへ、飲食禁忌は、身をつゝしむのたとへなり。又今本心をしれ

てか、我まゝに立がたきもの也。其上道の大體に通じて、滞なしと思はるゝはさもあるべし。然れども、實に知りたる事には信も立やすく、噂にきゝて實に知らぬ事には信の立がたきいはれをいはゞ、灸治は病によきとは、誰も知らぬものなけれども、我に効驗の覺えなきものは、あつさに先すえともなかるなり。又効驗を慥に覺えしものは、何の仔細もなく、喜びて灸治をすゆるなり。試に生だちよりの盲人に、何にても物の色品かたち等を尋きゝて見らるべし。其對ふる所いささかも錯るものあらず。然るに、其盲人初て目を開て見ば、其色品形、兼て思ひしがごとくなるべしと思はるゝにや。これ、きゝたると、見てしりたるとは、大きに違ふものなり。我まへがた其例を思ひあはせし事あり。嚴嶋の繪圖をくはしく畫きしを見て、又よく案内を知りたる人に、一々景色のいはれをきゝ、扨々日本三景の一なれば、いかさまにも美景なりと、眞に見るが如く思ひ、其後人にかたるに、嚴しまへ詣でけるかと疑ひしなり。其後年經て嚴島へ參詣せしに、前に圖を見きゝし事ども思ひ出て、そこかしこと見ありきしに、大かたは違ふことなし。然れども、違はざるに似て甚相違あり。こゝを以て、われ盲人初て目を開

(へ)顔、曹、冉、閔。孔門の弟子四人の名。

(ト)庸人。つれびとのこと。

や。

答、道を信ずる事厚く、守ること堅くば、いかにもそれに優りたる事なし。然れども、其信甚立がたし。其ゆゑは前いふごとく、聖人を師として(へ)顔、曹、冉、閔の諸賢從ふがごときはいざしらず、孟子既に性善養氣の説あるを以て見るべし。孔子の聖は、孟子だもおよびがたく、弟子の信、亦顔曹にしかざるにあらずや。いはんや、今日(ト)庸人にして庸人を導かんとす、人の信ぜざる又宜ならずや。大學に、知止而后有定と、古人は止所を聞て知る。今本心を知らしむるは、止所の地位を、自ら實に發明せしむる也。實に識得たることは、分に應じて信實厚く志もをこるものなり。

問、知本心の趣こたへ一應はきこえたり。然れども、我いまだ本心は知らざれども、聖經の旨を見るに、大體通じ、さして滯る事もなく。又志を立ると立ざるは、我にありて、さのみ本心を知らずとも、志を立んと思はゞ立べしと思へり。

答、しかなり。いかにも志の立と立ざるは我にあり。其我にある志、何とし

ら性理を說玉ふは、次第に藥品いやしきもの、時に其功あるがごとし。今日こゝに人ありて高きより落ち、息絶えたる時、急に人參を用ひてしるしなく、熊膽を用ひても亦しるしなくば、其まゝ打おくべきか。人尿は至りていやしきものなれども、時にしるしあらば、用ゆべきにあらずや。昔（ニ）洙泗の敎へ盛成しときは聖人を師として弟子諸賢なり。師の言は必きゝ、師の行は必見て、皆從ひ用ひて行ひ玉はざるなし。これ人參は、甚清淨にして毒なく、故に害なきがごとし。熊膽は、不淨なれば毒あるべし。然れども、人尿の不淨には大にまされり。毒あれば、必ず害あり、害あれば、これをよしとするにはあらず、止事を得ざる故なり。能療治あれども、息たえ生氣なくては、何をあてにしてか施すべきぞ、せんかたなかるべし。程子曰君子之學必先明二諸心一知レ所レ往然後力行以求レ至所レ謂自レ明而誠也故學必盡二其心一知二其性一然後反而誠レ之とあり。

問ふ、さほど知二本心一の敎へ下りたる事ならば、信を堅うして聖敎の通り守り、身に行はゞ、終に（ホ）豁然として一貫の旨に通じ、害なくてよかるべきにあらず

ことにて共に國の名。

（ニ）洙泗。水の名、洙は泗の上流、又地名と姓とにあり、周禮に職方氏とあり、支派屬流のこと。

（ホ）豁然。ほがらかなこと。

知心辨疑

手島堵庵述

問、翁の師、知二本心一を學問の始として教ゆるよし、恐くは聖人の本意にあらじ(イ)孔門かくのごとく、教へ給ひし事をきかず。

答、程子曾ての給ひし事あり、教は時を知るを要とすと。既に(ロ)子思の時、聖人を去る事遠からず。然るに、道の眞を失はん事を憂ひ玉ひて、中庸の説あり。又我が都鄙問答に、孟子盡レ心者知レ性の説に從ひ用ゆる事をいへり。知二本心一は、則知レ性と同じ。性は理にして諭しがたし、故に知二本心一と説のみ。中庸は性によつて説き、大學は心によつて説く。心は體用をかねて説くゆゑ、人達するにちかし。譬ば、孔夫子の時に教へ玉ふは、藥にたとふるに人參を用ひて、人の元氣を引たつに似たり。既に孟子に至りては、盡心知性の説あるは、人參及びがたく、熊膽を用ひて生氣の塞れるを開き無事にかへすがごとし。(ハ)趙宋以來專

(イ)孔門。孔子の門下へのをしへのこと。

(ロ)子思。孔子の孫の名。

(ハ)趙宋。時代の

（ツ）姦佞。よこしま。

れを見習ひ、不仁なる事をも恥とせず、少々不義なる賣買にても、利さへ取れば徳なりとおもひ、義不義を論せず、唯利をとる事を手柄とす。なるほど當分は、利潤たるに似たれ共、つまる所は小利大損、主人は主人で、我身に利の附工夫をし、番頭は〳〵、手代は〳〵、丁稚小者に至るまで、面〳〵我身に利の附工面するゝ故に、孟子の所謂、上下交利を取て、家危からん。翁の曰、諸君の仰せらるゝ通り、直木の影は直く、曲る木は影も曲る。其本と亂て、末治るものは否。國の本は國の御主人、家の本は家の主人、扨又身の本は、身の主人公、此主人公と申ば、天性仁義の明君なれども、人心といふ（ツ）姦佞の臣、動れば、罷出て君を沮。此人心に惑はさるれば、終に暗君の名をとりて、身も家も持崩す。逆臣を遠ざけて、唯放心を求給へ。孟子の曰、人犬や、鷄を放事有ときは、求る事を知つて、求むれども、本心をとり放して、求る事を知らず。哀哉、と。又曰、學問之道無レ他求二其放心一而已。

有べかゝり終

と、先刻から女夫が工夫、常の始末は何の爲、家内の者に寒ひ目や、飢目を見せまひため、彼等も人の子なりとは、口癖にもふせども、口ばかりにて心は屆かぬむづかしき事なりと云ひき。諸君子、此兩家の損益如何。一人罷出て曰。君之視レ臣ヲ如ニ手足一則臣視レ君如ニ腹心一ノ君之視レ臣如ニ犬馬一ノ則臣視レ君如ニ國人一ノと、孟子の曰ひし如くにて、一家の主人、家内の者を子のごとくもおひ、子のごとくする時は、家内の者皆、主人を親のごとくおもひ、親の如くに事るなり。もし主人内徒の者を、雇人のごとくおもひ、雇人のごとくするときは、内徒の者みな雇はれ人の氣になるものなり。是皆内徒の者の、水臭きにはあらずして、主人の阿房臭故ならんか。また一人出て曰、某も孟子にて、ちよつこと御答申べし。主人何ぞ必しも曰レ利、亦有ニ仁義一而已。たとへば一國の御主人、御仁心にましませば、御家中は中に及ばず、末〳〵の民百姓に至るまで、不仁なる事を恥、不義なる事を恐るゝ故、公事訴訟もなく豊に治る。大小は異なれども、町家とても其通り、一家の主人仁心なれば、家内皆是を見習ひ、互に不仁なる事を恥合、不義なる事はせぬ故に、むつまじく家治る。もし主人利欲深く、仁義の心なきときは、家内皆こ

（ソ）ぱつち。股引もゝひきのこと。

ならん。我等はまだ此やうに、寒いに付、暑いに付、人を遣へば苦をつかふ。唯苦を遣ふのみならず、錢をかゝふにこまり入、もはや次第に寒空におもむけば、丁稚どもにも此冬は、（ソ）ぱつちを縫ふて、夫それにはかせずばなるまひと、先刻から女夫が算用。尤毛綿代、仕立賃、さし當て損なれ共、是にもまた痛がらさせ。此冬もまた去年のごとく寒氣强く、もし寒氣に中るか、冷でも入れば、せわしき時節にまづは事欠、其上寢屋にも附などすれば、いやとも御醫者にかけねばならず。つひ二三日の藥代でも、ぱつちの五足や三足は、何の苦もなふ飲で仕舞其時の損をおもへば、今の損は却て利なり。とかく利の附算用知らでは、商人の家に立ぬと云ひき。其日また。去方へ訪ひしに、爰にもまたぱつちの沙汰、主夫婦の挨拶に、二三日此かたは、俄に手づゝおどしが吹、寒さの用意に追はれます。我等は何程寒うても、寒うないほど重ね着して、其うへ屛風の炬燵のと、ぬつくりと暮せども、可愛そふに丁稚小者、裾の短ひものを看て、夜る晝るの用捨なく雪にも霜にもつかひ歩行、よふまだ寒にもあたりませぬ。夏も寢びえの用心に、面〳〵ぱつちをはかすれども、冬は何卒あたゝかなぱつちの仕やうはあるまひか

所にあらず、是皆天なり。人のよく〳〵する處にあらず。しかるに暫くときに遇ば、時に遇ざる人を見下し、おのれが器量なりと誇る。是等は道を知らざる人なり。いまだ道を知らざる人は、貧富盛衰も、我ちからのなす處と思ひ、飽まで人欲深き故、何ぞ事に當たとき、欲にひかれ患を招き、天をも怨み、人をも尤むる。自作る孽は、活べからず〳〵。

又一人出て曰、某此頃、浪花へ下りしとき、水を擔て商ふ人あり。同伴なるもの是を見て、嗚呼、繁華の津なり。渡世の易土地なりといふ。とは如何と問ければ、水まで錢に成といふ。今一人の同伴なるもの、渡世のしがたき土地なりといふ。とは如何と問ば、水にも錢を出せばといふ。予此勝負を附かね侍る。何れのかたへ團扇を揚ん。御考給るべし。翁の曰是もまた、止事を得ずして、評して見ば身過は仕やすひ、水を賣ても錢になるとは、父母の心を養ふにはよからん歟。又渡世はしがたひ、水にも錢を出せばといふは、子弟の氣を引立るにはよかるべし去ながら皆思慮の分劑、翁は其難と易の間に遊ばん。扨これに類せる事の有。翁もひとつお尋ね申さん。此頃さるかたへ訪ひしに、主夫婦の挨拶に、翁はさぞ樂

子あり、富家へ生るゝ子あり。同じ年のおなじ月、おなし時は買たる同じ茶碗に命の短ひ茶碗あり、命の長ひ茶碗あり、我是を知らずと言ひき。翁もし處女あらば西家へ嫁す乎。東家へやるか。何れの方を聟にし給ふ。翁笑を含て曰、しかしさるかたに、處女ひとり持けるが、望む人二人有。一人は美男なれども家貧しくまた一人は不男なれども家富り。其親娘に問て曰、なんぢの心に任すべし。何のかたへ行べきぞ。娘答へず赤面のみ。親悟て曰、汝富家を好ならば、右の肩ぬげ、美男のかたを望みならば、左の肩ぬげ。娘左右の肩をぬぎけり。親問て曰、いか成故ぞ。娘の曰、晝は富るかたへ行、夜は美男のかたへ行んと。是等も色と欲との蹄に掛り、一も二もとりはづす。おかしき咄し。翁も富は好なれ共、富よりもまだ貴ものあり。かつ富もとみにより、貧きも貧しきによる。古語に、清貧は常に樂み、濁富は患といへり。また諺にも、家富りといへども、子不幸なれば其親瘦、家貧しけれ共、子孝行なれば其親肥といへり。嗚呼、何れをか富りと言ひ、何れかを貧しと言はん。翁其人を知らざれば、評判はならねども、此事を得ずして論じて見ば、西家の貧きも、愚鈍のなす所にあらず、東家の富も、才智のなす

傳へ、其悲みを傳ふる事、大なる殺生ならずや。子々孫々に憂目を殘す。其殺生人は誰なるぞと、愼みても愼むべし。恐れ見て恐るべし。

又一人出て曰、某の存知合に、所も同じ所、商賣も同じ商賣、齢ひも同じ齢にて、才能にも勝劣なきに、貧福同じからざる家あり。西家は貧しく東家は富り。予其東家に行て問、其元と何某と、町も同じ町、家業も同じ家業、齢ひもまた同じ頃、才能にも勝劣見へず。然るに、西家は貧しく、其元は富り。何の不同有て、かくのごときや。東家の主鼻にてあしらひ、人に賢愚あり、利鈍あり、せちかしこき今の世の中、才智人に勝れいでは、是程の暮も出來ぬ。何も角も同じ事にて貧富同じからずとは、近頃疎忽千萬なり。器量不器量、ひと口には云はれまじと一つ本さゝれて逃歸りぬ。其後また西家に行て問、其元と何某と、所も同じ所、家職も同じ家職、年も同年、才能もまた優劣見へず。然るに其元は東家より早く起、遲く寢、家業の勤は勝れども、衣類諸道具、暮しかた、東家には遙劣れり。是によつて見るときは、却て富むべき筈なるに、貧きはいか成ゆゑぞ。西家のあるじ答て曰、我も知らず、同じ年の同じ月、同じ日に生るゝ子に、貧家に生るゝ

（レ）經候。月經の時をいふ。

風ならずや。盗せば乞食を止めよ。盗みする乞食有ては、乞食仲間の顔垢しなりと、財布をとり、彼店へ持行て、我等本とよりぬすみせまじきとての乞食なれども、根がたびからの乞食なれば、見るに煩惱、手近き所に錢かねあれば、ツイ盗む心が發る。たとひ手を出しぬすまずとも、心に罪を作らする。是無益の殺生なり。人のほしがりそふなるものは、かならず手近に置しやますなと異見して歸りけり。是又乞食のみにあらず、取よき所に錢かね置ば、盗人にあらざる人を、盗人にする事の有ものなり。最大いなる殺生ぞ。先刻もいふ通り、蚤も殺さぬ程の人にも、覺えず殺生する事のあるものなり。御用心〳〵。

○禁殺生、婦人（レ）經候の中に交合し、もし懷姙するときは、其子かならず癩病になるといふ事、古書にも見えたり。人々のよく御存知の事なれども、かた田舍の男女には、未だ知らざる人もあらんかと、爰に記す。婦人の經水を愼さずして交り、その血止り懷胎せば、其子かならず癩病とならん。もし我子癩病に成なば、親先祖の筋目をけがし、一類の顔をよごす。是大いなる殺生なり。扨また癩病になりし其子の一生、其悲は如何あらん。其子の一生而已ならず、其子孫に其血を

かるものを聞かせ、着たがる物を着せ、欲がるものをあたへ、敎ゆる事をおしへずして、氣儘氣隨に身を持せ、息子のうちは濟にもせよ、世持といふに成たるとき、遊び事や慰み事に器用にて、肝心の家業が御留守にては、行末が覺束ない。大小となく、一つ家のあるじは大事のものじや。其身正しからずして、身上を持崩せば、其家々相應に。妻子眷屬難儀をする。是また大なる殺生ならずや。鳩やすゞめる殺すを見ては、殺生なりと顏を顰め、氣の毒がらるゝ人〳〵に、自身殺生するとはおもはで、無益の殺生する人多し。手代小者をつかふにも、是も人の子なりと思ひ、云ふべき事は急度いひ、止べき事はきつととゞめ、敎ゆべき事はきつとをしへ、呵るべき事は急度呵るは後だめなるに、是は人の子なりと思ひ、呵るべき事も急度呵らず、止むべき事もきつと止めず、少々の事は世間並などゝ料簡して、聞かぬ顏、見ぬふりして濟す事、是また無益の殺生なり。首尾よう宿這入するにもせよ、其時に身を持かねる。扨また錢金は多少によらず、かならず麁末にし給ふな。此間も去る何でも十九文店の端に、小財布の有けるを、乞食ちよひとゝつてはしる。外の乞食是を見付、引捕へて突倒し、盜せまじきとての乞

今日に見へし事にもあらず、さして命の沙汰もなし。我等はまた命にかゝる。實の慈悲者歟。名聞かは知らねども、彼岸前には鳥屋に言附、例年のごとく放し鳥雀何百羽、鳩何羽、中日に持參すべし。幾日は先祖の日、幾日は親の日、子の日などゝて、百羽、貳百羽、ほう〴〵の注文、鳥屋も其こゝろ當に、前方より捕集買集て彼岸を待。其あいだの困窮に、半は冥途の鳥と成。死殘りたるを籠に詰、慈悲者のかたへ持行ば、自ら籠の戸を開き、何やら唱へてたもれども、疲れ果て耳には入らず。籠は出ても高飛ならず、やう〳〵に塀の上、藏の庇に飛上り、一ト息いきをつぐを見て、あれ見られよかた〴〵、鳥類とても恩を知り、此方へ向て禮をすると、放してくれたを恩にきせる。放して貰ふ嬉しさより、捕るゝ時の悲しみを、推量して見給へと。恨めしさうに咄しけり。いかさま雀の云しごとく買人が有ば賣人が出來、放し人があるゆゑ捕人がある。本よりの放し鳥、捕て放すはいらざる殺生。慈悲じやと思ふてする事に、殺生になる事もあり、不便さにせし事の、却て殺生になるもあり。一人の孫を寵愛のあまり、甘きものを喰せ過し、病身にする殺生もあり。子を育るにも愛に溺れ、見たがるものを見せ、聞た

とく、天の人に於る事厚し。人本より魚鳥を喰らふ。天本と人のために魚鳥を生ずと。見臺を叩て言れけるを、側なる童子聞て曰、蚤虱人を喰ふ。天の人を生ること、本ト蚤虱のためなるかと、問はれて天窓を掻しとかや。扨また舍弟、此春より殺生相やみ、老母をはじめ兄弟衆、みな／＼安堵せられしとな、是が第一殺生せざる所なり。又殺生をはじめなば、怪我はせぬか、冷は入らぬか、家業の間は欠ぬかと、親兄弟は憂なん。是則殺生なり。たとへば獵師の子なるもの、おのれが家業の獵をせずして、外の事を慰ば、是却て殺生するなり。親の心を痛るより、至て重き殺生はあるまじきぞ。是又獵師の子ばかりでない。少しの心得違ひにて、おもはぬ殺生する事多し。きのふもあれなる庇の屋根にて、燕と雀、チ、クチヤ咄しするを聞に、燕の曰、其元は羨しい、幾度に成てもひよこ／＼と、盆の心で暮さるゝ。我等はまた盆も過、彼岸の來るを睎て待、産れ古郷を振捨て、遠い國に往ねばならぬと、しほりとすれば、雀は飛退、身戰して恐るゝ體、燕頰をふくらして曰、われこそ離別の愁あれ、汝はまた何ゆゑに、ひがんときいて恐るゝや。雀の曰、燕は社日を知つて、巣を辭て去るといふ事、古き書に有なれば

扨又道に遺たる物を、拾はざる人を見て、寶の山に入ながら、手を空しくするといふ。是がまた大間違ひ、寶の山は何國に有。面々固有の眞如の玉。是を寶の山と知らで、金銀ばかりを寶と思ひ、其寶に目がくれて、誠の寶をとり失ふ。是を寶の山に入ながら、手をむなしくするといふ。是等はよき田地を持ながら、捨作りにするが如し。固より所持のよき田地、時に隨ひ程を知り、よく〳〵さぎりよく耕し、怠らず培て、足る事を知る時は、五穀成就、天下太平、こゝぞ田からの山といふ。

また一人出、一禮して曰、御教示により舍弟事、此春より殺生相止、老母をはじめ兄弟ども、皆々安堵いたせし處、此頃彼等、友達同士打よりて咄すを聞に、我々網を打ず、宿鳥は射ず、餌に付魚を釣ばかり。是聖人にも恥ざる處、釣たる魚は人にもまいらせ、皆打よりて賞翫すれば、是また無益の殺生ならず、魚は本、人のために生じたるものなれば人捕ず。喰ずんば、是ぞ無益の殺生ならめと。おのれが得手に引かけて、また釣に喰つく相談、彼が日頃の持病なり。何卒再發せざる御療治、御考へ給はるべし。翁の曰、むかしある先生、今舍弟の言はれしご

なるほど金は怖ものじや。金銀の事に付ては、兄弟中の破るもあり、信友と中たがふもあり、常には尤らしき人も、金銀の段に成ては、無理もしたり、無理もいふたり、日頃の化が顯るゝ。金が敵といふは爰じや。金におのれが身をかへる、持たかねを放すまいとて、命を失ふ人も有。金の出入が病と成、寂滅うたふた人もあり。金銀を寶として、尊むは何のため、餓ず凍へず、命を全ふせんためなり然るに足る事を知らざる人は、厚味美服を貪りて、得がたき金銀に心を費し、利欲損亡に氣をいため、金は延るか知らね共、命は五割も縮むるなり。譬ば水難火難のとき、金銀衣類に心ひかれ、火に燒水に溺るゝに同し。是また愚なるにあらずや。扨又ちよつと言ねばならぬ事が有。道を知れる人は道に遺たる物を拾はず彼金を拾ひし兄弟も、惜らくは未道を知らざる人が。天の與へと悦ばれた遺たる金には、おとし人といふ主が有。ぬしある金を私に、天の與へ給んや。人の家の軒の下、閾よりうちに遺たるものは、其家のものなりとて、誰も拾はぬ。阡陌や、途中におちたるものは、まづどなたの物なるぞ。閾の外、軒より外は、皆お上の土地ならずや。御上のものを私に、天の與へと拾ひなば、かへつてあだを崇らん

事あり。何卒金子五両か七両、ほしや〳〵とおもふ矢先、こなたの店のかねを見て、傍に人の居るも見えず、夜晝といふ氣もつかず、金に心を奪はれて、面目もなき此仕合、まつぴら御免給るべしと。赤恥かいて歸りしが、金に心を奪はれて人の有が目に見えぬの、夜る晝が知れぬのとは、愚のまた愚なるにあらずや。

翁曰、是等は一向、蹄にも蘂にもかゝらぬ人じや。去ながら、此人ばかりも笑はれぬ。世間に多く有事じや。金銀に目がくれては、義不義の見えぬ人もあり。道理のわからぬ人も有。金に心を奪はれては、兄弟不和に成もあり。親類と公事するもあり。是に付て咄しが有。或所に至て親しき兄弟の有けるが、花見遊山はいふに及ばず、神詣で佛參にも、他人交ずの兄弟づれ、或時例の兄弟連にて、他國に行し途中にて、金五十両拾ひけり。天の與へと悦びて、かへり路は船に乗り沖中へ出ける時、舍弟彼拾ひたる、五十両の金を出し、其儘海へ投込たり。舍兄驚、コハ何故と問ければ、舍弟曰、本よりひとりの兄なれば、父とも母とも大せつに思ひしに、金を拾ひし時ばかり、兄なくば、我一人拾はんものをとおもひしなり。金は兄弟のなかをも割。おそろしきものなれば、捨たりといひしとかや。

にあつたつて寓言國といふ國有、此國は陰陽の氣交らず、夜七分晝三分の所なり故に晝起て働く間は纔に三分、夜寢る間は七分なり。此土地の人〳〵は、起て働くを夢なりとおもひ、寢た間のゆめを實なりとす。我今、起て働を實なりとおもひ、寢た間の夢を夢なりと見て、我彼國の人を笑はゞ、彼國の人又、我を笑はん。何れが是、いづれが非ならん。是非ともに是ならんか、是非ともに非ならんか、ゆめも現も現なる歟。現も夢も夢なる歟。現と見は現も夢もうつゝなり。現も夢と見はゆめ。見たばかりにて手に取られぬ。いかさま夢幻泡影なり。夢も我見る夢にあらず、現も我なす現にあらず、此所自得せば、遁世迄には及ぶまじ。古歌に「其儘に心ばかりを住かへよ山も浮世の外ならばこそ。

また一人出て曰、扨〳〵世には愚なる男もあるものかな。或所の兩替店に、金銀數多取散し有を見て、彼男つか〳〵上り、金一掴みつかんで出る。店の人〳〵引捕へ、亂心か、青盲歟、此人が目に見へぬか、夜晝がわからぬか、いやはや不器用な盜人かなと。金とり戻し突放せば、本意なげに手を摺り〳〵、私本より盜人ならず、盜みする氣はなけれども、今日金子五兩なければ、跡へも先へも行ぬ

(タ)同穴連理の契。夫婦の契。

を持ながら、帳箱にもたれたり。扨は夢にて有けるかと、嬉しき中にも妻子の事もし凶事はなかりしかと、尋ね廻るに何とやら、勝手も違ひ、妻子も見えず、扨は是も夢なるかと、つく〴〵おもひ廻らすに、幻にもあれ夢にもあれ、十三年夫婦と成、(タ)同穴連理の契りを結び、十一歳の男子まで育てあげたる此年月、夢とは更におぼゝえず、却て今の有さまを、夢とのみ存すなり。翁の曰、夫故の遁世なるか、きのふはさる御出家のものがたりせられしは、我夢に十九の歳、京なる商家へ養子に入、三十年の間の事を、あり〳〵と夢に見しか、其間には種々さま〴〵、樂みも有苦しみも有、悅びもあり憂も有、泣もしたり笑ひもしたり、損もしたり得もとつたり、禍福存亡、一〳〵にはのべがたし。三十年目の夢の覺口一年の内に妻に離れ、二十五歳の男子を先だて、間もなう廿一になる、其次の男子におくれ、重ね〴〵の憂に會ひ、夢心に無常を觀じ、ひとり殘りし女の子に、聟を入れて跡を讓り、出家せし夢を見たが、いまだとつくり夢が覺ぬ歟。出家は今に出家なりと、頭を撫で咄されしが、これは實を夢なりといひ、汝は夢を實なりとおもふ、いづれを是と見、何れを非と見ん。扨またとつと遙かる。西南の隅

旨、思ひかけなく寢耳に金、有がたく頂戴し、まづ此かねを柱として、紐上る其内に、東國がた西國がたのむかしの得意、久しく絶てとり引もせざるかた〳〵、古き殘銀を皆濟して、むかしの通り賣買すべきよしの注文、旨き事は餅に砂糖、干飯に水、金も得意も殖る程に〳〵、二年の内に居宅もさつぱり建直し、扨此上は彼娘、いまだ嫁せざるを幸に、媒をもつて、內意を聞に、緣はいなもの承引有て、結納の印、祝言の夜の儀式、首尾よく嫁に取濟し、間もなく帶の祝ひ、殊更左り孕とて男子をもふけ、夫婦の樂しみいはんかたなく、髮置袴着、だん〳〵に生長して、十一歳の冬のころ、二三日客來つゞき、家内草臥ふしたる夜、目ばかり光る頭巾を着、十人ばかり盜賊込入、內徒の者を殘らず縛り、某には猿轡、うごかば突べきゝつさうなり。女房と伜をば、ひとつ繩にして縛り、內證金の有所云はせんと呵責する。妻子はたゞ正體も、泣より外のことなきを、意地ばるとやおもひけん、井の中へつりさげて、さま〳〵に拷問す。此有さまを見るかなしさものはいはれず、身は隨はず、心のうちは七轉八動、終に繩をきりおとされ、非の底にて叫ぶ聲膽にこたへて、ふつと目を開、茫然としてわが身を見れば、算盤

（カ）猿猴。さる。

（ヨ）爐鞴。ふいごのたゝら。

豆羮見ニ於色一是は是れ孟子の語なり。下々にても名の爲には家督も讓り、家居敷をも讓る人あり。根が名聞といふ化物なれば、假染の事にも尾が出て、始終無難には行かぬものじや。まづ遁世の意趣如何。定て深き所以あらん。仰のごとく所以なき事に候はず、此春の花の頃、東山の花を見廻り、祇園林の床机に息み、都の春を見わたせば、柳櫻をこき交て、行かふ人の其中に、美にして艶なる富家の處女正風體の供廻り、おとなしく歩行來る。よく見れば能見る程、又類ひなき美目なり。人數ならぬ我等風情、（カ）猿猴の月及はずながら。供なる僕の袖をひかへ、名所を委く聞に、つり合ざる身上なり。たとひ今我挑燈に釣鐘なり共、一念力（ヨ）爐鞴次第で鉄も湯と成。など釣がねにならざらん。身上だに仕上だならばと處女の事のみ胸に盈、普賢像も、揚貴妃も、花の數かはと、見遣りもせず、一筋に宿に歸り、萬事うちすて、只金銀儲の工夫のみ、長袖よく舞、多錢よくあきなふなれば、まづ賣買を廣くせんには、元金が第一なり、舞ひ袖は振に振られず、兎やせん角やと算盤を持ながら、帳箱に打もたれ、案じ疲れてまどろむうち、去大名の御屋敷より御召にて、汝の先祖御用達し金子の内八百兩、此度下し置るゝ

らず、或はひとり旅、夜道などには、高聲に讀誦して、身の守護とせられけり。

或曰。手負の野猪里へ出て、人〻怖騒し事あり。彼何某も通り掛り、くさむらに身を隱しながら、高らかに心經をよみ居たり。手負猪の癖として、聲を目當に來るものにて、眞一文字に馳來り、牙にかけてうしろへほり、跡も見ず馳り行。爰こそとや思ひけん、一調子かすりあげ、マカハンニヤハラミタと、聲のかぎりよみければ、行過たる手負猪、矢を射るごとく引返し、さん〴〵に掛ければ、疵數ケ所蒙りて、聲も出ず倒れ伏、半死半生なりけるを、人〻見付、戸板に乘て歸りしとなり。災難を除といふなる、有がたき心經も用ひやうにてかくのごとし下手な御醫者の、人參を用ひ過し、却て害を招に同じ、金銀儲の爲にとて、金數多腰に附、心知らぬ川をわたり、其腰のかねゆゑに、沈んで死んだる人も有。かやうなる事を恐れて、水に溺れまじき用心に、水の稽古し、其水に溺れて、死んだる人もありと聞。是等みな自身蹄を作爲して、その蹄に掛し人歟。

また一人出て曰、我家督を弟に讓り、遁世の望みあれども、若輩の某事行末の程覺束なし、御考給るべし。翁の曰、好レ名之人能讓二千乘之國一。苟非二其人一。簞食

(ル)洛陽。みやこ、京都をいふ。

(チ)能化。人を教化すること、轉じて師僧の稱。

(ワ)苦患。くるしみわづらひ。

を順禮し、日暮て歸る路のかたはら、程よき石のあるを幸ひ、ひとりの婦人暫く腰かけ、連の遲きを待合す。若輩ども通りかゝり、石に腰かけたるを見て、あら笑止や勿體なや、夫は靈驗あらたなる地藏尊。ちよつと足が障ても、瘧病か、氣違か、腰かけた罰はいまだ見ぬが、大體ではあるまいと。口々に誑かす。同行二人も戻り掛り、ともに恐れ敬て、心の內にてお詫をし、連立て歸りしが、石に腰掛たる婦人、俄に大熱口ばしり、知らずや我は、六道の(チ)能化なり。衆生を救ふ菩薩なれば、我罰はあてざれども、汝が罪汝を責、此世にては命を縮、未來に地獄の(ワ)苦患をうけ、浮世さらに有まじきぞ。あら不便や、堪がたやと、虛空を掴み正體なし。隣近邊寄集り、同行を先として、種々の供物をとり揃へ、地藏に御詫まをさんと彼所に行て見れば、何でもない唯の石なり。皆々興さめ家に歸り、かの婦人を竹輿にのせ、また彼所に連行て、地藏にあらぬ石なるを、とつくりと見せければ、たちまち熱さめ正氣になりぬ。是等は未來といふ蹄に掛りてまよひに迷ひを重る人か。翁の曰、かゝる類ひ世にまた多し。或書生、予にかたりし事あり。其書生の舊里、其某といへる人。心經を信仰して、朝暮のつとめ懈

（ヌ）呵責。しかりせむること。

りなし。起ればまたきのふのごとく、朝から晩まで（ヌ）呵責せられ、くるしきは苦しけれども、寝れば又大家の主人、夢中の歡樂、心の儘なり。我聞く、人間の苦樂は、糾る索のごとし。樂は苦の種苦は樂の種とかや。扨或乞食のよめる歌とて「ぬるまのみ人にかはらぬおもひ出を浮世にかへす曉の鐘」去僧曉の返歌とて「かへすとて何かくるしき曉のかねより後も夢の浮世を」。是等我が辛抱して、季を重る所以なり。扨又主人の太夫どのか、晝は家内を呵り罵り、朝から晩まで責つかふ。其一日の草臥にや、寝入れば人の奴となり、夜る晝るとなく呵責せられ夢中の苦しみ隙もなく、咬牙し、汗し、叫聲、夜ひとよ止ず。其苦患たへがたく藥用、針灸、祈念祈禱、殘るかたなしといへども、更にその驗なかりしなり。彼僕の言けるには、我夢中の歡樂を物かたりして諫ければ、いつとなく心和らぎ、晝の利欲うすくなれば、夜の苦しみ少し止みぬと承る。是等も利欲の蹄にかゝり身を苦しむる人といはん歟。翁曰、利欲の蹄に掛る人は、利の利たる事を知つて利の損なる事を知らず。太夫は金銀の殖る事を知つて、身の痩る事を知らず、これ小利大損ならずや。また一人出て曰、或所の婦人、同行二人、（ル）洛陽の觀音

か、たとひ知らずとの給ふとも、心の問はゞいかゞ答ん。もし疑しき事あらば、善か惡か、義歟不義歟と、本心に問答へ。有べかゝりに知れたる事ぞ、知りつゝ蹄に掛り給ふな。

下

また一人出て曰、拙者舊里に、今山椒太夫とて、奉公人に辛き目を見せ、おのれ一人の樂しみに金銀を集る。抓面は鷹の爪よりもひどく、吝き事は一文の錢にも涙がこぼす、摺芥子の親父有。朝から晩迄透間なく、內徒のものを責つかへば其苦しみに堪かねて、一季半季の奉公人、居とゞけるものなかりけり。人嚙馬にも相くちとや、その中に辛抱強う、季を重ねて勤る僕あり。我其僕に問て曰、汝の主人情なく、人遣ひの苛事、近鄕に隱れなし。しかるに汝季を重ねて、勤ることこそ不思議なれ。苦勞にはおもはずや、但しまた所以ある歟。彼僕の曰、なる程苦きはくるし。去ながら、其一日の苦勞に疲れて、寢屋に入れば熟〱寢入、夢に大家の主人となり、數多の人を召遣ひ、衣食住心の儘にて、夜ひとよ歡樂極

また一人欠びたら〳〵出て曰、翁毎々しかつべらしく、教訓めかして書散せるものを見るに、皆淺はかなる、有べかゝりの知れたる事なり。知れたる事をなが〳〵と、紙の費はいとはずとも、人の欠びを恥ざるや。翁の曰、なるほどあさはかなる、有べかゝりの知れたる事なり。翁本より不學文盲、奥深き事かつて知らず、知らざるを知らざるとして、知れたる事を知れたる通りにいふ而已なり。去ながら知れたる事とて天窓から一ト口にな嚙み給ひぞ、足下のごとく、知れたる事とて、天窓から唾吐する人數多あらんが、其人々の中にも、知れたる事を、知れたる通りに、行はざる人も亦數多、善は善惡は惡、君は君臣は臣、親は親子は子、仁は仁不仁は不仁、義は義不義は不義、長短輕重有べかゝりに知れたる事なり。其知れたる事を、知れたる通りに行へは、言事はなけれども、世間を見るに親を親にせぬもあり、主を主と思はぬもあり、或は不義と知りつゝ不義を行ひ、不仁と知りつゝ不仁なる事もしたり、或は重きかたを輕うあしらひ、輕い方を重にしたり、長きを短く言なしたり、短きを長と贔負したり、おのれが勝手に任せては、惡人をも譽、善人をも毀る。かやうなる人々は、知り顏にして知らざる人

をも憂へとせず、生を樂しまず、死を惡まず、得失存亡を釣瓶にたとへ、苦樂盛衰を碓なりとて、貧富貴賤を一ト眼に見て、諂ひなく禮もなく、人譽れども榮とせず。人毀れ共辱とせず。此人寵愛の一ツ子有て男子なりしが、十歳の春急病にて相果ぬ。日比は悟りきつたりとも、などか力の落ざらんと、おもひの外憂る色なし。我問て曰、寵愛の一子に離れ、憂る色の見えざるは如何。實に愁る心なきか。天魔屋笑て曰、我十年已前に子なし、其とき何の憂もなかりし。今また子なし。たゞ十年已前のごとし。又何の憂る事のあらんやと、さつぱりとしたる顔色、是等は蹄を拔たる人が。翁の曰、是等は蹄を拔過て、極樂の先裏へ行し人なり。すぎたるは猶及ばざるがごとし。人の形ち有て人の情なし。人として人の情なきは、何をもつて人と云はん。むかし子を先だてし人のよみける歌とて「有ものゝ無こそ本のすがたなれとはおもへどもぬるゝ袖かな、是等の人情味ふべし。予が隣にも、足事を知りたりとて爲べき事をせず、なるべき事をなさずして、貧乏を自慢する人有、此類また世間に多し。是等は過たる人が、及ばざる人歟、翁も高い聲はならぬ。あまり除た中ではない。

(リ)本復。全快といふに同じ。

く、殊に孝心深しと聞。其同伴のうち誰にてもあれ、親御が順禮なされたく思召は、五枚肩三枚がたの通し駕にて、早速御供めさるべし。去ながら此孝行は身體相應誰しも仕よひ孝行なり。もし身上おとろへて、もの毎不如意に成たるときも早速負ふて御供するが此所合點がゆかぬ。人も身上よろしき内は、親子夫婦睦しくて、身上がかたふけば、親子夫婦、すれすれになるも有り。本より孝順なる人も、妻子が出來ては、初のやうになきものあり。爰が平生修行召るゝ學問のちからなり。かならず弱味噌に成給ふな。或先生の仰られし名聞になりとも孝行せよとは、有がたき教なり。名聞にても孝行すればまづは孝行、論語に、吾祭に與からざれば、祭らざるがごとしと有。足をさするも、肩うつも、自身せざるがごとし。或人大病を煩ひて、此病氣、全快なさしめ給ひなば、炎天にはだし、寒中に裸にて、御禮參りいたさんと、神佛に願を立て、其病(リ)本復して、代參を立られしが、神慮佛意如何あるらん。

また一人出て曰、某隣に天魔屋の善兵衞とて、悟りきつたるおのこあり。其爲人。寢たいとき寢、起たい時起、喰たいとき喰、飲たい時呑、禍をも悅はず、[illegible]

る男通りかゝり、孝子に對ひ、國所を尋問ひ、矢立を出して、我國所を書て渡し、かならずたづね來られよと契約し、道中筋の心得になるべき事ども委しく敎へ、扨自身の細き帶を解、孝子の脊中の帶に結付、鐙のごとく兩方へたれ、老母の足に程よう蹈せ、ふらつけば血が下り、かならず腫の來るものなりと懇に介抱し、扨々貴殿は美しひ、我等も去年老父を負て、西國を廻りしが、熊野を一ヶ所打殘し、來春はまた熊野詣でと、親子樂しみ暮せしに、無常の風相またず、其秋身まかり給ひしなり。夫ゆゑに此ごとく位牌を負て、熊野へ御伴いたせしなり。去年の春の道中は、樂みありて力も有しが、此旅に樂みなくて力も拔たり。扨〳〵其元は美しき人なりと。見上げ見おろし羨みぬ。此人は唯人の親の、存命成を羨て人の子の孝行なるをば、さのみ感心する體なし。我これを思慮するに。我等ごとき弱味噌は人の力の強きを見ては、身の及ばざるをもつてのゆゑに感心すれども力の強き人の目からは、珍らしからぬ事なりと。感心せざるごとくにて、此人至孝なるが故に、人の孝行なるを見ても、さのみ珍らしからぬと見えたり。同伴の感心も、もしくは弱味噌の仲間ならんか。翁曰、汝の同伴誰々もみな手前よろし

附を三度づつ目八分ですえたりとも、きり飯五つの孝行には掛合まじ。たとひまた掛合たりとも、家藏財寶諸道具まで、皆親のゆづりならずや。其親のものにて其親を養ふ子、何ほどの事を孝と云ん。まだ〳〵家財ばかりではない、身體髮膚、皆父母の讓りならずや。其父母の讓りをもつて、其父母につかふる子、いか成事をや孝と言はん。御工夫〳〵。

また一人出て曰、兎角孝子は貧家に多く、富家に稀なり、此儀如何。翁曰、國家亂て忠臣あり。家貧して孝子顯る。あらはるゝとあらはれざるとのちがひ而已にて、身をたて道を行ひ、父母の名をあらはすは、富家にこそ多からん。孝は人々の天性なれば、外より求て得るにあらず。何ぞ貧富に與からん。

又一人出て曰、拙者此春、大和廻りをいたせしとき、七十ばかりの老母を負、西國を順禮する孝子に會しが、同伴皆感涙をながし、手拭はな紙或は路用菓子なんど、我も〳〵と餞してありがたかりぬ。此同伴はみな富家にて、本より孝心なる事は、我等常〳〵恥入し人々なり。其身孝心深きゆゑ、人の孝行なるを見ては感る事もまた深しと。貰ひ感涙流せしが、折節遠國の道者と見えて、三十餘りな

（チ）もぎどふに。無愛想（ぶあいさう）に。

かり喰殘し、其半餘せしを手拭に包み藏て懷中す。我等其心を知らざれば、不審はれず、纔なる小盆のきり飯、皆喫たりとも爭か飢を凌ぐに足らず。しかるに半餘せし事こそ心得ね、いか成ゆゑぞと問ひければ、答て曰、我家本より至て貧しく、かゝる美食は稀にもたべずと、兩眼に涙を含み、貧しき身の悲しさは、ひとりの母を持ながら、かやうなる食物は進る事力に及ばず、恥しき事ながら、母への土産に致たしとそこ〳〵に禮いふて、手早に荷を負、（チ）もぎどふに別れ行、同伴皆感心し鬼の目にも涙とやら、目を摺て歸りしが、其後其近在の人に出會、有し事どもかたりけるに、年恰合かやう〳〵の人ならん。是こそよし田村の茂八とて、かくれなき孝子なり。此仁本より小百姓にて、家甚貧しけれども、人の手本になる人なり。舊冬も隣村の有德なる人、其孝行なるを感じ、田地山畑數多附添、娘を妻たきよし、媒を以て云はれけるに、固辭て承引せず、友達をもつて內意を聞に、孝子の曰、我家本より貧しければ、貧しきは常なり。今有德なる人の娘を、嫁にもち給ひなば、母の氣がね多からん。是をおそるゝゆゑなりと答しとかや。翁の曰、此ものがたりによつて見れば、其元達の身上にては、毎日二の膳

いかさま父母に事る道も知らで、妻子を持はつまらぬものじや。必妻子といふ蹄に掛て、孝のおとろへぬ用心召れ。足下達は身上もよろしく、内徒の衆も數多あれば、自身手足の孝行は勤ずとも、御不自由にもおぼすまい、唯親御の嫌ひなる事をせず、親御の御好に任するのみ。其父母の好きらひは、面〳〵の本心に問給へ。明らかによく御存知、知りつゝ蹄に掛り給ふな。

また一人出て曰、此間國本の舊友上られ、四方山の咄しの內、其客人の物がたりに、去秋茸狩に誘引せられ、行程五里餘り有處へ罷りし事あり。其歸るさの山路にて、ゆき倒れし人に會ぬ。樵夫と見えて腰に鎌をさし、其かたはらに荷も見ゆ秋の日の暮近く心せけども見るに忍びず、もし持病にてもおこりし人か、腹痛などせば、持合のくすり參らすべきかと、耳際により尋ければ、顏をもたげ一禮して云けるやう、本より持病も候はず、腹も痛ます、食ごりを猿にとられ、餓につかれて如レ此と。此言を聞て、同伴皆力を得、幸辨當に殘りたる切飯早ずし、或は煮染などとり集、小盆に盛り與へければ、押戴〳〵さも旨さうに味ふ氣色、中〳〵切食ぐらひにてはどこの端へも足まじく見へけるに、さはあらずして半分ば

調へ、是を味ふに、其香ひ口中ざわりまた別格の風味なり。誠に錢は錢だけなりと樂しが、是も僅四五日馴れば、さしてよきともおぼえず、あしきとも思はず、唯本の百文の煙草に同じ、故に費なりとて、又百文の煙草に戻り、扨是を喫するに、その嗅み口中あたり、中〳〵一服も盡しがたく、是非なく百五十文の場に止まりぬ。そのゝちまた二百文の煙草なりとて、人の賜し事あり。此煙草を味ふに其薫り口中障り、また〳〵格別の風味なり。誠に錢は錢だけなりと樂しが、是もまた四五日馴ては、よき共覺ずあしくもなく、唯百五十文の煙草のごとし。其ときまた、かの百五十文を味ひ見るに、其嗅み口中あたり、中〳〵一服も盡しがたし、このとき奢馴やすき事をおそれ、つとめて本の百文の座へ尻を据えぬ。是等は近頃些細なる事なれども、葎の雫萩の下露、はじめは譏の露雫、すゑに至ては舟なくては渡られぬ。幼少のとき敎ずして、悪癖の附たる子は、末に至て、親の手にも余るものなり。是等もはじめにをしへざる親々の過なり。古への人は、いまだ人の父たるの道を知らずしては、子の有事を恥しとなり。今の人は、いまだ人の子たるの道さへ知らずして、子の有を恥ずとて、去もの識が笑ひしなり。

(ト)舊染の垢。ふるくしみたけがれ

の教訓なり。

翁の曰、それゆゑの掃除なるか、一通りは聞えたり。去ながら煙草盆とはちひさい〳〵。掃除の場所が違ふてある。實の掃除せんとならば、まづ私心私欲をはらひ(ト)舊染の垢を洗ひ、腹の内を掃除して、天性固有の明徳を磨出すべし。日日に掃除し、又日に掃除して我本心を實知せば、先祖の心も、親の心も、天地の心も外にはない。其本心に順ふを通といふ。道は須臾も離るべからず。もし此道に離るゝときは、親先祖はいふに及ばず、世界の心に離るゝゆゑ、終にはなじみの得意もはなれ、家屋舗にもはなるゝなり。日日に掃除しまた日に掃除すべし。

翁歎て曰、いつ蹄に掛るともなく、ぢり〳〵とかゝるものは、奢の蹄なり。此蹄に掛り、國家を亡すに至る事も、はじめをつゝしまざればなり。歌に「よしの川其源を尋れば葎の雫萩の下露。ひと雫づゝの奢と思へど、末に至ては大河となり、其水が溢ては、家も屋敷もながれて仕舞。兎角奢は馴よきものにて、少しの事とて油斷はならぬ。翁常に一玉百文の煙草をのみなれ、さしてよきとも思はず、またあしきとも思はずして、是にて足りしが、或時不圖、百五十文の煙草を

(へ)御法度。おきて。

なきがごとく、雩して雨の降をば有がたがれども、程ようほどよう降雨をば、左程までありがたがらぬ。この御治世の有がたきを、さほどまでありがたがらぬも亂世の悲しみを知らざるゆゑなり。もつとも天恩國恩は、廣大なる事なれば、報じやうはなけれども、責て天の冥加をおもひ、(へ)御法度をかたく守り、正直に家業をつとめ、第一に奢を愼しみ、困窮なる人あらば、相應の助をせられよ。其元が先祖の二郎吉は、唾壺の掃除から組立て、此やうなる家藏、掛屋敷まで儲出し、內福に有たれども、一生榮好みせず、着ものに難癖言はす、奢をつゝしみ儉約をまもり、弱き人には相應の施しをして通られた。諺に親は苦をする子は樂をする。其子は乞食するとやら。いかさま世間にまゝ有事じや。どこの先祖も先祖にあだな人はなく、晝夜三十日寐なんだの、五日喰ずに働たの、肩は棒のたへ間なく、行も戾るも鋸賣買、目をせつて拵だる、先祖の御蔭は思はずして、此家屋敷財寶まで、已が物のやうにおもひ、妻子をはじめ下女小者を養ふまで、皆我力のやうに思ふ。是がおごりの源なり。奢はかぎりのなひものなれば、奢は乞食の源となり。おごりの心兆すときは、先祖の辛苦を思ひやれと、灰吹コツ〳〵叩て

しづかに治まれるをいふ。

一所に居て、なんの氣遣ひのきの字もなく、安樂世界に暮す事、是皆泰平の御蔭ならずや。余り廣大なる恩澤は、ひと〳〵左程に思はぬものじや。嗚呼、太平なる人心。扨又わごぜ達は知るまいが、何國の在所も同じ事、夏の頃旱つゞけば、百性の辛苦辛勞、いやはや京の衆にもちつと見せたひ。親も子も、夫も婦も、嫁も娘も、夜晝のわかちなく、命限り根かぎり、かひ桶の、龍骨車の、桔槹のすつぽんのと、眞黑になつて水の世話。少しにてもゆだんすれば、折角これまで辛苦した。稻も綿も、粟も黍も、大豆も小豆も、からしてのける。もふ二三日旱つゞけば、たとへいかほどはたらいても、最早引べき水も盡、人の力も弱るとき、神〳〵諸寺の祈念祈禱、雩の奇特とて、俄に雲にしるが出來、大雨頻にふり出せば其悦び類ひなく、蘇たるごとくにて、今まで有つる水の喧嘩も、さつぱりながれて仕舞、御神酒上るの、御湯立の、御禮まゐりの御蔭のと、村々の雨悦び。此やうな旱年は、五年目か十年目、度〳〵はない事じや。常のとしは時に順ひ、雨も程よう降故に、辛苦も數少、五穀も出來る。此年は猶以、悦ぶべき筈なれども、是がかの大病人の本復して、本復の祝ひはすれども、病ぬ祝ひとて、祝ひする人

は家の勝手をおもひ、算用づめにて手傳るゝか、又は癇症といふ病ひなるか、何にもせよ、卵を破るに、何ぞ横槌を用んや。主赤面して曰、全く彼等が勞をいたはり掃除いたすにてもなく、まして家の勝手を思はゞ、手傳はぬこそ勝手ならめまづは當世利ものゝ癇症と御覧給はるべし。去ながら、少し所謂のなきにもあらず、手前の先祖は丹波の國大江山に近き所、童子の頃より京へ登り、たばこ盆の掃除から仕あげたる身上なり。先年在所の老人登られ、世間咄しにことよせて我等に異見、一々身にこたへしゆゑ、せめて先祖の辛苦をも忘れぬ爲、かつは奢りの呪にもなるべきかと、おもひ付のたばこ盆、毎朝かゝさず掃除いたす。翁の曰先祖の恩を忘れぬため、奢の蹄に掛らぬ用心、たばこ盆の掃除面白し。扨老人のはなし如何。主人の曰、老人は田舍人、本より口不調法、我等また耳不調法、わすれる所は桂馬とび、無拍子ながら口まねいたさん。彼老人居住ひを直して曰、下々の口から澤山さうに、申も近頃御慮外ながら、天下大平五穀成就、民安全とは今此時、何ひとつとして不足なき世の中、堯舜の代といふとも、かほど目出度(ホ)御静謐成御代は有まい。すゑ〴〵の、わごせや、我等に至るまで、親子夫婦

り大なるものはあらじと、過を改て歸りしが、内の誠外にあらはれ、君子の相に見えける歟。恐るべし／＼と語りぬとかたりしが、今其元にいふ通り、内に敬心なければ、こと葉に災難顯はるゝ。敬み怠に勝ものは吉なり。怠り敬に勝ものは凶なり。人相には、福德たつぷり見えたりとも、愼しみなくして。奢りまた吝ならば、家の亡事遠からじ。長壽の相、しつかりあるとも、飮食の欲、男女の欲、ほしひ儘に行はゞ、身を失ふ事近からん。可レ愼可レ恐。かならず人相の蹄に掛り身を持損ひ給ふべからず。又一人出て曰、奢りの蹄に掛らぬ用心御考へ給るべし

翁の曰或所の商人、手代小者三十人余りも召遣ふ家の主なる人、毎朝煙草盆の掃除しけると聞、予其主に問て曰、手は手の役、足は足の役、目は目のやく、耳は耳のやく、鼻は鼻口は口、それ／＼の役有て一身おさまる。國を治め給ふにも、それ／＼の役人有て一國治る。町家とても其通り、主人は主人のやく、手代は手代の役、小者は小者、女は女、それ／＼の役をつとめて一家治る。しかるに其元、丁稚小ものゝ役をつとめ、毎朝たばこ盆のさうじ召るゝよし、翁風に傳へ聞。深き所謂ありての事か。かれも人の子なりと思ひ、小者の勞をいたわるのか、但し

ごとし。我本何某といふ朋友ありしが、名は憚りまをさぬなり。彼舊友、七年己前火災に會、貧窮におよべるを見るにしのびず、我財を分て賑はす。去秋われまた水難にあひ、困窮におよべども、彼朋友の信なきのみにあらず、予が災難を幸に、おのれが利欲をほしひ儘にし、剰我を科におとさんと謀る。彼是の恨骨髓に透り、かの朋友を刺殺し、我もともに死る存念、九寸五分を懷にし、かの家さして行途中思ひ内にあれば色外に顯れて、困窮の相見えざらんや。死相またあらはれざらんや。討はたすかくごにて、未明に彼、何某の家に至り、しのび入て窺ふに、何某ははや禮服にて、老母に屠蘇を進る體、只ひと刺と近よりしが、老母の面ざし、我亡母に彷彿たり。覺えず劍をとりおとし、過さり給ひし母の教訓、目前きく心地して、惣身より汗流れ、いかりの焔忽きえ、はじめて知る我身の非、今我かれを殺害せば、老母悲みに堪ずして、命もまた危からん。假令命全とも、たれ有て養ん。其子には恨ありとも、老母に何のうらみが有。恨なき人を害せんは、大ひなる不仁なり。足る事を知らずして、困窮せしは我過り。一朝のいかりに其身をわすれ、父母の遺體を毀ひやぶり、父母の名まで汚さん事、不孝これよ

(八)温潤。おだやかでゆたかなるさま。
(二)須臾。少しの間。しばらくの間。

り。愼むべしおそるべし。昔久米の仙人の通を失ひ落られしも、どこぞに白脛はないか。通うを失ひたいものじや、もの洗ふ女は居ぬか、落たいものじやと、覗き廻つて見たではない。百夜通ひし深草の少將も、はじめはちよつと見たばかり後には戀の奴と成。其いまだ見ざる所を愼み、其いまだ聞ざる所をおそるべし。
先年、或高名の相者なる人、翁にかたりし事あり。其相者元日未明に北野の社に詣んとて、千本通りを上りけるが、むかふより遽しく來る人あり。提灯にすかし見るに、貧窮患難、死相亦顯れたり。いか成ゆゑぞと問間なく別れけるが、此人の相、何となく心に掛り、もし逢事のありもやせんと、又千本通りを下向す。東方既に明の春、空の氣色も長閑なる人品にて、向ふより來れる人、(八)温潤にして君子の相あり。よく〱見るに、彼未明に逢し死相の人なり。(二)須臾に相のかはりたる不思議さに、いか成人にてましますぞ。嚮に未明に逢しときは、困窮の相有て、死相すでに顯れたり。今また君の相を見るに、福德充滿、長壽また限りなし。是我未熟の見過たる所なるか。但し君神術有て、如斯變せしむるか。不審を晴させ給へといへば、彼人手を打、嗚呼、妙なるかな〱、其肺肝を見るが

（ロ）名跡。あとつぎ。

蹄に掛り、國家を亡し、身を失なひしむかしの事は、和漢の書に數多見えたり。それはまづ置。翁目前見聞たる町家の人の、蹄と知りつゝ蹄にかゝり、家を失ひ身をうしなひ、（ロ）名跡の絶たる類ひ、指を折にいとまなし。歴きとした家の主、此蹄にかゝつて身を持崩し、終に金の耗と、水の耗とが病根にて、若死せられし人もあり。此蹄にかゝつては、其身正しからざるゆゑ、内徒の者まで放埓になり、いろ〳〵の蹄にかゝり、數代の家を沽却して親兄弟に難儀を掛、妻子に憂目見せる族、翁毎々承る。扨また息子や手代どもの、此色の蹄にかゝり、主親に勘氣を受たり、欠落したり、果は乞食非人となり、のたれ死をしたるものあり。親の遺體に疵をつけ、あられぬ死をして、親一類の顏を穢し、はぢに恥をさらせしもあり。兎に角恐るべきは色の蹄なり。

客一人出て曰、某今朝去名高き人相見に出會しが、彼相者予を相して、婦人の災難にあふべき相あり、愼み給へと言ひき。我曾て、婦人の難にかゝるべき覺えなし。もし相知りたる女あらば、愼みもせめ、本よりなき婦人の災難恐るゝに足らず、是等も相者といふべきか御考給はるべし。翁の曰、其言葉既に災難顯れた

知りつゝ、蹄に掛て命を失ふ。不便とおぼし給はるべしと。啼〳〵すがたを隠しけり。

賣卜翁、此事を傳へ聞、諸客に向ひ、はしめ終りを委しくかたり、誰しも人は過のなき事不能、蹄としらずして蹄に掛るは過ともいふべきが、蹄と知りつゝ蹄にかゝるは愚なる事にあらずや。諸君子如何思召ぞ。諸客聲を揃へて曰、流石畜生の淺ましさ、人に異なる所なり。誠に人は萬物の靈、我等もし、畜生に生れたりとも如何せん。よくも人には生れたりと、みな〳〵肩肱張を見て、翁かぶりを振て曰、ひと人と人もあまり自慢はならぬ。(イ)蛾眉は性を伐斧と知りつゝ、色といふ蹄にかゝり、奢は家を亡す蹄と知りつゝ奢り、利欲は禍を招く蹄と知りつゝ其蹄に掛つて苦む人あり。升落の鼠、盥落しの雀、鈎針にかゝる魚などは、皆是生を養んとて蹄に掛る。それさへ人は愚なるものにいふ。其人々の掛る蹄は、あながち身過といふにもあらず、明るといふ蹄にかゝつて、今日をむなしうする人もあり。毒と知りつゝ蹄に掛つて、酔狂ひするもあり。かやうなる蹄盡し、算て行は日もはや足らじ。就中貴も賤も、ひなも都も、唯かゝり安きは色の蹄、此

(イ)蛾眉。美人をいふ。

上

むかし／＼、姑射山のかた陰に、かたばかりの庵をむすび、よひ／＼毎に、講談しける翁あり。ひとよ講談すでに終り、まだ寝ぬ人を空に知る碪の聲も幽なる月山の端にかたむきて、隠暗き庭の木の本に、人の居眠るさまなるものあり。歩行よりてよく見れば、白髪の老人なり。翁問いか成人にて、いづくより來り給ふぞ。老人答、翁の高談ありがたく、毎夜竊に此所に來り、聽聞いたす。翁の曰、など内にと入給はで、かゝる處に居給ふぞ。翌日の夜も又來り給はゞ、かならず席をまふけて相まつべし。老人頓首し、顔ももだげず、もはや翌日の夜は來るまじ。老人が命は今宵かぎりなりといふ。翁驚き、所以如何と問ければ、老人愁ふる色見えて、我は人にては侍らず。此山のほとりに住て、數百年を經る野狐なるが、今宵蹄を掛られたり。既に蹄を掛られぬれば、たとひ此夜は遁るゝとも、明日の夜は是非にかゝらん。翁問、蹄と知らずして蹄にかゝるは是非もあらし。蹄と知りつゝ、蹄にかゝるはいかなるゆゑぞ。老人曰、そこが畜生の淺猿さ。蹄と

らう、それは御ゆるされませ、いや／＼苦しうない、人の仁義にならせられて、家内和合し、家業繁榮めさるゝは、神佛も悦ばせらるゝ事じや、我／＼や汝がおろかな事はいふにおよばぬ、聖人も、人を以言をすてずとのたまひ、佛は、依法不依人と法華にも說せられた、聖人佛も御ゆるしなさるゝであらう、早う參れさやうならば心得ました、はやうゆけ、ハア、

主へ忠義親へ孝行たのみます

かりのうき世にかりの狂言

堵　庵

ありべかかり

手島堵庵著

序

太郎冠者あるか〱、御前におりまする、汝を呼出すは別の事ではない、頃日山ひとつあなたの伯父ごの御出なされて、これを見よと仰られて、書物をば御持參なされた、先汝もこれ見よ、何と有りがたい事ではないか、拜見いたしました扨々これは有難い事でござります、誠に誰もかしこさうに思ふて居れど、ようよう思へばかしこうないなさやうでござります、中庸にも、人皆曰二予知一驅而納二諸器獲陷阱之中一而莫二之知一レ碎也擇二乎中庸一而不レ能二期月守一也とも仰られた、みな若い衆がこれをよむで、よう合點めされたらば、孝弟忠信になつて、安富繁榮うたがひはあるまい、これ世に廣めたうおもふが何とあらう、それは一段とようござりませう、それならば、汝はこれより彼方此方へ參りこの書物を廣めたらばよか

爲學玉箒後篇跋

夫孝者善繼二人之志一、善述二人之事一者也。と我曾祖父堵庵先生、平日門人の疑問に答へ玉ふ處の原稿若干卷、其要語を撰出して六卷とし、此を筺中に藏む、其中三卷は、往し寬正紀元乃秋、祖父和菴先生、淇水先生、與にはかりて梓に上せ玉ひ、世に行はること既に廿餘年に成りぬ、頃日書肆芳樹軒、其殘れる三卷を頻に梓にせんことを、乞求むる事、再四にして、强ていなみかたく、故に淇水先生精に諭して校正せしめ、玉箒後篇と題して授與し玉ひぬ、嗟小子精か如き、唯恐らくは善祖先の心志を繼、善事業を述ることあたはさらむことを、此に於て戰栗恐懼し、謹て其由を後にしるす。

曾孫手島精惟一拜書

てめでたがれども、もはや死したるが見へぬなり。人は死にぎはに驚ども、生れ出し時より時々刻々に死する也。老少不定の處はぬるし、こゝをよく得心すれば世界一面若きものなし、老人もなし、唯今、即今〳〵ばかり也。かなしむべからず、喜ぶべからず、かなしむべし、喜ぶべし。

爲學玉箒後篇終

(一)執滯。しふぢやくに同じ。

前にいふ如く、物の始を悦び、終りを哀しむは天然なれども、凡夫は是を常住にせんと(一)執滯する也。一休其所をあはれみて、諸人に心眼を開せんとせわし給ふなり、

元日は大晦のはじめなり。

大としの夜は元日の根本なり。

これによりて見よ、かなしむ終は悦ぶ始。悦ぶ始あれば、必ずかなしむ終りありと明らむべし。吉凶禍福陰陽晝夜かた〳〵まぬかれがたし、されば自己の本心を知りて萬事を放下し、吉凶陰陽のあるじとなりて、取ずすてず常正月に成給へと、聖人も佛も御世話の御苦勞を知り給へ。かゝる安宅に住人は、生れてもめでたし、死してもめでたし、世間の言にも、死したをめでたうなられたといひ、死人ありしを御めでたがありしといふも、おかしきやうなれども、生死のあるじと成て見れば無理でもなし、世界には死して人が減たれども、土の方は生じて増るなれば、土の方からはめでたし、人が生れてめでたがれども、土は減てかなしかるべし。凡夫は土は別物にしてゐるゆゑ、人間贔負でくるしむ也。ぎやつと生れ

又つれ〳〵艸四季の段にも、あけゆく空のけしき昨日にかはりたりとは見へねども、引かへめづらしき心地ぞする、大路のさま松たてわたしてはなやかにうれしげ成こそ、ともいへり。

三　夕

淋しさはその色としもなかりけり、槇立山の秋の夕ぐれ。

神無月風に紅葉のちる時は、そこはかとなく物ぞかなしき。

世を捨て身はなきものと思へども、雪のふる夜はさむうこそあれ。

右のうたどもを以て見れば、めでたさもかなしさも、此方の才覺事にはあらずと知るべし。こゝを實にがてんする事肝要成べし、此處甚やすきやうにて大きに難し。又一休の示しは、私知の分別にてめでたき事のみを願ひ、かなしみをきらひ貪着に迷ふものへのをしへなり。一體も正月はうれしくめでたきといふ事があればこそ、一休の歌に、

松たてずしめ餝せず餅つかず、かゝる宿にも正月は來つ。

にくけなき此されこうべあなかしこ、是より外にめでたきはなし。

見るに萬事物の始は人々悦び、終りはかなしむ常の情なり、しかるゆゑんはむかしより誰知りたるものはなし、古哥に、

知らざるは佛も人も同じ事、扨こそ人の迷ひこそすれ。

めでたきも、かなしきも、さらに知恵分別のいたす處には非ず。何としてか春の始めは、殊更にめでたくうれしく、秋はさびしくあはれに、冬はかなしきは何がさせる事ぞ、知りてなし知らいても事かけもなし、我もうれしき時はうれしく、めでたき時はめでたうなり、かなしき時はかなしく、かくいへばよきやうなれど身勝手の入用の時は、手細工のめでたき、自作のかなしみが出來やすうて油斷ならず、此手細工をせぬ事なりといふ事は、我石田先生の敎へによりて少しは合點したれども、口にいふはいへども、とくと合點がゆかぬやうに覺ゆるなり。實に昔から、

立　春

今日に明て昨日に似ぬは皆人の、心に春の立にけらしな。

百千鳥あさけの空に遊ふなり、殊の外にも春めきにけり。

(癸)混然。くろみてといふこと。

ふ、あらはれずして止ざるよりいへば健々といふ、あらはれて皆道理にかなふよりいへば順といふなり、すべていへば一太極にして人に有ては仁なり、(癸)混然たる一理也、川流は物々一太極なり、敦化は萬物一太極なり、敦厚とは其順德のみにて、一切に化が及ぶゆゑ大なりとするなり。

○或老人問曰。世の人正月に成といへば、老若となく互に目出度よしをいふて悅ぶ、然れども年一ッとれば年一ッ短うなる理なり。尤老少不定なりといへども、年をとれば年とるに付ても心ぼそし、其上一休和尚元旦の示しなど、かれこれ無常を思ひ廻らせば、さのみ正月じやとて別にうれしうも目出度もなし、いはゞ哀しきやうなもの也。是を以てみれば正月は何を以てめでたしとし、悅びあへる事にや、如何。

答。正月の元日何を以てめでたしといふ事は、われも知らず、然れども昔からめでたがる故めでたし、是とても何も才覺でめでたがるとも見へず。めでめづるなどいふは、愛するといふ言のよし聞り、又春は發生の時にて草木も茅の出る折なれば、其心にて何事も悅び祝ふ言を、めでたしといふとも聞傳へたり、是を以て

め）のぶち駒を。さかれて云々のこと。

給ひしを、天の鈿女の命を始め、諸神たち岩戸の前にて神樂を奏し給ひしにより大神少し岩戸をひらきかけのぞき給ひしを、手力雄命御手にとりつきひき出し給ひしといふ事あり。神代の事は尋ねず、此事人々心上にとりてはいかん。

答。いづれも大體心得もあるべし、予もさせる見處もなけれども、止事を得ずしていはゞ、心内少しも惡事あれば、直に本心の神明は岩戸にかくれ給ふ也。然るに神樂は則和なり、心和する時は神明の智ひかりさすなり、たとへば何ほどいかれる人も、こそぐればをかしく成が如し、殊更うすめは女德やわらかにて和なり和は則仁に屬す、不圖こゝろ和らぎし也、其上は手力雄といふ勇氣にて、引たてねば本心明らかには成がたし。是心學受用體の論也。神書の意味はわれ學ばざれば知らず、其家に行て尋ね問るべし。

○或問。中庸三十章に、小德川流大德敦化とはいかん。

答。小德の川流とは、天地の間萬物萬事巨細微塵の事物迄も、それ〳〵に道をそなへて少しも滯なく、道理分明にて自在に行はれ、しかも錯りなし、是が小德の川流なり。大德の敦化とは、只天理一個の順のみ、天に健といひ、地に順とい

(辛)妄分別。みだりなるふんべつのこと。

(壬)御悪事。天(あ

れが頼て御世話をやかるゝや、今迄の苦勞は大體の事でなしとは、たれが頼て、苦勞せられしや、其元の身に引うけて天地を思ひやり給へ、其元も定て、たれも頼たるにてはあるまじ、何としてやら、かやうの問を出しました苦勞も同じ事なるべし。天地は無分別なり、其元も無分別にさへならるれば、それを安心といふなり。其元は無理に安心したがるゆゑ、様々の(辛)妄分別私案だらけゆゑくるしき也。世界に住ば苦もあり憂も有うちなり、古人云、心隨㆓萬境㆒轉。轉處實能幽。隨㆑流認㆓得性㆒、無㆑喜亦無㆑憂。此偈實にさとりし人の言なり、人の心は物々に向ふまゝに、自由自在なるが靈明の德なり、それなりにてくらせば、喜ぶべき事は喜び、憂ふべきことは憂ひてゐるまでなり、これが憂喜にあづからぬゆゑなり。何として憂喜にうつされぬといへば、我なきゆゑ也。其元考へ見らるべし毎日早朝起出るより、夜寐る時まで、無㆓間斷㆒苦しく候や、大かたうか〳〵して居らるゝ時が多かるべし、其時も天地を恨みづめにする心ありや、其うか〳〵の時の心でくらせば、何も天地にふそくいふ心はなかるべし。

○或問。いにしへ素盞嗚の尊の(壬)御悪事により、天照大神天の岩戸に閉こもり

にと云に、あんじすごして色々私案し、若我先へ死せばなげかるべしの、難儀せらるべしのと、様々來りもせぬ事を常々思案して居なり、是凡夫なる所也。耻かしながら我も其凡夫の仲間なれば、盛德の君子の孝行なる心の上は知らねども、不レ及ながら本心に尋てはかり見るに、孟子に、動容周旋中レ禮者盛德之至也、哭レ死而哀非レ爲二生者一也との給へり。又論語に、子曰父母之年不レ可レ不レ知也、一則以喜、一則以懼とあり。是を以て見れば、盛德の君子老親に事るは、只常々御機嫌がよければ善がと、きげんのよきを喜び、ある時は既に今年八十餘歳にもなり給へば、若もの事もなければよいがと、只大事〳〵と思ひ暮すばかり也、跡先は無きなり、君子は人の法を行ふばかりにて、他念はなき也。

○或問。天地はどうよくなるもの也、誰が賴みもせぬに萬物をうみだしてくれられし故、これ迄其物に日々年々の苦勞、今とても苦勞のし通しなり、それを道にいれて安樂にせんよりは、はじめより生出さぬがよかるべし、ゆゑに天地はどうよくなるものと思ひ、此所不審はれ不レ申候。

答。其元は天地は賴もせぬに、物をうみ出しとはいはるゝが、今其元の此問は、た

て虚空と思はゞ中適にあらず、故に此所學者心得がたきを以て事によせて、横渠先生向レ君を以て註し給へり。差別をいはゞ中適は與々の註、向君は中選の註の如し、故に朱註の次に記する也。事にあらはれたる所を以ていはゞ、佐藤次信の八島にて、九郎判官殿にかはりしは中適なり、堀監物の伏見にて、主人を救ひしは向レ君なり、監物もし次信ならば身を以て君を隔つべし、主人既に刀をぬき合せて後はせよりたるは、不レ忘所ほど遅く成といふ所を考ふべし。次信は不レ忘といふものなき故一段はやし。

○或問。我八十に餘る老母に別れて、大きに力を落しける、然れども又思へば火難にもあはず、我も亦無事にて母を送る事、大きに荷のをりたるやうにて嬉しく思へり。然れば母を大切に思ふに似たれども、無事なる中に早く沒られかしと思ふ志あると見えたり。是は大切に思ふの餘りか、又少しは邪魔に思ふ心か、我ながら別りがたしいかん。

答。それは死なれかしと思ふにはあらず、只あんじすごしといふもの也、それゆゑ死後荷のをりたるやうにおもふ心持も有べし、是皆凡夫の心なり、それをいか

はるゝを以て見るといふなり。又知るといふも其ごとく、一切の量ひを忘たたる時をしるといふ也、譬ば虚空はかたちなし、人常に虚空を見んと思ふものはなけれどもみへてあり、虚空を知るべしと思ふものもなけれども、知れてあるがごとし、それをいかにといふに、よく見知りて居ればこそ、人が空を問ば物なき所をさして空と答ふるなれ、されども常に空を見てゐるとも、知りてゐるとも思はぬがごとし、これは諭なり、空は向ふにさして示さるれども、本心は向はれぬゆゑさして示すことはならず、自ら内に省てしるべし。少しもむかふ所あればそれは人のはからひなり、其はからひ絶たる時自得する也。

○問。駿臺雜話に、不レ忘レ向レ君の段に、論語郷黨篇の君在ときは與々如の朱註に、威儀中適之貌といふて、張子の説を引て、與々は不レ忘レ向レ君とも釋しおけり、故翁は横渠の説緊要なる事をさとりぬ。彼堀監物が始終君に目をはなさぬといふは、是則不レ忘レ向レ君にあらずやとあり、此所中適の註と、向レ君註と差別有や。

答。中適は聖人の止レ敬なり、強てたとへば虚空のごとし、此言をきゝて若錯

や。

○或問。古語に、子を見る事親にしかずとあり、然れば人の親たるものは、總て子の善惡は明白にみえ候や。

答。大學傳九章に、康誥曰、如レ保二赤子一、心誠求レ之、雖レ不レ中不レ遠矣、未レ有三學レ養レ子而後嫁者一也とあり、親の子を愛する誠より誠の厚きはなし、其誠實に私といふ迷ひの雲かゝる時は、同八章に、人莫レ知二其子之惡一ともあり、こゝを以て辨ふべし。左樣の迷ひある親は論には及ばぬ也、此問の親は迷ひなき親の事なれば、必定子の善惡を明かに見分ること違ひはあるまじ、大かた世上を見るに、親の目違ひはなきものなり、然れども親の迷ふも亦子故也、それゆゑ子の見違もあるなり、さればかやうの事は一定してはいひがたし。

○或問。本心は色形なしときく、然るを何を以てこれを見出し、何を以てこれを知るといふや。

答。此所は言句の及ばぬことなれど、強ていはゞ、本心は人のはからひを待ずしてあらはれてあるなり、人よりこれを隔るなり、故に一微塵も見ざる時、あら

(己)戯。言　たわごと。

(庚)驕泰。おごりのこと。

ふものなし、虚實一體なり、(己)戯言も思ふに出、戯動も慮るに出とも有、其中に、誠は心に恥る事なきのみ、只此恥なきやうにすべき事也。心は天なり、至誠無妄にして、何としても欺かれぬもの也、世の中の事此欺かれぬ所のみいつもかはらず。

○或問。論語に貧而樂富而好レ禮とあり、これ何故に富には禮との給ひ、貧には樂との給ふや如何。

智。富者は禮を好まされば、必(庚)驕泰になりやすし、其上富めるもの萬の事繁く多けれども、貨財乏しからぬ故、何事も自由自在に善事を盡して天理に循ひやすし、それゆゑに心安く禮をたのしむ也。又貧者は心に貧を忘れざれば、必ず屈すまじきことにも屈しやすし、其上萬の事は寡けれども、財寳なき故何事も不自由にて、たとひ善心ありて天理に循ひ、義理を盡し禮を正し、文物の備へをかゝず、又は愛惠の施しもいたりとゞく樣にと、志ありて好むともそれは叶はぬ也。然れば貧者はならぬことはなるほどにして、無理に禮をつくしたき心なく、身の分限に安んじて、外に願ひ望みなきが故に、心樂なるはたのしみの至極にあらず

(戊)山門。山寺のこと。

答。畫けし餅の飢をたすけぬといふは常をかたる也、具に推ていふ時は、曹操の庾嶺の梅を語りて、士卒の咽をうるほせしのみにはあるべからず、繪に書る餅も飢をすへふに似たる事もあるべし。無住の雜談集にも、ある醫師餅を好しが、勝手にて餅を搗音をきゝて、疊にしがみ付、をう〳〵といふて堪かね、何とぞ我聞ぬ所にてはつかぬぞ、此餅の音をきけば、命も絶る斗に覺ゆといひしとぞ。はかるに如此人は餅の繪を見ても、嘸堪がたく思ふらんとぞ覺ゆ。又同書に、(戊)山門に住ける或僧湖水を見て弟子にむかひ云けるは、此湖水を田畑となさば廣大の田地ならん、さもあらば誰々には五百町づゝ得さすべし、などゝ云けるに、一人意に合ざる弟子有しが、彼には何ともいはれざりければ、傍より彼にも給はり候へと申ければ、汝には一反あたふべしと云ひしを聞て、其弟子云我も同じ弟子なるに、我を弟子とも思召ぬ段面目なしとて、師をうらみ出去けると也。此弟子の恨たるを見れば、田地をもらひたる弟子は、皆々嘸喜びつらんと思はるゝと書れたり、此弟子の恨しも喜びしもみな假の事ならずや、世上の人こゝを以て思ひ見るべし。世の中の事皆々跡かたなし、何ものか實なる、推ていふ時は本實物とい

(丁)渴。のどのかはくこと。

心無レ所レ住而能應レ變而卒得甲ニ罪於聖人一。聖人之學不レ然、於下無レ可無二不可一之間上有レ義存焉とあり、今委く論ずる時は、聖人從二心之所レ欲而不レ踰レ矩といふ、地位の而生其心ならば義ありて存する也。聖人より以下の分際には、而生其心を以て義に合へりとはいひがたし、故に聖人より以下は擇んで義に從はねばならぬ事也、前にいふ如く佛家の說は其言麁なり。儒家の論は其辨密なり、又無心といふ時は麁也、無二私心一といふ時は密也、故に程子は無心といはず、無二私心一と說給ふ類にて、推て知るべし。

○或問。翁の作れるねむりさましに、

繪に書し餅はくはれず世の中は、まことでなければ間にはあはぬぞ。

とあり。然れども昔魏の曹操戰ひし時、大軍(丁)渴にのぞみて一足をも得ひかざりしに、曹操下知して曰、此往先に大庾嶺とて梅數千株あり、其梅味ひ殊にすぐれたり、やがて是を取て喰べし、力をおとさず進むべしと云ひければ、軍兵これに氣を得て渴を忘れたりと聞り。然れば梅の噂にて梅を喰ひたるに似たり、繪に書る餅も飢を助る理あるにあらずや。

(乙)康節。號にて邵八姓。

(丙)先儒。むかしの儒者。

君子になれば父母はうれしがり悦び給ひ、一鄕も町内の衆人も扨々ありがたき志なりとて、うらやみ貴ぶにあらずや、それに君子には何とてならぬことぞ。又曰。君子となるには何の造作もなく、少しもむづかしきことはなし、口に善なる所をいひ、身に善なる所を行ひ、意に善なる所を思ふばかり也。かくのごとくして君子にならぬものは、われいまだ見たることなし。又口にあしきことをいひ　身にあしき事を行ひ、意にあしきことを思へば惡人となる也。かくのごとくして惡人にならぬものも、亦いまだみたることなしとなり。又(乙)康節邵先生曰。善也者吉之謂也。不善也者凶之謂也。學者よく〳〵思ひ見るべし。誰か吉をきらひ、凶を願ふものあらんや、吉凶外になし、我身の行ひにありと知るべし。

○或問。儒には、無レ適也無レ莫也義之與比といひ、佛家には、應無所住而生其心といふ、其たがひあるべしと思へり、故に(丙)先儒無所住は罪を聖人に得ると戒め給へり、此差別いかゞ。

答。義は天然の的當にて少しも私なき所をいふ、生其心も無所住なれば先は私はあるまじけれども甚麁し、故に儒にはとらぬなり。謝氏曰、老佛之學、所三以自謂二

（甲）徐。姓。節孝ハ號。

卷　下

○或問。老子は白髪にて八十歳の時出生し給ひ、終に青牛にのり去りて、其行所を知らずといへり、此事いかん。

答。老子天地にはらまれて人これを知らず、世に老子の言行をしりたる時を出生とはいふ也。又青牛とは青は天の正色なり、世人老子の人體はしりたれども、眞の老子は卽天なるゆゑ其德をみるものなし、其所を青牛にのるとはいふなるべし。

○節孝（甲）徐先生學者を訓て曰。いづれも君子に成たしと思ひ願へども、己が力よわく、功にもかなはぬ事をせよの、貧窮なる身にても、金銀費ある事をせよのといふ事ならば、それは君子にはなられぬといふも宜なり。君子に成には、疲力にてもくるしからず、金銀の費もなし、それに君子には何としてならざるや。又君子になれば田舍にては在所中、町かたにては町内いやしめうとみ、父母もにくみきらひいやがり給はゞ、君子になられぬといふことはりなり、さにはあらず、

り。道心則天心なり、然る時は死人には天心なきにや、死人に天心なしといはゞ死生二になる也、此所いかん。

答。善死はおのづから死、生は自生、死生は一にして二ツ、二ッにして一なり。我常に諸君に語るがごとく、萬物萬事皆二にしてよく一になる也、晝夜幽明、心身、父子、君臣、夫婦、内外、表裏を以て知るべし。死生ともに天なり、唯天のみなり、あらはれざるを天といひ、あらはれたるを地といふなり。人も則土なり視聽言動する時、其正しきを人といふ。死すれば土なり、たとへばこゝに築山が言踊いでは人に似たり、地とはいひがたかるべし、これ地の正理を失ふがゆへなり、人として人の所作に背けば土の化ものに似たり、故に死人に同じといふなり。人生てのはたらき人の道に合へば、それが天なり、死しては死して人の所作やみたるが天也、されば死しても天なり、生ものははたらきみえやすし、死したるもの、又は地もはたらきなきにはあらねども、ぬるきゆゑ動はぬがごとし。

(と)百八段。百八項と同じ。

けれど、年久しく癖づきたるは、其生のやうにも見ゆるもの也。雀も其如く山野人家を飛まはり、食を求めて遊ぶが元來の性なれども、久しくかゞめたる木の如く、これを以て雀の性を知るべし。習て性となるも内に其性なきものは、何ほど習ふても習ふた通にはならず。銅はかたきものなれども、内に蕩性ある故沸せば湯となる、木は和か成ものなれども、煎ても湯にはならず、内にとらくる性なきゆへ也。石は習ふても水にうかず、木は習ふても水に沈まず、人不善に習ふて惡となるは、形氣を外にそなへしによる、習ふて善となるはもとより内に性善を得はるによれり。此性善は天に受得しものゆゑ、是を德といふなり。されば得といへり、惡は外氣質にあり、善は内實德にそなはりしゆゑ、桀紂の大惡人も我身は惡をなせども、民に令して惡をせよとはいはれず、是桀紂の惡人も惡をきらふの性、内にあるをみるべし。

○或問。つれ〲草、(と)百八段、寸陰をなしむ人なしといへる章のうちに、しばらくも是なき時は死人と同じとあり。右の是とさしたるは中庸に所謂、道は須臾も離るべからずとあるがごとし、人として少しも道心なき時は死人に同じとな

下さるべし、外に何も望なし、只此度の葬禮の入用だけ御かし被下候へといひて此度の入用だけかり受、扨在所近在まで馴染のかたへ廻り、此度親相果葬禮にぎやかに仕たし、何とぞ御なじみの事に候へば、近頃乍御苦勞葬禮に御出被下候へと、そこら中たのみあるくべし、これ心一ぱいの志ありたけのしかたなり、行とゞかぬ所はせんかたなし。

○問。或處に雀を飼ひけるに、不圖生をくるしめて我身の樂とするは、人情にあらずと知りて、やがて放しやりぬ、其後雀その軒に歸り饑て死しけるとなん、是は生れしより籠の内にそだち馴れて、外に出て身を養ふ事を知らざるゆゑなり。こゝを以てみれば習ひ性と成なれば、徳は内にあらずして外にある事明らけし。又徳は得也外より得る事也、故に徳を積も外にありといふ。此人に對し徳の内にある事を得心するやうに、説聞す事いかん。

答。汝に問ふ、こゝに梅の枝を若木の時より悉く折たはめて、しだりざくらの如くなし置たるを見て、是梅の木の性也と思ふべきや、定て汝もさは思ふまじ、是も只半季か一年ためたる梅の木なら、放し置ば、ついもとの如く枝上へのぼるべ

もろ〳〵の願ひ有とも手を束ね、遊びて居てはいつ成就せん。
神佛また人の手も守らずに、我つとむれば諸願成就。

○問。或田舍に孝子ありしが、甚貧窮の人なりしが、其親まさに死せんとする時孝子へ遺言しける、我死せば念頃にあつく葬るべし、葬禮もにぎやかに賴よしいひければ、孝子快よくうけあひ少しの山ありしが、それにて漸ほそ〴〵と世を渡りしに、其山を賣て親の望の如く、にぎやかに葬禮し、我身は其後は手と身にてかせぎ、又としへてかせぎ出して、彼賣し山も買もどしけると也。右の親のごとくいふ時、其山とてもなく、何少し賣物なく、裸身の孝子ならば、其時はいかゞすべき、いかにもあつく葬禮すべしとうけあへば親を僞になる、さればとて一錢の才覺も出來ずばしかたなき也、此時はいかゞせんや。

答。其時いかにも快うけあふべし、幸よき賣物あり、われはそれを賣て葬禮を厚くすべし。其賣物といふは我身也、妻あらば妻だけうりもの多し、先其處にてかね持の買てくれそふなる人へ相賴、其わけを語り忌中は身も火もけがれあれば五十日の間御ひまを被下、其後は死する迄一生いかやうに成ともなされ御つかひ

(へ)冥罰。ふしぎのばつのこと。

なき願也、かくの如くするを誠の願といふ、成就せずといふ事なしと申き。

好次第望次第の願なれば、其所作直に成就なりけり。

身の所作の通が已が願なれば、よきもあしきも成就し易し。

○又曰。神佛に詣でゝ、只諸願成就と口に唱へたるまでにて、其願心の通身につとめざれば、それは神佛の前へ僞事をいふて出るが如し。たとひ鉄丸はくひ給ふとも、其傳はくひ給ふべきや。たとへば願といふは己がこけておきがたきに、人におこしてたべといふ時、人おこしてくるゝ己もおきんと、互の力にてこそおきるなれ、いかに大慈大悲の神佛なればとて、起してたべと願かけて、己は死身に成てぶらさがらば、おこされさふなものか、虫強き神佛も是はたまらぬと、手を離し給はんは必定成るべし。其時思ひ當るを、罰あたりといふ也、神佛の(へ)冥罰おそるべし。北野聖廟の御神詠に、

心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん。

仰でとふべし、又諸願成就のうたに、

なせばなるなさねばならず成ものを、ならぬといふはなさぬ故也。

（ほ）所作。なすところにて、身のたちふるまひのこと

は義に屬し、懺は禮に屬し、欲は智に屬する也、これこゝろの道理ならずや。

○或翁曰。世の人神佛に詣て稱ふるを聞ば、諸願成就といふ。其願は家内安全息災延命商賣繁昌と、惡事災難なきやうにの祈りなり。是尤成願ひ也、願ふ通りは身になし行ふもの也、されば願ひさへすれば、直に成就する事疑ひなし。若口にいひ心に思ふばかりを、願かけたりと心得ては大きに違ふ也、信實の願といふは、身の（ほ）所作にありと明らめ知るべし。故に主人氣隨氣まゝに無理をして、我意をふるまへば、家内混亂の願直に成就する也。大酒大食淫亂なれば、不息災短命の願成就なり。手をつくねて遊び居れば、忽遊びの願成就し、商賣なく貧窮疑ひなし、無理をいひ無理すれば、惡事の願成就す、不愼にて人にむごくつらければ、災難の願成就する也、故に又上をうやまひ忠孝實義に、夫婦兄弟睦じきは、家内安全の願なり、不養生せず心をけがしいためず身をつとむるは、息災延命の願なり、賣さき買先を主人父母のごとく大切に思ひ、賣買正直に叮嚀なるは、商賣繁昌の願なり、御法度をかたく守り柔和にして我をたてず、人をあなどらず、人と爭はず、慈悲深く了簡強く、萬に我かしこしと思はぬは、惡事災難

は小に滿つ、廣狹巨細來るに任せてたゝゆれども盈欠なし、これ妙なるにあらずや。明德は心の妙とは、中の妙は未發を主として說也、明德の妙は應用を主として說なり、故に其體は虛にして見るべからずといへども、其用靈明不測にして、萬事に應じて滯りなきは、則不顯の靈衆理を具へしにより、微妙にして自由自在なるにあらずや。然れども畢竟は體用一源顯微無ㇾ隔。仁義禮智は心の道理とは譬は心は水のごとし。其本體名づくべからざる所、一毫の不善なき故に、其所を性善といふ。水には定まる形なきは虛に似たり、其水何事何物にても、來るまゝによく應ずるは靈明のごとし、物其應ずるに動かされぬ道理あり、水は水にして火にあらず、木にあらず、土金にあらざるは仁のごとし。人は人にして私なきを仁といふ故に、仁は人なりとも。亦仁は人の心也とものたまへり。扨其水少しにても高きかたへはのぼらず、少しにても卑かたにつきて流るゝなり、これを禮といふ。其水流るべきかたを知るこれを智といふ、流るべきかたへ流るゝこれを義といふ、此道理違はぬを信といふ也。心は樣々に働けども、本心の動は此四ッの外なし、喜怒愛懼哀惡欲の七情則此四ッのはたらきなり。喜愛哀は仁に屬し、怒惡

（に）充塞。みちふさがること。

かさるべし。

答。言語道斷のことなれども、やむことを得ず所望にまかせていはゞ、先水を以て譬ふべし、性の德は水の無味にして、いさゝか何ともなきが如し、これを仁といふ。浩然の氣は理氣全をいふことは、是を譬ば此時は氣は水のごとし、氣とは形氣なり、形氣とは人の身なり、此身則水のごとし、水には水の道理ありて、水と道理とは離れぬものなり、人の身も同じ事也、故に中庸には道はしばらくも離るべからずとあり、此浩然の氣は義と道とに配合すとあり、道とは全體の道理にして仁也、義は仁の制なり、此水の通なる時を浩然の氣とはいふ也。これ天地（に）充塞の氣にして、則天と身と二體に成たる也、性は則天也水なり、此身も水になりたれば、則天なるにあらずや、中は性の妙とは、中も性のかへ名にて則水なり。たとへば大湖水の中へ籠を漬て其籠の中の水を見よ、これ人の性のごとし、其籠を從横自在にふりまはしても、籠の中の水はいつも何方へも倚らず偏滿してあるは、未發の中のごとし。故に種々の器物を以て外よりこれを汲とるに、悉く應じて過不及なし、圓には圓に應じ、方には方に應じて、長は長にしたがひ、小

(は)中。中庸とか執中とかの中をいふ。

答。克己復禮は、人もと無理は少しも生れつかず不爲はずと、得心したるがごとし。これを腫物の療治に喩ば、膿血をぬきさるがごとし。これは治する度毎に、それだけ〳〵の惡血減るに似たり。克伐怨欲を抑て行なはぬは、無理が爲たけれども、無理をしては世間がすまぬゆゑ、してはならぬと心得て、おさへつけるがごとし。これは腫物の療治にたとへば、散ぐすりをぬりたるがごとし、かくのごとくすれば治する度ごとに惡血内に滯るなり、後々ほど人欲制しがたかるべし故に難しとの給ふなるべし。又譬ば釜に湯をわかし、釜の蓋飛あがる時、釜の下の火を取ば、蓋自ら鎭るは克己のごとし。又釜の下の火を隨分もやしながら、蓋を抑へてゐるは、克伐を行はぬに似たり、また難からずや。克己は理を明らめて、理を以て私の氣にかつ也。克伐を行はぬは理を明らめねども、理は知るゆゑ私意を以て私氣を抑ゆる也。

○問。翁曾て曰。仁は性の德、浩然の氣は、理氣全の稱、(は)中は性の妙、明德は心の妙、仁義禮智は心の道理、右論孟中庸大學の敎、其名異にして理無別なる譯は聞えたり。前五ケ條の差別、初學の人も聞えやすきやうに、譬を以ていひき

れば、何事も和合して睦じかるべし。然れども其堪忍がなりがたし、いかゞ心得候はゞ堪忍なるべきや。

答。堪忍するは重き事なれば、必定といふにはあらず、まづは誰にても人に對し、何事によらずいひぶん出來る時、唯身に立かへりて、我が惡き故といふ事を眞實に辨へなば、いか樣の事も堪忍しやすく、いひぶんは出來まじきか、此我がわるきといふ事は、諸人常に口にはいひやすけれども、眞底より萬事我があしきと知ること甚かたし。予近き頃此事を感得いたしたる故、かくいふ也。それをいかにといふに、これ心得違あり。孟子に、自反而忠矣。其橫逆由是也。君子曰、此亦妄人也已矣。如レ此則與二禽獸一奚擇哉となり。此語は、孟子の如き賢聖の御身の上の事也、我らごときは、隨分麁略なしと思へども、大かた麁略なく盡したることは、あるまじきと思ひあたれり。然れば何事にても、少しも不足恨の心をもたず、心につゝしみて人に強てさからはず、身に立かへり改め盡したきものとおもふなり。

○或問。克己復禮と、克伐怨欲を行はぬとの違ひは如何。

らじと思ひ渡るさへ危きに、目を閉てはいかゞと思へど、不仁者の心は目をあけては、色々の毒蛇虎狼、千仭の谷ふかきなど見へては畏し面倒也、故に目をふさいで渡る程安はなしと思ふ也。世に氣隨氣まゝほどおそろしきものはなきに、足の下の災難を見ぬ顔して渡るは、これ危きを安しとするにあらずや。扨菑を利とするとは、劒を懐中し、はんみやうを食ひ、狼にざれあひ、己が手を折、足を抜がごとくに似たる大酒大食淫亂を爲利と思ひ、人の事はかまはず、身勝手の無理をし、無理をいひがち也と、それをよき事にして、爲利とする也。心脾腎を損じ、人の怒悪にて身の害を招ぎて、夫を利じや／＼と思ひ、樂みの至極とするは、まことに亡ぶる謂をたのしむともいふべし。

仁者は目を開くは、道心あきらかにして、萬事を愼に喩ふ。不仁者は目を塞ぐとは、人これに道心を明めよといふに、いやがりてうけつけぬ也、其いわれはもし道心明らかになりなば、惣じて悪しきがみえて恐しくならば、悪事がしにくうなるべしと、思ふにたとふ也。

○或問。人に對し遺恨、又は不足など出來るは、堪忍せざる故也。堪忍さへす

るをみて知るべし。此天君の令に悉くしたがふはかたかるべけれど、道に志しゝ有難さは、身分だけの力を盡せば、天君あはれみてうけ給ふ惠ぞ有がたし〳〵。君親へ事へさへよければ、夫婦兄弟朋友世間の交り、家業職分等に麁略不沙汰はなきものなり。人の世に住む、人事を盡す外に善あらんや、善は吉のいはれとかや、吉慶を願はゞ、善にすゝむにはしかず。

○或問。孟子曰。不仁者可二與言一哉。安二其危一而利二其菑一、樂二其所一以レ亡者一、不仁而可二與言一、則何亡レ國敗レ家之有。

右の語をたれ人も心やすく、聞え易きやうに説聞さるべし。

答。此本文の言は、道に志なき者は、道の言を以て語るべからず、其ゆゑいかなれば、其志皆仁者のうらなれば也。仁者は曾子のごとく戰々兢々として、世の中を渡るを愼む事、偏に丸木橋を渡るがごとく思へり。兼好のうたに、

世の中を渡りくらべて今ぞしる、阿波の鳴戸に波風もなし。

然るを不仁者は、其おそろしき丸木橋を、目を閉て渡りゆくを悦ぶなり。其悦ぶは心安しと思へる也、仁者の心よりいへば、目を開て見つめて、少しも脇目をふ

（い）妻類。しもべのものゝこと。

（ろ）泰然。やすらかなこと。

かりかり。實にや仰ぎても事もおろかや、かゝる世に住る民とて豐なるは、今日の有難き農工商皆其業を盡し、上は先祖父母につかふるに似たり、下は妻子（い）從類までも養ひあはれむにみち〳〵たり、皆たまものをいたゞくにあらざるなし仰とも及ばし俯して思ふゝもつくすまじ、君の惠ぞ有がたき〳〵、恐ながら常々御冥加を忘るまじ〳〵、めでたし〳〵。右によりてつら〳〵思へば、又我一身も世界也、かゝる有がたき時にあひ、聖敎のはしをもきゝ、此身も則天地成事を知れり。故に及ばずながら、一身の無事をねがひ、本心のあるじ天君の令に背かじと愼む意に成し事、御恩の上の御恩、先祖父母積善の恩、師恩、其外諸恩多かることはかりしられず、此仕合はなみの事にはあらじ、諸の御蔭にて大きなる過なきは、身分相應の四海なみ靜とやせん。枝をならさぬとは、手足をきまゝにせざるなり、相生の松とは心身常をたもついはれか、主君を主君とし、父母を父母として、忠孝を盡したしと思ふ、及ばねどもかゝる志に成しこそめでたかりけれ。是は仰ぎても猶餘りあれば、かゝる世に住る民とてゆたか成とは、かやうの身に成しことゝなるべし。君の惠とは百體令にしたがふて、天君（ろ）泰然たりとあ

に成也、唯親の心に打まかせてつかふるが、つかはれて世を渡るといふもの也、主人へ事るも此方より忠義たては、家來より主人をつかふに成也。只主人の心に任せ身を忘れて、大切と思ふばかりにて麁略なきが、つかはれて世を渡るといふもの也。さればとて、うつそりと主人親次第、如何樣なる爲あしき事ありても、主親の心にまかせてもよきなどゝ思はゞ、是卽わたくしのはからひと知るべし。前の如く眞實に向ひ來る儘に任せ、私のさしはからひさへせねば、氣遣ひなしに本心に味能、上加減に智惠が生れ付いる也、是を天命の性といふ也。此智の中に仁も義も禮も信も含むゆゑ、むごき事もなく、あなどる事もなく、いつはりもなくさばくなり、夫婦も兄弟も朋友も、賣も買も遊ぶも働くも、皆是を推して知らるべし。事繁ければ、只大略をしるすのみ。

○或人正月の謠初によりてかく思ひつゞけける。四海波靜にて國も治る時津風とは、有がたくも今の時をや申べき、一天四海御靜謐にて、下々迄何の不足なく悅びくらせば、是なん枝をならさぬ御代なれや成べし。あひに相生の松こそとは、高きもひくきもおしなべて、惠みにさかえ、つきせぬ齡ひをことほぎて、めでた

見給へ、一ツも此方のはからひ力を用ひる事はいらぬもの也。唯物の打向ひ來る通り、其來りたる物まかせにして、此方の身をそれ成に、それ〲につかはれてゐれば、忠孝は本より夫婦兄弟朋友の交り、日用の萬事萬端まで、少しも間違ひは出來ぬもの也。微塵もその間へ、此方の身より私といふ勝手づくの、さしはからひが出るやいな、大きに間違がいでくる也。人にても物にても、あれはいや是が望の、彼はきらひ是がすきのといふは、皆大かた身勝手よりの物好也、それゆゑ物事思ふ樣に行がたく苦しむ也、是苦をつかふといふもの也。思はしうゆかぬは向ひ來る物の理と、此方の向ふ知と背けて、ひつたりと一ツにならぬゆゑあんばいわるし、向ひ來る物次第にして、それに身をまかせぬれば、物の理と人の知と合體して、一ツに成るゆゑ快く苦なし。

　かれはさぞつかふとこそは思ふらめ、つかはれて世をわたる猿引。

此うたを能々味ふべし。つかふと思へば直に苦をつかふ也、つかふと思ふはあやまり也、つかはれてくらさねばならぬ此世也、前にいふ如く世界はつかはれてこそ、世はめでたう渡るべけれ、其つかはるゝとは、孝行だては子より親をつかふ

うに違めあるなり。

箒にて拂ふは、箒元來塵をつかねたるものなるに、其塵を以て塵を拂ふ故、ひたと塵たへず。是は私知の箒にて、色々の難行苦行して、助け長ぜしむるとの給ふ所也。

又曰。團扇にてあほぐは、萬事身の勝手はせぬか、本心に背はせぬかと、たゞ一途にて他事なし、甚無造作なり。扨常々見るも、きくも、いふも、動くも、一々我がみるにあらず、我が動くにはあらずと、我なきことを極めゐるが、障子のさゝらぬやうにしてゐるがごとし。

巻中

○或問。諺に人をつかへば苦をつかふといふ事あり、人をつかふは男女ともに心身のたすけとせんが爲ならず、それに苦をつかふとはいか成事ぞ。

答。惣じて人にかぎらず萬物とも、此方よりつかふ時は、却て其物につかはるゝゆゑ、小人は物のために役せらるゝと云也。各本心を知りて萬物に對ひたる處を

（コ）克己復禮。おのれにかつて禮にかへると云ふこと

具へたり、土は和にして虚は敬也、又和は仁也、敬は禮義なり。故に其身は至極物やはらかにして、心にしまりある時は、自ら慈愛あつく禮義も正しかるべし。かくのごとくならば、行はれざる所もなく、行はれざることもなし、萬事柔和にて、其分際を守り、身のほどを辨へて亂れず、かたからずば、誰かこれを厭ふものあらんや。語曰、禮之用和爲ㇾ貴。先王之道斯爲ㇾ美。小大由ㇾ之。有ㇾ所ㇾ不ㇾ行。知ㇾ和而和。不ㇾ以ㇾ禮節ㇾ之。亦不ㇾ可ㇾ行也。

○問　新き箒を以て、座しきを掃除すれば、其箒の中よりひたと塵埃出て、却て座敷塵たへず。其時はいかゞして、きれいに掃除すべきや。

答。其時ば座しきの障子をあけはなして、自然の風まかせにして置べし。若風も思ふやうに吹ずば、扇子か團扇かにてあほぐべし。

右箒にて掃、たとへば克伐怨欲を行はぬに似たり、團扇にてあほぐ、たとへば（コ）克己復禮に近し、座敷の障子をあけはなすは、敬するのたとへ也。佛氏にていふ時は、箒のたとへは神秀のごとし、障子あけるは六祖のごとし、團扇をつかふは、志を起すがごとし、箒にてはくと團扇にてあほぐとは、志の立や

（ク）黄精地黄。薬になる草の名。

（ケ）戯論。たわむれのろん。

○或翁五段かへりのからくり人形を指ざし示して曰、若き衆此人形は何でかやうに能働き候や。衆曰、これは内に水かねを入たる故なり。翁曰、さればこれを以て各の身の、自由自在にはたらくも同じく水かねなり、されば世間の人を見て思ひやり給へ、大かた水と金銀がへるといなや、此身忽動かれぬやうになる也。又これをあしく心得て、腎水をますことを貪り、（ク）黄精地黄山薬の類を常食とし、かすてらを菓子にして、杞枸の茶をのむものは、水ますこと度に過て、大きに陽火を起し、婬亂の病ひものとなり、又貨殖をよしとして貪り、弱きをいため、強きをだまし、こけては拾ひ、起きてはつかむを常産とし、虎の皮の犢鼻を質にとり、はんみやうの買込するものは、金銀のつもり、多分法に越え甚驕奢を生じ、放蕩無慙の狂氣となる。以上の二ツは共に身をたもつことあたはず、へたばり亡ぶるなり。されば多きも天命に違ひてはあしく、況へらすをや、たゞ身分相應に天よりあたへ給はりし、其水かねを守りて減さゞるにはしかずと、いふことを知るべきなり。然れどもこれは畢竟座興（ケ）戯論なるが、實に生人形の水かねからくりといふは、此身は土也、土は則水をふくめり、心は虚にして金徳を

ゆる、是は格別の間がらゆゑ、隔なくいふなりといへば、義理にせまりてかたじけなしといへど、心の内にはいはれぬ御せわなどゝ、うれしき處は一向なく、少し腹たちぎみなるは、實に本心をしらぬゆゑ、本心のへごみて見ぐるしきが見へぬによりて成べし。髪のわげ、羽織の帶にかゝりしを、人直し正してくれずとて身の害と成程の事あるべしとも思はれず。心のひづみを人いさめ正しくれられば大きに悦びて改むべき事也。然るをあやまりて諫をきかずば、忽身に耻を受べき也。甚しうしては家を失ひ、身をも亡すに至るべし。故に我が石田先生是をいたみて、門人に先本心無事の姿を知らせて、本心をへごます事を恐れしむ。是によりて學者本心を知りたる御かげにて、ゆがむ事を恐るといへども、何分力よわきゆゑ、馴染し人欲のおひやすく、心の諫を聞受る事難し。誠に子路は過を聞事を悦び給ひしとあり、是學者のよき手本也。又古語に我好をいふものは我賊也、我が惡をいふものは我師也といへり。

甘き毒くはせてくるゝ人はあだ、後腹いたき時ぞうらめし。

我ゆがみ直すいたさはにくけれど、あとの樂さに師とぞたふとぶ。

の給ひしにあらずや。誠なきときは物なし、人は仁也、されば人は仁なるが誠なり。故に君子は人の道を全く盡して死するゆゑ、其死を終といふ也。小人は道にくらく、只生を貪り身命のつくるを哀しむゆゑ、末期を死といふなり。君子仁に違ふて生ることを願はざる譯をかたるべし、今こゝに病人ありて、必死に極りし時、非道の一術を行ひ無理に活したりしが、彼病人病は平癒に似て活々壯健に成しが、少しも物覺えなく、狂氣のやうにもなけれども、爲成こと皆人の用にたゝず、やくたいもなきものならば、一命をとりとめたりとて、悅ぶべきや、又何とも難義なる人間なりと思ふべきや。これを以て考へ給ふべし、仁にたがふて活たる人は、君子より見れば、かやうのものゆゑ、君子は身を殺して仁を成すなり。

○世の人行き逢ふ時、立かへりて御髮のわげゆがみたると、手をのべて直しくれば、扨もやさしき志かなと思ひ、悅ばしく厚く一禮をいふ也、是身のかたちは實に知りて、よしあし見ぐるしきをたしかに辨へたるゆゑ也。若こゝに人ありて、其友に、其元は父母樣の御呼なさるゝ時、御返事今少し、かどあるやうに聞

はぬを、善を選とも惟精ともいふ也。右は止事を得ず大略を云也、此味無といふ事、本心を知らぬ人へは云聞せがたし、若錯て味ひなしと思はゞ、それははや味ひなり、人々知りたる本心則道心なり、道心則中也。自己に返照して考へ給ふべし。

○或人問。語曰。民之於レ仁也。甚ニ於水火一、水火吾見ニ蹈而死者一矣。未レ見ニ蹈レ仁而死者一也。とあり、然るに又志士仁人無ニ求レ生以害一レ仁。有ニ殺レ身以成一レ仁。とあり、此語を以て見れば、正しくこれ仁も蹈で死するにあらずや。

答。人の生命は即仁也、水火は人の（キ）軀命を續助る外物なり、故に仁はしばらくも離れぬもの也。水火は外物なる故、人これを踏ば死する也、何ぞ水火のみに限らんや。身命を助るものいづれも用ひやうあしければ、皆人の生命を殺す也、唯仁のみ踏行ふて生命を全うす。故に生を求めず身を殺すとあるなり、これを以て考へ見るべし。死すべき時節に違ふて身を殺さゞれば、天理の本心を破りて、天命といふ眞實の生命全からずして、たとひ身活のがれたりとも、心内安穏なるべからず。汝水火のみ身を殺すと思へりや、人皆死あり、信なくばたゝずとも

（キ）軀命。からだといのちのこと。

（カ）顔淵篇。論語の章の名。

（カノ二）孫。遜字にて、退遜のこと。

あらはるゝなり、こゝに於て委曲文章行はるゝなり。朱註に忠信を質とすとあるは、これ學ぶ上にて示し給ふ也。忠信は既にあらはれたるうへにて説給へり。

敢て問。翁は仁を質といへり、然るに衞靈公篇には、義以質とするとあり、此違ひいかん。

答。既に（カ）顔淵篇には、子張達を問ふの御答には、質直にして義を好との給へり、これ義の前に質を説給ふは、敬以直レ内する也、直レ内する時はよく仁を存するなり。君子義以爲レ質。禮以行（カノ二）孫以出之。信以成レ之と説給ふ所は、既に事にあらはれて以後の説なり、素より後の説の質素は不顯の所なり、忠信を質とするは、早白紙に水にても引紙に地をしたるがごとし。

○問。中庸序。人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執ニ厥中一。右執ニ厥中一とは如何執可レ申哉、御示し承度候。

答。本心を知りて見れば、我性は少しも味ひなし、常に心に少も味ひなきまゝにて居るを、中を執といふ也、是其所を指て惟一とも固く執ともいふなり。惟精とは人心の欲にひかれ易故、人欲にひかれはせぬかと、委く吟味して人欲をせずい

受用に甚便ありと思へり、愼みて用ひ給へかし。

○問。内外ともに養ふといふはいかん。

答。本心を知りても、磨ざれば心鏡くもるなり。故に物に向ひては、我なき事をひたゝ常々感心し、悦ぶは内を守るなり。感心する時外物に蔽れ、しばらく去る也、それゆゑ間斷なく感ずべし。本心明らかなれば是非邪正わかれやすし、然れども、外言行をあやまれば心鏡に疵がつくゆゑ、外を能勉べし、言を出さば心内に立かへりみて、いふまじき言ではないか。又身の勝手はいはぬか、後にきのどくにはないか、きみが惡うはないかと吟味し、心のいたまぬ處をいふべし。行も右に同じ、心の内にたづねて耻かしくいたまぬ處を行ふべし、かくの如くせざれば、切角心德の明鏡を磨ても、いろ〳〵疵つきゆがみなどして鏡の用にたゝずさるによりて内外とも正しく養ふ事なり、能々思ひみるべし。疵は何ほど磨てもとれずおちぬもの也、ゆがみは猶以てみがきても直らぬ也。

○問。繪のことは素より後にすとあり、其素とは何をさしての給ふや。

答。道の全體にていふ時は、仁を素とし質とせり、公平にして私なきときは節文

事を知るべき也。

○問。大學に、心こゝにあらざれば、見れどもみへずと、其心あるとは、いかやうにいたしゐるをいふや。

答。もしあやまりて、心を別に存せんと思ひ、或は主一にならんとし、又放心せしなどとせば是皆放心也、本心は元來天なり、外へにぐるものにあらず、只忘れたるが如し。かくの如く常にそれなりで暮すを、敬するとも放心を求るともいふ也。

問。我ら如きは、それなりにしてくらさば、放心に成まじきや。

答。いな然らず、こゝをよく聞れよ、それなりにして暮すそといふは心願也、是を志といふなり。此心願に願はなけれども、心願の通はするもの也、この心願を立給へといふ事也、内に此心願あれば、たとへば人と物語してゐる時、何ぞ外の事を思ひ出せば、いや是はうか／＼すると思ひかへして、又物語ばかりしてゐる也。かやうにするを、朱子は心を（オ）喚醒するとの給ひしなり、心の外へちるは、ねむりのきざすやうなるもの也、ひたとよびおこせと示し給ひたり、此心持

（オ）喚醒。よびさますこと。

右のかどはいかやう成をいふや。

答。まるきは混然たる一理にして仁也、義は方正にして角なり、仁禮智信此角を以て行はる、天の四氣流行するも、秋の義氣有を以てなり、天のめぐる全體左旋なれども、日月五星は右旋してさかふも、是角あるが如し。惣じて陽は圓く陰は方也、天はまるく地は方也、物皆まるきのみにては通用出來ぬものなり。禮の用は和を貴とし、禮を以て節するとの給ふも、節が角あるが如し、禮よりいふ時は和用となれども、和は混然として即仁也、ゆゑに和を以ていふ時は、禮用と成也、體用互にして行はるゝを以ても考へ知るべし。又惣じてものゝ全體は皆圓き物なり、書を知らんと思はゝ、遙に遠く隔りたる處の物を見て知るべし、角なるものにても人馬にても、しよつぼりと圓くみゆる也。扨其圓きやうなるもの、日月星土地名玉の如きものにても、眞まるといふものなし、日輪は火焔也、月は水の露の大きにしていぶ〳〵したるが如し、玉も滑に見ゆれども、明らか成目にてみるならば、少しづゝは角あるべし、目の及ばぬ物は、其大體を見るゆゑ皆圓きが如し、方圓即陰陽也、何事も陰陽にもるゝ事なきゆゑ、角なくては調はぬといふ

(エ)書。書經といへる本の名、句は泰誓の中の語。

天のみなりと知る學者は此理をあきらめて、常々此地に復らんと克己の功夫を用ゆ、これを實に道を學ぶとはいふなり。天のみの理を知る時は、山のあなたの小咄に限らず、何もかも疑ひ晴るなり。今汝の様々疑ひあるは、芥子ほどの腹の中に、埃ほどの眼を見張て、廣大なる三千世界を外にみて、彼ちいさい腹の中に、色々の私智をふるひ、事理無擇者なる所より、目にて見耳にてきくといふ分別を離さず、爲に耳なしにきくと説なとゝ、人の了簡も知らずして、獨相撲となるやうに、色々の御世話、其元は扨々賢き人哉、其かしこきが實にあらざる故、不審だらけになるなり。汝も我と賢きと思はるべきが、眞實賢きといふは、物の道理わかるを以て賢きとはする也、能々考へ見給へかし。(エ)書曰。天視自二我民一視。天聽自二我民一聽。

○或問。西明寺時頼殿より給ひしよし、

　角あれはものゝかゝりてむつかしや、心よ心まろ／＼とせよ。

隆覺禪師の返歌に、

　おのづから角ひとつあれハ心、餘りまろきはころび安きぞ。

（ウ）舊染。ふるくしみたること。

却而汝に問ふ。汝は偏に此肉身の耳にてきく眼にて見るとのみ想へり、今こゝに眼をひらきながら死したる人あらんに、それは耳目あればよく見、よく聞と思ふべきや汝もさは思ふまじ。又活々したる人も其障眼といふ病あるものは、皆目見えず、かな聾は耳ありながらきかず、又耳目病なくてもみえずきこえぬものあり、習はぬ事は無筆なればよめず、我がごときものに音樂を聞せてくれても、何が泰平樂やら青海波やら聞えず、ぶう／＼となるばかりなり。無筆もよめはせねども何やら書ちらしたりとは思ふなり、されど事はわからず、こゝを以て人は道を學ぶべき事也。汝も早く心學をして、本心を知るべし、本心を知らぬゆゑかやうの不審晴ぬなり、汝も無筆の字がよめず、習はぬ藝の合點がゆかぬと同しものにて耳目あきながら通用ならず、心ありながら道理わからぬは、習ひて本心の光をくらませし病あるゆゑ、今また學びて（ウ）舊染の惡習をさるべし。本心の光さへあらはるれば、かやうのことはいはずして分明なるべし、事も習はぬ事はわからず理は一心を明めざればわかれず、故に文字言句の學問にては、肝要大道天理のうへはさばけぬと決定すべし。一度本心を知りて見れば、元來意必固我はなし、唯

やすめたく奉存候。

答。此不審事理の二ツわかれざるによつて疑ひ出る也。本心を知らざる人は、毎々かやうの不審あり。其差別を語るべし、論語に知るを知るとし、不レ知を不レ知とするとの給ひしは、事の上にての給ひしものなれば、是を事といふ。又我は意もなく、必もなく、固もなく、我もなしとの給ひし也。是を理といふ。

右無下意必固我上の語にて考へ見給へ。孔子は耳目なきのみにあらず、意もなく、我もなし、我は則身なり。身なければ耳目は勿論なし、孔子は則天也。三千世界孔子の御身にあらざる所なし、故に仁者は天地萬物を以て一體とするとはいふなり

又ねむりさましに、

目にきゝて耳にてものを見る人は、萬の事に迷はざりけり。

これも耳がなければ、こゝからもきくといひしと同じ言なり、此言は則易の艮卦の言をかなにしかへしもの也。艮二其背一不レ獲二其身一行二其庭一不レ見二其人一无レ咎とあり。此語も理を説示したるものなり、其人をえずとは、背には目はなし、眼なくして見れば、私なきゆゑ咎なきなり。偏に見ずといふことにはあらず。

○問。ねむりさましと云書物を見侍べりしに、歌に
唐士の山のあなたの小咄を、耳がなければ爰からもきく。
此うたに不審あり、聖人知るを知るとせよ、知らざるを不レ知とせよと曰。理に於てすます、唐士は姑く置、纔家一軒隣でいふ言さへ不レ得レ聞、きこえぬことは聞えずといふこそ正直なるべけれ、人をまどはす言を歌に詠、何の利益かあらん。かくいはば汝は是は目にて見、耳にて聞といふ分別を、はなす歌なりと云べきが。此目にて見、耳にて聞より外の物が見聞ことなし、心が見聞するといふとも。耳なくは聞えまじ、目なくて萬を見分る事なるまじ。然れば唐士の咄をこゝに聞と云道理決してなし、無ことを有やうに云なして、人を不審がらすは、聖人の道とは云れまじ。汝は常に儒佛同一と云故かく問ふ事なりしかし、實に聞ゆるならば、聞ゆる譯を申さるべし。

右の如く問時、我得心致したる通りを答んとすれども、口がむちやつきて思ふ通りがいはれず、此歌の意味のいはれざるは、實に得ぬと云ものか、愚に代りて此者の得心いたすやうに、御答御聞せ下さるべし。御答を拝見仕候て、心を

（ア）會輔。友を會して仁をたすくること。

（イ）不肖。親に似ぬおろかものと自分を卑下（ひげ）云たることば。

答、されば知音同志なればこそ、しらずといふや、しらずといはれぬ事を無理にいふことは無用なり、然れども強ていはゞ、體用一源顯微無レ隔とあるにあらずやあらはれぬ所も、もとより體といふものにてやあらん、其所に用はなければ、それを初心の學者に、無理に覺えさせいでも、くるしからぬ事と思ひ、予は其沙汰に及ばねども、若輩の朋友達も度々（ア）會輔の席かさなれば、いつの間にやら功者になりて、それは體の、それは用のと、體用さばきが上手に成て、目にも見へねば、知るにもしられぬものを、よく知り覺へて、我が心體は死なぬ虚空に充滿して、火にもやけず、水にも溺れず、變滅なしなどゝ、眼をいからして目なしなりといひあらそふ。予は何とぞ古先生御きらひの此目を、つぶしたしと思ひ願ひてさへ、つぶれかねる目に、ひたものにめぐりさして見えることを、好がうるさく思ひて、初心に體の沙汰するをきらふなり。さすれば又用に泥む友が多く出來る也。いづれにかたよらずにはいられぬは、むかしより學者の通病ときゝ及べり然ればその所は力及ばずせんかたなし、それは（イ）不肖ながら、おもひ付の通りをかたる迄なり。

○或心友某氏問、足下の說をきゝしものに、本心はいかゞ心得られしといへば、其返答向ひ來るものを本心と思へるに似たり。ゆゑにそれは心の用といふものなり。汝が本心の體はいかゞ心得しとかさねてとひしに、こまりて甚迷惑せり、是を以て見れば、足下は本心の用を體と敎へらるゝやいかん。

答、それはいふに及はず、予は兼てしらるゝごとく、いたりて不肖なるものなれども、一切みぢんにても顯れたるものは、皆心の用也と說きかせり。去ながら初學の學者は、先は用を背かぬやうを肝要と思ひ、孝弟のために來るもの向ふまゝにしたがひ、身に立かへりて心内に私なく、身勝手なきやうにつとめ給へと、若年の朋友中へたのみ入事なり。

又問、然らば足下は本心の體いかゞ。

答、予一體はしらず、却て問、足下の本心實體いかん。某氏曰。もとより言句に及ばぬは、足下も知れることなり。これは同志の間故所存をのぶるまでなり、實體は虛空と共に法界に偏滿せり、又上天の載至哉とあり、足下も知音同志のことなれば、我がごとく具に所存をかたらるべし。

爲學玉箒後篇

手島堵庵先生著

巻上

○或問。明二明德一新レ民止二至善一といふ事、此三ツ何を以て如此ならざれば、學成就せずとするや。

答、學は仁に復るのみ、仁は人のまゝにて天理混一と成にあり。我明二明德一斗にては混然にあらず、たとへば一身を以ていはゞ、首は我が如し身體は世界の如し全體疾痛するに、我一人明德なるは、首ばかりいたみをのがれたるが如し、世界不殘明に成て後惣身安かるべし。それも至善に止まりて、至極の全快に至らざれば、混然には成がたし、一應の快氣にてはまたいたみ、時々いたみては、本然にならぬゆゑ、至善にとゞまりて、微塵もいたみなく、又おこらず、本腹して見よ其時は全身を忘るべし。是ぞ混然たる一理に成たるもの歟。

文化元年戊辰秋九月

門人　土州川田躬平越智沇親

謹識于淇水樓塾中

玉箒後篇序

偉哉一氣動て道之名あり。洋々乎高極于天得之於天人心之固有に根ざす。蓋し人唯天なることを知て。我性なる事をしらず。我性また天に出て天と一つなるをしらす、一なるをしつて一も亦守らざるべき歟。唯至一之理日々に新なるへし。新なれは則ち邪穢を蕩滌し。査滓それ消融し、終始惟一にして日新之功於是而得矣。古曰。玉不琢不成器。人不學不知道。故に爲學之要は。敬以直内。義以方外。時々省察する時は。察于内。然して心之適く處の者正しく無他岐之惑矣。惟知心明性を以て急とし。勉強して不息則存養之功熟し。適として天理之流行にあらざる事なきに至て。日用之間心思動作また毫髮之隙漏なからむ。一日此書成焉。先生夙に起釁階示して曰。務旃乎。務旃乎。見於事爲之迹、言語之表者道德之符也。故に言近ふして意遠きものは。石門之學只爲然。咨二三子卑近なりとして可忽之乎。曰洸不敏なりといへども。請以此告戒必期待せむ。至誠懇惻念々可忘乎。故に拳々服膺之餘り。卷端に贅して以爲序。

爲學玉箒跋

先是我杖三卷、塵斗三卷、二部與刻于家塾、今又次之以玉箒三卷也。蓋採子爲以古人之格言全產業之一助而集成於嘉言善行以備于日用之間掃除於心身之塵埃以復天性之意矣。有客詰曰。吾子既刻杖箕帚三書以授于子弟尚復加之以抹布澡豆帒不亦善哉。余對曰。善哉客言也。詩曰。如切如磨如琢如磋。其此之謂歟。客默而退。肆記其事以爲跋。

男上河正揚拜識

強き者が來て弱き我をせぶらかさうかと思ふ心遣ひもなし、言たてゝ見るに、何を一ッ不足のいふべきなし。かゝるめでたき御代に生れ出で、己が本心を知り、樂にならざるは、いかさまにも、損とも何ともいはんかたなく、愚なること也と思へり。此趣は具に齊家論に見えたり、故に其大略をしるす。恐れ多きことなれども、人として此太平の御高恩を思はずばあるべからず。是を報じ奉ることは、及ぶべくもあらねば、せめて自己の本心をよく知り、是をあきらかにして、身をつゝしみ、貪らず、怒らず、奢らずして、太平の御惠を悅び樂しみくらさば、少しく先生の遺風を、學ぶともいふべき歟。

爲學玉箒終

望なきゆゑ、安樂に世を渡るなり、翁も此第一の悦を知るやいかん。

答、此第一の悦びとする事は、我等ごときの中々知るべき所にあらざれども、我が先生前かたのたまひけるは、我天下の御靜謐に太平なるを、悦び樂しむの外他事なしと仰られしを聞て感心し、則是第一の悦びなる事を知れり。實に先生の身の行ひ給ふ事、仰られし言に違はず、外にいさゝかも求めなく見えたまへり。我等ごときは、此地位を學ぶ事なり、然れば天下太平の、

御代に、逢ふ事を有難思ひ、第一の悦びとするときは、何か不足の事あらんや治に亂を忘れずとかや、亂世の哀しき事を、能々思ひ見るべし。今此座席にある衆中は、先生の敎に隨ひ、人の人たる性に率ふの道を知り、人の身の上に於て、我が性を知るより上の、至極の悦びといふはなし。是とても太平の御代に生れ逢ひたればこそ、不思議の師を得て性を知り、此身此まゝにて足事をば知れり。夜は枕を高うして寐ね、朝に目さむれば、何の思ひもなく心靜に父母に事へ、おのれ〳〵が家業を精に入營さへすれば、衣食住は不足なく、湧出て樂々とくらされ手透の折は月花をも、心のまゝに見たければ、詠て吟行、本より盜賊の憂もなく

（ゐ）い。ゐ、居の字に見るべし。

望まば、これをかふべきや、いかんぞこれをかへん、其かへざるは眞金の寶は重うして、玩好の土の輕きを實知これを照せばなり。盤珪和尙の曰。不生の佛心を、餓鬼、畜生、修羅にしかへなとあるは、甚親切のをしへなり。人々本分の明德と百金と何れか重き、然るを金にさへかへぬものを、土細工のために、明德をかへものにするは、餘饒慙愧の事にあらずや。御用心あれ、必々化され給ふな。

或狂歌に、

西行も牛もおやまも何もかも、つちの化たる（ゐ）いなり海道。

扨翁は、口から先へ生れたと乳母が申たが、さやうかして、何事でもいふ事がさきになりて、行ひは後からも行ぬ、これはどふ生れたやら、聞のこしてわけが知れませぬ。誠に口は重寶いひやすけれども、此所眞實の行ひがたし、恐るべし愼むべし。さらば〳〵皆樣御精御出しなされ、我は老足じや、そろ〳〵跡から御供申さうとて　繩床よりくだる。

○或問て曰、性を知るを以て悅とする事は、知れたる事なり、予は此外に第一の悅とする事あり。故に常に何にでも、此悅に勝る事なきを事て、外に少しも求め

某氏曰、太鼓の音をきゝて發明せり、其時惣身脱却して、比するに大虚空に似たり。

翁曰、善汝其時何の苦がありし、又何ものかありし。

某氏曰、すべて苦樂にかぎらず、毛頭有無を知らず。

翁曰、これ眞の大安樂體なり、これ汝が元來清淨のすがた也、他日此上に毫毛も添ることをやめよ。いかにも知る事は安く、信ずるをかたしとす。されば夫子漆雕開の信を悦びたまひ、佛氏も知惠に富たりし舍利弗も、信によりて佛位をゆるさるゝとかや。汝がために一つのたとへあり、汝大暑の時、裸體にて居ば、大虚空に似たるにあらずや、其時頭上に微塵の一物を加へば快からんか、又單衣を身へ襲ば、これ快からんかいへ〳〵。某氏曰、不是々々、たゞ裸體にしく事なし。

翁曰、これ汝が實知の所なり、常によく此實知を用ゐば、何ぞ力のたらざる事かあらん。實に知る事は必あやまる事なり、汝こゝに百金を持てあらんに、他人戲に土を以て、美女寶器奇鳥異獸種々の珍玩を作り來り、汝が百金に替んことを

體忽然とあらはるゝなり。前にいふごとく、眞體はもとより聲臭なし、まして形もなく色もなし、それが何として現はるゝぞと、不審あるべきが、本心を知るとは、別に知る事あるにあらず、我を忘るゝをいふ。我を忘れぬれば、覺えず知らぬやうなれども、物に觸れば、直に見聞動て自由をなす、又物去れば忘れたるに似たり（り）槁木死灰のごとくなるにはあらず。眞體もと名なし、强て名づけて、天理とも、太極ともいふ、これは皆後につけたる名目なり。一度此眞體を發明すれば、よく物に應じて跡なく、しかも衆理を具へて不足なし、天地に先だち、萬物に後れて、古今來變滅なく、長く生死を超過し、水に溺れず、火にやけず、鎗刀も施すべきなし、貴重の至極、萬寶の第一なり。故にたゞこれを信ずる事をしりて、他を信せぬゆゑ、力を費さずして、人の道を盡すに甚便あり、急々志を起し給ふべし。

某氏問ふ、我示敎を蒙り、前に本心の一端を發明せり、然れどもこれを信ずる志立がたし、いかんがすべき。

翁答、汝發明のところ、しばらく物に比していへ。

（り）槁木。かれたき。

かし、然れどもこれは事繁ければ略す。今汝の疑ひある所をさして少しくかたらん、聖人といへども、實に道體は說給ふことあたはず、然れども其用によりて、體をあらはし給ふ。たとへば醫の病人をうかゞふに、身を割腹の內にせんぎして病を見るにあらず、顏色脉腹などをみて、病體を知るなり。其體は見えずといへども、皆用にあらはるゝ事著し。故に聖人多くありがゝり、見えたる所を以て示し給ふ、それさへ門人何ぞ聖人の蘊奥があるやうに、疑ひしと見えて、論語子曰、二三子以レ我爲レ隱乎。吾無レ隱二乎爾一。吾無下行而不レ與二二三子一者上。是丘也とあり。又吾有レ知乎哉。無知也。有二鄙夫一問二於我一。空々如。我叩二其兩端一竭焉とものし給ひしなり、これを以て察すべし、用を離れて體なし。かくいへば體一向になきものなどゝ思ふは、至愚の人也、體といふものは見えず、量り知られぬにてこそあれ、眞體なしとはいはれず、眞體なきものに、用のあらはるゝいはれあらんや今汝が腹中をさがし見たりとも、何ありとも見えたるものはあるまじ、されども忽汝かやうの理屈をいふも、いはする眞體あるによれり、退て工夫せらるべし。

翁あまねく聽衆に諭して曰。各早く本心を知り給ふべし、本心を知れば、我が眞

じや、物に向へば見え、音がすればきく、これは彼色形もなき、我が眞體の用といふ物で働きじや、其働に付て我身も心も打忘れて、かねていふ通にして、何が見る何がきくとせんぎすべし。怠なく信力がつよくば、忽然として我なくして、見る聞といふ事が、合點がゆくであろう。

老比丘すゝんで問ふ、われ教相に於て、心を盡すこと久し、いまだ眞體を見ずいかんしてか我眞體を見ん。

翁曰、汝が頸を見來れ、老比丘曰。これを見んとするに、終に不可得。

翁曰、既に汝見をはなれり。老比丘涕泣三拜し、在レ吾三昧吾亦不レ知と言て偈を誦す。我今不レ施レ功。佛性而現前非二師相授與一。我亦無二所得一。人に古今あり、證明古今なしとて、治禮して不レ休。

翁曰、われは浮屠氏にあらず、然れども汝のために擧示す、眼レ不レ見レ眼。指不レ指レ指と。他日忘るゝことなかれ珍重。

儒生因に問ふ、翁の談話、悉く老佛の説に似たり、聖人別に道體を説給ひし事をきかず、今これ體用の論不審。翁答。聖人ひとへに道體を説給はずとはいひが

をや。汝が編身則太極なり、試に自ら己が身を切りて見よ、時に學士小刀を取て、自身所々を疵つけしに、痛にたへず。

翁曰。汝が痛所太極出現す、會得すや否や。

女人あり出て向ふ、太極を我が眞體とする事、女にても心得安く、聞ゆることあらば示し給へ。

翁答、我が師したしく示せしことあり、かたるべし。太極とは則天理也、天理とは則天なり、人は天を眞體として居るを譬ていはゞ、天を大海の水とし、其中に大地萬物あるは、皆籠をならべたるがごとし。第一の大籠を大地といふ、其大地籠の上に、人間鳥獸、虫魚艸木、其外諸物を籠にてつくりならべたるに、其籠の中へ、悉く大海の水入滿てあるなり。これを以ていづれも身に、天理を具へて眞體としてゐる事、人にかぎらず、虚空も萬物も、皆これが身體と成てあるぞといふ事を知らるべし。然れどもこれは一通譬て聞すまでの事也。志もあり氣に見ゆれば、何とぞ此眞體を發明せられよ。此水といふたとへじや。眞體は虚空のやうなるものゆゑ、體をぎんみせんとしては知れぬ、現れたものは皆用といふもの

前にいふ感じて通ずると、同じ事なり、こゝを用といふなり。一心の體は、天地に偏滿して、聲もなく臭もなく、まして色形にあらはれず、目に遮らず、思慮をはなれたれば、量り知られず、然れども明によく萬事分別する實理具りし故に、神明不測といふ、佛氏は不可思議ともいひ、又知らぬが佛ともいひ、佛は不思議を體とすともいへり。古歌に、

知らざるは佛も人も同じこと、さてこそ人の迷ひこそすれ。

一心の用は、物に對へば其物が心となりて、其外に心といふものなし、此心は心の用なり。古歌に、

きねが鈴海山木こり谷の聲、入相の鐘に庭前のはな。

翁一日太極の圖を説終りて、猶繩床に座す。或學士近前で問ふて曰、太極はこれ無極、もとより實理あることなし。大學の明徳も其體虛なり、何もあるにあらず。理體言句にいはれずといふは、其理なきゆゑにあらずや。

翁答。天地を總ていふ時は、天地萬物一太極、一物を以ていふ時は、各一物一太極にして、微塵といへども、太極を眞體とせざる物ある事なし、況や人に於て

（ち）潭然。ふかき靜なるかたち。

むかし公孫丑、浩然の氣を問はれしに、孟子いひがたしと答へ給ひたれば、其體に言句の及ばぬ所なり。中庸にも上天之載無レ聲無レ臭。至矣とあるにて察識すべし。強て止事を得ずしていはゞ、本心の體は天なり、其天は色形もなく、萬の智惠分別を離れたれば、先たとへば虚空に似たり、然れども虚空は人見て虚空と知る諭とするにたらず、近くは人よく寢入たる時のごとし、本心の用は無心のごとくなる時、何にても物に對すれば、直に見きゝ覺え知り、扨又動きはたらき樣々の事を思慮す。これを用といふなり。易曰寂然不動。感而遂通二天下之故一とあり。寂然不動とは、我か本性（ち）潭然として、私案なき心地をいふ、これ則體也。感而遂通ずるとは、何にても向ひ來れば、見きゝ知るは、其何ともかとも覺えず知らぬやうなる本體より、應ずるはたらきなり、これを用とはいふなり。金剛經云。應無所住。而生其心とあり。無所住とは、即前にいふ寂然不動の事なり。自性はひとり洞にして、しかも色形もなく、住所なきゆゑかくいふなり、則此所が體なり。生其心とは、即何にても向ひ來れば、其時は見えたる物が心と成、きこえる音が心と成なり、これ元來自性の本體、少しも住る所なきゆゑなり。此所は

（と）鞴。かぢやの道具の名。

もなく、德もなく、功もなく、名もなし、誰か知り、誰か傳へん、是德をかくし、愚を守るにはあらず、本より賢愚得失の境に、ぞらざればなり。又上天載無レ聲無レ臭至矣哉。是所に至て行ふ者あらば、從二心所一レ欲不レ踰レ矩との給ふ所にして、心は卽用、體卽道、用卽義。聲爲レ律而身爲レ度。この味を譬ば（と）鞴體用を知らざれども、他より見れば、體用は能わかれるものなり。暫體用を分るは、赤子になれとのことなり。赤子の形は體なり、手足をもさくさして泣所が、體用一致にして、體用ともに正しき所なり。赤子が行儀正しくして泣ずんば、是を正しといふべきや。

善惡もわかれぬさきの身をしらば、體用しらで正しかるべき。

○或問、本心の體はかくのごとく、本心の用はかくのごとくと、御得心の所、尤言句の及ばぬ事なれども、止事なくしていはるゝたけの所、御答うけ給はりたく候。

蓋し心は性情を統ていふ、故に道心あり、人心あり、今本心といふ時は、卽道心にて、天より受得たる、性善のまゝなるをいふ。

答、本心の體をとはれてさがせども、見えずしられず云もいはれず。

本心の用はこたへに及ぶまじ、たれも見るきくしればしらるゝ。

にしてあらはれず、情はあらはれて用なり、心は體用をかけたり。物をうつしたるまでにて、覺えずしらぬがごときは體なり、覺え知りはたらくは用なり、心はあらはれずして體たり、身はあらはれて用なり、右を以て具におして、其餘をも知るべし。一切に悉く體用は一々にわかりあり、然れどもかやうに體用を論ずれば、斜視にて向ふに物をたてゝ算用するといふものにして、皆眞理にはかなはず理屈といふものなりと知らるべし。譬へば體用をわくるは、餅の皮と肉とをわけんとするがごとし、皮の外に肉なし、肉の外に皮なし、用をはなれて體なし、體をはなれて用なし、體用一源顯微無ㇾ隔、わけていはるゝ所にあらず。

體用をわけてそれとはいはずとも、みな體用のなきものはなし。

體用の心覺えはいらぬもの、わすれはてゝも白黑はしる。

何ゆゑに春になるとはしらねども、ひと夜あくれば心のどけき。

我が師曾て體用の論に曰、天地とわかれぬ先の身をしれば、體用わけていかで見るべき。つれ〴〵草に曰、傳へて聞、學びてしるはまことの智にあらずと、いかなるをか智といふべき、可不可は一條なり、いかなるを善といふ、眞の人は智

の心持萬事にわたりて、心得になるべきことなり。何事も平生の取さばき、此心にて取あつかはゞ、錯すくなかるべきか。

○或問、道の體と、用と説わけて御きかせ候へ。

但し道の用はあらはれたれば、説に子細なし。道の體は言句の及ばぬ所なれども、止事を得ずいはるゝたけを、御書付なさるべし。

答、いはれぬを得心の上の尋ねなれば、あとへんとやらいふに、似たることを、こゝろにいふべし。其道の體はあらはれずして、聲臭勿論いろかたちなし、人にとりては、覺えず知らぬときをいふ。然ればなきに似たれども、少しにても無理を思へば、早直にきみわるし、これ本體に違ふ故也。こゝを以て覺えず、知らざるがごとくなれども、その體嚴然と屹としたることを知るなり。此知るは早用といふものなり、用ははたらきにしてあらはるゝなり、用とは萬目に見え、覺え知られてあらはれたるは、皆用といふものなり。一切のはたらき動も、皆用なり。太極は體にしてあらはれて、天地はあらはれて用なり。天は體にしてあらはれず地は用にしてあらはれたり、又約ていへば天地は體なり、流行は用なり、性は體

さやうの少しの過失を、いひ立にして去なば、妻それは以來改むべしなどゝ、樣々ことわりをいふべし、其時夫きゝ入なくば、妻も聞わけなき心せばき夫と思ふべし、且他人よりも內證はしれねば、扨々道だてをいふ男哉、理づよきは非の一倍なりとて、夫をそしるべきかいかゞ。程子の答、其罪は彼妻必、我が身に覺えあるべし、然ればそれでよし、他人の知ると知らぬは、せんぎ無用なるべし。左はいへども眼あきらかなる人は、自らしるものもあるべし、若夫未熟にして、我が妻の內證の大惡を世間へあらはし、他人に知らせて悅ぶは、夫婦の恩義を忘れたる大の卑劣者にて、人間の屑といふべし、道に志ある君子の人物は、凡世間の噂になる事にても、對ふの人を邪にし、此方の直をたてることは好ず、只對ふの人に邪曲ありても、了簡のなるたけは、含容てきゝながし居るなり。或人又問古語に妻をいとま遣しても、又他所へ嫁のなるやうにしていとま遣し、臣にてもそれと同じ、朋友の間にて、交りを絕にも、我とは懇意をやめても、其友又外の人に見捨られず、交りの出來るやうにして、懇意を絕といへるも、右の意味と同じことにや、程子の答に、いかにも其方のいはるゝ通なりとの給ひしとかや。右

（へ）二程。二人の程子のこと。

○或問、古人己が妻飯をかしきけるに、其飯こはかりしを、老母にすゝめたりしを、其故を以て不孝として去り、又親の前にて狗を呵りしを、不敬なりとて去りけるあり。これらは實に父母に愛敬を失ひたれば、かくのごとくさるべきや。答、此事は（へ）二程全書に出たり。或門人右のごとく、程伊川先生へ尋ければ、程子答へての給ひけるは、これ古人の志忠を盡し給ふ所なり。いにしへは妻を去り、或は臣に暇を遣し、又は友だちの交りを絶ことありても、其人の大なる惡事の、あらはれぬやうにと、取はからひて、大惡の外へ聞へ、惡名の出るに忍びずそれ故かくのごとく妻にいとまを遣すにも、少しの罪をいひだてにして去なり。こゝを以て古へ賢德ある人の志、忠厚にして信實のいたしかた、手厚き所を考へ見るべきなり。或は飯こはきを父母にすゝめ、狗を親の前にて呵りたりとて、何ぞこれを大き成科とし、きびしく過失とするほどのことあるべきや。これは只平生口の端へも出されぬほどの、大惡あるをあらはさじと、其惡の手前の見えぬうちに、此飯のたきやうあしきの、狗を呵りしのといふ、少しの罪をとりこにしていとまを出せしものなりと、示し給ひければ、或人又問、妻をいとま遣すとき、

あらずと、其水は同じ水なれども、流はしばしもやむ事なし、これは知た事のやうなれども、むかしから忘れて暮すなり、直に其忘れてくらすが本心ゆゑ忘れやすし。迚の事に忘れついでに、一向忘れ通せば、死するといふ事は忘れて、毎夜寢ろごとく心得て、寢所へ入たるやうなものにてもあらんか、いかほどの私案者にても、寢さまに我が身は寢れども、心は寢ぬの、心はねれども、身は寢ぬのといふ、算用したる人をいまだ聞ず。つら／＼思へば、ちよとうたゝねをするも、危ものなれども、ついに家内へ暇乞して、うたゝねしたる人もなし。世にはまさしく死したる人、稀に蘇生するものもあり、何事もとかくはかり知られぬ天命を死さうなことあれば、私案が募りて、俄に仰山にさはぐは、元來生死なき身に、物好の私案といふ材木をあつめて、死といふものを作るとやいはん。先死生の説はともあれ、一念あやまりて、私案の私にひかるゝ時は、忽身といふものを建立し、無量のくるしみをうくるなり。幸に天より良知を給はり、私を去の思ひあり此思ひは本心の 光明なり。何事にても私案心に萠ば、それははや邪の私なりと思ひ辨へて、本心の光を暗されぬやうにし給ふべし。

と思ひ、目に見えた物は、かはると思ふゆゑ、心はかはるまじきが、身はかはるといふ疑ひあり、其目に見えぬ所が、常にかはり〳〵て、暫時もやまぬ事が、合點ゆかぬゆゑなり。左樣の人は實に身のかはる事も、合點がゆかぬ也。其わけいかなれば、多くの人終に臨みて、今ぞ死するといふ時、息のきれたるを見て、扨もはかなきもの哉、やれ誰が死したりと驚き、其時急に變りたるやうに思ふなりこれ既生れたるときが、死したりといふ事を、しらぬゆゑなり。扨それから後、死つゝけなりとしるべし、しばしも死なぬ間はなし、ぎやつと生れたるが、死したるといふは、惣じて死するといふは、有がなくなり、變りゆく化名なり。然れば畢竟が物のかはる名なれば、人の生れたるも見えぬ所から、見える物にかはり來りたれば、死したると同じものなり。又死通しといふも、此身を見給へ、毎日〳〵としのよらぬ日はなし、念々も一念〳〵何かたから出て、いづかたへさるやら、出てはさり、出てはさり去なり。是又念々の往生、刹那もとゞまらず、これを以ていへば、生とやいはん、死とやいはん、死よりいへば悉く死しゆくばかりなり。生よりいへば、皆生々なり。長明曰。逝川の流は絶ずして、然も本の水に

數と、初ざつと數へ給ひし數と違ひなく、却て後の念を入給ひし數違ひしと、示し給ひしことあり。これを以てみれば、萬の誤りは皆私案さし出て後のことなり今此疑ひにつきても、考へ見給ふべし。身を見心を見るは、皆私案を起して、こしらへたるものなり。私案をでかしてこしらへねば、身が有やら、心がないやら、二ツやら、一ツやら、一向わからぬがごとし。謠にうたふごとく、生死に住せば輪廻の苦、生死を離れば斷見の罪なり。又古語にも無二一物一而編界不レ藏ともいへり人の死骸も日々に腐りゆけば、動かぬともいひがたし。鼻口へ風がふきいれば、おかしき音を出せば、ひとへに物をいはずとも定がたし。天地とともに動き、風聲水音を始として、人の言鳥獸の鳴にいたるまで、夥しく喧けれども、只私案と云小耳目あるゆゑ、見えず聞えぬにや、やむ事を得ずしていへば、唯世界中が一面に變化までなり、これを易といふなり。誠に變易して卽かはりかはるが常なり。常といへば常住にして、物を釘にて打つけたるごとく、變らぬやうにおもふは錯りなり、變化がいつも相かはらず、かはりかはるゆゑ、其かはるが常なりといふ事なり。本心をしらぬ人は私案をつくりて、目に見えぬ物は、かはらぬ

可ニ以踐レ形とあり。形色とは人の身なり、天性とは人の心に具りたる、孝弟の道理なり。諸人元來此身あれば此心ありて、心身二ッなし、心は見えがたく、身は見えやすき違ひあるまでなり。然るに聖人は心の道理の通、正直に身にあらはれ給ふ故、これを誠の人といふ也。凡人はたゞ此身を見て、本心をしらぬゆゑ、本心に背き身の贔負して、身勝手の私といふ私心をつくるゆゑ、生死の上もかやうの疑ひあるなり、早く本心をあきらめ給ふべし。本心の通身も行ふ事は、及びがたき事なれども、先本心をあきらむれば、かほどの疑ひははるゝなり。夫をいかにといふに、或道人の曰。悟は念を滅却するをいふ、念によつて身をなす、悟れば生ながら身なしと、これ面白き言なり。常に申ごとく、誰人にもあれ、私案止みぬれば、さして死したるにもあらねども、此身ありともなしとも、覺えぬ也。其時聖人の無知と何ぞ異あらんや、覺えず知らぬごとくなれども、物事來りて應ぜぬことはなし、覺えず知らぬほど、能應じて謬らぬものなり。むかし程子、或廊の柱の數を、心のうちにてさつと數へ給ひ、又再び念を入て數へ給ふに、初の數と違ひしゆゑ、門人に其柱を一々に數へ來れとありしに、門人直に數へし所の

(ほ)無我。がまんのこゝろなきこと

を知るべし、恭しく愼みあつけれども、易直なるを以て、老人の心を穩に安くし給ふを知るべし。又鄕黨篇に。孔子於鄕黨恂々如也。似不能言者とあり。注にも恂々とは、信實なるをいふ、言給はざるやうなるは、卑下遜順にして、賢知を以て人に先だち給はざるゆゑなりとぞ。卽鄕黨は。父兄宗族の居給ふ所なるを以て、其樣子かくのごとしとなり。又朝與下太夫言侃々如也。與上太夫言誾々如也とあり。註にも侃々とは剛直なるをいひ、誾々は和悅にして諍をいふなりとあり。これを以ても、聖人老若上下の交り、天然の形容を察し見るべし。具にはいひつくしがたし。右の大略を以て、自己の本心に返照して、考へ見給ふべし。其應ずる所のもやうは、色々にかはりあれども、畢竟は我を立ぬにあり。

(ほ)無我なれば愛心は自然に物事に達して、行はるゝものと見えたり。

○或問、本心を知れば生死なしといふ、然れども現在死したる身は動かず言はず心はかはらずとも、身はかはらずとはいひがたし。然る時は心と身と二ッになるなり、心と身とは別々なるものにはやいかん。

答、此疑さもあるべし、元來心身二ッなし、孟子曰。形色天性なり。惟聖人然後

しうなりて、終には心底から、思ひつくやうに成ものなり。其恩愛の厚きあしらひやうといふは、此方の我を立ず、我も若く未練なりし時の事を、能々思ひめぐらして、萬事了簡づよく、扨又幼稚の人などには、少しの宜き事ありても譽たり又は折によりて、身分に合ひたる程のものは、少しの物にても、愛相にとらせたりすれば、おのづから心服するものなり。これ全く人を誘といふものにてはなしたらすといふは僞なり、大にわけの違ひたる事なり、其所を能々辨へ知るべし。たとひ内に愛する心ありても、外へしるしあらはれねば、愛するやらせぬやら、しれぬものなり。然れば少しも譽べき事あるときは、譽もしたり、又は悦びもしたり、或は物にてもとらする事あれば、それにて心内の愛する實外へあらはれ、相に見ゆる故、それを愛相とはいふなり。老人をあしらふには、敬ひを主とし、若き人をあしらふには、あはれみを主とし、いづれに交るとも、對ふの人心の安きやうにと思ひ、勤習ひたきものなり。聖人の上を見んとおもはゞ、論語述而篇に。子温而厲。威而不レ猛。恭而安とあり。聖人は温なる故に、老若ともに親み易し、厲き故に恩義みだれずして全し、威あれども猛々しからぬを以て、少者の懐

答、子曰。老者安レ之。朋友信レ之。小者懷レ之と。此所は聖人の地位なれば、我らごとき者、はかり知るべき事にあらず。聖人は少しも作意なくして、天然自然にかくのごとく、天地の化工とひとしくして、言の及ばぬ所なり。然ればしばらく此所を、學ぶ上を以ていふて見るべし。聖人は唯仁愛のみ也、此三事皆人を愛し給ふの外なし。老者は血氣衰へ心細く、其上若き人に對ては、遠慮ありて、恥いたみ、氣をかねる所あるが通途の情なり。故に注にこれを養ふに、安を以てするとあるなり。其老人の心を養ふに、安くするしやうはといへば、敬ふ心厚くして此方の我をたてず、ひたすら老人の心遣ひなきやうにと思はゞ、終には安くする所へも至るべきか、朋友の交りは、本より此方に眞實あつければ、伴ふ人の心たのもしく思ひ、安堵すべし。又幼少の人は、血氣未練なる故老人に對しては、ひとへに畏るゝ心かちて、氣遣はしく、よりつきにくきものなり。これ亦年若成時の、おしなべての情なり。故に注にもこれを懷くるに、恩を以てするとあるなり尤若きものが、老人を畏れいでもすます、然れども恩遇あつきときは、若き人の心に恐懼も、我を甚愛してくれらるゝと、思ふやうに成、若き人が其老人はいと

思ふときは天理に合ひ、思はざれば私意に蔽はる。然れば隨分思ひめぐらして、私なきやうにはすべき事なり、此私をせぬが遠き慮といふものなり。遠き慮は却て近き所にあり、君子の言は帶より下らずして道存す、道は近きにありとも聖人の給へり、只吾が禀得たる何ともなき、坦平なる本心にまかせて、見がゝりの通少しも私をさしはさまず、易直に身を行へば、後の憂なしとのたまふ事なり。汝がいふごとくなる私案は、皆私意に出てたるにて、却て災害をうくるものなり昔季文子三たび思ふて行を誤り、冉求は季氏がために、顓臾の遠き害をはかり、近く蕭牆の本に憂を求る聖人のいましめ、思ひ合せ見らるべし。常にもかたるごとく、思ふと私案とは、似て大きに異なるものなり。思ふは天理の本心に出て、善の光なり。私案は人欲の私に出て、本心を蔽ふの邪魔なり、道を學ぶは公私を擇びて、善に率ふの外なし、擇レ善固執。省察存養の工夫を用ゐて、功をなすのみ。

○或問、論語。子曰。老者安レ之少者懷レ之とあり。安ずると、懷との行ひのいたしかた、差別は如何。

(は)小成。わづかなこと。

をとぎ、苦のためいきを吹を見ては、我も此道を知らずば、何ぞ彼とかはる事のあるべきや。今其冷きいやなる苦なきを悦び、此深遠の道にあひたる事を、返々々も悦べき也。これ全く(は)小成に安んぜよといふにはあらず、少し道の端を知りてだに、かくのごとくあらましの苦はのがれたり。まして此道を推廣ば、いかばかりか樂しからんと思ひて、不斷年月をかさね學ばるべし。信は初より思ふさまに、おこるものにあらず、實に思ひあたる事ある度〳〵に、進むものなりと知らるべし。若いまだ本心を發明せぬ人あらば、早く本心を知らせて、此味を樂む人と、爲したきものなり。

○或問、人無二遠慮一必有二近憂一と。然れば汝私案を惡きやうにいへども、人遠く考へ思ひめぐらし見ざれば、或は過ありて、後の難義をまうけ、又は災害にもあふべきか。然れば末がすゑ迄の事、かねて懇に私案して置ねばならぬ事と思へりいかん。

答、汝のいふ所一理あるに似たれども、聖人の語とは趣意大きに違へり、いかにも行末の遠き所を、かねて考へ思ひはかる事なれども、私案とは甚違ひあり、

四時の流行雷鳴震動まで、我が爲所にあらざるはなし。壽命は其はてしなく、臨終といふ譯を忘れ、火葬にしられても、火も燒事あたはず、又水にもおぼれず、斧鉞も破ることあたはず、貴き事はこれを良貴といひ、重寶なる事は、如意寶珠と名づけたり。恐れある事なれども、神といひ、天理といひ、佛といふも、三ツに名はかはれども、唯この體のかへ名なり、此體即吾なり、然れば自ら思ふべきは吾神なり、神が不正直ではすまぬものなり、吾天理なり、天理が邪をしては埒もなきものなり、吾佛なり、佛が欲が深うて刻をしては、佛とはいはれまじとかくの如くひたと思ひ返し〳〵してたしなむべき也。扨年老或は病に臥たる人の、死の先途を、覺束なく思ひ哀を見ては、我も此道をしらずば、彼がごとく苦しむべきが、今は其苦しみなきを悅び、又貧身に世間を張て、かへすあてなき金銀をかり、それより狂ひて樣〳〵の物巧し、日夜くるしむものを見ては、我も此道を知らずば、彼がごとくいか成惡事を爲べきも計がたく、恐ろしき事なるに、今その恐れも、苦みもなきを悅び、老たるも若きも、好色に打かたむき、あらぬ見ぐるしき、擧止などをしだし、互に疑ひ怒り、或は恨み或はにくみ、共に殘害の劍

く教を信ずるものは、しかも死生一となりて、永生死なきにいたるなり。
問、生死を離れ、死を安じたる身の、何として死をかなしむ事ぞや。
答、死生の界を出れば、愛心のみありて私案なし、故に一休かくのごとし。此所は工夫あるべし、私案にては知らぬ所なり。
○或友問曰、われ道を信ぜざるにあらず、然れどもかく信ずる志立がたし、いかゝいたさば、志大きに發るべきや。
答、其發るべきやうをいはゞ、道を見る事委しからぬゆゑ志發らぬなり、しかりとて(ろ)卒爾にくはしきにいたるべきにもあらず、されば先我此度ふしぎにして此道の端をしりたる事の有がたく、逢がたき明德の師に、逢奉りたればこそと、師恩の限りなきことを熟思ふべきなり。それを思はんには、凡世に生るゝ人、幾億萬ともなき人の中に、この道理を知りて、心身やすらかに、生涯を送る人を、指を折て算へ見るべし。幾人ぞや、我其數の一ッに入事、悦びてもなほ餘りあるべし。扨其たのしき事を、一々思ひて省るべし。廣大なることは、天のあらんかぎり、自在なる事は、微塵の内にもいり、或は花を咲せ、鳥を飛せ、魚を泳がせ。

(ろ)卒爾。にわかに。

いふまじき事をいはぬことなり。此二ツを守れよ、これ上に立たるもの丶、身の持やうなりと示し給へり。是外の事にあらず、仁を全うする事を、敎給ふなり。

又一休和尙の、死とむないとの給ひし一言、是則仁なり。生ををしむは愛の至極也、仁は愛の根なり、一休和尙この心ある故に、よく一切の人を濟度して、我身の苦勞を忘れて、倦事なし。我儒の道も、此死とむない心を、偏く推廣むるばかりなり。故に孟子曰、人皆有レ所レ不忍。達ニ之於其所レ忍仁也とあり。又曰、以ニ不レ忍レ人之政一而仁覆ニ天下一矣ともあり、此仁に於て二つのかはりなき所なり。

問、曾子一休仁にかはりなくば、何とて一休は死の安からざるにや、いかん。

答、一休此心あるを以て、普く人を導く、生死の境を出し、死を安くせしむるなり。人の死を安くさするもの丶、自ら安からざる事のあるべきや、おして思ひ見らるべし。

問、然らば鳥と人と、死をかなしむに、差ひありや。

答。鳥はたゞいたづらに、死をかなしむ一偏なり。人は此死あることを知りて、此理を窮る故に、此愛遍く人に及び、萬物までも及びて、各其生命を遂げ、深

道に違ひあるべしと思へり。それとも如此にても一ならば其一なる所を、くはしく云聞すべし。

答、いづれの道も悟る心は一なれども、儒佛の教術は、一なるにあらず、故に曾子一休、此趣大きに異なれども、其一なる所を語るべし。曾子一生戰々兢々として、能身を脩め、人の人たるうへ闕めなくして終り給ふは、則仁を全うし給ふ所なり。其仁といふは、本心の通を身に行ふて、少しも人欲の隔なきの名なり。故に孟子仁人心也との給ひ、又仁者人也ともの給へり、然れば身を全うする外に仁はなし。曾子孟敬子に告て、鳥の死する時鳴ことかなしとの給ふは、鳥は心暗ものなれば、たゞ身の死することをのみ、かなしむなり。人は心明らかなるものなれば、常なみの者にても、最後には一言能ことをも云ものぞかし。曾子今我も死に臨ていふことなれば、あしきことはいはず、汝に三品の善言を示し聞すべしとて、念入て大切に聞いるゝやうにと思召、孟敬子の心を起し置て、扨のたまはく人の上に立ものは、身を動かすには、荒々しき事なく、慢なる事をせぬことなり顏色を正くして、信を失なはず、言には鄙ことをいはず、少しも道理にそむき、

（い）病。重きやまひのこと。

けども、幸に天より本心といふものをうけ得て、此本心が見るまじき色は、何ほど美くてもうけつけず、耳の聲、鼻の香、それ〳〵に應ずるも亦同じ。然れば一向に本心にまかせさへすれば、危をまぬかるゝなり、能々翫味すべし。

卷下

○或問、曾子病氣（い）病給ひしとき、孟敬子といふ人、きげんを窺ひけるに曾子の給ひけるは、鳥のまさに死んとするとき、其鳴ことやかなし、人のまさに死んとするとき、其言やよしと示し給ひ。又死に臨て、門人に我手を見よ、足を見よ、戰々兢々として、深き淵にのぞむがごとく、薄き氷を履がごとく、一生大事〳〵と、つとめて、如此身に疵もつけずして終るなり、今よりして此事を免るゝとのたまへり。又禪宗の一休和尚病わづらひ給ひ、いまはの時に至て、或弟子機嫌をうかゞひけるに、死とむないとの給ひけると承る。これは鳥のごとく死をかなしむに似たり。汝常に悟れば、道に二つの違なしといへり。然るに何とてかくのごとく、一方は死を安んじ、一方は死をかなしむ事ぞや。これを以て見れば、

いふ道は、こもりある故、これは爲べき事か、爲まじき事かと、腹の中へ相談に及ぶとき、腹の中にうけつけぬ事を爲ぬばかり也。然れども此段は、本心を一度知りて後の事なり。本心に一度對面せぬ人は、うけつけぬものが、私か本心がわかれずして、まぎれるなり。一度本心に對面したる忝さは、本心は清淨にして、少しも私といふ形氣に出る不淨は、うけつけぬ事が、明白にわかるゝ也。每度譬ていふごとく本心を知れば、大道に立たるが如し、本心を知らぬ人は、大道の端の草むらの、さかしき難所を步くが如し、一步をあやまてば(レ)千仞の谷に落んとするに同じ、本心を知れば、何とて公私の間が、よくわかるゝそとならば、平地に立は足のうら、何ともなく快し、草むら巖石の上は、忽足のうらが、きみわるきに異ならず、それ故不圖難所へ足がゆかんとするとき、足がいたさに早く直に平地へ立戻る也。これ孟子の所謂、耳目之官。不ㇾ思而蔽二於物一。物交ㇾ物則引ㇾ之而已矣。心之官。則思、思則得ㇾ之、不ㇾ思則不ㇾ得也。此天之所ㇾ與ㇾ我者。先立二乎其大者一。則其小者不ㇾ能ㇾ奪也。此爲二大人一而已矣と。それ耳目の類は、何の辨へもなきもの故、目は色のはめにたゞ一偏にひかれ、耳は聲の爲に一途に隨ひなび

(レ)千仞。仞は尋に同じ。一仞は八尺のこと。

（タ）浩然之氣。天地正大の氣のこと

人は、活きたるがごとくに見ゆれども、道を知る目より見れば、死物なる事あきらかなり、恐れつゝしむべき事なり。

○或問、世に危き事の、根本の至極いかん。

答、善き問なり、尤物皆根本あり、危き根本の至極は、人として人の道を知らざるより、まさりて甚しきはなし、其道といふは、則心をいふなり。されば人々の身に備りたる本心を知るを、道を知るとはいふなり、此本心を知らざるは、目を閉て刃物針などの散かりたる中に、立たるがごとし、一歩を過れば、直に足を害するなり。然れば人々早く、本心をあきらむべき事也。又本心のはしをも知りたる人は、其本心といふ眼を養生して、明らかに見ゆる樣に、すべき事なり。目さへよく見ゆれば、怪我はせぬなり。萬の錯りも、皆見る事の、えらひがとゞかぬゆゑなり。此眼の養生をする術は、孟子も我善養㆓吾（タ）浩然之氣㆒とのたまへり。此浩然の氣は、直を以て養ふべし、直とは知れたる通するをいふなり。其知れたる通は、知れたる事と思はゞ、それは早理屈にて、知れたる通といふものにあらず、たゞ何事も理屈ばりたる私案をやめて、己が備りたる氣の中に、本心と

があるやら、見えぬものなり。事物にあらはれて後、形によりて其功能は見ゆる也。されば物盡れば、理あらはれざる故、理つくると說給ひたるものなり。大海の水は寂然不動にして、終始、生死、動靜ともにあるじとなりて、しかも元より增滅去來なし。其所よりいふ時は、古今不滅とも常住とも、本有などゝもいふなり。かく言によらず、本心に反照して見ざれば、萬あやまる事あらんか。

問、人物なきときは、天理のはたらき、見るべき所なき譯はきこえたり。然るに惡人は、天理にそむき居るものなれば、天理の德性、反り盡きたるが如し。然れども其惡人、嘗而死するにもあらず、此譯いかん。

答、これ則中庸に、所謂不レ誠無レ物との給ひし所也。人性理に背きはたらく時は見かけは今のごとくなれども、人にあらず、然れば人氣は死して少しもなし。それを譬ていはゞ、こゝに氣ぬけのしたる人か、又は大きに狂亂に成たる人あらばこれ人の用にたつべきか。人として人の用にたゝざれば、人なきに同じ、木にても見るべし、立がれの木は、木の用にたゝず、これ木の理つき去るが故なり、惡人もそれにひとし。故に性理去りつくる時は、活ながら人物有ことなし。凡夫庸

（ヨ）澤。うるほふこと。

性理具る、この動物の人は草木の如し、性は水のごとし。水氣の（ヨ）澤を得る草木あり。水氣盡る時草木かるゝごとく、此性理あつて、動物の人あり。性理盡るとき、動物の人あることなし。事理一致なり。

右のごとく承候へば、事物盡るときは、理もまた盡てなきがごとし。人の性は古今不滅と承候とは、相違いたし候。彌人の身死する時は、性理も盡てなくなり候やいかん。

答、かくのごとき類、古語にもあり。中庸萬五章に、誠者物之終始。不ㇾ誠無ㇾ物とあり、物とは人なり、誠は卽性なり。又六祖壇經に、師曰、大衆世人自色身是城。眼耳鼻舌是門。外有二五門一。內有二意門一。心是地性是王。王居二心地上一性在王在。性去王無。性在身心存。性去身心壞ともあり。然れば今我が先生、事物の外に、性理なしとの給ふも是と同じ。元來天理斗にて、外のものなきゆゑ、かくのたまふなり。此天理もとより有無の名を離れたるもの也。名なきゆゑ、無がごとく聞ゆることあり、それを譬ていふべし、大海の內にて、人形諸道具を、造り出すがごとし、則大海の水は天理のごとし、其天理はいかやうのはたらきがあるやら、能

其亭主愚なる故、其父かねて頭手代に發明なるものを選み、後見にいたし置しが程なく主人の父も相果ければ、いつの間にか頭手代威勢盛になり、心驕り高ぶり文盲もうるさく成けるにや、或學者を招きよせ、養ひ置て學問しけるが、此學者甚惡黨者にて、聖人の書をいろ／＼と利口にいひなし、其頭手代を遂にわるものにしなし、既に愚なる主人を出しぬき、家を奪ふ手段きはまりしに、不慮に頭手代頓死しける故、一時に惡事露顯し、不思議に無難に治りしが。彼學者は早速出奔したりけり。かゝることもあれば、學問は餘りよからぬもの也、必子どもに學問など、さし給ふなとぞいひける。予幼年の時の事なれば、今は其かたりし人さへなく成ければ、殘念はいづくの事にてありしともきかず、熟思へば思ふ程、道を學ぶは大切のことなり。今世上の人學問をきらひ給ふに付ても、かやうのふるき事思ひ出て、實も尤も思へり。學問はいかにもしやうあしければ、却て大害をなす、おそろしきものなり。故に先よく師をえらみ、本心の公道を知りて、直路をあゆみ給へ。

○或問、石田先生嘗而、生之謂レ性の答に、仁は性なり、人は動物也。動物の中に

（カ）佚道。たのしきみち。

る、名利の心がなす所也。又一殺多生は狂るにあらず、利心とはいひがたし、是は則公の心よりなす所なり。孟子曰。以二（カ）佚道一使レ民。雖レ勞不レ怨。以二生道一殺レ民。雖レ死不レ怨レ殺者とあり、これにて知るべし。必文字言句の末を事として本心を明らめざれば、其道に合ざるのみにあらず、その害あらん事を恐るべし。聖人は意、必、固、我の四病なく可、不可の一定もなく、適、莫の二つなければこれはせねばならぬ、これはせぬのといふかゝはりもなし、唯義之與比とのたまひ、義のある所にしたがひ給ふまでとかや、此所は本心に通せざれば、うかゞひ知らるゝ所にあらず。我が本心を知りて見よ、毫釐も私なきのみ、道二つ仁と不仁となり。私なきは人にして公也、これを仁といふ。此公を行ふ名を義とはいふ也、然れば畢竟公を出れば、皆利心なり。故に利心を非道とす。學者は公利の二つを、あやまらぬまでなり、文字言句はいかやうにもさばかるゝものなり。識者の世智辨なる人は、利口に取なし、いかやうにも尤らしい、無理はいはるゝものなり、おそろしき事なり。予若年の時、火の側にありしに或田舍人父にかたりけるは、近頃我が國の或里に、おそろしき事あり。富家にて數口くらす人なりしが

尋を直うするがごとし。其上一殺多生といふも、狂レ尺直レ尋に類せり。此惑を分明に示しきかさるべし。

答、狂レ尺と、理強きと、一殺の事、ともに一様の趣にきこゆる故惑あるは、實もことわりなれども、此三つおのづから、分明にわかれあり。惣じて言も文字も同じけれども、意味はそれ〳〵かはる事あり。此狂レ尺直レ尋とあるは、狂る心向ふ所利を求るにあり、故に孟子利心ぞとのたまひきらひ給へり。同じ文字にても此方にての言に、狂て道理にしたがへなどゝいふは、己が私欲を矯まぐる事也。尤まぐるといふ言は、穏ならねども、此まぐるといふは、其意ため直すにあり、故に利心にはならぬ也。されば文字言句には泥みがたし、唯我が本心の眼を明らかにして、書を見るべし。又理の強きは、非の一倍といへるは、たとひ初いひ出す事、道理にあたりたる事にても、諸人得心せぬ事を、強張いひぬかんとするは是亦則利心也。いかんとなれば初の道理強張とき、忽變じて私意盛に成る、所謂意に起りて必に遂げ、固に留りて我になるの、四病(ワ)凝結す、非の一倍といふもことわり也。かくのごとくなるを大我慢とはいふなり、是己が一分を立んと欲

(ワ)凝結。こりかたまること。

(ヲ)尋。八尺をじんといふ、丈といふに同じ。

のなり。然りとはいへども、強て屈れば、屈り居るに似たり。卑劣譬なれども、小便の通をこらへているがごとし。甚氣味わるきものなれども、それも成事なればこそ、むかし物がたりにきゝ傳へしは、或人小便を強こらへ、一日にも及びしかば、小便肩を越る事再三にて、死したりしとかや。實にさもありぬべし、世上を以て見るべし。彼人欲のわたくしを以て、本心を強誣屈曲るもの、終に身を亡さゞるはなし。こゝに病によりて小便通せざるもの、大きに腫滿て、死するを見て知るべし。物の理二つの異なし、人の本心萬事に通せざるも、情欲善道を塞ぐの病也。小便閉て通せざるものに、何ぞ異事あらんや。小便閉は、通藥を用ゐてしるしあり。本心の通せざるは、聖賢の教に隨ひ、敬を以て內をあたゝめ、義を用ゐて鯉魚湯に、まさるの功あるべし。

○或問、狂レ尺直レ(チ)尋といふ事、孟子の對にては、利を好む心なれば、宜しからぬよし、左もあるべきこゝと思へり。然るに又世の諺に、理の強は非の一倍といふ事あり、是は世間の事少しも了簡する所なければ、却て大きに其事破るゝぞとの事なり。少し了簡するは、尺を狂るに似たり、それ故事の子細なく調ふは、

るなり、恐るべし。君子の學問は、此處を學び得たる人を、聖人とはいふなり。

○或問本心の思ひと、私の私案と、此わかれをくはしく說聞さるべし

答、本心の思ひと私の私案と、本始より二つあるにあらず、思ひは直に本心の應動なり。故に思ひのまゝに從ひ行へば、君に對へば自ら忠となり、臣にむかへば禮となり、親につかへては孝となり、子にしたしめば慈となり、兄へは恭順となり、弟へは友愛となり、妻には和にして義を失はず、夫へは貞にして順となり友には互に交りて、信と成なる、然るに此思ひの發る、其さきを曲屈るをば、私とも私案ともいふなり。たとへば、何事にても、父毎かくのごとくせよとのたまふ時、始より否といふ念發るものにあらず、先唯と承る念發れども、其所をそのまゝ否といふもの出、曲屈て動かせぬを私案とはいふ也。然れども本心の思ひ、直なるもの故、否といふは非なりとして伸んとするを、又私案が押へて、いろいろと非に理をつけて、本心の思ひを曲屈るなり。されども本心の思ひ、無理ざらひにて、ひたと伸んとするなり。學問の大事は、この所にきはまれり。元來本心の思ひ、淸明質直にして、私の私案といふ不淨をばうけつけず、屈れども屈ぬも

きけり。赤子は先第一不レ言重荷もたず。歩行ず。萬事の差別なし。然るを赤子の通身に行ふとは、いかやうにいたす事にや。

答、人の本心は、有ともなしとも、赤子とも大人とも、何ともかとも、更に知らぬ心也。然れば此心は何ぞ赤子と大人との隔あらんや。形は大小のかはりあれば力は差ふなり、然れども其かはらぬ所をいはゞ、大人に成ても、目はふたつ鼻口はひとつづゝ、手は貳本、足も二本なり、知もこれと同じ事なり。其かむりたる所は、知も力がつよく成故、はたらきが自由なるまでなり。赤子といへども、喜怒哀樂はあるなり。只私の私案を起し、本心の妨をせぬばかりなり。ひだるければ哀泣、乳を與ふること遲ければ、怒りて其泣つよくなるなり。少し日だちては喜びあるかして完爾笑ひ、乳を呑み、腹たりたるときは、樂しく見ゆるなり。かくのごとくにて飢も寒もせず、事かけなく埒をあけるなり。金人もたゞ私の私案にて、本心を隔ずば、赤子と何ぞかはる事あらんや、此何もしらぬ心をつけて仁といふなり。事にふれて身の行ひ、此しらぬ心に、違ひ背かぬを名づけて、義とはいふなり。もし身の行ひ、外に背けば、忽内に悔しといふ、覺え知るもの出來

(ル)かくまふ。かくしおくこと。

なれば、賊害せしものなるも知れず。詮義すれば追手の難後に近づく。又敵うちしが不圖信實ならば、手のびすれば、善人を殺す。それをもかへりみず、かくまふまじきやいかん。

答、これ私案より事を計る故、むつかしくわかれがたきかと思へり。

問、然らば私案にわたらずして、處かばいかゞすべき。

答、此方武士の身ならば、それを見かけて、一命を救ひくれといふ、殊に君父の敵をうちしものを、殺さすべきにあらず、先何かなしに(ル)かくまふべし。急成こと故其時いひきかすべきは、汝君父の敵をうちたりといふ故かくまふ也。定て追付汝を捕へに來るべし、其時汝がことに信實ならば、身にかへてもかくまふべし、僞ならば此方より繩かけて渡すべし、其段聞置べしと、いひ置までの事なりと思へり、何もむづかしき事もなきなり。前もいふごとく、賢德ある人は、能處もあるべきか。我らは我らが分限の、私なきと思ふ所の知れたる通を、行ふまでならんかと思へり。

○或問、大人は赤子の心を不失ともあり、又赤子は無知の聖人などゝもいふよし

ば明にすゝむは、煩多にあらず、約るところは私欲に克つの外はなし。つゝしみて唯私欲を去るべきことなりと思へり。すべて德を好むの外は好むべからず、暗は皆好むかたより初るぞかし、其私欲の好を押へ止むる者に惡くなり。欲の好の肩もつ者には贔負が出來るなり。是惡人佞人のつけいり來るとしるべし、恐るべき事どもなり。本心の直なるまゝに身を行へば、則孔子の曰ごとく、君子は欺べしとあれば、道理正しき事を以て欺さば、欺さるゝ事はあるべけれども、利欲色欲名聞などを種として、罔くらまさんとするとも、それには罔さるゝ事なし、欺さるゝには、身の災害などは出來ぬものなり。罔くらまさるゝときは、災害ならびいたりて、身を亡すものなり。唯一向に心身を謹て、斜視をふることは無用と思へり。

問、浸潤の譖尤恐るべけれども、事の急にあらざれば、少しは心つく事もあるべきかと思へり。若卒爾に血刀を提て走り來り、其元を武士と思ひ賴申なり、我今近隣にて主君或は父の敵を殺遁れ來れり。急に追手の者迫れり、かくまひ給はれといふごとき時は、いかゞすべき。君父の敵うちたりといへども、自身いふこと

かになるべきか。さし當浸潤膚受の讒出來らば、いかゞせんと案ずべからず。今分の心ありたけ、見えたる通に處置べし。

問、今分の心の通さばき置とは、汝の身にあたらば、いかゞ處かれ、よしとせらるゝや。

答、予よしとするにあらず。止事を得ぬときは、我が身の分を盡すまでなりと思へり。先人に交るには、俄に交る事はすくなきものなり。かねて交る人は、互に常々の氣象、扨は善惡好不好、萬端知れたるものなり。別して物事に、人を忌妬む根性ある者は、本より知れよきものなり然るに夫を知りながら、欺れ迷ふは、いかにといふに、心直ならずして名聞、利欲、色欲、此三ッに引惹さるゝ故也凡知れたる事は知れたりとし、知れぬ事は知れぬとして、疑ふ心なく、恩愛の心厚く、非道なる利を好まず、色欲にかたむかず、身に善事藝能もなくば、譽らるゝいはれなし。身不肖にして、道に合はぬ事多くあらば、毀らるゝは其いはれありと知りたる人は、いかなる惡人も可レ罔やうの術なし(ヌ)王通嘗稱、聞レ謗而怒者讒之囮也、見譽喜者佞之媒也、絕レ囮去レ媒讒佞遠矣と、尤さも有べし。然れ

(ヌ)王通。人の名。

(チ)浸潤之譖。ひたしうるほふごとくそろ／＼そしる
(リ)膚受之愬。はだへにうくるごとくきうにうつたふ愬はうつたへなり

○或問(チ)浸潤之譖(リ)膚受之愬。行れざることは、甚重きことなれば、我らごときの、及ぶべき所にあらずといへども、世の中の事、毎々此二事に類する事多し。我らごときの分際にても、また此所を見分る。術ありやいかん。

答、善哉此問。實に浸潤と、膚受とに、迷はぬ事は、廣大なる所なれども、又今日のこと畢竟大小の差はあれども、迷ふ事は此二ツの類に、同じからぬはなし。然れば及ばぬ所として、除置べきにあらず。惣じて學問は、悉徹上徹下にて、上から下へおし通て二品はなし。明至極したるは聖人地にいたりたる所なり。其明を學ぶは、學者の事なり。これを學んと思はゞ、第一浸潤膚受などに、欺されまじとおもふは、甚あしかるべし。只自己の本心の通り、背かぬやうに身を行ひ、本心を操失はぬやうの工夫肝要なり。其工夫は敬を以て、本心を存すべし。其存するといふは、いかやうにする事ぞといへば、向ふ所のまゝにて、其外へ心散亂せぬをいふ也。如レ此なる時は、只萬事見えたる通、知れたる通也。其見えたる通、知れたる通に、差ぬやうに身を行ふを、義にしたがふとはいふなり。學問の極意此外になし。此通を退屈せず、年月を重ね學んで怠る事なくば、日々に心德明ら

（へ）ひたす。つけること。
（ト）しゝびしほ。醢の字魚肉の酒につけたるを云。

小撃レ之使レ正なりといふ注あり。これ私の私案に流れぬやうに、引かへし〱するといふことなり。敬の字は撃レ馬なりと註して、これも戒謹て、他に馳させぬ事なり。かくのごとくするときは、本心のまゝにて、私案といふ私のへだてなきがゆゑに其心存す。其心存焉とは、おのづから放心せずとの給ふ事なり。涵養とは、ひたしやしなふといふ事にて、前のごとく本心を本心のまゝで居るが、即十分ひたし養ふといふものなり。清浄に身も心も涵つけて、飽まで清浄なるが養としるべし。古歌に、

酒瓶に此身をつけてひたさばや（へ）しゝびしほにも骨はなるとも、

此うたは、酒を強く好むものが、其身を酒壺につけて、骨までも酒がしみこましたしと願ひたる歌なり。涵養は心徳にひたすを、かくのごとくすることゝ見るべし。純熟其理著矣とは、純熟は前の酒に身を漬たるごとく、徳につけて、本心の清浄骨まで徹て、骨も消て、清浄ばかりに成たるをいふなり。然れば其ときは、其理の外にものなき故、あらはるゝとはの給へりとしるべし。右の語を能々我が身にとりて、工夫あらば、敬以直レ内の敬の術、手に入べきか。

（ホ）齊莊整敕。かざりなく淸らかにとゝのへ、いましめつゝしむこと。

子、誠とはかくのごとくなるをいふと示し給へり。今日學者は反レ身誠ある事は。或人のとへる如くして、一途に本心を欺かぬやうにすべし。

○或問二敬於程子一程子曰。主一之謂レ敬。又問何謂レ一。程子曰。無レ適之謂レ一。又問何以能見レ一而主レ之。

右の問を和げいへば、程子敬は一に成居る事とこたへ給ひしに、又其一に成居るとは、いかゞいたす事にやと問故、無適との給ふは、少しも外に馳る事なきぞとのたまふ事なり。其時或人一は合點したれども、どうすれば、其一を見失はぬやうには成らるゝにやと問。此答いかん。

答、右の問に、程子對曰（ホ）齊莊整敕。其心存焉。涵養純熟其理著矣とあり。然ればこれを和解ば、齊莊とは、内外何ともかともなく、廓然をいふなり。何ともなきは、卽淸淨なるにあらずや。少しも内外ともに、淸淨らしきことあらば、卽これ穢なりと知るべし。齊とは、心の正しく、莊とは、身の端しといふ文字なり整敕といふは、右の内外何ともかともなき所に、背くことあれば、進に改め、少しも由斷なく、廓然所に立歸り／＼して、怠る事なきことゝしるべし。整の字は、

り。

呂大臨といふは、程子の高弟也。信哉とは、此語を感心し、深信仰したることばなり。

實有是理とは、爭はるゝ所にあらず。唯眞實無妄の天理のみありと、其外を知らぬことばなり。故實有是物とは、是物卽眞實無妄なりといふことばなり。故實有是用とは、是物卽眞實無妄なりとなり。故實有是心とは是心卽眞實無妄なり。故實有是事とは、是事卽眞實無妄なり。故曰誠者實理也とは、此一々委說をはりて、こゝを以て見よ、程夫子の實理との給ふ所、能々味ひしれとあることばなり。右の語を見て、誠といふものを知るべし。誠は卽天理なり。天理は卽人の性なり。人々卽誠のかたまりなり。誠なきときは物なしとものたまへり。物とは人なり。人のみにあらず、一切のもの卽眞實のかたまりなり。されば一切行はるゝ用をなすうへ、一切を照し應ずる心、一切爲なす事々、一として眞實の凝りにあらざるはなし。或人の問、意を專らにして無不竭、本心を欺かぬやうにするは、意を誠にするの事といふべし。それを誠とはいはれず。故に程

(三)無妄。みだりなることのなきをいふ。

るばかりにあらず。一切私の勝手にひかれて、本心をくらますは、皆利欲といふものなり。本心の公に背けば、其反は人欲の私なり。私は即利なり。利は天のにくみ給ふ所なり。故に大學に災害ならびいたるとありて、たゞ禍きたるのみにあらず。身を殺し、家國をも亡すとかや。此理をしらぬはいたましからずや。人たるもの恐れざるべけんや。今此一座の人。互に此理を知りながら、人を火坑におとさばいかん。

○或問、誠者專レ意之謂乎。

右の問を和ていへば、或人の思ふは、意を一途にして、無レ不レ竭といふかと問しなり。此返答いかん。

答、程子曰。誠者實理也。專レ意何足二以盡一レ之。呂大臨曰。信哉實有二是理一。故實有二是物一。實有二是物一。故實有二是用一。實有二是用一。故實有二是心一。實有二是心一。故實有二是事一。故曰誠者實理也。

此語を和解ば、程子のの給ふは、誠は眞實(三)無妄の天理なり。然れば意を何ほど一途に無レ不レ竭と思ふとも、それではつくさるゝ所ならずと對へ給ひしな

少觸當りても、やれあつやくるしや。我々ごときは、兎角實を外に見るなり。實とは身を捻れば、直に痛き外に實なし。こゝが學問の眼目なり。此所本源私案を離れたる本心を、常に取失はぬやうにと無事を守るにあり。抑聖人は鏡の如くなれば、世を憂へ給ふ事ふかし。故に人を救ひ教へ給ふ事急なり。聖人手を取て、引あげ給はずは、忽皆白刃につらぬかれ、或は火坑に陷り、或は深淵に溺ること卽今目前なり。易文言云。積善之家必有二餘慶一積不善之家必有二餘殃一。臣弑二其君一。子弑二其父一。非二一朝一夕之故一。其所二由來一者漸矣。由三辨レ之不二早辨一也。易曰履レ霜堅氷至との給へり。此漸といふことを、我等ごときものは、遲々と事の重りて、緩なるやうにおもへり。聖人は此漸卽今卽心性迫る事をのたまへり。こゝにおいて、我が先生の世の人を救ひ給ふ志切なりし事を、大きに感歎せり。縱令我らごときの不仁なる者なりとも、一邑の衆人が、まさしく主人を害せんとし、父母を害せんとするを、卽今眼前に見ば、いかにして成とも救ひ助けたしと思ふ。志のなかるべきや。熟思ひ見るべし。今其時とかはりありや又なしや。今の人多くは心利欲に向へり。心利欲に向ふときは、災害至らざる所なし利欲とは、金銀をむさぼ

（へ）端的。その時すぐに。

也。然れども信に甚淺深あり。其淺きと深きとは、程子の曰ふごとく。道を見るの明なると、不明なるとによれり。其理を見ること慥成ほどには、身にも行はるゝものなり。こゝが大事なり。然れば我が見知りたる性を、先よく見きはむべきことなり。我が性本來少しも疵なきものなり。然るに一たび、私案といふ私に、かりにも引るゝ事あれば、直に疵がつくなり。疵とは恥るをいふなり。疵をつくるとは、性を欺くをいふなり。こゝを能々實にするが、信を進むの術なりと思へり。これを實にせんと思はゞ。少しも不善のきざしあらば、其時（へ）端的身を害せらるゝとも、それを爲へきか、なすまじきかを、能々思ふべし。たとへば白刄をふりあげて居る人あらんに、其人の前におのれが欲思ふものあらば、何心なく行てそれを取べきや。君子は外の事はなし。こゝに明なる故、白刄の下へは行かず、我らごときはこゝが昧して、實にきらるゝと分らぬゆゑ、うかりと取に行て、恥といふ疵を蒙る也。常々油斷なくこゝを能見分る事を工夫すべし。今予が工夫性に背くは、實に火焔に觸當がごとく思へり。目に背けば目が燒、耳に背けば耳が燒、口に背けば口が燒、手足身に背けば、手足身が燒る也。おそるべし〳〵。

（ロ）漆雕開。孔子の弟子の名。

ふことあたはず。こゝが聖人佛にても、ならぬ事はならぬ所なり。聖人佛仁慈より衆惡をいたみ給ふ故、心の及ぶだけ、小人衆生を敎へ導き給ふ也。これが成事を爲給ふ所なりとしらるべし。

○或問。論語に（ロ）漆雕開對曰。吾斯之未レ能レ信とあり。此所の注に、信とは眞實に其己に得るの性理、如レ此明白なるを知て、兎の毛の先程も、疑ひなきをいふ也。然るに漆雕開未レ能レ如レ此故、斯對られたりとあり。此對は、漆雕開道に信ふかきが故なり。此所は及ぶべき事にあらねども、我ら如きも今日性理を知り、道を學ぶからは、道を信ぜざるにはあらず。然れども身に行ふことあたはざれば少しも信ぜざるが如し。我ごとき者は、如何せば骨髓に徹して、道を信ずるやうに成べきや。

答、此問甚切なる所なり。予もかねて漆雕開の道に信厚きことを思ひ、何として如何地位にいたらるゝものにやと、疑ひ慕ふことありしが、其後予私に思ひよりし事どもあり。具にかたるべし。程子注に曰、古人見レ道分明。故其言如此とあり。今日誰にても學問に志せば、信なしともいひがたし。志すは直に道を信ずる

ごとく、困窮しても亂るゝ事をせぬばかりなり。本心を知らぬ前と、かはりある所をいはゞ、水の飲置とやらんいふて、いまだ來もせぬ事を案じ置をし、過去りし事を徊然と思ひ切なきとの二ッは、益にたゝぬと云ほどの事は、學問の功ほどには明らかなる。故に前後の思ひなく、今來るさし當りたる念の外なし。死ぬるといふ根がなければ、病氣のときも病苦ばかりなり。如此なるを、成ことゝしてならぬ事をせぬとはいふ也、安樂といふ二字に、眼をつけて見らるべし。安といふは前にいふごとく、腹の中に耻なきより安はなし。樂とは苦樂ともに、求なきより樂なるはなし。此樂はさして樂らしき事もなし。若少しも樂らしき事あらば眞樂にあらずと知らるべし。然れども又學者は、一向に求めなしといふにはあらず。如此の地にいたる事を求るが、學者のことなり。これ外にあるものを求るにはあらず。已にあるものを求る也。已にあるとは此樂をいふ。此樂は則天の我にあたふる所なり。道を學ぶ人は、此所をよく〳〵思ひ辨へ給ふべし。すべて同體にして、同體を惱す事は常なり。聖人も佛も小人も衆生も。其本同體なれども、小人は不善を行ひ、衆生は惡業を作る。聖人佛是をいたみ給へども、悉救ひたま

は心脾腎の三ッのいたみより、受るものを重しとす。其中にも心をいたむるより甚きはなし。其心をいたむる源を尋るに、脾腎をかねて、共に一箇の人欲より事起れり。正直なる本心に差ふて、無理非道の利欲を好みて、金銀貨財を貪れば、本心安からずして、或は災をうけ、或は病を發す。其貪る意より酒にひたり（イ）美食厚味を多くくらひ、遂に脾を破り、女色を愛して、淫亂放逸して腎を覆す。これらは皆腹の内に省て、恥かしき事どもなり。君子の樂は仰で天に恥ず、俯て人に恥ずと、孟子もの給へり。心の内に恥ることなき樣にと、心をつゝしみ、身をつゝしめば、私欲の心を惱すことを免がるゝなり。此外にたのしみあることを知らず。如此心身を守りて、其上に或は災をうけ、難病に逢ふともいかんがすべき。難儀なる事が、難儀になきといふ事もなく、病苦のいたみくるしみが、痛まず苦うなしといふこともなし。難儀に逢ひては難儀すべし。痛をうけては痛痛といふて苦むべし。我から作らずして、苦痛難儀に逢ふも力及ばぬ所なればせんかたなし。貧賤も亦復かくのごとし。我家業職分を怠らずして、貧賤なるはいかんがすべき。これならぬ事は、ならぬとしるところなり。君子は固に窮すとの給ふ

（イ）美食厚味。うまいたべもの、ご馳走。

巻中

○或問、身には病といふものありて、我が身を惱し、心には私欲といふものありて、吾心を惱す。實に本心を知れば、身も心も永く安樂なりとかや。本心を知れば、此二ツの惱みなくなるとは、何と明らめて安樂になるや。委示し給へ。

答、本心を知りて樂になる譯をいはゞ、先第一本心を知れば、樂をもとむる意なし。本心はたゞ何の理屈も味ひもなく、造作もなきものなり。故にたゞ成事は成と知り、成ぬ事はならぬと知るばかりなり、然ればならぬ事はそれなりにして、なる事をするなり。私欲の心を惱すは、私欲をせねば惱む事なし。然れば惱ぬやうに成事也。其成事と云は、君へは忠を盡し父母へは孝行につかへ、其外人に生れたる故、人の通する事は、皆なることとなり。病身にて忠孝がならぬの、貧賤で忠孝がならぬのといふ事はなし。病身ならば病身なり、貧賤なれば貧賤なりで、心のたけをつくす斗の事なり。病の身を惱すは、惱されねばならぬ事なれども、是も私欲をせねば、自ら病もすくなく、病身成る身は、殊に養生を能すべし。病

詮、こゝにあることを知らば、學問至約にして其功あるべし。凡聖賢の學問といふは、悉君子を學ぶ事なり。故に聖人は顔子の、不ㇾ遷ㇾ怒。不ㇾ貳ㇾ過を以て、好學との給ひ、又君子食無ㇾ求ㇾ飽。居無ㇾ求ㇾ安。敏ニ於事ニ而愼ニ於言ニ。就ニ有道ニ而正焉。可ㇾ謂ㇾ好ㇾ學也已ともの給へり。此外論語を看て察らるべし。聖人の學は、書の博覧、强記、廣才等は取給はず。こゝを以て知るべし。聖人の門には、君子の道を學ぶ者を學者とはいふなり。故に古今世に一文不通の學者あり。博識廣才の（チ）大庸人あり。學は道にありて、博識書才にあらず。君子の書は道を行はん爲の書なればなり。實に聖人の道を聞ざる人は、多く書を讀たる人を、君子の如く思ひ、大きに害を取ことあり。假令百萬卷の書を讀たる人なりとも、聖賢の意味を知らず、又少も惡心惡事あらば、大俗人なるのみならず。其は世の中の虎狼なり。可ㇾ恐可ㇾ憎。書を讀まぬ庸人は、人を害せること甚稀なり。讀ㇾ書庸人は甚世人を（ワ）惑亂させ、其害至らざる所なし。人々此所を能辨へて學者の名に泥み必しも惑ひたまふべからず。

（チ）大庸人。庸人は凡人といふに同じ。

（ワ）惑亂。まどはすこと。

(ヌ)赫々。はつきりすること。

(ル)内外六根。外は眼、耳、鼻、舌、身、意、内は喜、怒、哀、樂、愛、惡。

のなければ、何もなきかといへば、其用甚靈明にして、來るほどのことに應せぬことなし。又其應ずべき通に少も背く時は、直に腹の内に知りて内平ならず。さればとて肉眼を以て見るべき色形はなけれども、清虚なる性理の神體、其光を覆べからざるものありて(ヌ)赫々たることこゝを以て知らるべし。此性氣を合て全體にていふときは、本心といふなり。此心徳明潔なるもの故に、其名を明徳ともいふなり。皆是清淨を名とす。人々自己の本心、一點の私案なきとき、何を以て穢とせんや。本心元來清淨なり。我國にて秡を事とす(ル)内外六根秡て清淨なるときは、本然の直なり。直とは清淨の外、別に直あるにあらず。然れば聖賢の學問は、何ほど多くの書ありても、本心を全くするための敎にあらざるはなし。故に約の至極は、清淨なる本心に背かぬばかり也。本心則天理也。天理則禮也。さればこそ聖人約にするに、禮を以てすとはの給へり。顔子の學も、非禮勿レ視。非禮勿レ聽。非禮勿レ言。非禮勿レ動の外はなし。今日の人も學ぶにかはりはなし。非禮は皆不淨なり。視聽言動に不淨なくば。此外の事は求むべからず。さればとて聖賢の書いらぬと云事にはあらず。其書いかにも尊び用ひべし。實に其書の所

（リ）朱注。朱子の注釋のこと。

申合せ、忠信を主として、いよ〳〵道は學ねばならぬ事なりと思へり。
○或問、論語雍也篇に、君子博學ニ於文一約レ之以レ禮と（リ）朱注に約要也とあり。こゝを以て見れば、學文のことは博く聖賢のことを、見聞知に若はなけれども、肝要の約る所は、禮のみ也との給ふ事なりと思へり。然れば今日道を學ぶ者、如何せば禮一ツにつゞまるべきや、此一ツにつゞまる術を說聞さるべし。
答。善問なり。學問の肝要、唯此所にあり。故に我が石田先生、人に固有の性を知らしむるを、學問の初門とし給へり。此門に入らざれば、假令子貢の才辨ありて說とも、聞ゆる所にあらず。今汝は幸に、先生の敎誨に隨ひ。知レ性の門に入たる人なれば、予が志を語るべし。先肝要の約所とは約の至極なり。約の至極は則一なり。一とは則天理なり。然れば此一に約るは、此一に成ことなり。此一にならんと思はゞ、先獨を愼むべし。愼レ獨の約る所は、內に省て自欺ことなかれと禁むべし。腹の中に背かれぬ所あり、それに背かぬことなり。こゝが性を知らぬ人は聞えざる所なり。腹の內に背かれぬ所といふは、卽人々固有の性なり。此性と云もの色もなく形もなく、聲もなく臭もなし。是と指て言べき物なし。云べきも

（チ）卒爾。にはか。

を忘れてはならぬと思ひ（チ）卒爾にすまじと省よ。人に物を遣るには吝はなきか取には取まじきものをとりはせぬかと思ひ、能々省よ。學者はとにかくに、思はねば爲過ずるなり。孟子も耳目も思はぬゆゑ、外物のために蔽ひくらまさるゝなり。心は能思ふ故、人の人たる所をうしなはぬと仰られたり。予が常にいふ所の私案といふは私のことなり。思ふてこそ、公の道にはしたがふ事なれ。必しも思ふと私案と取違へ給ふべからず。これ學問の至要の所なり。かくのごとくして倦事なくば、終には思無レ邪の地にもいたるべきか。然れども思ひたるばかりにて身に學び行ねば信なきなり。論語爲政篇。子曰。學而不レ思則罔。思而不レ學則殆とあり。注に不レ思心に得る事なし。道ある人につき從ひ、已を正してもらふを、學を好むとの給へば、正しき人により付て、人事を學ぶべし。學び不レ習はからず人欲の私にしたがふ事あるゆゑに、危くして安からぬと警給ふ事なり。又衞靈公篇に、子曰。吾嘗終日不レ食。終夜不レ寐。以思無レ益。不レ如レ學也とあり。注にこれ思ふて學びざるものゝために、敎へ示し給へるとあり。何ほど思ふて道を求る心ありとも、習ひ學ばねば人の人たる至極の所には進まれぬ事なれば、此後各

たる通を、身に行ひ課するを信といふなり。先忠信の譯はかくのごとし。此忠信を心身のあるじとすとは、いか樣にする事なれば、此主とするもの形なき故、說聞せがたし。然ればおのづから主となる術をかたるべし。忠信は右いふごとく、心得て、其忠信に心も身も少しも背くまじと、屹と思ひつめて、思ひ通しにすべし。かくのごとくして、勤て息まざるときは、常に忠信主となるべしと思へり。孟子曰、誠者天之道也。思レ誠者人之道也とあり。又論語季氏篇。孔子曰。君子有二九思一。視思明。聽思レ聰。色思レ温。貌思レ恭。言思レ忠。事思レ敬。疑思レ問。忿思レ難。見レ得思レ義ともあり。扨前にいふしれたる道を隔てをするものは、我が身勝手なり。然れば聖人の教へにしたがひ、見るに付ては人欲の勝手にひかれはせぬかと立歸り見、能々思ひわけて、欲に隙をやるべし。聽にも亦かくのごとし。顏色も氣隨な事はなきかと、思ひかへり見よ。形もじだらくな事はなきかと思ひ省よ。言にも無理や僞やはいはぬか、人のいたみ害になることはいはぬかと思ひ省よ。何事にても爲ことあらば、非道はせぬか、無理はせぬかと思ひ省よ。合點のゆかぬ事あらば、打捨置ず思ひ出して、必問ふべし。若腹立事あらば、一朝の怒に身

光のあらはるべきや。是を思ひて勤給へ。
○或問、主二忠信一とは、いかやうに致す事にや。女中子ども衆にても、聞えやすきやうに、和解聞さるべし。

但し忠は心の實を盡すをいふ。信は身に實を行ふをいふ。主とするとは、心身のあるじとする事なり。

答、忠とは心の實を盡すをいふなれば、其心の實はいかやうなるが實ぞと、推極て見るべし。此實の所は、性を知らざれば聞えざる所なり。それをいかにといふに、我性を知りて見れば、少しも實らしきものなし。只天は天、地は地、高きは高く、卑きは卑く、人は人、我は我、有は有、なきはなし。借たるものはかりたるなり。貸たるものはかしたるなり。君は君、父母は父母、家來は家來、子は子なり。一々書付るに及ばずかくのごとし。これを誠といふ。是を言を待て、かくのごとくなるにあらず、いはぬ前からかくのごとし。少しも味ひなし。若此所に微塵も味ひあらば、早實にたがひたりとしるべし。然れば實とは誠に背ざるの名なり。盡すとは、其知れたる通を、かけめなく内に擇む事なり。其能思ひえらみ

ふ事をせずして、其上こゝに書通を能々辨へて、晝夜怠らす勤は、少しは孝行に本づきしともいふべきか。君子の道は級を踰ては進まれぬなり。何程の高山に登るも、麓より登り初るがごとく、先不孝をせぬが、孝行に進むの初めなりと知るべし。人と生れながら、中孝者といはれては朽惜からずや。不孝といふは人でなしといふ事なり。人の形は有ながら、人でなければ則禽獸に同じ。此身此まゝにて畜生とならんこと哀しきにあらずや。

　實に知るときは、改めねばならぬものなれども、彼人欲の私といふ雲に蔽るゝ故に、本心の善月是がためにかくれて、照す事あたはず。それ故に、我が先生是をいたみ、千歳不傳の教を興し、先人々の本心を知らしめ、善に進んことを願ひ給へり。本心を知るときは、我といふものなし。我なきときは混然たる一理のみ孝行の至極といふは、内外の分を忘れて、この混然に成得る事なり。然れば孝行の志ある人は、速に本心を求て知り給ふべし。我も其流の澤を蒙る故、又々人々に其本心を知らしめんことを庶幾のみ。又本心の光を知りたる人は、其光について信を厚くして、日々に新に磨給へ（ト）連城隋珠といへども、琢磨ざればいかで

（ト）連城隋珠。ふたつのたまの名。

右の荒ましは、親の身に成て、甚いやなる事故、急々に改たき所なり。是不孝の大略なり。具にはしるすにいとまあらず。

一家業に精を入、眞實にて非道なる利をとらざる事

一主君は則我が一命なり。商ひ買主是に類する事

一來祖を大切にして、諸親類を先祖のごとく思ひ、遠諱又は年々の忌日を勤る事、喪を務るごとく、内外清淨にして事る事

一其家に仕るゝ人は、子ども出入の者までも、皆先祖代々父母の手足のごとく思ひ、恤ふかく見捨まじき事

一其身奢を退け、何事も人に驕たかぶらず、朝は早く起て、夜は遲く寐ね、朝は父母のきげんをうかゞひ、夜は寐ねても安否を尋ね、養生よくて身健にして、苦勞を人にかはりて勤め、父母の衣服は身に快らん事を思ひ、食は口腹に安からん事を思ひ、志は慇ん事を願ひ、只大事〳〵として、父母の志に順はんを願ひ、勤てやまざる事此外具には事しげければ、大略をしるすなり。

右の荒ましは、孝行のはしともいはんか。前に書所、父母の大きにいやがり給

ん事を願ひ求め、深く思ひ入て事りなば、初て是までの不孝を、やめる程にはなるべきか。不孝やみなば、漸にして孝行に進むべし。先足もとより改ゆくべき事也と思へり。其不孝といふ事、我身に覺て知れがたき事にあらず。只眞實に改る事を求むる志しの、立がたきが凡人の憂なり。我が知る不孝の改たき品々、又孝行の品々、其大略を試のために爰に書記し侍る。

一家業にうとき事

一淫亂にて身持あしく、不養生なる事

一あしき人に交り、幷にあしき所へ行事

　但し行先と友とは、常に明白なるべき事なり

一短氣にて物事氣まゝにし、幷にけんくわ口ろんする事

一萬事僞り、人にむごくて憐なき事

一遊藝衣服道具普請、是等に好て疎漏なき事

一かりそめにも、私の事に金銀錢を遣ふ事

一先祖代々を麁末にし、或は父母に理屈をいふ事

（へ）康誥。書經の章の名。

かくのごとく胸にこたへて、間斷なきゆゑ、曾子は外にありても、度々內へ御きげんをうかゞひに戻り給ふを以て、いつ何時とも母の待かね給ふ事なく、母の是は今曾子が戻れば能がと思召とき、いつでも戻り給ふなりと知られ侍るなり。我ごときの口に申も恐れあれど、扨〳〵有難き孝行にあらずや。學問といふは外の事はなし。此所を學ぶばかりなり。則孝行は萬善の長なる故、孝弟は仁を爲ふの本とも仰置れたり。又大學に書經を引て（へ）康誥に曰、如レ保二赤子一。心誠求レ之。雖レ不レ中不レ遠矣未レ有二學レ養レ子而後嫁者一とあり。熟〳〵女子の子を育るを見るべし。十七八歲の女子は壯にして、寐る事も亦壯なるゆゑ、寐入ては雷が傍へ落ても覺えぬやうなるが、我が子に乳をあてがふを見るに、母子ともに能寐入て在ながら子は內飢る時は、口を以て乳をさぐり、母は覺ゆるとにもあらずして、乳を小兒の口へあたふるなり。實も康誥にのたまふごとく、心誠に求るのしるし明らかならずや。子は無心にして乳に應じ、母は無心にして子の飢に應ず。人元來かくのごとし。故に眞實に父母の心安からんことを求めなば、誰人か力足らずといはるべきや。誠にせざるなり。恐るべし哀むべし。何とぞ心誠に、父母の御心安から

りなりと知らるべし。其譯を一ツをあげていはゞ、曾子常に外に出て行給ふ事あれば、必行給ふ所を母へよく申置て出給ひ、行給ふ所を違へて、外へ行給ふことなし。然れば曾子は母の御心安からん事を、片時も忘れたまはず、外にありても今は母の何か御用はあるまじきか、御きげんは何とあるやらんと、思ひ暮し給ふ事、少しも止ときなし。それゆゑ外の用事は、いつにても手ばしかく仕舞て、隨分早く內へ歸り給ふなり。又外にて用事隙どる事あれば、その用事の間に、折々內へ見まひに歸り給ふなり。こゝを以ていつ何時にても、大かた母の御心の望みは、合ひ給はずといふ事なし。母指をかみ給ひて、曾子胸にこたへて速に內へ歸り給ひ、母の待居給ふ御心を悅ばしめたまふ事、此所をおして知るべし。親の子を慕ふは常なり。況や曾子のごとくなる孝子。さぞ母の慕ひ思召らんこと、思ひやられ侍る。指をかみ給ふとは、母曾子を思ひ慕ひ給ふ所の切なるをいふなり。されば母は大かた指をかみ通しにて、居給ふなるべし。又曾子の胸にこたへたるとは、母の今は何とかあらせらるゝぞ、何とかは思ひ給ふらんなどゝ、胸のひや〳〵するをさしていふなり。然れば曾子は常に胸にこたへ通しといふものなり。

ぬなり。其知らぬが天ばかりといふ所なり。曾子は其知らぬ天まかせして居給ふ人なり。譬ば母は心のごとく、曾子は身のごとし。今日誰にてもあれ、何ぞ心にかくのごとく爲たしと、少しも萌ときは、直に其萌に隨ひ身が働くなり。心が顏がかゆきの汚たるのと思ふがいなや、早速手がゆきて、或はかき或は洗ふ。又何かたへ行たきがと思へば、直に足が其方へつれてゆくなり。曾子の母の指をかみ給へば、胸にこたへて、直に歸りて、母の用事をかなへ給ふ事かくのごとし。曾子と母と二ツなし。曾子は私案なきゆゑ、天地あらんかぎりが、曾子獨の身と心なり。かくのごとくなるを、聖人事レ親者聽ニ於無レ聲。視ニ於無レ形とはの玉へり。こゝを以て曾子敬の至極に成得給ふを見るべし。

又問、いかにも汝のいふごとく、天地が身ひとに成得たらば、さもありぬべし。然れどもまさしく曾子と母と身わかれありて、母の心に萌所が、曾子遠方にありて、胸にこたへることは信じがたし。我がとくと信ずるやうに解聞さるべし。答、本心を知らぬ所より、此不審はさもあるべし。然れば汝のきゝ易きやうに、見え渡りたる所を以ていひ聞すべし。曾子は母の外に心なし。曾子の心は母ばか

る身には、甚入用の事故、及ばずながら和解事しかり。

〇或問、曾參ある時山中へ薪を取に行給ふに、母留主にゐたりけるに、したしき友きたれり。是に饗應をしたく思へども、曾參うちにあらず、元より家まづしければ叶はず、曾參歸れかしとて、みづから指をかみたり。曾參山にゐたるが、にはかに怔忡しける程に、いそぎ家にかへり給へりとなり。右指をかみたるが、遠き所へこたへたるは不審なり。御示し承度候。

答、かやうの不審を明に解んと思はゞ、先自己の本心を知るべき事なり。本心を知らざる人は、具に解あかすとも、聞えがたかるべし。其譯はいかなれば、人々我が本心を知るときは、我といふものなし。只天ばかりなり。それゆゑ孔子は一以貫レ之との給ひ、釋尊は天上天下唯我獨尊ともの給へり。こゝに通ずるときは、かやうの事に少しも疑ひはなきなり。古今唯一身なり。天ばかりといふは、地にいふもの天のうちにあれども、此地も則天の貫く所なれば、地則天なり。天地は則人の身と心とのごとく、身の外に心もなく、心の外に身もなし。身と心とわけらるゝものにあらず。然れば一度私案なしの明徳になるときは、身ありとも知ら

物各付レ物とは、右のごとく君父は君父、花は花、戸障子は戸障子、それ〳〵にわかれきつてあるものなれば、何事でも其物〳〵なりに隨ふをいふなり。不レ役二其知一とは私知を用ぬをいふなり。私知とは私案也。赤子には私案はなきなり。何にても私案が出ると、向ふ處のまゝに背くなり。故に何事にても、私案に落はせぬかと擇で私をせぬをいふなり。則意誠不動とは、右の如く私案なき所に率へば、直に赤子でゐるといふものなり。赤子は純一無レ僞ものなり。とあり。然れば此外に誠なし。誠にて誠をしらねば、動くべきやうなしといふ事なり。

意誠自定とは、右の如くにして、ひたと習ひ學んで、どちらへこかしても、どちらへやりても、私案なしの場に、すはりたるをかくいふなり。則心正とは右の通私案なしになり課せたるときは、明鏡の如し。物きたれば來るまゝ、去れば去まゝにて、不レ逆不レ迎至極の地にいたりたるを云なり。始學之事とは、道を學ぶものは、先此處を能々辨へて學ぶべしとなり。心正にいたる迄の次第が、學者の始に心得ねばならぬ事なりとの給ふ示しなり。右は性を知り、道を學ぶ志あ

（ホ）童蒙。幼くて理にくらきもの。こども。

ことを知ながら、此事を勤ぬは、劔を以て父母の身を害するに似たりと思へり。其罪を何とかせん。此外にまだ大なる不孝多かるべけれど、それまでは中々行とどかず、先々此五ヶ條を心の内に立省て、耻かしからぬやうに勤たし。然れども今に中〳〵勤らねば、指あたり是程の事は勤ると、りつぱにかゝれぬは、扨々淺猿く耻かしけれど、取つくらふて似つくらしう書ば、腹の中から僞じやと云て合點せぬゆゑ、耻かしながら有體の通を書は、まだしもつとむるうちならんか。

○或問、致レ知在レ格レ物とは、いかやうにするをいふや。

答、程子曰、物來則知起。物各付レ物不レ役二其知一則意誠不レ動。意誠自定則心正。始學之事也とあり。是學者の身にとりて至要の所なり。熱讀してこゝに力を用ひべし。能聞え易く說給ひたる語なれ共（ホ）童蒙の爲に、猶此語を和らげていはゞ、物來則知起とは、人々吾性を知りたるは赤子に成たるにあらずや。赤子は我とする事もなく、知とする事もなし。君に向へば君、父母に向へば父母、兄に向へば兄、花に向へば花、戸障子に向へば戸障子、此方より少しも用る事なくして、君父は君父、戸障子は戸障子、分れきつて有をいふなり。

一親類一屬出入する者、或は先祖父母の敬ひ給ふ人、親み愛し玉ふ人の子孫、是等に親みなく睦からずは、大切なる交さへ如此、あれでは諸人に見限らるべしと深傷み給ふ事。

一利欲甚しく、家居諸道具衣類に花美を好み、私に金銀を費捨、あるひは無理をして勝手つよければ、自ら人に惠なく刻無情ものなり。多は爭も是に起る。盛にしては、公の御法度も背やうになるものなりと恐傷たまふ事。

一色欲と酒とは、大亂の根本なり。戯たる色欲は云に及ばず、たとひ夫婦の間にても、已に顧て少しも不養生あれば、必短命ならんと哀傷玉ふ事。

一別て病身にして灸治をせず、食事を放肆にすること、是また短命ならんと哀傷給ふ事。

右五ケ條は家を毀、身を滅す大事なり。故に若年の時、性を知てより後は、及ばずながら勤ねばならぬと思へり。少し志ある人は、學問なくても、これ程のことは能する人あり。予大切なる敎を聞、性善の端を知りたるからは、孝行は得せずとも、此五ケ條の大不孝をすれば、生死のへだてなく、父母を傷めまゐらする

（二）ひた。ひと向にのこと。

性。所以事天也との玉ふ所にかなへり。是はいかなれば存其心と云は、私案なくして常に心明なる鏡の如くなるをいへり。養其性とは私案といふ私を以て本心の邪魔をせぬ故、本心安穏なるをいへり。是はこれ人食して腹に足ときは、腹中快何の思ひもなきに似たる故養とはいふなり。又事天と云は性が卽天なり。如此性まかせにするときは、天に率ふて違ひ背かぬ故に事るとは云なり。此所は聖賢の地位にして、及びがたき所なれども、是に力を用ゐて勉强が學者のことなり。然れば予も學者の端くれに連ならんと、勤る志はあれども、腰ぬけにて足たゝず、口惜きことなり。世俗にいふ道風の古事のごとく、蛙も（二）ひたと飛習へば、どこぞでは柳の枝に飛着くなれば、予も其如くに何とぞ五分壹寸ほどづゝ飛揚たしと思ひ、せめて哀〳〵も大段なる不孝を、先禁止たしと願ふ品々を、荒かたこゝに記す。

一家業は先祖の家業、父母の重じ給ふ大事にして、其上父母の心に、子が家業に無精なれば、賣買ともに得意方に見離され、先祖の家業をも滅すのみならず、子孫も流浪すべしと深傷み玉ふ事。

(八)惻隱。いたむこゝろ。

る父母にも、孝行のしかたもあることにや。
答、嘗て孔子へ、子路死に事ふることを尋ね給ひしに、答て曰、生る父母に能事ることを知らねば、死たる父母に事ることは中々知らるゝ所にあらずと、仰ありけるとなり。然ればこゝを以て知べきことなり。人の性は卽天也。父母の性も天なり。我性も天なり。故に孟子の曰、盡二其心一者。知二其性一也。知二其性一卽知レ天矣とあり。天は私案なきが故に、死生の別もなく、混一にもあらず、生は生、死は死なり。心を盡して此所を知るときは、向ふ所に應ずる(八)惻隱にしたがふ計なり。父母の性も我も同じ事なる故、情も亦同じことなり。されば朝目が開と、直に父母の天に應じて、惻隱が發し起んとするを、我ら如きは又そのまゝ、私案といふ不孝者が罷出て、未早きぞ今暫臥て居よと、差とめて起さぬなり。扨朝寢が終で、漸起て出るより、終日また寢まで、萬事萬端私案といふ。不孝者の裁に、ひきつけらるゝ事ばかりなり。如此兎角私案が邪魔をして、父母の情にしたがはさせぬなり。此私案にしたがはずして、父母に事へば存生の父母にも能事ふべし。死給へる父母にもよく事へらるべし。如レ此なるときは、存二其心一養二其

ば直に一氣應せぬ事なし。こゝを以て能々工夫あるべし。

問、萬物萬事現にある物は、一氣應ずるはさしあたり、聞えたるやうに思へり。邈大古の事も、心に浮むは猶不審なり。是は如何。

答。何ほど大古の事でも、書傳へ語りつたへある故、則予前に云萬物萬事の中にこもれり。其證は書にも留めず、聞もせぬことの、心に浮むといふことは無き也工夫あるべし。右の如く止ことを得ず語るといへども、如此算用づくにて、知らるゝ所にあらず。忽此物語も云て居れば、何方からやら湧出て盡ることなし。誠に無盡藏とやいはん。誰人も唯今の此身此まゝが即虛空に出生し、虛空に成長し居るなりと、私案を離れて知るとき、默して笑はるべし。少しも私案ならば、虛空にあらず、工夫々々。

流れいづる水のみなかみ尋れどこゝ源としるよしもなし
春來るといへども春に足もなしされどもたてる霞にてしれ

○或問、世人の人我父母存生ならば、孝行をもすべきに、今は亡なられし故、香花を手向るまでにて、孝行のしかたもなしといひて、後悔する人多し。但し死た

ゑに、花とよべば華が覺え、月とよべば月が覺え、愛宕とよべば愛宕が覺え、火爐とよべば火爐が覺ゆるなり。如此呼出す物が出るなり。呼出すは何とも思はぬ身へ觸るが如し。色々の念の起るは、さはる所が覺ゆるが如し。凡人は萬事萬物に應ずるを、念と合點してゐる故、凡人の念の根と云ば萬物が根なり。其證を言聞すべし。若人ありて虛空の中に始て生れ、虛空の中に成長せば、其時の念々はいかやうな物であるべきや。此所を工夫せらるべし。世の人皆萬物の中に出生し萬物の中に成長するゆゑに、萬物萬事に身應ずるを言と名け、心應ずるを念と名くるなり。萬物萬事なき所に出生し、其所に成長せば、何を習ふて言とし、何を以て念とせんや。本心を知りたる者は、こゝを以て念々皆無念にして、少しも疑ひなし。其疑ひなき譯を譬ていはゞ、庫の中に千萬無量の物を入置き、内に一人ありて、何にても入用の道具を、自由にするが如し。庫とは無我なれば、天地あらん限、つゝみ居るに譬ふ。千萬無量の物とは、萬物萬事にたとふ。庫の中に一人ありて、萬物萬事を自由にするとは、一氣の動くに譬ふ。如此なる故に、無我なる時は、天地の間に古今あるほどの事は、何でも手づかへすることなく、よべ

にや如何。

答、予も何が根やら知らず。然れども問人には答るなれば、知らぬものゝ根とやいはん。

問、知らずは根になるものは何もあるまじ。然るに何としてそれが根に成る事にや。

答、いかにも何もなきが根なり。其方は何もなしとする私案が、主と成てゐるゆゑ、何もなきものにならぬ也。それ故に此千萬の念々の起る、不審が晴ぬなり。何もなきが根といふは、一度自己の本心をよく知れば人は皆念はなし。此所言語の道斷たる場にて、いへば卽學ぶ人執着。とりつけは學ぶ人の心の病となる。然れども亦言ざれば工夫の助なし。止ことを得ず、人千萬の念起る譯を、具に譬を以て語るべし。人本心を能知れば色形もなく、只一氣の動くばかり也。故に無念にして能來るに應ずるばかり也。譬ば一身何とも角とも思はぬとき、頭へ物が觸れば、頭のさはりたる所に觸ると覺え、背へ當れば背が覺え、足か指端へさはれば、其所が覺ゆるが如し。無念なるときは、萬物の外に我なし。萬物皆我なるゆ

（ロ）徹上徹下。徹はとほすと訓みてつらぬくこと。

なることなりとも、花を見るとき、他の善を思ふは忽一己が立なり。是則己なりと知るべし。其己を直に改るを克と云也。改るとは花を見るときは花のみ、月を見るときは月のみ、食するときは食するのみになるを云なり。さればとて念の起らぬと云事にてはなし。花月を見れば、花月の縁により念は起れども、念々外へ流れぬを花のみ月のみとは云なり。元來天理のみなり。そこに違ふことあれば、其違ひを改れば元來の道なるにより、復とはの玉ふことなり。この所は高上の事といへども（ロ）徹上徹下の事にて、未熟の學者といへども、學に志すものは、こゝによらねばならぬ所なり。各力限に守るべき事なり。如此なるときは、無事有事も共にぬけめなし。無事には内洞にして、有事には人の思ふまじきを思はず、爲まじきをせまじと、能擇む故内を恥しめず、是亦克己復禮なり。初心には守ること不レ堅、擇ことあらけれども、隨分志を立、倦ことなくして進まば、人々の分限程は盡べき事なり。こゝが學者の肝要なりと思ひ兎に角に退屈せずして、學ぶべき事なり。

○或問、人色々樣々の念々起る、是は何が根になりて、千萬無量の念々は起る事

(イ)ありべかゝり。さうあるべき筈なるをいふ。

はせぬか、いはぬはずのことは言はせぬか、せぬはずのことを爲は爲ぬかと、心の内に立かへり見て、親は無我に生つけて給はりしに、我といふ身を出來しはせぬかと改めもてやまずは、平常正月元朝ぐらしといふものにて、一生氣がゝり、心がゝりといふことなしにくらさば、亦悦はしからずや。同じ志の友かくのごとく集り、多勢つれで正月ぐらしは、亦樂しからずや。

生れ得しもとの心にあら玉の春の始をいつも忘れじ「喜びて本の心をゆがめじと思ふにまさる祝ひやはある「親へ孝おのがわざをばおこたらじ樂を求めじ苦とて嫌はじ「はてもなく始もしらぬ本の身にあらたまるをぞ始とやせん「天に恥ず人に恥ずはあら玉のもとの姿とひとやいはまし。

○或問 克レ己復レ禮とは、いかやうに致し候事をいふや。我等ごとき學問なきものゝ、耳に能聞え安きやうに説て聞さるべし。

答、禮とは向ふ所のまゝを云。禮は則天理なり。天理の顯れたる所は(イ)ありべかゝりなり。おのれとは私なり。其私といふは、ありべかゝりに違ふを云。然れば己に克といふは、譬へば花を見て居るときは、花を見るばかりなり。たとひ善

爲學玉箒

手嶋信著
男上河正揚輯

卷上

○或問年始をあら玉の春とて祝ふは、いか成意にや。答、あら玉の春とは、去年さりてもとのはるに、あらたまるといふ事にあらずや。其もとに立歸り、あらたまりたる程、めでたき事はなし。故に年始をあらたまるとて、喜び祝ふなり。然ば即人の本心を知りて(一)明德をあらたにし、生れ得し始に立歸るより、まさりて有がたく喜ばしきことはあるまじ。祝ふとは悅びの志しをのぶるをいふなり。されば、先生の御かげにて、此喜びを知らせ給はりしは　かぎりなき高恩にあらずや。然れば此慈恩の虚しくならぬやうに、及ばずながら、湯の盤の銘のごとく苟に日々に新たに、又日々にあらためて、時々刻々に怠らず、我本心の光を背き

(一)明德。いさぎよく明らかなる心の德。

跋

此編は幼稚行狀のあらましを、先生談し給ふところの口教なり。予窃に思ふおそらくは忘却し或はあやまりあらん事を。故に其こと葉を書しるし、梓に鏤ひろく幼稚に授與する事になりぬ。よく熟讀しよく記憶しよく勤行せん人もあれかしと、是先生の欲する所なり。庶幾は幼稚の志を起さん事をおもひて書するのみ。

保　敎

は、是誠の人の道にあらずとむべなるかな。昔時唐の鄭義宗が妻盧氏は、世のきこえある程の婦徳を備へたる婦人なり。されば舅姑につかへて大孝を盡せり。或夜其家へ盗賊五十人斗、太刀かたな拔持太鼓を鳴らし垣をこえて家に入る。家内の人々恐れ迯かくれければ、姑獨り寢屋にゐけるに、盧氏劍を拔て姑を守護し側にゐければ、盗賊ども氣强き女かなとて打擲しけれども少しもたゆまず、劍をふりまはしければ、賊もたまりかねて迯去りぬ。事鎭りて後家内の人々立歸り盧氏にむかひいひけるは、何とて君獨りかく危きにゐ給ふといひければ、盧氏が曰人の禽獸と異なる所は、仁義有をもつてなり。隣里急難ある時は猶赴救ふべし。况姑の身の上において、何ぞ危を見捨遁べきや。若萬一姑の御身にあやまちあるならば、いかにして獨り生ながらふべきぞと申されけるとなり。まことに勤勞の精粹是に並ぶべきものなしとかや。

口教終

（れ）むげ。一向にの意。

（な）不遜。したがひへりくだらぬこと。

（ら）發用。はたらきのこと。

るとなん。

勤勞　勤勞とは、人の婦となりては我身を夫に任せて、少しも私の心なく、いかやうのくらうなる事も苦勞とおもはず、ちからをつくしつとむるをいふなり。

然れば女は身になす業、口にいへる言、夫の仰に背かず、舅姑に孝行を盡し家內の取廻し正しく樂をもとめず、心をはげまし少も怠りなく、奴婢又幼年なるものをいたはり引立取廻し、夙に起夜半に寢紡績裁縫のわざ怠らず、舅姑夫の衣服きよらかにすまし、見苦敷衣服を着せざるやうに心がけ（れ）むげに日を送り給ふまじ。けふの日は明日にいたること速なり。水はながれて歸らず。光陰矢のごとくにしてしばらくもとゞまる事なし。老たるもの二たび若くならず。幼なうして學事をせざれば、老て悔めども益なし。樂は極むべからず志は充べからず。奢に長ずべからず、樂極て哀情多し。志を充る時は（な）不遜なり。奢長する時は亡ぶ。凡身の行ひは其心の（ら）發用なれば、心正しからざれば行も亦正しからず、程子の言にも言行善なれども實情なき人

道にかなひ侍らざらんや。有がたき御志なり。

恭謹　恭謹とは容正しく、心を用ひる事ゆだんなく、身を大切に執まもるをいふなり。

されば女は順ふを道とするなればつゝしみ特におもし。萬の事心に怠りなく身もち正しく、驕りたかぶる事なきやうにといましめたしなむべし。婦となりて驕りたかぶる時は、子孫ほろび身を失ふ。婢となりてたかぶる時は咎られ身の立所なし。又おごらざる時は我身人に敬はれ、子孫ながくさかえ安穩なるべし。漢馬皇后は婦德すぐれましまして、帝ふかく（つ）稱擧し給ひければ、御子位につき給ひて後、御母かたの御一門に大國を授け、尊くなしまゐらせんと勅命ありけれども、后かたく辭したまひ仰けるやうは、親類時にあひぬれば必奢長じて、天下の災となる事ためし多し。時にあひたる幸なるに何の功もなくして此うへに大國をたまはり、天下の政を執行はん事、二たびみのる木の、其根かならず枯るゝが如しとて、終に我親類を引あげ給はざりけり。天子の御母なれども、宮中に糸繰機織所をこしらへ、御慰にし給ひけ

（つ）稱擧。ほめること。

儉約

儉約とは我心をかたへひきしめ、少しも奢こゝろなく、衣服飲食萬に恣にきまゝなる事をせぬをいふなり。

然ば居所はいふに及ばず、衣類とても恣にうるはしきを着ず、食事もつゝしみて美なるをはぶき、何事も身の奢をしりぞけ、家内の者を見そだて、或はうれひにあへる人貧しき人をもめぐみ、夫の心屆ざる所あれば、色をやはらげ聲を怡ばしうして、夫にかくと告て惠みあるべし。女は心小き故、物事吝なりやすし。吝は必奢より出るものなり。心しわく身の奢ある時は家を亡すべし。元の世祖の后順聖皇后は勤儉の御德ましまして、みづから苧をうみ布とし給ひ、綿をのべて紬としたまふ。糸すじほそくそろひあざやかなる事綾綺の綾に異ならず。常に其紬をのみ着給ひて錦を着給はず。萬事これにならひて、奢なく道を愼み給へば、萬民御德に化して下おだやかなりしとかや。其帝は韃靼國より出給ひ、大唐の帝となりたまへば、もとより后もだつたん國の御生れなり。ゑびすの國に生れ給へども、御志は聖人の道にかなはせたまへば、いづれの國にうまれいかなる人の子なりとも、志だにあらば聖賢の

（そ）見かへず。見かはらずの意。

女は心せばくして嫉妬ふかく、夫に不足を思ふ人多し。これ女第一のつゝしみ事なり。たとひ外に夫の愛する人ありとも、それをもねたまず、夫に少しも不足を思はず、却て夫の心をはかりて共に妾を愛しいつくしむ心あれば、夫この節義に恥て妻を（そ）見かへず、妾も亦此恵をうけてかろしめ侮る事あるまじ。漢の明帝の后馬皇后は天性才徳すぐれさせ給ひ、學に通じ、行ひ一つとして道にかなはずといふ事なし。物ねたみの御心ましまさずして王子のうまれさせ給はぬ事をのみなげかせ給ひ、才かしこく容うるはしき女あれば帝に奉り給ひもし、御寵愛あればかぎりなく悦び給ひ、其女を猶々したしくめぐみ給ひ、尊き御身なれどもいさゝかも奢給まず、はなやかなる御衣を着給はず、あらき御衣をのみ着給ひしとなり。又我朝の紀氏なりける井筒の女は妬心少しもなく、かへりて夫を大切におもひける心ふかゝりけるとぞ。

風ふけばおきつしらなみたつた山夜半にや君がひとりゆくらん

とよみたるこゝろいとあはれふかし。

(れ)隣里。となりむらのこと。

事をせぬものなり。漢の鮑宣が妻桓氏は極て貞潔なりし人なり。嘗て鮑宣貧身にて操潔よく勤學怠りなければ、其師其志篤を感じ、一人の女を彼鮑宣に妻す。既に嫁するの時、其やうす女の粧ひ富たる體にて、衣類調度美をつくして、從者なども夥しく目を驚すばかりなり。鮑宣是を見てさらに悅ばずして婦にいひけるは、我もとより貧賤なる身なれば、かゝる華美なる婦を迎ゆべきにあらず。又異方へも嫁し給へといひければ、桓氏こたへていひけるは元來我父鮑君貧しき身にて德をゝさめ給へるを感じて、我を君につかうまつらしめ給ふなり。さればとにもかくにも君の仰にたがふ事有べからずとて、美服を改て短布の衣裳を着、多の調度其外つき〴〵の侍女も皆〴〵親里へ返し、鮑宣とともにして小車をひき、姑に孝行を盡し、釣瓶を提て手づから水を汲飯を炊ぎ、婦の道を盡せり。(れ)隣里是を稱せざるはなしと聞及べり。

不妬

不妬とは夫に順ひて背き悖事なく、我身を正しくして、人を憐み、たとひ、夫の愛する所の妾ありとも、夫をもそねみたたまず、恨み怒る心なきをいふなり。

べし。これ父母に育られしその厚恩を報ゆるのいはれなり。勿論親類縁者ともむつまじく、下部を憐み幼者は他人の子といへども我子のごとく愛し、人にさからはずせは〳〵しからず、心温和なるべし。唐の崔懿の妻唐夫人は姑に事へて孝行なり。姑年老て歯こと〴〵くぬけければ、食事用ひらるゝこともなりがたかりしに、唐夫人毎朝堂に登て我養育の子は、おろそかにして、其乳をひたすら姑にすはせまゐらせしなり。かるがゆゑに姑數年の間飯粒を食したまはざれども、一だんとそくさいなりしとなり。されば姑天年終らんとする時、末期に人々集れるに對していひ給へるは、我年久しく嫁唐夫人の厚恩をうけ、つひに報ずる事なし。願はくば唐夫人子あり、我に事へられしごとく孝行にせば、我家ながくはんじやうすべしとぞ申されけるとかや。

清潔

清潔とはけがらはしき事を心に受いれず、邪なる事をおもはず、貞節をかたく執守をいふなり。

然れば女の身は、とりわけ男女のわかち行儀正しくうたがひをさけ、人に恥しめをうけず、身の取まはしきれいに心すなほにして、少しもうしろぐらき

しつとめねばつとまらぬなり。其勤らぬは彼氣隨氣任といふ大病なりと、かなしみおそれ、つゝしみて改め、きびしくつとめ給ふべし。つとむればつとまるなり。女子の重寶此上あるまじきかに候。

男女の童子口教の趣は、先幼稚の時より、常理を心に納得し、末々成人の後たよりとも成べき品の急務ををしゆ、嬰兒の身なれば事多くては覺えかたく勉がたかるべし。故に甚切近なる節用を少しく述て、小學に入の楷梯ともなれかしと思ふのみ。

附錄

司馬温公家範
婦人六德和解

柔順（やはらかにしたがふ）

柔順とは物やはらかにして慈悲ふかく、父母に順ひつかふまつりて、能其ちからを盡すをいふなり。

然るに女子は夫の家に嫁すれば、父母につかゆる事かなはず、されば親の家にあるうちは、殊に父母に孝行をつくすべし。夫の家に嫁しては舅姑につかふまつりて、苦勞をかへりみず、夫に順ひて志を盡し、老ては子にしたがふ

しなるをもゆるさずあらため、善は少しなるをも怠らず、積かさねよとの敎へにしたがひ、善心にすゝみ給はゞ終には神聖佛の冥加にかなひ、身の榮えはいふに及ばず、子孫もまた〳〵長久なるべし。

右の通能々御讀御のみこみなされ、常々御精に入られ御つゝしみ御つとめなさるべく候。女中の御孝行と申は此外なく候。よろづの不孝は氣隨氣任といふ大病より發る事にて候。それゆゑ何事も御孝行の御志さへ立候へば、其ひとつにてつとまらぬ事はなく候。しかればとにもかくにも父母の御恩のおもき事を御わすれなく、あしたに鏡をとり顏を御むかへなさるゝにも、此身も心も直に御兩親の御身心のかたみぞとおぼしめし、父母の御顏を拜する思ひになり、又手足は近く常にめにかゝりやすき所なれば、手足を見る毎にも、親の御身に疵をつけじ、御心に恥をかゝせ奉るまじと、明ても暮ても、起つも居ても、(た)時所諸緣につきてつゝしみ、念佛者の念佛をわすれぬごとく、父母を大切に思ひ給はゞ、現當において卽惡心も發るまじ、惡事も出來る事あるまじ、若勉らぬ事あらば、これを以て引くらべ、直に我が氣隨氣任なりと知り給ふべし。つとむるにつとまらぬ事はな

(た)時所諸緣ときところさま〴〵のゆかりのこと。

（か）かたまし。心のねじけること。

（よ）たばかり。思ひはかること。

く、夫の外男に近よらず、女のともなき所にをらず、常に人の口のおそろしき事をわするべからず。閑暇の折ふしは、つれ〴〵草、大和小學のたぐひ、身の教となる假名文を拜し見るべし。日用事多きものなれば、さやうの書物をも拜し見れば、氣のつかぬ事に氣のつく事ありて、大きに利益をうるものなり。女は陰を主とするゆゑ、大やう知惠くらきもの多し。故に孔子も女子と小人とは養ひがたし、近づくればあなどり、遠ざくれば怨むとの給ひ、又佛經にも一切の江河は曲れり、一切の女は必（か）かたましくまがれりとも說給へり。ちかくは徒然草にも女の性は皆僻り、人我の相ふかく貪欲甚しく、物の理をしらず、唯まよひの方に心もはやくうつり、言葉もたくみに苦しからぬ事をもとふ時はいはず、用意あるかと見ればまたあさましき事ども問はずかたりにいひ出す、ふかく（よ）たばかりかざれる事は、男の智惠にもまさりたるかとおもへば、其事あとよりあらはるゝをしらず、すなほならずして拙きものは女なりと。女中はつねにこれを見て恥かしく思ひ、日々心をみがき給へ。心はなどか賢より賢にもうつさばうつらざらんやとあれば、惡は少

（た）歩々行住座臥。物いひ、たちふるまひ、起きても、臥してもの意。

（わ）はしたに。はしためとは下女のこと。

なされては、身の置所なしと思ひ入、夫と同體の心となりて、たとへば、手足が目口の用事を、かくことなきがごとく、すこしも怠りなく、つかふまつるべし。扨夫を敬ふといふは、たゞ頭をさげ手をたれて、我が身を引さがるのみにあらず、第一の敬ひといふは、夫に恥辱を與へざるにあり。さればたゞ何とぞ一生涯夫に恥をかゝさじと心願を發し、（た）歩々行住座臥にこれを忘るまじきことなり。此心願にて女の道は大かた不足なくとゝなふものなり。先舅姑に不孝なるは夫の大恥なり。髮貌のはでなるより衣服の花奢たる、萬の行儀氣のつくつかぬまで少しも過てば皆夫の辱となるなり。一々はいひつくしがたし。推してしらるべし。誠に恐れつゝしむべき大事のことなり。また舅姑につかふまつるは、我が父母に事ふるごとく、心の隔てなく敬ひ愛し參らせ、何事にてもすこしも仰に背かず、隨分〳〵氣をつけていたはり大切にすべし。舅姑夫へのつかへさへよければ、それが直に實の父母への孝行といふものなり。必々我が舊里の事を思ふべからず。下女の（わ）はしたにのせられて、かりにも夫の一家一門をそしるべからず。尻がるにて言葉はすくな

の大事なれば、尊きも卑きも通じてせねばかなはぬ事なり。かやうの大事を物知らぬ人は却て下品たるやうにおもひ、衣服道具もきらめき、身持も花奢たるを上品たりともおもふは、何の辨へもなき故にて甚あさましき事なり。左樣の人柄は心ある人には大きに笑ひものとなるなり。恥かしき事にあらずや。眞實の上品たる事は、道にかなひて厚篤なる故、花奢を好むめよりは下品たりと見ゆる事多かるべし。此所をよく〳〵辨へて道にそむかぬやうにとつゝしみ、善人の笑ひものにならぬやうにしたまへ。

一女は嫁して後は、他念なく、舅姑夫に事こと、是まで父母につかへしごとくすべし。二度我うちへ戻るまじと御つゝしみなさるゝが何より大切の事にて候。

凡女子は我が家といふものなきゆゑ、嫁するを歸といひて歸といふ字を書なり。是則夫の家を家とするゆゑ歸といふなり。されば父母の家を出る時門火をたき、ふたゝび父母の家へもどらぬといふ儀式をするも、其いはれなり。然れば一度嫁してのちは、夫を神とも佛とも賴み、貴び敬ひ、この夫に見は

ぬかたが却て賴母敷きものなり。

一神佛の御供ものは疎にせまじき事なり。其外何事も母さまの御助をし、御苦勞のすくなきやうに、油斷なく御氣くばりが大事にて候。

惣じて飯をたき、汁菜の料理をするをいやしき業のやうにおもふは甚誤りなり。すべて女に四つの德あり。則婦言、婦德、婦功、婦容といふ。女は此四つの行ひ一つかけてもならぬものなり。其第一婦言とは女の辭なり。ものいひ鮮に口のきゝたるにはあらず。能言葉をつゝしみていふこれなり。二つに婦德とは女の德なり。才能人にすぐれたるにはあらず、起居靜にしてさはがしからず。身を顧て人の知りても恥る事なきやうに愼むこれなり。三つに婦功とは女の業なり。たくみなる事人にすぐれよといふにはあらず、常に織縫の業に怠らず、客人などあれば食物などいさぎよくして馳走するの類これなり。四つに、婦容とは女の貌かほよく姿のうるはしくある事にはあらず、湯あみ髮洗ふ事怠らず、身持穢らはしからず。朝とく髮結ひ、常にかたちを齊へ取亂さぬをいふなり。此四つはこれ女の大成德にして身を脩家をとゝのふる

（ろ）むざ。はばかりもせずの意

されば女は三從の道と申事の候。幼稚の時は父母に從ひ、嫁しては舅姑夫にしたがひ、老て夫なくなりて後は我子に從ふものなりと小學にも敎へ給へり。又女は外をいはずとて、殊に表むきの事は夫の任なれば女は少しもいらふまじく、さしでまじき事なり。しかれば幼稚の時より少しも氣隨氣まゝの擧動ひはかたくせぬものなり。凡氣隨の品事多ければ、さしあたりつゝしまでかなはぬ品の大やうをいはゞ、先○父母の仰を能きゝて背かず○女は十歳ばかりにもなりては、中戸より外へ（ろ）むざと出ぬものなり○身の行作はいふに及ばず、言葉づかひ尋常にして物やはらかなるべく○子細らしきは男めきてあしゝ○品過たるはいやらしく聞にくし○流行言葉無用たるべし○容貌はでならず、いやしからず、娘らしくをとなしきがよし○頭のかざりも目の立たぬやうがをとなしく見ゆ○被ものなきはいやし○なにごとも當世風はよからぬ人のする事なり目立てあしゝ○女の業は手習うみつむぎ糸くり綿つみたちもの織縫、料理煮燒加減大やうかくのごとし。右の手わざ不調怯なるは女の大恥なり。勵て覺えしならひ給ふべし。此外の遊藝は、下〴〵の身は知ら

物をとりわたしせず、女は女のなき所またはくらき所に獨おらずなどゝ小學にも説たまひたるごとく一切のことを此心持にて推はかり、女の身持を行儀よく嗜をいふなり。かやうに身持たゞしければ、おのづから人のうたがひをうけ、災難をうくるやうなる不孝は出來ぬもの也。たとへば男は火のごとく女は薪のごとし。近よれば必あやまちやすきことを眞實に辨ふべし。其辨へは人〳〵の本心理非あきらかなるもの故、寄まじへ受まじき事は心の内に能覺えあるものなり。其覺えある善心に背くまじき事なり聖人も佛も男女のあやまりて亂れやすき事をかなしみ給ひて、男女別ありとをしへ給ひ、邪婬戒といふいましめもあるなり。これ女の子達幼雅より能〳〵覺えしりてつゝしみ給ふべき至極の肝要なり。若この行儀をあやまれば、人面獸心とて、顏貌は人に似たれども人の本心をうしなひたるゆゑ。生ながら畜生といふものなり。甚かなしき事なり。恐れつゝしみたまへ。

一女は順にして、父母舅姑夫などにしたがひて、何事もわれときまゝに取はからひせぬものにて候。此こと屹と御つゝしみなさるべく候。

手島道話 前訓（女子之部）

口教

一惣じて是まで四冊の口教改めて女子の事とは申さねども、女中は皆女子の事なりと御聞なさるべく候。凡つね〴〵の教誨男女ともかねたる事多きものなり。必男子のことばかりと御聞なされ候へば、大きに御心得違になり申候。則今日の口教は、専ら女のこたちのために御はなし申候へども、是とても男の子達は女中ばかりの事と御聞なされず、男子の身に用ひて宜しき所は、男子も同じ事と思召身に御引うけなされ候て、御聞なさるゝがよろしく候。

一第一女は別といふ事をよく御辨へなさるべく候。

此別と申事は男女の差別と申事にて候。男は男のやう女は女のやうに其差別正しく、行儀をつゝしみ候事を申なり。しかれば幼稚の時より男女の亂がましき事を恥かしく思ひ、近よりて座する事をせず、男の手より女の手へ直に

て萬善なると申事の候へば、世に父母へ孝行にて外事あしき人は終になき事にて候。此所をよく／＼御のみこみ御おぼえなされ、随分／＼御精を入られ御両親さまへ御孝行に御つかへなさるべく候。近比或人の狂歌に、

（ぬ）無二膏や萬能膏の奇特より親孝行は何につけても

（ぬ）無二膏。萬能膏。共に膏薬の名。

色事のはなし又は噂○大口○男女の間にてむしき戯たる言○むごき言○高ぶりほこりたる言○いやらしく氣味わるき言○意地わるき言○無理非道なる言一々所作は申に及ばず。

此外かやうなる言所作其品多かるべし。悉くいひ盡しがたし。自身心をつけて吟味し習ひて愼みなさるべく候。とかく萬事堪忍が大事にて候。或人の狂歌に、

堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬ堪忍するが堪忍

此歌の心になり候はゞ、堪忍袋の緒がきれると申事はなき事と御心得なさるべく候。此袋の緒さへきれねばあしき事は出來申さず候。誠に有がたきをしへにて候。

右是まで段々御はなし申品々は、實に御幼稚の御覺えなされやすく、御つとまりなされやすきために、人の道のかたはしをすこしばかり和解述る所なり。くはしくは小學を始として、和漢の書物に出たれば、漸々と御見きゝなされ、御孝行の通に御すゝみなされ候樣にと偏にこひねがひ申候。一孝たち

御兩親の御代りになる御人あるものなり。其かはりに御立なされ候御方を御兩親と思召候て、大切に御つかへなさるべく候。

凡御兩親なき御方も其御かはりには、祖父樣祖母樣かあるべし。それもなければ伯父樣か伯母樣か、兄樣か姉樣かあるべし。それもなければ又古き手代歟か、或は御世話人あるべし。是其御人則御兩親樣の御かはりなり。尤手代衆などを親と申にてはなく候へども、御親達の御心に成かはり、世話をしてもらふからは、直に御親達とおぼしめさるべく候。然れば屹としたがひ、大切に御つかへなされねばかなはぬ事と御こゝろえなさるべく候。

一何にかぎらず、心に是はあしきとおもふ氣のつきたる事は、かたくいはずなされぬものにて候。

これ輕き事にあらず。御幼稚の時より御成人なされて後までも學問の至極と申は別の事にてはなし。只此あしきと思ふ事をいはぬとせぬとの外はなく候扨まづ其せまじきあらましを左にしるす。

凡主親兄夫などへ口ごたへ○惣じて人に對して氣隨なる言○あるまじき僞○

能毒を擇ばず、妄りに物食ふこと。

又はあはれ食などはせぬなり。飲食は身命をつなぐ大切の寶にて、禮義のはじめこれより發るよしなれば、かまへて飲食の事に不作法なるは大きにあしき事にて、其上脾胃をそこなひ病者と成なり。又身の怪我をせまじとたしなめば、これもおのづから喧嘩公論の爭ひはせぬものなり。此身はいふにおよばず、髮爪までも皆親の御身の預りものなれば、これをすこしも毀はぬが孝行の始なりと、孝經にも說置せられて候。

一善惡とも報ひの來るは、のがれぬ事と御辨へなさるべく候。

むかしより申ならはせしごとく、仰向て吐唾はかならず天には吐けずして、却而落かゝりて身を穢すといへり。孟子も自侮て後人これを侮り、自毀て後人是を毀と仰られしなり。されば惡事をすれば忽凶事來るなり。善事も同じ事にて、善事をすれば亦吉事來るなり。是即形と影のごとくなるべし。然れば此段を御辨へなされ、報はおそろしきものなれば、必〳〵少しもあしき事はなさるまじく候。

一此座も大勢の御子達なれば、定而御兩親ともなき御子達もあるべし。それは必

一毎月一度灸をすゆる事、これ御孝行のためと御心得なさるべく候。

是は何故なれば、毎月灸を御すゑなされ候得ば、父樣母樣ともに此方の子は灸をよくするゆゑ疫病もうつるまじ、食あたりもあるまじと安堵なさるゝなり、畢竟あつさはしばしの間にて、御兩親の御心の痛を易くし、大きに御孝行になり申候。其上孝行にするかせぬかは、此灸がよきためしにて候。若灸が御すゑなされともなく成候はゞ、早不孝者に成たりと御知りなさるべく候灸をすゑるは何でもなき事なり。それさへすゑるからは、外の事なにとして孝行なるべきと、御あきらめなさるべく候。灸はこの身の病のためと存じすゑる候へば、きかぬ時はすゑぬ樣になるものなり。格別のあたりさへなくば、灸をすゑてきかずとも、御兩親樣の御氣やすめとおぼしめし御すゑなされ候がよく候。

一食物飲物にて腹をそこなはぬやうにし、又惣體身を怪我せぬやうに御心なさるべく候。

先飲食にて腹をそこなふまじと思へば、おのづから(リ)いかもの食したり、

(リ) いかものぐひ。

（ち）あはう。阿房宮とて、秦の始皇が造りし大なる、わけなき宮殿の名にて、愚鈍のことをいふ、東京にて馬鹿のこと。

其くせづきやみがたく、それが漸々とあがりて上手になりたるのにて候。然れば幼稚時より末のつまらぬ事をしらぬものを下愚と申候。たとひ表は發明に見えてもとしゆきて、後の難義になる事を知らぬは、肝心の底が（ち）あはうなるゆゑにて候。此あはうにならぬやうに、御つゝしみ肝要にて候。

一外にて物をもらはゞ先持歸りて、父樣母樣へ御あげなさるべく候。又人に何にても、物をかすにもかるにも遣るにも、もらふにも、皆其度々に御兩親樣へ御たづねなされ、御ゆるしをうけて取遣なさるべく候。

これ聖人の御教に、孝行なる子は、私の財寶といふものはなし。皆々御兩親のものなりと知れよと仰られて候。其譯を御合點なさるべく候。元來人々子たるものは、我が身とても御兩親のものにて、我身にてはなし。されば財寶はいふに及ばずと申事を御辨へなさるべく候。

右之通能々御熟讀なされ御のみ込、御覺え御勉可被成候。

口教四

(とノ二)好事。すきゝらひのこと。

つかはるゝ人の親は王子を可愛おもふなり。されば隨分憐愍ふかくいたはりてつかふべき事なり。其上惣じて人をうちたゝきはかたくせぬものなり。其譯はむかし或田舍の大家にて、手代小童を呵るとて、何心なくたゝきしに、打所あしかりけるか、其小童速座に死したるを、病氣にて死したりと僞をつき、かくし置たりしが、其後僞あらはれ殺したる手代は死罪になり、主人の家は御追放になりしといふ物がたりをきゝし事あり。たとひ禁忌所を打ずとも、不圖其人の死する時節に打たゝき、仕合さん事もはかりがたし。是は人の命にかゝりあやまれは、兩方とも命を失ふやうにもなる事なれは、きつと恐れつゝしみて、かりにも人を打たゝきなさるゝ事はきびしく御たしなみなされ、せぬ事に御心得なさるべく候。

一衣服食物に(とノ二)好事を申さぬものにて候。

大かた成人になりて惡性事に錢かねつかひ、色〳〵の身の奢榮曜をしたがるやうになり、終には先祖の家をも賣、非人乞食となり飢寒し、のたれ死もしかねぬは、偏に其はじめ幼稚の時、のみくひ着ものゝ、好事をいひ習ひし、

（へ）かんだ。かためのこと。

（と）濕の病。ばい毒、今の花柳病のこと。

立よれば力を入ずして善人となるにうたがひなしと御辨なさるべく候。

一人のかたわなるを見て笑はぬものにて候。幷に外より人の來りたる時又歸る時など、かたかげにて笑はぬものにて候。

一むかし和漢ともに、人の見めあしきを笑ひ、ちんば（へ）かんだをわらひて、其笑はれたる人怒て、わらひたる人を害し、剰家國まで亡ぼしたる事ためし多き事に候。ちかく前かた我が存じたる人（と）濕の病にて鼻おちたるが、人の見て笑ふを甚無念におもひ、根ふかく意恨に思ひたる人あり。誠におそろしき事なり。又人の出入するを見て笑ひ、意趣におもはれ難にあひたる人もあり。これ殊更女中に多くある事なり。かたくつゝしみて必〳〵さやうのとき笑ふまじき事に候。

一女衆にても、小童衆にても、すべて御つかひなされ候人を、むごくし別て打たゝきなどは、かたくなされぬものにて候。

我が身をつめりて人の痛さを知れと申事、ちかき手本にて候。つかはるゝ人、も皆人の子なり。然れば、われを親のかあゆく思召るゝと同じ事にて、又其

惣體幼稚時分より、男女一所へ集る事恥かしく思召つけなさるゝが、至極によろしきことにて候。左様に幼少よりなされつけたる子供衆、御成人なされ候て、惡性に御なりなされたるは、すくなきものにて候。行儀はとかく幼少の時より習ひが大事にて候。男女のあやまりは人間の大罪にて、一命にかゝり候災難も起り申根本にて候まゝ、聖人佛もこれをかなしみ強く、行儀を御立置なされ候事に候。是にて大慈大悲の思召有がたきいはれを、よく〳〵御聞わけなさるべく候。

右之通能々御熟讀なされ、御のみ込御おぼえ御勉なさるべく候。

口教三

一惣體惡き所へ立よらず、惡き人に御交りなされまじく候。

人は善惡の友によると申古人の御をしへ、少しもちがひなき事に候。忽火の傍へよればあたゝまり、水のはたへよればしめるなり。泥の池へはまれば身よごれ、風爐へいれば垢おちて奇麗になるがごとし。然れば善に交り、善に

(ほ)大口。みだりなる物いひのこと

りて、左様の事かたくなさるまじく候。これも僞と同じ事にて幼少より殺生をいたしつけ候へば、後にはものをころすこと上手になり、甚いやらしくおそろしきものになり申ものにて候。物の報ゐと申事は、かなしくおそろしきものにて候。罪科のむくゐは打は鳴る響のごとし。愧き事なりと思召るべく候。

一惣じて人のつゝしみて申さぬ不禮なる(ほ)大口をかたく申さぬものにて候。幼少の時より大口を申習ひ候子供衆は、後には大かた惡性になり候て、親ごの勘當をもうけ候やうになりたる子達、是まで多く見および申候。是子供衆の時分に行儀のあしき癖づきにて、人に不禮を申憚る心をうしなひつけて、終には哀しき身になり申事に候。然れば御互に幼稚の御方へ御氣を付られ、假にも〳〵少しにても、大口に仰られまじく候。甚わるき事にて、恥かしき事と申譯を能〳〵御ぼえ置なさるべく候。

一男女のわかりは大事のものにて候間、幼少のときより男の子だちと女の子だちとは、一所に御あびなされぬものと申事、よく〳〵御きゝわけなさるべく候。

右の外も此二色にて御推量なされ、とかくわるき事と御氣の付たる事はなされぬがよく候。

一殺生をする事は甚あしき事にて候。

凡殺生と申は定りたる料理ごと、あるひは薬ぐひなどに魚鳥の命をとり候事にてはなく候。只無益に物の命をとり、我はいためくるしめ候事と申候。然ればかりそめの弄びにも、生類をかひてつなぎくるしめ、又たとひかはず候ても、犬を打擲走らかし、鷄鳩鼠などをとらへ苦しめ、虫けらの頭をとり、羽をぬき、あらゆるわるさをする子ども衆もあるものなり。是全く聖人佛の敎をきかぬ故なり。一切萬物はみなもと直に我が身なり。草木虫魚鳥獸生あるものは猶以て我が身にとりて近く重し。然れどもそれをいためて覺えぬは、今の身にても我が髪のはし爪のはしは、我身の內なれどもおぼえぬに同じ。しかればさしあたりいたみは覺えねども、我が身のはしに違ひはなし。夫を毀傷いため殺すは、我身をやぶるに似たれば、深重の罪科なり。現在の我が身の命をおしく、いたみのいたさこたへにくきにて、引くらべおもひし

(は)やみなまし。すみませうがといふこと。

(に)さもし。鄙劣「ひれつ」なこと。

上手になり、僞のあがりたる者が一切の惡性事をしたり、或は盜賊をし人をも殺すやうになり申候。わるき事をかくして人はしらぬとおもふとも、我が腹の中に我がよく知るなり。此しる心が直に神樣や佛樣と一體なり。然ればいはぬはずせぬはずの事を、云たり爲たりするは、神佛の御きらひなるゆゑ心にうけぬなり。されば此本心の氣味わるくおもひてうけぬ事は、かまへてかりにもいふたりしたりせぬものなりと、御こゝろえなさるべく候。古歌に

いつはりも人にはいひて(は)やみなましこゝろのとはゞいかゞこたへん

一惣體遊び事にもあしき事はなされぬものにて候。そのあしき遊びごとのあらかた其品をいはゞ、

一あないち、其外諸勝負事、錢あつかひかたくなされまじく候。第一博奕の兆にもなり候て、こゝろもち(に)さもしくなり、其上友達爭ひ起り、互に氣をもみ、剰恨疾もみな此勝負より初り甚あしきものにて候。

一何事にても人にかくしてする遊び事はかたくなさるまじく候。これは前に申候僞と同し事になり申候。

ぶんには、とゝ様かゝ様の御世話にならぬやうに、てらへゆけよみものせよと仰せられ候はゞ早速御出なされ、けふは又用事があるやすめと仰せられ候はゞ御やすみなされ、とにもかくにも一言もそむかずとゝ様かゝ様の仰せのとほりになされ候が、此うへもなき御孝行にて候。扨又をぢい様をばゞさまはとゝ様の、又とゝ様かゝ様なれば、猶もつてだいじになされねばならぬことにて御座候。

右の事どもよく〳〵御覺えなさるべく候。

口教二

一何にかぎらず、僞をいふたり爲たりはなされぬものにて候。是人間第一のたのしみなり。人の本心は正直なるが生れつきにて候。それゆゑ人々すこしにても僞をつくか爲がいなや、忽我が腹の中に急度氣味わるく覺えがあるなり。はづかしくおそろしき事なり。盗人我は人殺も幼少の時は同じ人にて、外にたねのかはりたるにてはなく候。皆此うそつきならひ段々

(ろ)さかはず。さからはぬこと。

これもゆけと仰せられ候時は手を御つきなされ、參てさんじましょと御申なされ御出なさるべく候。御歸りなされ候時もまた／＼手を御つき只今歸り候と御申上なさるべく候。御遊びも久しく外に御座候へば、親ご様御あんじなされ候間折々御歸りなさるべく候。

一御ふたりの親ご様の仰せられ候事は、何事にてもあいと速に御返事なされ候てきげんよく仰せ付られ候通になさるべく候。さやうになされ候へば御成人なされ候て後々御仕合よろしく候。親ご様の御心に御そむきなされ候かたは、後々御不仕合にて難儀をなされ候。

子どもの時の孝行と申事は、何も外の事にては御座なく候。先あさおきるより晩に寢るまで、とゝ様かゝさまの仰ある事をあい／＼と御申なされ、口ごたへせずとゝ様かゝ様の御さしづの通なされ、扨衣服、三度の御飯、御柴髪結事、手水つかふ事、此外何にてもあい／＼ときげんよく御返事なされ、親ご様の御氣に(ろ)さかはず顔つきをわるうせず、かりそめにもなかず、朝から晩まできげんよく御あそびなされ、又手ならひよみものに御出なされ候じ

ぢゐさまの御かげにて御座候。御飯を御あがりなされ候事は、つひはならぬ事にて候。おとしのまいらぬうちにおめしをあがるはどなたさまの御かげ。もつともたちまちおやご様がたの御かげがなければ、あがられぬといふ事をよく／＼御かんがへなさるべく候。それゆゑ御佛檀にて御禮を御申上なされと申事にて候。則此内に御存生の親ご様がたへの御禮もこもり申候。

一三度の御飯をあがるときと、寝しなと御祖父様御祖母様とゝ様かゝ様へ手を御つきなされ候ておめし御あがりあそばされ候へ。御寝なり候へと御挨拶なさるべし。

これも親ご様がた先へたべ候へ。先へ寝候へと仰せられ候はゞ。其時は然らばおさきへたべ候と、手を御つき御斷御申上なされ候て、御先へ御あがりなさるべく候。寝しなも又その通になさるべく候。何とも仰られず候はゞ御まちなされ候て、御一所に御あがりなさるべく候。

一いづかたへも御出のときは、手を御つきなされ候て、とゝ様かゝ様へ御たづねなさるべく候。

（い）おひなり。おきること。

手島道話 前訓（男子之部）

手島堵庵著

口教一

一朝（い）おひなり候はゞ手水を御つかひなされ候て、まづ神様を御拝みなさるべし。

これは此日本は神様の御國なれば、神様の御影にて皆〳〵御飯をたべ、衣服を着申事も是みな神様の御かげなれば、一はんに神様へ御辭義をなされ候て御禮御申上なされ候が第一にて候。

一次に佛檀へ御むかひ御拝みなさるべし。

これは皆様の御先祖と申て、曾祖父さま曾祖母さまや又祖父様祖母様なども御佛檀のうちにござらせらるゝゆゑ、是又おほをぢゐ様がたのおかけにて皆々様御成人なされ、今日御飯を一度もかけずに御あがりなされ候事は、おほ

自跋

我れ愚昧を不レ顧、古反古を書き集めたる畢竟は、別の儀にあらず、人を人といたしたき志也、如何となれば、三教共につゝまる所の教の要を得心する時は、生死は言ふに及ぼず、名聞利欲もはなれ安きことあり、是を導かん爲に、心をつくして終る、明師のこゝろざしは、實に有難御事にあらず哉、世の人々此志を感じて、公の道を守りて、士農工商各正直の道にうつらしめんとおもへば、腹ふくるゝゆゑに、腹すかしのために、此反古を書き集めて又散すは、いらざる世話と云ふものか、見る人のこゝろにまかす。

兼葭慈音尼

なしまず、親子にても贔負もせず、他人にても疎略にもせず正直なる所は、神にも恥ぢず、是れ即ち無知の聖人なり、成長しても、其正直を基にして(二七)虚靈にして、時によろしき所の義と共に順がはゞ、學德成就したりと思はるべし、無知の正直と、時に宜しき義に順ふ所、工夫あるべき所に候、譬へば非情の草木が虚靈の心に情を發するが如し、依て萬物一大極、こゝに至るが要めなり。

道得問答終

(二七)虚靈。虚心のこと。

云ふ教あり、皆我が不直と迷ひと邪道との病を治せん爲なり、此つたなき病を治することは、知らずして飽くまで食ひ煖かに衣、放逸にして人の痛をしらざるものは、神明の罪人なり、天罰のがるゝ所あるまじ、おそるべし、愼むべし（二五）周禮に曰く、室は高きにあらざれども、漏らざれば便ちよし、衣服は綾うすものにあらざれども、和暖なれば便ちよし、飮食は珍しきそなへにあらざれども、一度飽けば便ちよし、又論語に、君子は食飽かん事を求むることなく、居安からんことを求むる事なしとのたまへり、此味ひを知るべしと、我が師のいましめおける所なり、世の人々此味ひに心を付けられ玉ふべし。

大人は赤子の心をうしなはざるよしを問ふの段

我れ先生に問て曰く、大人は赤子の心をうしなはずと申す事は、如何いたしたることに候哉。

答へて曰く、赤子はしれたるとほりに、無知なるもの、暑うも寒うもなく、飢ずして腹も能く、腹も痛まず（二六）二便の汚れも下のあんばいも、よろしければ、ぐやすやとして居る者なり、私心なききゆゑに、譽めてもよろこばず、譏りてもか

（二五）周禮。書物の名。

（二六）二便。大小兩便のこと。

又よこしまなきやうに、人の道をたづねる人もすくなし。

上に聖德おはしまして、四海の中を御心にして、治め給はる德化の驗萬民流通し及んで、天下よこしまなく、公の道にあひ奉る、是れ今卽ち神代そのまゝに、天下泰平國土安全の御代萬々歳と、奉レ祈也、此神德そなはらざる君を無德の暗君と申すなり、下々やつ子ごときのものにても、此身このまゝにて足ることをしり奢りをしりぞけ、約やかに行ひ、熟味して心ざしをたがへず、漸々以て聲も臭もなき、上天の德に至れば、かたじけなくも、淸淨神なり、何の災かあらん、善を好み惡をにくむは、人の性なり人の性に悖どる時は、菑必その身に及ぶと云ふ、書の太甲篇に、天の作せる災は猶ほ遠くべし、自から作せる災ひは不レ可レ活とのたまへり、神道の秡除と申すは、今より我が心を淸淨にして、身によこしまなきやうに、はらひたまへきよめたまへとの御事なりとかや、是れ則ち佛道にてはざんげの事なり、過ては改むるにはゞかること勿れと、論語の文にも見えたり、しかれば三敎一致と心得て、畢竟の處は善を勸め、惡を懲さしむるをしへの外なく不直に因て正直の敎あり、迷ひに因て悟ると云ふをしへあり、邪道に因て正道と

それ人は、其秀を得て最も天地の靈にして、萬物の長たり、故に（二四）五常五倫の道を明らかにして、君臣父子夫婦兄弟親類朋友にむつまじく、己れ己が家業に精を入れ、事々物々よこしまなきやうにすべし、聖人は其秀の秀を得て、以て全く是を行ひ玉ふ、このゆゑに天地とその德を合せ、日月と其明を合せ、四時とその序を合せ、鬼神とその吉凶を合す、堯王は君の道を盡し玉ふ、舜王は孝の道をつくし玉ふ、周公は臣の道を盡し玉ふ、學問の道をつくし玉ふは大聖孔子とかや、是れ皆性のまゝにて、上下天地と流れを同じうす、聖人は人倫の至りなり。

是れ則ち神道の神明の德に至る所なり、佛道にては生如來と申す所なり、明理本源の神は、神と人と差別なしといへども、汚穢不淨の人欲を去つて、吾が身を主宰したまふ、神明を眞實に知らず、故に身を修めて、人の人たる道を行ふ人すくなし、われ悟道したり顏に云ふ人も、心をつくして實に善をあきらかにせず、このゆゑに我がひじあか見えずして、かへつて高滿になり、人を見くだし、天狗の旗臣のやうになるもの有り、其身には悟道したりとおもふとも、悟道にあらず不正の道にして、おそろしきことなり、愼みてはやく正道に立歸りたまふべし、

（二四）五常。仁義禮智信。五倫。君臣父子夫婦兄弟朋友のこと。

（二一）放逸。たゞきまゝに世事をかまはぬこと。

（二二）遍滿。あまねくみつること。

（二三）神化不測。ふしぎにかはりのはかられぬこと。

ぞかし、能々此理をわきまへてかならず〴〵（二一）放逸無ざんにくらして、天命につきざる様に、つゝしみたき事をいのるものなり。

龍田大明神託宣に、なべての貴とき人、いやしき人、天を祈り、地をまつりてもろ〳〵の神をいのらんよりは、なんぢめが、父母によくつかへよ、則ち兩親は内外の神明なればなり、内あきらかならで、外のみをねがふべからずと有るぞ、人々宗門あらそひせんよりは、まづおのれに固有の法性を得心して、德をあつくすべし、德至て諸宗に勝れる人は是れ諸宗のつかさなり、德天道にかなふ人は、世の人是をしらずといへども、是れ則ち諸宗は云ふに及ばず、天下の師匠なるべし、神道において云ふ時は、神明の德に至る人は、是れ則ち神の神なり、その神明の德は天地（二二）遍滿の神體にして、是れ則ち上天なり、人にあつては常にわたくしなき心胸也、神道には元氣化生の神を、國常立尊と申し奉る、儒に所謂無極之眞、二五之精、妙合して凝る、乾道は、成ㇾ男、坤道は成ㇾ女、二氣交感して化㆓生萬物㆒、而變化無ㇾ窮焉、是則神道の天地萬物、皆（二三）神化不測の神明の妙用にあらずと云ふ事なしと云ふ所なり。

咄をするとも、人の善心に至るやうにすべし、人の藝能學問才智をいひ消すべからず、よろづのとがはなれたるさまに、上手めき、所えたる氣色して、人をないがしろにするあり、人のよきことあらば、我身のごとくによろこびて、ともにたすけるやうにして、何ごともまこと有りて、人の貴きを貴び、賤しきをあなどらず、うや〳〵しく、詞ばすくなうして、四恩（天地、父母、國王、師匠、）をほうぜんことを常々わするべからず。

菅公の歌に、

　　こゝろだに誠の道にかなひなば
　　　いのらずとても神やまもらん

左はいへど、佛神をおろそかにせよといふにはあらず、いかにも信心堅固に敬して、佛神の心にそむかぬやうに、其宗旨〳〵の法儀の事を用ひて、朝夕怠りなく勤行すべし、最も親先祖の御高恩をわすれずして、つゝしんで拜勤すべき事なり、是れをわするゝときは、きんぢうにちかしとおもふべし、上より下にいたるまで、おのれ〳〵が日々に喰ふ所の食物は、皆是れ親先祖の骨髓より出でたる物

(十九)動容。はたらきのこと。
(二十)中言。なかあしくすること。

智　何ごとも、そのしなぐ\を知る人に、
　　ひろくたづねて、他をなそしりそ。

信　心いと、直かるべしと、いのりつゝ、
　　あしきをすてゝ、善きをともなへ。

神道儒道佛道何れを願ふ人にても、(十九)動容周旋心を付けての段

神道儒道佛道何れを學ぶ人にも、動容周旋氣を付けて、先づ一度口を動かし、足を動かすにも、天道を恐れて、人の善事をさまたけず、(二十)中言と云ふて、人の親子兄弟の中をへだつべからず、親子兄弟夫婦はいふに及ばず、親類下々奴僕に至るまで、中よく一同和合して、欲心を離れ、仁心を以て人の難儀をすくふべし、我れにそむき、さかふ人ありて、萬事我が爲にならぬ人をも、我れによくうけ入れて、忍びこらへて、人をそだてる樣にすべし、上より下に至るまで、物こらへなきものは、人にあらずと、書傳にも見えはべり、我身をわすれて、道になる人は、人なり、正直の道をつくして依怙贔負せず、人々皆々さうぞくする樣に、心ひろうして、善惡共に受け入て、惡しき人はおしへて、善心にすゝめ、假初に

なにを一つ君子のごとく行ふ事もなく、一生をすごすは、口をしきことなり、さぞ明らかなる人は、わらふべしとはぢ入て、あらためたくおもふところより、人に喜ばるゝ事の聞こゆるは、まことの瑞相出づるなりと、眞實に勇みすゝみて、あしき事は日々改めたき事なり、家々里々國々の主となられし人は、この段に最もよろしく心を付けられ玉ふべし、予が心に終日わすれがたき歌あり、朝夕是れを拜どくして、益を得ることおほし、かるがゆゑに、又世の人々のためにも、なりやせんと、こゝに記しおけり。

烏丸光廣卿、仁義禮智信の御歌とかや、

仁　他をめぐみ、我れをわすれて、ものごとに、
　　慈悲のある人を仁と知るべし。

義　へつらはず、おごることなく、あらそはず、
　　よくをはなれて、義理をあんせよ。

禮　君をあほぎ、臣をおもひて、かりそめに、
　　高きいやしき、禮儀みだすな。

仁德を內にをさめ、外に民を愛せられば、世間みなきりんのごとき仁體となるべし、心の外に形なく、かたちの外に心なく、一面平等に仁政がしみわたるべし、その外に何の祥瑞をかまつべき、凡て人間といふものには、是れが下々にて、これより下はなきとは定めがたし、下々といへども又かれに從ふ者あり、よつて上より下に至るまで、それ〴〵ほどほど、其從者に、此君長久、此者長久にて、此家と〻のひ、この里この國おさまるやうにと、いのるやうにせらるべし、きりんほうわう出づる事あるべけれども、唐土といひ太古のことなれば、聞くばかりにて見たることもなし、よつて我れ相應に、家々區々國々を愛し惠ぐむ心有りて、民のたのしみを見ば、我が瑞相のきりん出でたると知らるべし、詩經にも麟の足振々、公子嗟麟兮、文王の后妃德身に修まり、子孫宗族皆善に化す、かるがゆゑに、詩人りんの足を以て、公の子を興していへり、よつて予も今天下の萬民とよろこびたのしみ、ありがたき治世といふを、きりんが出で、萬々歳と鳴きわたるといふ、これに不審のあるべきや、偖めい〳〵にこれほどのことを、行ふゆゑこれ程のずいそうあるべきやと、聞きたくおもへば、名聞となりて、惡しからん、

がれぶんまはしにて法則のこと。
(十五)陷穽。おとしあなのこと。
(十六)方伯。諸侯の旗がしらのこと
(十七)虐政。むごきまつりごと。

生草、不二群居一、不二侶行一、不レ入二(十五)陷穽一、不レ羅二羅網一、王者至仁なればすなはち出づるなりと見えたり、如レ是なれば、形は皆仁のかたまりなり、聖人四海の中を、仁德を以てかためたまふゆゑに、其性あらはれしと、おもふべきことか、依て一同にあらず、舜のときは鳳凰來儀すといふ、舜は天下をたもちたまひ、四海歸服して仁の生がほうわうとなりて來儀し、こけまはるといふても、おもしろくあるまじくや、また文王は(十六)方伯にて、西國を治め玉ふ、東國は紂王にせばめられ玉ふ、よつて仁德四海に滿たさるゆゑ、仁生の聲ばかり、岐山にたかくきこゆよつてきりんきさんに鳴くと記るせしも、おもしろきことなり、孔子ごとき大聖在ますといへとも、天子より下諸侯に至るまで、明君なく暗君ばかり出でられ、御一生には仁政行はれざる、前表にきりんのころされたることなり、如レ是亂世も大唐にはありしにかたじけなくも、今の本朝は、浦々しま／＼まで、下萬民御仁政、萬々歲と唱へわたるは、卽ち麒麟の鳴く祥瑞の聲にあらずや(十七)虐政に爭でこのこゑを聞くべきや、これにてきりんの味ひを知るべし、其所の主しとなられば、きりんをなかかせ、其聲をきくやうにせらるべし、きりんをなかするものは

にあるぞ、慈悲とは仁の道ぞ、おごりをたつて、仁を萬づの根元と定める心を得心して、天下國家をおさめる、政ごとの鏡となれとの、御示しあり、げにありがたき御事にあらずや、予がこゝろに、ありがたさのまゝ、こゝろに是をしるしおけり、世の人是をあほぎ玉へ。

或る武士方來つて（十一）麒麟は聖人を知て出で候哉否やを問ふの段

是も又吾妻旅宿の時、ある武士問ふて曰く、麒麟は聖人を知つて出で候哉、今日小人にても、暫く本心を以て行ふ所の味ひあらば、きりんの出る（十二）瑞相もきざし可レ申事に候、今日此方體の學問、相應の味ひにて、きりんの瑞相うけたまはり度候。

答、我れ先生に聞きけることあり、まづ牡を麒といひ、牝を麟といふ、牡牝のことなり、きりんはきずいあるけだもの、鹿の身、牛の尾、馬のひづめ、五彩あり、はらの下黄にして、高さ丈に、圓き蹄、一角、角の端に肉あり、音中ニ（十三）鐘呂一、おこなひ中ニ（十四）規矩一、あそぶに擇レ地詳にして、而後處、不レ履ニ生蟲一不レ踏ニ

（十一）麒麟。仁獸の名。

（十二）瑞相。めでたきゝざしのこと。

（十三）鐘呂にあたる。音樂にかなふこと。

（十四）規矩。さし

曰く、汝等よく武威の大事をしれ、武道の本意をしらざるものは、必ず國のさはりとなるぞ、されば武家の大寶とは武道なり、抑も〳〵和漢に古今不易の大寶あり、先づ日本の大寶を三種の神器といふ、此三種は神璽、寶劍、內侍所なり、神璽は神の印といふて、其理は正直、寶劍は村雲の劍といふて、其理は慈悲、內侍所は鏡と云ふ、其理は智惠、此三種の神德は、萬事の根元ぞ、此慈悲と智惠と正直とを三種の六字といふぞ、先づ慈悲を萬事の根元とす、慈悲より出てたる正直が誠の正直ぞ、慈悲なき正直は輕薄といふて、不正直ぞ、また慈悲より出てたる智惠が誠の智惠ぞ、慈悲なき智惠は邪智なり、漢には此大寶を智仁勇の三德といふ、住吉大明神託宣には、我れに神體なし、慈悲を以て神體となす、我れに神力なし、正直を以て神力とす、我れに神通なし、智惠を以て神通とす、我れに奇特なし、無事を以て奇特となす、我れに方便なし、柔和を以て方便となすと、是れ有るぞ、忘れても無理非道なることを、おこなはざれ、凡そ惡逆に我が身の私欲よりいでゝ、天下の亂れは君臣のおごりより出づるぞ、人民の(十)あんどは、うれへなくして、各々家職をよく勤めるにあり、太平治世長久は、上たる人 慈悲

(十)あんど。安堵にてやすらかなこと。

（八）驕吝。おごりてやぶさかなること。
（九）盈歉。みちてあきたらぬこと。

せば、戀しかるらんと詠ぜられし志し、誰れも加樣には有り度きことかな。

巻之四

凡そ人は萬物の靈とて、萬物にすぐれたる生物にして、皆天道の子なり、然るときは我子を惡しくせられて、其親其ものをなんぞよくせんや、このゆゑに、天の子をいたむるものを、天道かならず是れをにくみ亡ぼしたまふ也、人間の貴賤貧福のわかりはあれど、生れくる身は、替りなき人が人をいたむる時は、其痛むる人をば、かならず天道是れをほろぼしたまふは、理の常なり（八）驕吝は（九）盈歉の殊なること、有りと云へども、しかも其勢ひ常に相因る、蓋し驕りは吝の枝葉、吝はおごりの本根、故に嘗て是れ天下の人に心見るに、未だおごつてしわからざるものはあらず、しわくて驕らざるものはあらず、此所を能々我が心にこゝろをとふて見て、あやまりあらば、何方此方ものこりなく、はやくあらためられたまふべきもの也、我れ幼年の頃、或る武士の家にて、書きちらしたる反古を見侍りしにその反古に曰く、我が朝に於て、むかしの明君、御子孫方をいましめて

けて、百二三十錢も取らんと云ふ時、最早惡しき心生じて、目暗むほど苦しみても、行き歸るにあらずや、明日に至て足痛み頭痛いたし、やれと云ふて、醫者を召び、鍼醫を召ぶ事を思ひ合せて見れば、百三十錢の籠代は何程か利あらん、然れども出さずして行くことをつとむ、これを以て見れば、情の發するに隨ふて行はゞ、勤まるべきものか、惻隱の心一事を行へば、盡く皆同情にならん、皆同情とならば、何ぞ虛實を分けんや、只我が情を行ふばかりにて、善からん、昔し貞子と云ふ女人あり、大内左京大夫義隆の妻なり。歌に

身をつみて人のいたさぞしられけり
　　こひしかりせば戀しかるらん

これは此れ我が發る心を、直きに行ひし人なり、ことに女の身の上、夫の妾のことなれば、妬み怒りも有るべき筈なるに義隆都にあつて、歸國おそきを待ちかねて、たへがたきを妾も待かね思ふは、おなじことゝ知りて、身をつみて人のいたさぞしられけり、我れ夫を待ちかぬれば、妾も心は同じきゆゑに、こひしかり

天地に行はるゝに同し、前にいへる如くなれば、萬民の情は一致なるに、何として行はれざることゝ思ふに、萬事色品多き故に、難レ行、我れは只一事に因て行ひ見んか、一事と云ふは惻隱の心の一事を行ひ試みん、惻隱といたみ痛む心發らば痛め置くは不仁なりとて痛まぬやうに勉め見ん、羞惡の心發らば、羞と我を耻ることあらば、耻あるは我を苦しむ不仁なりと、耻なきやうに勉めん、惡と人の惡を憎む心發らば、すじなくて人を惡むは不仁なりと、正しく惡むことをつとめみん、辭と辭のゆづることあらば、ゆづらざるは人の心を痛める不仁なりと、辭のゆづりを勉めみん、讓と身を退くことあらば、退かざるは己をたかぶる不仁なりと、退くことを勉めみん、是非の心發らば善惡明らかに別れざる愚なり、我を愚と人に思はするは不仁なりと、是非善惡明らかに分けんことを勉め見ん、只今發る一念を曲々計りを勉めん、譬へば日用働きする者の、一日の日用賃を取り、日々に請取る前を勤める如くに、つとめばつとまるべきものならん、譬へて云はゞ一日の旅をして、歸るに、三條の橋か四條大宮か、二條堀川のやうな所にて、足痛み、籠に乗らんと思ふ時に、每度は三十錢か四十錢で往く籠に足の痛みを見か

辭讓と是非と、四情と說き玉へども仁義禮智、動き出づる物なれば、仁義禮智は性の一理なり、其性の動なれば、如何ぞ淺深有らん、聖賢は惻隱といたみいたむ時、痛む心を盡し玉ふ、羞惡と我が不善を耻ぢ、他人の不善を惡むに心を盡し玉ひ、辭讓と辭を以て我をゆづり、身を以て他人の後にし、他人を先とするに心を盡したまひ、是非と黑白善惡を明らかに見分けたまふ事は、我れと人と分くるが如くに心を盡し玉ふ、こゝを以て見れば、淺き情なき故に、別に深き情と云ふ事なし、我れも惻隱の情、羞惡の情、辭讓の情、是非の情、動き出ることは、聖賢に替はること少しもこれなし、聖賢は感ずるに隨ふて直に應じ玉ひ、惻隱の所にては直に慈愛を行ひたまふ、羞惡の所にて我不善は行ひ玉はず、人の不善は鏡に物を移すが如くに明らかにして、是をとふざけ玉ふ、辭讓の所にては、辭を以て(七)謙退し、人に下り身を以ては人に後れ玉ふ、是非の所にては自他に限らず、善と惡と分け玉ふ事は天地黑白の如くに見分け玉ひ、見わけるごとに、行ひ玉ふ四つの端あらはる如くに盡し玉ふ、何れをか實情とし、深しと爲し、何れをか虛情とし、淺しとせん、聖賢に於ては皆實理の情也、無極の眞は陰陽五行の精情

(七)謙退。へりくだりよけること。

し、又付屆けなきとても、奉公に精入り勤め候へば、我子同前に思ひ、不便をくわへ申す事なり、然れば付屆のあいそうに、預りたる報ひを無にする所有りて、我罪となる、我身を相けらるゝ彼れに依て、罪を受くるは迷惑ゆゑ、斷り置く所なりと云ひ渡すべし、如レ是法式を立て置くべし、此法に大概五つの德あり、然る時は奉公人の鄕里に、土產の世話を掛けざる是れ一つの德なり、奉公人互に親里の貧しきに耻ぢ富めるに矜ると思はせざる是れ一つの德なり、我が慈悲の心より彼等が心を靜にする是れ一つの德なり、奉公人精を出だし勤めざればならずと思ひ、人を善に入らしむ是れ一つの德なり、貰ひし度々に返禮すべしとの心づかひなし、是れ一つの德なり、偖出入の者の事は、音物を受けぬは、しわきに落ちて宜しからず、彼れがすこしにても、世帶の便りとなるべき事を、工夫して、慈愛をくはへてあしらふべき事なり。

我身において是より深き實情なき事を問ふの段

昔し我れ石田先生に問ふ、我身において、是よりふかき實情なき事如何、先生答へて曰く、情に淺深の二つ有んや、性一理なれば情も又一なり、惻隱と羞惡と

すとおもひ、我から肩見を（五）すべて、子ども心にはさぞ悲しく思ふべし、是れ道を見る事正しからざる所の不仁なり。

曰、汝がごとくいへば、奉公人を使はざるより外に、仕樣はなかるべし、受けるも非なりと云ひ返禮するも是に似て非なりと云ふ、しかれども持參せし土產を推し返しも成り難し、いかゞして然るべく候や。

答、其輪を拔ける法あり、如何となれば、人を慈愛する心なり、世話に疾めば僻むと云ふ事あり、貧しき小者が如きは、病人なり、其病を療治し、苦しみの來らぬやうに工夫する事なり、此法を立つるを、苦みの輪を拔け、慈愛の室に入るといふ。

曰、其法は如何。

答、奉公人を抱へる時、連れ來たる者に云ひ渡すべきは、親兄弟衆、上京して逢度く思はれ候はゞ、遠慮なく何時にても參らるべし、若し國所の名物杯、手前へ土產とし吳れ度思はれ、持參せられ候ても、手前家の（六）法度に致し、受け申さず候、子細は、日々の付屆けに預り候とも、彼れが無奉公いたし候へば隙を出

（五）すべて。すくめての意。

（六）法度。おきてのこと。

うにして、使ふにあらずや、其古着にてもとらするは、約束の外なり、然れども
其施す所へ施し、賢きものを使ふ故に、快く樂みを受くるなり、音物を贈りても
野良者にて氣にいらねば、隙を出すなれば、さのみ贔負の沙汰にはあらず、ひい
きはせねども、度々受けたる程の昧らき、無調法はのがれがたし、是を諸役人に
なして見ば、俗にいふ、草づとに國傾くなれば、大なる害ともなるべし、如何ぞ
持參すればとて、みだりに受けらるゝ所にはあらず。

曰、一ト通り相聞へ候、然れども親兄弟、逢ひに來たる序に、何にても呉れし
物を、あいそうなく推し返へさるゝものにあらず、是非受けまいといふ事は成
り難し、兎角何にても返禮を遣はし濟すが、然るべく候や。

答、事々返禮するは、只受置く方より勝るべし、返禮しても、受くるに宜しか
らざることあり、受けるによつて(四)不仁となる、其疵を告ぐべし、其富める親
を持ちたる者は、たび〳〵音物を贈れば、主人よりも返禮せらるる時、親本貧乏
なる、小者より見て、彼れは富める親を持たるゆゑに、たびたび付屆けすれば、
旦那殿よりも厚く返禮などもあり候に、我れは親貧しければ、左樣なる事もなら

(四)不仁。ふひとがらのこと。

答、加様なる事も、道を得て一法の我より立つ所あれば、おのづから、たばゝるものなり、今こゝに小者二人かゝへしに、一人は親本貧乏なるものにて、奉公に出すとて、寒うなきほどには着がへも着せずして、出すごときのものなり、又一人は親本富める者にて、衣類等も澤山にこしらへて、不自由になきものなり、富める體ゆゑ京へも折々上り、我子に逢ひに來る時、土産物抔を調へ來り、付届けの（三）音物などに不足はなかるべし、然れども其小者野良者にて、朝夕勤めかた甚だあしく、何とも勘忍して使ひ難きものならば、是非なく暇をやるべし、暇をやるときにいたりて、是までたび／＼付届にもらひし物、快かるべきや、何程か迷惑に思はるべし、是れはその音物を受けしによつて、今此苦しみを受けるなり、また其貧しき者の子に賢き者にて、勤め方百人にも勝れたる者なり、然れども着がへ寒くなきほどには、得着せざる程の者なれば、邂逅、京へ登りても、身の廻りも見苦しければ、我子に逢ひにさへ得來らず、況や音物を贈るにおいてをや、親本貧乏なれば、付届け不足故に、つかはれずと云ふて暇をやるべきや、其小者寒く不自由ならば、定まりたる仕着せの外に、古着にてもとらせ寒からぬや

（三）音物。みやげのこと。

べし、家を治むるも如レ是、妻子より家來に至るまで、小過をゆるさずんば、家内に人なくなるべし、然れば家内の耻と不祥を、主人たるもの能く受け入れずんばあるべからず、垢を受け入ることを能く知り、心を寛大にして、己れを正しく行ふは、家をおさむる節義なるべし、深く味ひ見るならば、聖人のおしへに、かはる事もなかるべし。

或る町家の人來り、奉公人の親本より、何にても持參し來るもの、道に合ふ樣にして、受け置く事を問ふの段

或る町家の人來り、石田先生に問ふ、是れ家々に相應に有るならひにて候へども、儉約にも合ひ、道にも不レ背候樣に、いたしたく候へども、心得がたき事あり或は手代、小者、下女、其外出入働きするものども等に至るまで、親本や宿本より見舞として在所の名物抔持參し來る事あり、奉公人にても、出入するにても、賴み筋のあいそうに持來り候へば、受け置き返禮せずとも、然るべく候や、但し賴まれ筋として、受ける理はなき事に候や、受くる事はなき理ならば、返禮いたすべく候や此所決定致しがたし、如何して然るべく候や。

て見よと云ふ所より、末の事は手前傳來には曾てなき事なり、是れ（セ）偏見にあらずや、其邪見を、正しきとは、云はれまじ如何。

先生答に、汝不得の所は、最もなるかな、人より傳來する傳なるゆゑに、摸に落ちて知り易し、我傳と云ふは、人より傳はるにあらず、我身を主宰したまふ、天照皇太神宮より直傳なり、この故に、唯一神道と云ふ、人の傳にてしらるゝ所にあらず仰ぐべし尊むべし。

或人來りて老子經のおしへを問ふの段

或る人問ふて曰く、老子經に曰く、聖人の云ふ、受㆓國之（ス）垢㆒是謂㆓（一）社稷之主㆒受㆓國之不祥㆒是謂㆓天下之王㆒と出でたり、垢を受け不祥を受くるとは、如何樣に受くる義に候や、但し聖人の敎にかはりて、惡敷事に候哉。

答、孔子曰く、小過をゆるすと、子夏に告げ玉ふ事は、語に見え侍り、孟子曰く、王者起る事あらば、惡事ある（二）諸候を敎へ改むれば善とのたまふ、大過の惡事を不㆑改ときは、天誅にして君といへども、ゆるしたまふこと不㆑能、小過もあらためざるは、天下の耻なり、此二つを免し受け入れずんば、天下に人無くなる

（セ）偏見。ひがみのこと。

（ス）垢はあかにてはぢのこと。

（一）社は土地の神稷は五穀の長にて共に帝王諸侯の祭る神とす廣く用ひて國家のこと、なす。

（二）諸侯。諸大名のこと。

（ヒ）明德。心のはたらき。

（モ）妙德。不思議の作用（さよう）

出すは、保食神の口なり、萬物の種は國常立尊なり、二葉に分れ、人間鳥類畜類に陰陽を具ふるは、いざなぎいざなみの尊なり、天に日月有つて晝夜をてらし、人に（ヒ）明德在つて天地萬物の理を照し、おのれ〳〵が身を脩む、草木國土に其理を具ふるは是れ天照皇太神宮なり、天地の間に一度生を受けし物を、枯し殺さずと云ふ事なく、枯し果すは月夜見尊なり、この理を我が身に反し、求めて見よ陰陽有て呼吸をなすは、伊弉諾伊弉冊の尊なり、心の明德あるは天照太神宮なり一念一念繼ぎ續いて起るを、一念一念にて枯し殺すは月夜見尊なり、是れ皆天地自然の（モ）妙德なり、この理をしらさんために、聖德太子舊事記を作り玉ひ、安麻呂は古事記を作り給ひ、舍人親王は日本記神代卷を作り給へり、日本三部の書を明らかにせば、何不足のあるべきや、正直の敎に通り徹る者ならば、聖人や釋迦の敎をうらやむ事のあるべきや、然るに傳來にて、しらるゝことゝ思へるは、悲しき事にあらずや。

曰く、汝古より傳來して、我まで傳へる道を、そしりあざけるは如何なる事ぞや、汝が云所も、口傳の註釋かによつてしるにあらずや、且つ我身にかへし求め

(シノ二)あざへて。貯へてもりそなへること。

(エ)果木。くだものゝ木。

のを以て、我を養ふべけんや、乃ち劔を抜いてうち殺しつ、しかうしてのち、復命し具さに其事を言し玉うと見えたり、愚解いて曰く、是は八九月十月は、陽神は太神宮の神命を受けて、陰神と交じへ代つて、かくれ玉ふ、よつて陰神天地の間に盛んにして、萬物を枯し殺すを、月夜見神怒りて劔を抜いて撃ち殺したまふと云ふ、こゝに云ふ陰神陽神は、伊弉諾伊弉冊の兩神の末流なれども、伊弉諾伊弉冊の神とは別なり、譬へば源家は清和天皇の王子六孫王なれども臣下の家となり玉ふが如し、總じて云ふ時は、根元は國常立尊なり、八百萬神と分れ玉ふ事を譬へて云はゞ、こゝに一本の(エ)果木あらんに、その種は國常立尊なり、其種を植えて苗で、二葉となるは、いざなぎいざなみの兩神の如し、二葉の中より心の立ち出るは、太神宮の如し、その心の一本より、枝葉六萬に分れ、數萬となるは八百萬神のごとし、その枝々に果生り遂ぐるは、保食神の如し、その果熟して零ち落ちて地に入る所は、月夜見尊劔を抜いて撃ち殺し玉ふがごとし、其種土中あるは、又國常立尊となるがごとし、この理を推して見る時は、國常立尊は、古今にわたつて在まし玉ふ、よつて今に至て萬物を生じ玉ふ、萬物を大地より開き

(シ)鰭。ひれのこと狹はせまきこと

曰く葦原の中國に保食神あり月夜見尊にゆいてみよとのまふ、月夜見尊みことのりをうけて降り、已でに保食神の許に到り王ふと見えたり、愚解いて曰く、是は陽神霜月より、太神宮の神命を受けて、四月までに、段々と一陽づゝあらはれいでゝ、地上より天上にのぼりたまふが、五月よりだん／＼と地下にくだりたまふを云ふ、また神代の卷に保食神卽ち首べをめぐらして、國にむかひしかば、すなはち口より飯出づ、又海にむかひしかば則ち(シ)鰭の廣もの鰭の狹ものまた口より出づ、又山にむかひしかば則ち毛のあらもの、毛の柔もの、また口より出づと見えたり、愚解いて曰く、是れは陽神太神宮の神命を受けて、天にのぼりたまひ五月より一陽神づゝ地下にくだりたまふ、陰神も又太神宮の神命を受けて、五月より月々に、一陰神づゝあらはれたまふにむかひ、和合したまひて、國に向ひたまへば、五穀を生じ、海に向ひたまへば、魚類を生じ、山に向ひたまへば畜類を生じ玉ふ所なり、又神代の卷に保食神口より吐き出し玉ふ所の品々のものを、ことごとくそなへて、是れを百の机に(シノ二)あざへて饗たてまつる、此とき月夜見尊、忿然作レ色して曰く、穢らはしいかな、いやしいかな、寧ろ口より、はけるも

神主保食神の事を論ずるの段

昔し或る神主來りて、石田先生に問ふ、汝が作れる都鄙問答を見れば、保食神の事を云へり、保食神首をめぐらして、國にむかひしかば、則ち口より五穀出づ又海に嚮ひしかば魚類口より出づ、又山にむかひしかば禽獸口より出づ、この保食神の口とは、いかなる口ぞと工夫すべしといへり、神道の傳なくしては云れまじ、何れの家より傳へ、又は(ミ)註釋を見て得心せられ候哉、委しく物語りあれ我が家に傳來する所に相合ひ候や、うけたまはり合せたく候。

先生答て曰く、保食神の事を云ふは、問答に聖人の智惠と小人の智惠とは、格別にかはりたる事有樣に思ひて、問ふ者ある故に、其答よりいでたり、聖人の智惠とても、光明あるものにもあらず、むかふものを曲げる、私なく直ぐに應じて鏡のごとくなるを、聖人の智惠とはいふと答へしより、口拍子に乘て、保食神のことにおよべり、元來この國にはいざなぎいざなみ陰陽の兩神、天地の間に出で玉ひて後ち、春夏秋冬と周流し行はるゝ主となりたまふは、いざなぎいざなみの御子、天照皇太神宮におはします、よつて神代の卷に天照太神、天の上に在して

(ミ)註釋。ときあかしのこと。

病難にて、我身の死に及びたまふも、財寶をうしなふも天命と知り、我れからなすと思召す心に、くるしみの粕ははし、聖人の心は直きに天なれば、百日旱りしやけても、百日の永雨にて水流れしても、何の苦しみのあるべきや、哀しみも樂しみも、向ふ物も天なり、天に寒暖冷暑有つて四時行はれ、萬物を生じ、枯すがごとし、是れ天地と德を合せ玉ふ所なり、己れにあづかる所なし、我等如きは學問の德に依て、其意味をしり、何とぞ天德にいたらん事を願ひ望むものなり。

古人の歌に、

かしこさに、うつさばなどかならざらん
こゝろからこそ身はいやしけれ

心あらん人は、是をおはるべし、偖又天命に任すと云ふに、こゝろえたがひなき樣にすべし、士農工商ともに、おのれ〳〵が職分をつとめて人欲の私し勝手すくなきやうにして、公けの道をまもりて、人事を勤め〳〵て、後ち天命にまかすべし、つとめおこなはずして、よからぬは天の罪人なり、おそるべし〳〵。

卷之三

はは人欲におほは、金銀財寶に至ては、能くしれども、の言葉をもつて申しかへす事は能くしれども、金銀財寶に至ては、人欲におほは

れて、約束をたかへずして、返すことを知るものはすくなし、人よりうけたる恩をおくりかへさんとおもふ心はなくして、たゞ我よりあたへたるおんばかりをおもふゆゑに、人より我に屆かざる所ばかりを咎めて、恨むるこゝろ日々止む間なし、此人は凡夫のぼんぷ、小人の小人にして、人にあらずとおもふべし（メ）范中宣公が云けんやうに、人至愚なりといへども、人を責むる事は明かなり、かしこげなる人も、己れをおもんぱかる事は昏し、あゝかなしいかな。

古人の歌に、

世の中の人の心の心かは
心得てもてこゝろひとつを

惣じて世の衆人、病難にて熱に犯され、或は頭痛し、腹痛む類のことあれば、是は神佛の咎めか、又は生き靈、死靈がつきたるか、狐狸が付いたるかと疑ひ迷ふて、祈禱祈念をなすことぞしやうしなれ、聖人に如レ是の苦しみはなし、如何となれば常々誠の專ら一筋なると、身に養生を盡くし玉ふの故なり、其外火難水難

（メ）范中宣公。人名。

心は（ユ）變易あり、公の心ざしは公にあり、行ひ遂げ玉へば一となる。あしき時は二つとなる、よつて後の事は今にてはいひがたしと云へり。

勸めてもまたつとめてもつとめても
つとめたらぬは勤也けり

人の明言を聞きて、其者の前にては、あしく云ひなし、其事を取るもの有るの段。

人の明言を聞きて、其者の前にてはあしく云ひなし、其ことを取るもの有り、是又みだりがはしき人と云者也、誠の道は、我おもふことを人が云出したる時は我思ひよりとおなじきとはいはずして、偖々名譽なる事を云ふたりとて、其者を褒美するものぞ、如此是れなき時は、重ねてよき事を思ひよりても、いはぬものぞと、昔の明君家來をいましめ玉ふは、實に有りがたき御心ざしなりと、覺え侍んべる、君子は、人より我れに、もし無禮の事あれば、我身に立歸りて人を咎むる心なし、只人の恩を恩とおもひ、是れを送りかへさんと、おもふこゝろは賢し、小人は人より我は假り初めに忘れても、無禮あれば、直に此方よりも又無禮

（ユ）變易。かはること。

(サ)公。おまへさまのこと。

(キ)矩。規則のこと。

の所をいよ〳〵得心に候哉、むかし三條こかじむねちかゞ、太刀をうちしとき、其太刀に疵あればうちおり、またきづゝけばうちおり、百日二百日、二年三年、或は十年かゝつても、きづゝけばうちなほし、無疵の太刀とならざれは、やむ事なしと聞けり(サ)公も志ざしを立てたまふからは、宗ちかが太刀をうちしごとくに、年數をわすれ、聖人となりて止むべしと思しめし、侍のいき通りを、立てとふせたまふべき、心ざしに候や、今申す宗ちかが太刀をむきずと云ふはきつさきよりなかごに至るまで、芥つぶほどの疵なく、金色は青天の空色を見るごとく、切れ味は萬物を切るに水を切るが如し、かやうなるをうちいだす事はなりかたし是を名付て太刀といふ、人の道もそのごとく、七十にして心の欲するところにしたがへども(キ)矩をこゑずとのたまへども、最初よりかはる事なし、千言萬行も後世の法となり玉ふ、かやうにはいたりがたき所なり、中人以上も至れば、萬事皆通となり法となる、道と云ふは佛家の卽ち悟道なり、迷ふがゆゑにさとりあり生れならの聖人に、別に悟りといふことあらんや、最初より一等なり、今より公も心ざしをたがへたまはず、漸々いたりたまはゞ善なり、しかれども善惡ともに

（ア）萬鍾。一萬圓と云ふに同じ。

悟りたりと思へり、然れども色々には成りがたかるべし、假令悟らずとても、勤めかたはまけまじとおもへり、勤方さへよくば、生死までかね迷ひをはなるゝ理あらば承り度候、答へ、むかし我が師に左樣の事を問ふ者ありしとき、答のはし〳〵おぼえしるしたる事もあり、そのおもむきをもつてかたるべし、先づ子細を御尋ね申す、其上にて返答いたすべし、さて御勤方とは、忠をつくし、立身して高祿をのぞみたまふことに候や。

曰、其尋ねに似たる事ありて、我がおもひ入に、少々かはりあり、勤方に忠をつくし候事は、人間の道なり、高祿に心ありて忠をつくすは、聖人のみちにあらず其道にあらざれば（ア）萬鐘をたまはれどもうけず、其道にあらざれば馬をつなぐ事、四千疋なれども、顧りみずと、孟子ものたまへり、然れども今日賢人のごとくに、勤まると云ふことにてはなし、たゞ心ざしを立てし所をいへり、曰く今汝のかたる所を以て、昔石田先生に申すものありし時、先生の曰、論語に富と貴きとは、是れ人の欲する所なり、其道を以てせざれば居らず、貧と賤とは是れ人のにくむ所なり、其道をもつてせざれどもさらずと、聖人ものたまへり、かやう

（テ）悟道。さとりのみち。

れもこれ元來親を思ふ心のうすき所より、終には親をいきながらやく所の、哀しき事には至れり、人たるもの、常々天下に第一に、親ほど大切なるものはなき事る能々知るべし、又親なき人は、我身は親のゝこせる枝葉なれば、わが身を我が心に問ふて、辱かしめざるやうにいたしたきことなり。

子を思ふ親ほどおやを思ひなば
世にありがたきひとゝいはれん

我身に恥をうけじとおもはゞ、おのれが性善を知て、徳を厚くすべし、徳至らば我身直に鏡なれば、善惡は分明になるべし、善と惡とわからば、我身を忘れて養父實父双方共にすくふみちにも至るべし。

今日の勤め方よき時は（テ）悟道の道に叶ふことを問ふの段

予暫く吾妻に旅宿の時、我武士問ふて曰く、某し相役たる方學文はあれども、某しにまされりとも見えず、然れども若年のごろより、禪學に立入り、悟道したりといへり、其故かあらまし勤め方は、能く見え候人なり、其れにつき折々さとらでは、迷ひ止むことなしといへり、よつて某も今手すきの内に迷ひをはらし、

しかれどもとゞまらざるほどの意趣ならば、たとへ何程に子の身無事にしてとゞめたりとも、しよせん打果すべし、養父實父の中一人打たれて、其子が命をまつたういたし、あとにのこり敵といふてうたれはせねば、世間へたいして、何のいひわけがあらん、是非なく親をころして、我もはら切て死するばかりなり、しからば（ケ）惻隱の一念をもつて、二人の中にとびいりたるは、實に孝といはざるべけんや、儒に曰、民は三に死す、父に生れ、君にやしなはれ、師に導かれ、そのあるところの一に死す、是れふた親のために死するをもつて孝とせん。

昔し物語に曰、あるところに出火のとき、夫婦に親一人あるものあり、まづ親をいづかたへなりとも、のけんといひければ、親がいふやうは、我ゆゑに財寶をおほく、やきうしはひたりと、汝が後にくやみ申事あらん、火もいまだ急ならずまづ〳〵諸道具をのけよといへば、親のいひぶんを幸にして諸道具を能く出だしたりしに、思ひの外に飛火來りて、もはや家にかへる事あたはず、諸道具のかはりに、又調ふ事ならざる所の親を燒きころしたるものありて、後に上より（エ）御詮儀のうへ、たぐゐなき惡人なりとて、死罪に行はれし事ありと聞き侍べり、是

（ケ）惻隱。惻は傷の切にて隱は痛の深きなり。

（エ）御詮儀。おしらべのこと。

とき實父來りて、養父と座敷にものがたりしてありけるが、何事かいひつのり、つひ口論におよび、たがひに刀をぬき切りむすぶ、養子座敷にゆき、直に聲をかけれども聞き入れず、双方共にあやうく見ゆ、何程にいひても養父實父双方ともに聞入れず、そのとき養子の身とならば、何方に加勢をいたし、たすくべしや、いかん、曰く昔し左樣の事を師に問ふものありしとき、先生答の言ばのはづれ〲、に、おぼえ記るしたる事もあり、こゝに書付けて見るべし。

養父實父口論につき、たがひに火花をちらしきりむすびて居る所へ、養子かけつけて見れば、やれかなしや、まづまちたまへと、こゑをかけれども双方これを聞入れず、まづ〲とさいさんこゑをかくれども、とゞまらずして切むすぶ、吁是非なしといふて、そのまん中へ飛入らん、その時にいたりて我身を切られば、切れまゝよ、此とき双方親のために、一命をすてん、我身を忘れて孝とせん。

かゝるときわがみとしらばおしからん
親の枝葉と思ひしらずば

評に曰く養父實父共に、目前我子に刀を立つべしや、双方共に目は見ゆべし、

（マ）仁心。廣くめぐむ。

せざればあらぬことなりとおもひしり、他を憐む事を知り、人の（マ）仁心をよろこび、不仁なるを惡む心を生ずるゆゑに、一代の中、人を使ふにも、不仁を嫌ひ、仁を以てする故に、人の歸服する事多し、是家を齊へ身を修むる本なり、然るを子供の時苦勞させるを僻事といふは、如何なる事ぞや、仁なる時はさかえ、不仁なる時は辱しめらると、孟子もの玉ふ所なり、父母の子を思ふ慈愛の心をひらき見せらるゝものならば、いかなる惡生者なりとも、有難く思ふらん、親の子をおもふ慈心があらはれ見ゆるものならば、感じ歡んで善心にかへらぬ子はなかるべきに、親の心があらはれざる故に、不孝者多き事は哀しいかな、開らき見られざる心を見るは、敎を受くるちからなり、然るを常體にしてよし、格別の敎へはいらずと云ふは、如何なる事ぞや。

或る武士養父實父口論に及び、刀を切りむすぶ時、孝の道をつくす事を問ふの段

或る人來りて問ふて曰く、

或る武士他家へ養子にゆき、養父とも中もよく孝をつくしてありけるに、ある

(ク)禁裏。御所の内のこと。
(ヤ)翁。能の名。

(ク)禁裏に御能あらんときに、子たる者(ヤ)翁を拜見致度よしを云ふ時に、翁は明け六つ半に始まると云にど、何時より拵へ行かるべく候や。

答、六つ半に始まるに明け六つに行けば、半時早し、六つ半に往き付かば、費へなくして然るべし。

曰く半時の隙を費さゞれば、人込みにて近き場へ往かれず能く拜見ならざるゆえなり。

先生答曰、汝が今云へる所其れ而已にあらず、天下の事皆然る事をしらるべし子供を十二三歳の頃より二十の頃まで苦勞させるは、其子が我世になりて、心易く渡世をいたし、樂しましめんためなり、是汝が能を見せたしと思ふ心より半時はやく行くが如し、初め半時の苦勞するより、後に心易く能を拜見し、たのしむと、子供のとき苦勞をして、身の一代心やすく樂むとかはる事あらんや、是れ世俗にいふごとくにて、毎々耳に聞くといへども、道に志しなきゆゑに、心あらざるごとくにて、見れども見えず、聞けども聞えず、如何となれば可レ愛子には旅びをさせよといふにあらずや、旅し修行すれば、己れが艱難苦勞して、萬事に堪忍

賢人の事にてあるべし、我等ごときがいかゞして合ふべきや。

先生答曰、世俗に云ふ、一事が萬事といふ事あり、子を敎ゆるも約を本とす、聖人も約を以て失する者は少しとの玉ふ、故に天下國家を治むるも約を以て本となす、然れば子を敎へ家を相續するも、約を本とするより外あらんや、約といふは儉約而已にはあらず、法式によつて行ふ所なり、法は聖人より立つて、本天より出る所なり、汝十二三歲の頃より二十頃になるまでを、小者や手代同前にするを、異なることをなすといふ、又世間より譏り笑はるゝ事は、いらざる事なりといふ、我いふ所は世間が重きか、我子が重きかと思ひ合せて見るべき事なり、如何ぞ他人の口に我が子をかゆべき、子の末の善き事は、若年のときに苦勞させ能く敎ゆるにしくことなしと決定せり、夫れ共に親の云ひ分に順ひ、學文にても致さば父母へ孝、家内を治め人の道をも知るべし、然るを親の命に從はざる徒づら者ゆゑに、末に至つて親の(オ)勘當に逢ふか家を亡ぼすか、此二つに近かるべし、前方に用心して敎ゆる慈悲は、末の禍をおもふゆゑなり、若年のときに苦勞さする道理を、事を設けて問ふべし、若し明日にても、

(オ)勸當。みはなしのこと。

（ノ）紂王。暴君の名なり。

比干、是なり、三人の行ひ同じからず、しかれども志す所の誠は一なり、故に紂王の大悪に依つて、殷の世の亡び絶ゆる事を憫み怛むの意より出づる行ゆゑに仁愛の理に悖らずして、其心の徳を全うするゆゑに、同じ仁と聖人是れを許し玉ふ、今汝是れを聞けども、夫れは臣の君に事ふまつる道なれば、左もあらんとおもふらん、又子を養ひ育つるは、我が子なりと思ひ、愛に溺れて心を盡さゞる所あり、こゝに於て天命に背き、禍を求むることをしらず、君に仕ふる道と、子を養ひ育つる道と、事は二にかはれども、理は卽ち一なり、人の臣となるは、我身に於て天の與ふる役目なり、然るを我が子なりとおもひ、勝手するは人欲の私なり、書に云ふ、惟れ益たる上帝衷を下民に降すとの玉ふ、朱子も是れを本として天より生民を降すとの玉ふ、此理を以て見れば、我が子と雖も、天の子にして我れに養ひ育てよとの天命なり、天命を重んずる心あらば、子に慈愛をつくさずんばあるべからず、何ぞ天命を受け、理に於て君に仕へるとかはる事あるべきや、惣じて人事に於て萬事に心をつくさゞれば、道に背く事多かるべし。

曰、一事さへ心をつくす事成りがたきに、萬事に心をつくすといふは、定めて

（十）往世。むかしのこと。

人の性をいふときは、萬民一統に受くる所にて、性は善なるものなり、このゆゑに教ゆれば、天命變じて惡人も善人となる、孟子曰く仁の父子に於ける、義の君臣に於ける、禮の賓主に於ける、知の賢否に於ける、聖人の天道に於ける命也、性あり、君子は命を謂はず、程子の註に曰く仁義禮智、天道は人にありては則ち天命に賦するものにて有りながら、うくる所は厚と薄と清と濁と不同あり、然れども本性は善なるゆゑに、學ぶ時は終に性善に至るべし、然るを汝は天命なれば惡性にならば成り次第といふ法は、聖人の敎にも天下の御法式にもなきことなり故に御政道にも、善をすゝめ惡をこらしたまふこと而已なり、この事は御制札場を拜見しても、所々に明らかなり、然るを我家に敎はいらずといふは、御法式を背く惡人なりといふべし、子たるものに、自然に善惡あるは、孟子の爲す事無ふして爲す者は天なりとのたまふ所なり、又敎ゆる時は無心の天より幸の至るは命なり、幸の至る事を敎ゆるは、善を積むなり、故に積善の家には必ず餘の慶びありと、易にも示し玉へり、然れば我子にても、心をつくして養ひ育つるは人の道なり、心を盡す時は人となる理をかたるべし（十）往世殷に三人あり、微子、箕子、

の道なり、つゝしむべし〳〵。

子供の養育様を教への段

或人來つて、先生に問ふ、汝子どもの教育様云ふ所に、凡子供は十二三のころより、二十ごろまでは、奉公人に準じ、番頭へ申し、見世の小者同前のやうに仕ふがしかるべしと、いふ所心得がたし、如何となれば、世間にことなる事をなして、且つ益なき事なり、子供の惡性なるは皆因緣なり、其證據は世間に子供を常體に養育候とも、實體なるもの有りて、身をたもち家を治め、繁昌するものあり、また我所に汝がいふごときのもの有て、甥を手代に致し置き、實體に見えしゆゑ、養子にして讓られしに、此者養父死なれて後に、惡性になり、家をほろぼせしものあり、これを以て見れば、いかやうに養育候ても、是れにはよらず、然るを異なる養育様をなし子供にはいやがらせ、世の人々にはそしりわらはれるはいらざる事にあらずや。

先生答に、汝は子供の善惡は、格別の教へはいらず、皆因緣なりといふ、其因緣といふは天命のことなり、善惡禍福ともに惣じていふときは、皆天命なれども

（ウ）淫聲。みだりなこゑ。

すれず愼むべく、然る時はおやに物思ひをかけることすくなし、親に物思ひをさせずして、心をやすくくらさせる程、大きなる孝行はあるまじ、しかれば他家にゐても、孝行はつとまるべし、其上老少不定のならひなれば、親に先立つこともあれど、順をいふ時は親におくれるなれば、親の命の内の孝行せざるときは、親なくなりては、ことの外殘り多きものなり、後にていかほどくやむとも、かひなきことなり、二度仕直しのなるものにあらざれば、子たるものは、此所をあけくれわすれずして志しを盡すべき事なり。

列女傳に古者婦人姙レ子、寢不レ側、坐不レ邊、立不レ蹕、不レ食二邪味一、割不レ正不レ食、席不レ正不レ坐、目不レ視二邪色一、耳不レ聽二（ウ）淫聲一、夜則令三瞽誦レ詩、道二正事一、如レ是則生子、形容端正才過レ人といへり、つゝしめや女子。

惣じて女は何事にても、我身をへりくだりて、たかぶれる心なく、つゝまやかにうや〳〵しくして、我れによき事ありても、おのれが名をあらはさず、人のあしきことをも、我身に引請け、はぢしめられても、よくたへしのびて舅姑夫の心次第になり、己れが私意をもちひずして、つゝしみて、眞實にしたがふは、女

にてはなし、よく／＼常々心をつくして、もし我がまゝいづるときは是は不孝が出づると心にて心をおさへつゝしむべし、慎めばおのづから親へあしき事もきかさず、もし又親の所へ、見舞に人をつかふとも、眞實なる心あれば、しせんに親の心にたんのふし玉ふ、又親のかたより人をやらるゝときは、何事にてもいひやらるゝ事を機嫌よくうけ、たとへちと心に入らぬ事ありとも、少しもいらへなくなるほどさやう／＼と、機嫌よくかほつきよくうけるときは、使の者かへりてそのとほりをつたふれば、おのづから心よく、何心なくいらるべし。親の子を思ふ事は、いたらざる所なし、人をやりてその使かへれば、何をしていたぞ、きげんはよかつたか、何共いひはせなんだかと、種々の事をたづね、機嫌もよくかほつきもよしといへば、うれしきていに見え、もし又機嫌あしきとかかほつき悪敷とかきゝては、それはどうした事にてぞと、いろ／＼の思ひやむ事をなし、ことによれば夜もねられぬごとく、あんじたもふ事おほし、是れはこれ子たるものつゝしみなく、孝行の心なきゆゑ、我がきげんのとほりにして、おやをあしらふといふ所より、我れにしらざる大不孝をするなり、此所をよく／＼、つねづね心にわ

（ラ）牝雞の朝。めとりの時つくること。

（ム）下知。さしづのこと。

にあらず、聖人も（ラ）牝鷄の朝する時は、家のわざはひなりとのたまへり、是れは女には、鳥がときうたへは、家のわざはひとなるとなり、此心はすべて女は內を知りて外をしらぬが女の道なり、然れば女の身として家をおさむる事或は町家にては、商賣などの（ム）下知をすれば、家治まらずして、かへつて家のわざはひになるとなり、これを以て家を治むるは、子にまかせて外のことをさしでずしてよめをかわいがり、物事そろ〳〵敎へて、內の事ばかりするを、子にしたがふといふ、然れども子たるもの身もちあしき時は正直の道をもつて異見にてもすべきことなり、元より女は天下に家なきものなれば、我まゝ成る事をせずして、家は子に治めさするを、子にしたがふといふ。

右の如くなれば、實の親への孝行は成りがたく見ゆるなり、いとけなき內はおやの世話になり、嫁入しては先の家にしたがふなれば、實の父母へは孝行成りがたき如くなれども、右の三從の道をよくつとむれば、おのづから、實の親の心やすし、親の心をやすめるは孝行の第一なり、然れば正しく女の道を守ることにて孝行に成るべし、しかれども此所心やすきことにて、中々たやすく行はるゝもの

は、天命といふことをよくしりて、其所に心をおとしつけて、他をうらむ事なく正しく守るを父母にしたかふと云ふ、嫁して夫にしたがふといふは、よめいりすれば、一生夫にやしなはれて、一生の世話を頼むなれば、何事によらず、夫に身をまかせ、少しも心やすだてをせず、第一に身持正しく持つべし。すべて家内の事は、女の治むるものなれば、人をつかふにも、無理いはず、あはれみをもつてつかふべし、偖て又夫の大切なるものは、親にこゆるものなし、しうと姑を我がおやと思ひ、孝行をつくすべし、孝行といふは、衣服食物は、いふにおよばず、第一に親の心のやすきやうにするをかなめとす、我が身をわすれて、何事もおやの心次第とおもひつかふべし、たとへ心にあはぬいやなことをいひつけ玉ふともすこしもふせうらしきかほつきせざるを第一とす、たへいひつけの通りをつとむるとも、少しにてもふせうらしきかほつきあらば、親の心にかなはず、親の心にかなはざるは不幸の第一なり、舅姑夫に従ふことは、我が心にとふてみて、すこしもわたくしなく、眞實に心よりうやまひ、したがふを以て道とす。

老いては、子にしたがふといふは、女は内を治むるものにて、表を治むるもの

なし、おのれがためにして、此書をなせば利のみにして物なしと、丹氏康頼のいへるも、實に最もなるぞかし、是れ醫の道のみにあらず、萬の道もわたくしの思ひを、はなれざる人は、その道の妙義にかなふ事なかるべしと、むかしの人此事をくれ〴〵いましめおきたまへり、つゝしむべし〳〵。

女に三從の道ありの段

女に三從の道あり、幼にしては父母にしたがひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子にしたがふ。

幼うして父母にしたがふといふは、おさなきときは、何事にても父母のいひつけをうけ、身持正しくして、おやの言つけにて、よめ入するに、いかやうの所へやらるるとても、うらむる事なく、おやの心次第に身をまかす事なり、親の子をおもふ事、いたらざる所なければ、行末までのことを思ひ、ありつけ玉へども、人々の天命ありて、能き所へ行き、夫の心もよく心やすくくらすもあり、又思ひの外、夫の心あしきか、身上不如意になる事もあり、或は妹は仕合せよく、姉は仕合せ惡敷もあれども、これは人々の天命にて、親のちからにもおよばぬ事なれ

り、人にあらずしては、忍びとげがたきなり、忍ばざるは人にあらずといへり。

人我れにさかふ事ありとても、能くたへ忍びて、おのれが心をおさめて、いかりをつゝしみ、口を守りて悪言をいたすことなかれ、佛も諸々の弟子に示して曰、忍の爲レ德、持戒苦行も所レ不レ能レ及と遺教經に見えたり、是を以て見れば、忍の字は人々はだの守りともなして、かりそめにも忘るまじき事なり、是れを忘るゝときは、禽獸にことなる事なうして、ものゝあはれもしらずなり行くなん、あさましさ。

八幡宮の(ツ)託宣に(ネ)衆生の心不善なる時は、神明を祈り求むといふとも、其心にやどる事なし、直き心にして正しき時は祈らざれども、我れ常にそのいたゞきにうつりゐて、まもらんとのたまへり。

いま／＼の人々は、あしき事をかたりて、耳を驚かしぬれば、信仰をまし、實儀を以て誠をかたれば、耳に入りがたきは、かなしき事なり、僧醫の妙儀は、もろ／＼の生類のなやみを一筋に救はんと、天地に誓ひてひたすらに、わたくしのおもひなければ(ナ)いきとしいけるものゝなやみを、わきまへずといふ事

(ツ)託宣。仰せごと。

(ネ)衆生。世の人のこと。

(ナ)いきとし。生物としてといふこと。

（ツ）かみ。上ツ代とてむかしのこと

古人の歌に、

明日までとおもふこゝろのおこたりに

けふをはあだにくらすはかなさ

その（ツ）かみ孔子の弟子に子張といふものありの段

そのかみ孔子の弟子に子張といふものあり、他國へ行かんとおもひ立て、孔子に暇乞ひして曰く、ねがはくは我れに身を脩むるに能き一言をさづけたまへと申しければ、孔子示して曰く、萬事一生涯の身を脩むるはかり事は、忍の字を以て第一とす、天子忍ぶ時は國中にがいなく、諸大名忍ぶときは名をほどこし、下官忍ぶ時は官に進み、親子として忍ぶ時は孝行あり、兄弟忍ぶ時は榮え、夫婦忍ぶ時は死する迄離別せず友達忍ぶ時は名をけがさず、我身忍ぶ時は禍を招かず、若し人、物こらゑなき時は、天子は國を失ひ、諸大名は身を亡ぼし、下官は命を失ふ、兄弟は中惡くなり、夫婦は離別してその子既にみなし子となり、友達は情け薄らぎ、我れは禍にあふなり、能々愼みて忍ぶべし、忍の字は萬づ行ひの第一也との玉ひしかば、子張なかく敬ひうけて、曰く、誠に忍の字は行ひがたきものな

(レ)そこ。そこもとのこと。

ば、かゝるめでたき御おぼえや候べき、などはやく御請は申させたまはざりしといひければ(レ)そこにとひ聞くべき事ありてなり、今よりは何れの事となく、我する事をふつといろはずしてあるべきやと、いひけるに、さばかりの事にかはといひければ僧は御請申すべしとて、装束して出けるに、袴の腰をもぢりて着たり妻後ろより見て、いかにはかまのもぢりて候はといひければ、すはさればこそはやくもいふことのたがへるとて、なほ堅くいひとぢめけるとかや、常にはかやうのこと、女のいふまじきにはあらねども、さしはへ訓めけるきはに、忘れてもたやすくうちいでたる、淺はかさにさがしかるは、女の心なれば、行末かけて公事の障りとなりぬべきと思ひて、かく心みたまふは、實にもつともなるかな、無益の事を云ひ、むゐきのことをなしていたづらにときをうつすべからず、つれ〴〵草に生住異滅のうつりかはる、實の大事は、たけき川のみなぎり流るゝがごとし。又、

朱文公勸學の文に「勿レ謂ニ今日不レ學而有ニ來日一、勿レ謂ニ今年不レ學而有ニ來年一、日月逝矣、歳不ニ我延一、嗚呼老矣、是誰之愆」ぞや。

（ヨ）詮義。しらべのこと。

（タ）喪祭。忌中の靈祭のこと又祭は法事のこと。

先生答へて、そこ〳〵と云へば、其所は、山は手前の内なれども、栗の木は他所の山より落ちたる栗なり、其（ヨ）詮義なしに拾ふ事不届なりと云ひて、食半ばに返してまゐれと、大に戒しめられければ、則ちかへしに行かれけるよし、聞きおけり、惣じて人の子供の親たるもの、如レ此愛の道をつくしてそだてたき事なり夫婦男女をわかつ事、禮記に其訓、具さなり、大むねまづ家居の内外をわきて、女は外にあり男は内におり、中門には守りをすえて、ゆゑなければ行き通ふことなし、男は外をおさめて、女の事にわたらず、女は内をおさめて外さまの事を口にもいはず、夫婦同じさほに物かけず、おなじ箱に物入れず、ゆどのも、かはやも、ともにせず（タ）喪祭の時ならでは、みづから物を取り渡さず、男のさづくる物は女、箱にてうく、箱なきときは下におくをまちて是れを取り、夫婦だに猶しかれば其外の男女はいよ〳〵遠ざけて、みづからいましめて、おそるべくつゝしむべきは、此まどひなり、近頃多賀豊後守高忠といふを、京の奉行に置くべしと君より仰せこと有りければ、かへりて妻にかたらひて、御請申さんといひけるを聞く人ものにもせずとつぶやきあさみけり、高忠妻にあひてかくなんと聞ゑけれ

祭りをすべきためなり、よつて子なきは不幸なるよし、古人もの玉へり、子ありといへども、只教へいましむる事なく、そだて惡ければ、成長して後ち、放埓者になり、不幸不忠にして身をほろぼし家を失ひ親先祖に耻をあたふる類多し、かやうなる子は、なきがはるかにまされり、女子はとりわき、外の家に嫁して他人につかへ、子をもふけて其家にそだつるものなれば、自身の心得あしければ、子の教も宜しからず、一入能く愼むべき事なり、子共は幼きうちにそだてぬれば、智明かにして、賢者と成るもの多し、因て懷姙のうちより身持ちよく愼んで、生れ出でゝ後は、直ぐに育てなして、靜にものごとを教へ、惡事を見習らはせぬやうにして、偏へに愛の道をつくして、そだつべき事なり、子を愛して教へなきは禽獸の愛なりと書傳にも見えたり、人と生れて鳥けだものゝ類に入れらるゝは、かなしきことにあらずや。

石田先生は丹波の山中にて、或る百姓の子なり、幼年の時秋の半に山に遊ぶ事ありしに、初栗の時節來て、笑み落ちけるを拾ふて歸り、中食給べる時、拾ひし栗を出して親に見せければ、其栗は何方に落て有りしぞといふ。

（ワ）經は聖人の書なり傳は賢人の書なり。

（カ）我。我慢なり

らそはざる人こそ、あらまほしけれ、品の高さにても、才藝の勝れたるにても先祖のほまれにても、他にまさる事ありとほこりたかぶる心あらば、大なる失なり愼みてこれを忘るべし、書のみ能く覺え、口によめるは學文にあらず、文字知りと云ふべし、いかなる才藝ありて、詩作文章に疎からず、一切（ワ）經傳に渡るとも、おのれが氣質のよからざるところを改むるに、心のつかざるもは、とるにたらずと思ふべし、誠に道に志し深き人は、みづから明かに我が非を知るゆゑに志し常にみたずして、終にものにほこることなし、武士の道は（カ）我なくてものゝふになり、和歌の道は我なくて和歌に成るとかや、萬の道を我なくならではその道の達人とはいはれまじ。

孔子曰、德これを修めず、學これを講せず、義を聞いて徙ることあたはず、義らざるを改むる事あたはず、是れ吾が憂なり、又曰、周公の才之美あれども、驕り且つ吝しめば、其餘は觀るにたらざる而已、との玉ふ語を、よく〳〵味ひ知らるべきことなり。

人たるもの、子孫を養育する事は、其家をゆづりて、繼ぎをたやさず、先祖の

施にはあなず、此身にて是をせざれば、人にあらずと思ひなば、これぞ聖賢の心にも合ふべし、他より受くるとて、なの葉一はを受けても、實に養育せらるゝとおもはば、天下國家に恩を報ずる理も、その中にこもるべしと、我等つゝしんで此教にたがはぬやうにとおもひたるのみ。

孔子の教も釋迦のをしへも、今日のこゝろを正しく誠にするより外なし、般若灯論に、何をか佛と云ふ、一切の法に於て顚倒せず、眞實に覺了する故に佛と號くと云ふ、今の世諸山諸寺伽藍堂塔の繁昌は、佛法破滅の時なり、佛法繁昌の時は、樹下石上に座して、佛法執行の人、多く有る者也と、古人のいへるも、實に最もなりけんかし。

巻之二

夫れ熟々おもふに、人は善にほこらず物とあらそはざる人こそあらまほしけれの段。

夫れ熟々おもふに、人は兼好法師のいひけんやうに、善にほこらず、ものとあ

或人來つて問ふ、何れも儒經を學ばれ心はいかほどよろしくなり候哉と問ふの段。

或人來つて問ふ、何れも儒經を學ばれ候て心はいかほどよろしくなり候哉。

答、某し(ヌ)素讀のやうな講譯少々づゝいたし、申せば、ほむる人はすくなく、そしる人はおほけれども、諸人に口あれば、いろ／＼になるはづのことなり、是れに喜怒はいたさず候、あつまる人々の中に、かうしやくを聞き、忠と孝との心になり、家業精に入る人あれば、よろこび、又不忠不孝の人あれば何をきかれしやとなげかしくおもふなり(ル)子細はそれがし不德ゆゑに、その不德がむかふへうつりたるゆゑ、さだめて不忠不孝不情あらんと、只我が不德をかなしくおもふばかりなり、やうやく是程のことなり、こゝに、

先生に聞きおける事あり、惣じて人たる者は、餓ゑて死すとも、終には死するものなれば、不義にして此方より人に寄り賴むものにあらず、死すとも人に無心いばねば、うらみもなし、うらみなき身となれば、一生人の世話になりしおんをわするまじ、人の恩をばおんと思ひ、我よりは人へ(ヲ)法施ありとも、人への法

(ヌ)素讀。よみかた。

(ル)子細。こまかきこと。

(ヲ)法施。法のほどこし。

ところなり、只無心にして流れを續き繼ぐばかりなり、人の性善も如レ是、無心にして形の運動より呼吸の息の出で入りをつぎ、繼ぐばかりなり、若し其續き繼ぐを善と知り、つがざれば死に至るにより惡と知らば、善惡對するゆゑに、水の無心なるものには譬へられず、善惡を知らざるゆゑに、水の無心に流れ〳〵て絶えざる所が、性善と無心にして、呼吸の出入、形の動靜をつぎ繼ぐに同じきがごとくなるゆゑに、水にたとへたまふ、惡に對するに心ある善ならば、寢入たる時は止みやんで死すべし、寢るときも起きたるときも、止ざるは天地の晝夜を分たず流行するに同じ、依つて易の(リ)一陰一陽するを道と云ふ、是れをつぐ者は善なりと、のたまふと一致なるゆゑに、孟子是れに習ふて人の性は善との玉ふ、一陰一陽の道をつぎ繼ぐに心あらんや、其に同じき性善なれば、何の心有つて善惡對々の善なるべき、孟子譬へ玉ふ、全體非情の水にある事をしらば、其時にしてうたがひは晴るべし、この味ひを知らざるものに説くは、口のいとまもおしいかなといはれけれ、學文に心がけある人は、此段に能々こゝろをつけられたまふべし。

(リ)一陰一陽。循環(メグル)のこと。

りなりと思はるゝなり。

先生答、誠に非學者論にまけずとは汝が事なり、我が明かにして說かざるは、腹中より實に開かせんためなり、然るをかへつて我があやまりのやうに云ふなれば、止む事を得ずして說きゝかすべし、先づ汝に問ふ、孟子の性善をもつて水の下だるに譬へ玉ふ、其水下に流れて堤を切り、田畠を損じ、人畜を害ぶるまじと云ふ心あらんや、但し田畠をうるほし、人畜を育はんと思ふべきや、曰く水は非情のものなれば、何ぞ其心あるべきや。

先生答に、汝がごとく水は非情のものなれば、其心なし、世界に水の田畠をうるほし、人畜を養ふを善と思ふ、汝もまたこれをもつて水の善とおもへりや。

曰、しかり。

先生答、水の善といふは左にあらず、水に私なきを善とす、然るを田畠をうるほし、人畜を育ふを善とせば、時有つて堤を切り、田畠を損じ人畜を殺さば惡とすべし、是れは人心より見たる所なり、水は非情のものなれば、育ふも殺すも水の用をなす所にて善とも惡とも知らざるが卽ち水の性なり、是れ善惡を離れたる

答、今汝が問ふ所を以て、昔し石田先生に問ふ者ありしとき、たがひの問答あり、はなはだ面白く、おもひ記しをき申したることあり、これを見らるべし。

先生答に、汝は孟子の文字をかぞへ、これを書を見るとおもふゆゑに、意味に達へり、我が性は知り得ずとも、譬への意味なりとも得心せば、性善は得ずともかやうなる問までにはいたるまじ。

曰、喩への意味を（チ）會得するとは如何なる事ぞや。

先生答ふ、譬の意味を知るとは、別の儀にあらず、論語に仁者は山を樂しむ、知者水を樂しむとのたまふ、知者は事理に達して周流して滞りなき所の知が、水に似たる事あるゆゑに、水を好むとたとへたまふ、又仁者の心は義理に安んじて動かず、他にうつらずして山に似たる事あり、故に山を好むにたとへたまふ、依つて體の知り難き事を、たとへを以て知らする爲めの譬なり、この理をおして、孟子の性善をしらるべし、ちよつとなりとも端を求め知る事あらば、そのときには惡に對せざる事あきらかならん。

曰、其れは汝がのがれ辭と、いふものなり、いよ〳〵問答にいへるは、あやま

（チ）會得。心にわかること。

こゝろの駒に手綱ゆるすな

宇多天皇勅曰、人の善惡は言と行によくあらはれ、しるものなり、然れば何ぞ其心にかくさんや、ゆゑに達人は物をかくす事なし、天と心ざしをおなじうしてたがはず、小人は物をかくして天とだがひ、おのれが物とする、鬼神手を打つて是れを笑ふ。

物部大明神の（ヘ）託に、

もろ人の心きよくは我れもまた
かげをうつしてつねにかたらん

學者來つて孟子の性善を論ずるの段

或る學者來つて問ふ、汝が師の作れる都鄙問答を見れば、今いふ所の惡に對する善にはあらずと云ふ、然るに孟子の（ト）告子に答へ玉ふ語を見れば、人の性の善なる事は、なほ水のくだれるにつくがことしとのたまふ、これは是れ善惡に對する善と見ゆ、然るを惡に對する善にあらずと云ふ所、引合せ說き聞かさるべし都鄙は孟子の意味に違ふとおもへり。

（ヘ）託。おつげ。

（ト）告子。人名。

随ふは、女の道なり、兄弟中よくして兄をうやまふ事は、父のごとくにして、何事にてもそむかずして随ふべし、弟をあはれむ事は、我が子のごとくに思ひ、親の心をうけ、慈愛を以てそだつべし、友の交りは一言の辭ばの上にても、芬子ほども僞りをいはず、如レ是の人を眞の誠の人と申すなり、大學に「そのもとみだれて、すゑおさまるものは、いまだ是れあらず」と見えたり、中に誠在れば外にあらはる、まことなきときは不仁不知となる、この故に己れが身を放逸むざんにして、親の心をくるしめ、兄弟不和になり他人をあはれむ事はなほしらず、我が身に財寶をつかひつひやす事は何とも思はずして、貧窮なるものを救ひたすくるに心のつかざる事はかなしき事なり、又貧なるものも己が分限にやすんじ、家職を勤むる事はうとくして、人の寶をうらやみ苦しむなり、是又盗跖をにくみきらふといへども、人の寶に目をつけ、うらやみ望む心微塵程もこれあらば、我れも盗賊の仲間たりとしるべし、是れ即ち餘の禍をまねくしるしなり、はやくつたなき人欲を去て、人の人たる道に至らんことをいのるものなり。

ひかれなばあしき道にも入りぬべし

所をおぢおそる、人は人の人たる道をしるべし、其道と云ふは別の儀あらず、我が明徳を明かにして、父母には孝をつくし、人には僞りをいはず、出入等に不埒をなさず、返す覺えなきものを借らず、飢えて死すとも不義の𠮟を受けず、おのれが欲せざるところを人に施さず、我が才能を以て人に伐らず、他人の善事を我が身にうつして、人の惡事を見ては我れにもこの惡事あらん事を恐れ、已れを顧みて仁義の志し有りて、士農工商己れ〳〵が家業を勤めて、無用の事に物をついやさず、萬にきらかざりを好まず、米一粒、からし菜一葉、ちり一本に至るまで無益の殺生をせぬやうに、おのれをつゝまやかにして、そのあまれる所を以て、一門眷屬末々のしもべまでも心を付け、ふびんをくはへて、まづしきものをあはれみふかくして、萬事たすけてやるやうにいたすべきことなり、君に仕ふるものならば、我を忘れて身を君にゆたね、勤むべき事をさきとして、得ることを後にすべし、子なる者は親の心にそむかずして、身のとりまはしは、水草の水にもまるゝことくに事ふまつるべき事なり、夫婦の中むつまじく、男は道を以て交はり女は舅姑夫の心次第になり、何事にても已が私意をもちゐずして、愼んで眞實に

り、天知る地知る、我れ知る人知るなれば、何れの所に向つて罪をまぬかれんやのがるゝ所なし、是れ積不善の家には必ず餘の禍ひ有るにあらずや、恐れ愼しむべきことなり、顏淵のごとき君子の德に至る人は、貧富ともに天命にやすんじ、樂にも天下を以てし、くるしむにも天下を以てしたまふ、我が身の貧富に心うつしたまはざることは、申すもおろかなり、このゆゑに天下の人、上より下に至たるまで、父母のごとくに思ひ、後世の法となり玉ふは、是れ積善の家には必ず餘の慶びあるにあらずや、何んぞをのれが私意を以て、聖賢の語をうたがはんや、恐れ愼しみ度きことなり、惣じて人大なる惡表にあらはるゝ事是れなきは、我れも人のやうに思ふは愚かなり、中庸に曰く誠はものゝ終始なり、誠ならざれば物なし是を以て見ば、信あれば人なり、信なきときは人にあらず、天下國家身をおさむるに至るまで、信を以て本となす、論語曰く、民無レ信不レ立とありとかや、誠は實なり、實なきときは已れをたてんとしては、人を非にいひかすめ、人の目をくらまし、何事も皆おのがためになるやうに心がけるものは、とふせきが仲間をのがるゝ事これなし、故に君子はその見ざる所を戒しめ愼しみ、その聞かざる

（ホ）疏食。まづきもの。

くして、心よく樂しみ、年月をおくる人あり、それを嫌ひ、汝はやはり富みさかえ、病身になり苦しみ煩ふが心よしと思はれ候哉。

曰、財寶は身を樂まんが爲めなるに、さやうに病身になりくるしみ煩らはゞ、何の心よき樂か是れあらん、困窮しても、その困窮に心をうつす事これなく、樂み暮さば、いかなる寶も是れにまさることなし。

答、然らば善人も惡人も、是れに無二異事一、盜跖如き惡人も、罪をまぬかれ居る者ありと思ふは、おろかなり、我が身に昧き事少しにても是れあるものは、人のうはさなどを聞くにつけても、見るにつけても、是れは我が身の事にてはなきかと、思ひわずらふ苦しみ内にあれば外にあらはれ、その眼ざしまで、人のやうに見へぬものなり、此者苦しみ寸の間も止む事なき病人よりもまされり、たとひこぼれさいはひにして、罪をまぬかれ居るとも、終には天罰來りて、己れを亡ぼし子孫までを失ふべし、故に論語に「飯二（ホ）疏食一飲レ水曲レ肱而枕レ之樂亦在二其中一矣、不義而富且貴於レ我如二浮雲一」とのたまへり、惡事は我れよりさきに天下に明らかなり、いまだあらはれずといへども、機はすでに動く、動けば是れ明らかな

(ハ)不易。かはらぬ事。

(ニ)子路。人の名。

答、汝も學文に心がけありながら、いまだ誠の理に通ぜずして、書を讀むゆゑに聖賢の意味わかりがたし、聖人は天地萬物生る心を得て、もつて心としたまふゆゑに、心の欲する所にしたがへども、不レ踰レ矩、古今(ハ)不易の法となりたまふ、心に得心せば、何ぞうたがひあるべきや。

曰、汝も頸をおさへて問ふ時は、實に得心しがたきこともあるべし、一向我が言ふ所に同心して、がてんのいかぬ事はいかぬといひて居らるゝが、正直ならずや、故に孔子も知る事はしるとせよ、しらざることはしらずとせよと、(ニ)子路に敎へ玉ふにあらずや。

答、古への言をいださゞる事は、身の及ばざることをはぢてなりと愼しむべきことなり、譬へを以てとふべし、先づ爰に兩人あらんに、一人は富み榮えて病身になり、食物は味ひを失ひ、にがぐすりをくらうごとく、其上胸の苦しみは火の中に居るごとく、目前に地獄の苦しみをうけなやみ煩ひ、晝夜苦しみ、寸の間も止むことなし、又一人は貧窮なれども、その身無事にして、心よく我が職分を勤め、食物は甘露のごとくに味ひ我が分限にやすんじ、貧富に心をうつす事是れな

（イ）顏淵。人の名
（ロ）盜せき。人の名。

以後は恐れ愼み度事なり、門弟是を聞きて曰く、抑も／＼より講釋うけ玉はり申せば、聖賢の意味深長なる所、だん／＼身にしみわたり、有難し、かようのことを說き聞かせ、人の道を直にし、忠孝の道をつくす敎を、山師といふは嗚呼かなしひ哉と云ふ、我れ是れを聞きて曰く、孔子君に禮をつくし玉へば、時の人へつらひものとなすと、論語にありとかや、大聖孔子の德にだもかくのごとし、いはんや虫の數にも入がたき我等、世上の評に預る事、左もあるべき事なり、あしき評議に預る事、誠に我が幸として以後は恐れ愼しみて、およばずながらも、君子の德に至らん事を願ふものなり。

易に孔子の曰はく善事をなす家には必ずさいはひ來り、惡事をなす家には必ず禍來るの段。

或人來て問ふて曰く、孔子易に、積善の家には必ず餘りの慶びあり、積不善の家には、必ず餘りの禍ありとのたまふ、しかるに（イ）顏淵のごとき大德の君子、貧窮にしてしば／＼むなしうくらしたまふとかや、また（ロ）盜せきごとき惡人もつみをまぬかれ居る者あり、是れ汝はいかゞ心得居られ候や、承り度存んじ候。

たく、ある人湯治すゝめ、箱根山へ入湯せしに其功もなし、却つてがいと成り行けば、湯治をすゝめし人もきのどくがり申され候、致すことなうして至たるものは命なりとのたまへば、何にうたがひの有るべきや、死してもよし、生きてもよし、天命にまかすときは心に掛る山の端もなし、時にまかせて居たる時、灸治然るべきよし申す人あり、よつて我が思ふは、灸にてすへ殺すか一つ、生るか一つにし、一日に七百八百九百、又は晝夜に千二百程もすゑたる日もあり、先づ覺えしるしたる大數、あげていはば、凡そ二年半斗りに、十萬二千五百程なり、其功ゆゑか段々順快に及び、先生七回忌菩提のため、吾妻の都にて、經傳幷につれ〴〵草、先生自作の都鄙問答開講いたすも、有り難し、道の行はれんとするや命なりすたれんとするや命なりと、古人ものたまへり。道に心ざしある人、世上のさたにかゝはるべきや、非義無道は天是れを知る、かくれたるよりあらはるゝはなし恐れ愼しむべき事なり。

或人の曰く世上の人々汝を山師と云ふ者あり、いかなる事に候や、我れ答へて曰く、世の人々山師といはゞ山師なり、辨者といはゞ辨者なり、何疑あるべきや

は、ひとへに天の罪人なるべしとの玉へり。

石田先生の心ざしは、都鄙齊家論を見てしるべき事なり、自然に感應有りて、たとひ召出だされ候ても、たひていにて中々出づべき様成る人にてはこれなく、あくまで德をかくし愼む人なり、願ふ所は只忠孝の道をつくして、人の人たる道を敎へたく思ふばかりなり、つたなきよく心などは、毫釐もなき仁也、いつの世にかやうの人また出づべきや、はかりがたし、依て門弟とも鶴の感聲を仰ぎ願ひ奉り候得共、誰れ在つて奏聞する人もなし、感應なきは命なり、我等不幸にして病身に成り、一日〳〵と日を送る内に、師むなしくなりぬ、かなしひかな、力なし、せめては跡にて石田先生の德を感じて、忠孝の道をつくす人も出で候はゞ、是れを手向けにせんとおもふ心より、吾妻へ下り、先生の心ざしを天下の人々へ語り申さん爲に、經書、つれ〳〵草、謠ひ等少々づゝ講じ申せば、表の書付を見て、男女ともに立かはり、入り替りまゐり候内に、意味聞き取り、勘平先生の德を、及ばずながら行ひ申度思ひ、感じ寄る人も少々出で來り候所に、我等病氣だん〳〵おもり、信仰の者ども苦勞にし、かれこれ醫者にかくれども、藥めぐりが

唯一心とも說き玉へり、如ㇾ是春夏秋冬の行はるゝ如く、一代行ひ終らざれば、萬法一に歸する所、得心せりとは云はれまじ、予も自性を得心するものに似たりといへども、昔しの行跡能き人に、にる事かたし、いまだ勤めの天理に、一つとしてかなはざる事あるべき哉と、はぢ入恐るるは此勤めなり、天地萬物生する私なき心を得て、眞實無妄の誠の一心を、しばらくも放心是れなきやうに、一代勤めおはるべき事なり、實に免すと云ふは、此後のことなり、死するまで勤むる心ざしなきものを、神儒佛の流れを學ぶとはいはれまじ、世界は數萬の事なれば、其宗旨〳〵の敎へを聞きたがへる人もあるまじき事にもあらじ、あやまりあらばはやくあらためて、賢にうつる事をいのるものなり、ふつゝかなる人の、我したり顔に人を見下し、欲心のみふかくして、形は人なれども、心はさらに人にあらずたとひ口上姿は佛菩薩や貴とき聖りに似せりとも、地獄の巢守りとこれをしるべし。

貞純親王の曰く、天道はと此方よりなす、人ごとに天道にまかすといふは道なし、人事を勤め〳〵て後に、天道に任すべし、人事を勤め行はずして、よからぬ

宗には止觀といひ、眞言宗には阿字本不生と云ふ、禪宗には本來の面目と云ふ、念佛宗には入我我入機法一躰といひ、日蓮宗には妙法と云ふ、神道には神明又は自己の尊神とも、申し奉るとかや、様々に名はかはれども、修行熟して至る所は一なり。

わけのぼるふもとの道はおほけれど
おなじ雲ゐに月を見るかな

此の心をしらんとおもふ人は、常々心靜かにして清座を好みて、よろづの音聲を聞く者は何者ぞ、是れ何者ぞと明け暮れ捨ておかず、尋ねなば、終には其主に尋ねあたるべし、此要めをしらざるもの、たとへ萬卷の書をさとし、そらんじよみ申すとも、何の益かあらんと、古人も、のたまへり、一子出家すれば九族天に生ると申傳へしも、自性を得心して、平常行ひまつたふする人の事なり、聖人は政事の鏡となり、佛は迷ひを解くの鏡となり、神は正直の鏡となり、神佛聖人は皆天の一理に歸しおはりたまふにより、日月星辰森羅萬象と成て、古往今來おこなひたまふ、よつて矩をこえず、神道には唯一、儒道には一貫、佛道には三界

れども、我等ふつゝかにして、中々これぞと落着しがたし、我思ふは、是れ程德の備はりたる仁、何國にあるべくや、此所にて取り得ずんば、一生自性を得る事あるまじくとおもひ、堺町姉が小路上る町木村平助と申す人、其節石田先生の門弟也、此座敷を取り仕切り、これにて修行いたすべきよし、平助夫婦もろとも進め申すにまかせ、二疊半のざしきに取り籠り、食を斷ち、はんぎりに水をくませ晝夜水をあび工夫いたし、心を盡し候所、身もつかれ、ぼうせんとして居たるとき、そよ〳〵と吹來る風に、思はず我身を驚かす所にて、古今變滅にあづからず全體そのまゝの我れなる事を、ほうほつと知る所あり、在り難き事も面白き事も此上なき事決定せり、大高恩の父母は我身にそうて、諸共に守りの神と成りたまふ、親の心を眼前に拜する事のありがたさは、骨髓に徹しけり、一心の門を開けば、法界の草木、國土佛といふも面白く、柳はみどり花はくれなゐ、おのれ〳〵が法をとく、實に面白き天の氣しきかな、信心堅固に、修行の功積つて、忽然とひらくことあらば、闇夜の忽ちに明け、一天照然として明らかなるが如し、すべて神儒佛ともに、自性得心するを要めとす、先づ佛法において云ふ時は、天台

つくし、見たること、筆言葉にもつくしがたし、或る時は夜な〳〵人しらぬやうにして、川へ下りて水ごりをとりて、神々を祈り見ることもあり、智識とあればあなたこなたと參禪したる事もあり、其外難行苦行さま〴〵心をつくし見れども是れぞと思ふしるしなし、我れ思ふは、道を敎へ悟らしくるゝ人あらば、身命なげうつて自性得心したく思ひ、心を苦しむをりからに、父におくれなげきてもかへらぬ事の、かなしさはなみだにむせぶばかりなり、其上病身になり、家内の者ども打寄り、相談して、京六角堂の前に店をかり、これにて暫く養生と申す、其所に居り、我れ悟道して、父母の成佛を眼前に見れば、今命は、をはるとも、何ぞ思ひ殘す事のあるべきやと、思ひわづらふ折からに、ある人來りて、堺町六角邊下る所に、石田勘平と申す儒者あり、よの稀れ人にて、無緣の講釋し、人を正道に導き給ふ人なりといふ、我れこれに因つて、まゐりて見れば、朝講は論語に夜講には山姥の謠ひのかうしやく、至つて有難き意味合、中々に窺ひがたき所あり、常ならぬ人の樣に思ひ、近付になり、打入つて行跡の樣子を窺ひ見れば、いかなる大聖賢人も、此上は在るまじくぞんじ、此人にたより、都に上り修行し見

らず、そのぶんにて藥師山へ遣し、自秀と申す尼の弟子となり、暫くやくし山に居り、心をみがく執行の志しは、うす〳〵して、唯だ經文をよくよみ、學者になり度思ふ心、だん〳〵募り候ても、我等愚昧にして、中々急々には至りがたし、誰れ有つて身にしめ敎へくるゝ人もなし、我れ思ふは、何とぞ能く敎へてくるゝ人あらば、行かんと思ひ、人々へ尋ね承り候所に、ある人近江國澤山邊、南泉庵桃谷といふ尼は、くがくにて、晝夜怠たりなく、何にゝても能く敎へくるゝ人なりといふ、我れこれを聞いて、自秀といふ師匠に申して暇を乞ひ、彦根正法寺桃谷と申す尼へ、經文習ひにまゐり、法華經禪錄など少々よみ覺え、無門關と云ふ書に、世尊昔在二靈山會上一曰、吾有二正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙法門、不立文字、敎外別傳、付二囑摩訶迦葉一と云ふ語を見て、予も悟道して迦葉におとるまじと思ひ、心をつくして執行し見れども、中々師なくては筋道あやうふしてしれがたし、何とぞしりたく思ふ心より一日一夜斷食をもして見たり、時齋もして見たり、石山寺へ七日七夜斷食して籠り見る事もあり、また茶をたつて見ることもあり、三千佛を三日三夜に拜し見ることもあり、そのほかさま〳〵執行に心を

し、かれこれいたすうちに、はや十四歳に成りぬ、世上より娘に致し度き由申來れば、其節父は何ともいはざるは、眷屬ども打寄り、我れに向つて申すは、先づ一度縁につき、何んどき成りとも歸りて出家に成り候樣にと申し含め候得ども、その返答せず、かくして夜の間に、髮を切りて居申せば、父を始めけんぞくども是を見てゐんにつけと申すものもなく成りぬ、とやかく申す內、はや十五六歳に及び、何とぞ〳〵髮をすらせ、けさ衣を着させ、山寺へ遣し修行させ下され候やうに父に願ひ候得共、その返答なし、暫くあつて父申すは、抑も汝が母におくれて、このかたを見れば、手習は嫌らひにて縫物はせず、一つとして女らしき事はなし、其上晝夜佛神をなぶり、そのいとまに男わらんべとおなじやうに、くるひ遊び、誠に汝はのうなし猿なり、さよふのもの、ねがひにまかせ尼寺へ遣し候とも、人三日は得置き申す間敷といへり、我れこれを聞くより思ふは、いつまで待ち候ふとも、けさ衣を着する時節は見ゑずとおもひ、夫れより父にかくして人々を賴み、つでを求め尼寺のやうすを承り申せば、京藥師山と申して、おとなしき尼寺ありと聞き及び、父に隱れてまづ尼寺へ行かんとす、父よびかへせどもかへ

道得問答

慈音尼兼葭著

卷之一

八歳にして母に後れ、夫れより菩提心に志すの段

抑も我れ八歳して母におくれ、其折柄母の追善に、天台坊主佛前に向ひ、晝夜法華經をよみ申せば、其坊主の後ろへ廻はり色々さまたげをなしてあそび候得ば、其坊主のいふは、これ〳〵じやまをしやるなや、是は汝が母の能き所へまゐられ候爲めに、讀み申す經文なりといふを聞き、然れば我れ坊主になり、母のために經をよみ、其功德を以て母のゆくゑを見んと、思ふ心だん〳〵つのり、魚肉をたべる心なし、出家を願ひ候得共、父を始め眷屬ども、中々請けごふ氣しきなし、何にとぞ出家に成りたく思ひ、四方八方の神々を、晝夜怠りなく祈り申せば、父其氣ざしを見て取つて、ゆるし心になれども、然らば出家になれと申す言葉もな

一子供の養育樣を敎への段。
一或武士養父實父口論に及ひ、互に刀を切り結ふ時、孝の道をつくす事を問ふの段。
一今日の勤め方能き時は、悟道の道に叶ふ事を問ふの段。
一人の明言を聞て、其者の前にては、惡敷云ふもの有るの段。

卷之三

一神主保食神の事を論ずるの段。
一或人來り、老子經の敎へを問ふの段。
一或町家の人來り、奉公人の親元より、何にても持參し來るもの、道に合ふ樣にして受け置く事を問ふの段。
一我身において、是より深き實情なき事を問ふの段。

卷之四

一凡そ人は萬物の靈の段。
一或武士方來つて、麒麟は聖人を知つて出で候や、否やを問ふの段。

道得問答惣目錄

巻の一

一八歳にして母におくれ、夫より菩提心に志すの段。

一易に孔子曰、善事を成す家には必ず幸ひ來り、惡事を成す家には必ず禍來るの段。

一或る學者來て、孟子の性善を論ずるの段。

一或る人來て問ふ、何れも儒經を學ばれ、心はいかほど宜しくなり候哉、否やを問ふの段

巻之二

一夫熟々思ふに、人は善に誇らず、物と爭はざる人こそ、あらまほしけれの段。

一其のかみ、孔子の弟子に、子張と云ふもの有りの段。

一女に三従の道ありの段。

朝に道を聞いて夕に死すとも、可なりの語を拜し、謹んで、齋戒沐浴して、筆を取り、愚がつたなきをも、かへり見ず、書き集めんと志す年は、

安永三甲午正月吉日

兼葭慈音尼自序

道得問答

序

論語讀みの論語しらずと申す事、我れかしこげに、人には常々申し聞かすといへども、さのみ我身の上ともおもはざりしに、時至てや、けふしも、爰に我身の上と、目をさまし、はぢ入りかなしめども、せんかたなし、我等不幸にして、二十二三の頃より病身になり、只だ養生のみに心をうばはれ、道にそむく事のみ多きは、哀しき事なり、せめては先生の申し置れし言葉の端々、覺え記したる反古や、又我等に人來りて問ふとき、先生答へのはづれ、覺え記したるあらましを以て、答へ申したる反古や、亦我等先生に問ふとき、答への反古や、又人來て問ふとき、愚が心にうかむに任せて、答へ申したる反古や、色々さまざま取集めて、予が非を知る少しのたよりにも、又は同志の門人童蒙初學の人の、此身このまゝにてたる事を知る、毫釐のたよりの端にもと、思ひ立つ頃は、十月二十二日の夜半なり、臥したる床をおきかへり、手洗ひ口そゝぎ、ともしびの本に立ちより、

慮は神慮なり、神の思召し入れといふ事なり、以下略レ之。
加護とは、神のおぼしめし入れふかく、人を護(まも)り玉ふがまに〳〵、守をくはへ玉ふといふことなり。

安永二年癸巳十二月

五樂舍塾藏

（コ）化身。うまれかはり。

戦々とは、こはし／＼、兢々とは大事／＼と、おそれつゝしむこと、淵の青みたるにのぞきかゝるがごとく、あやうくおもふは、薄き氷のうへをあるくがごとくして、漸く一生涯を、今日無事におはるぞと門弟の衆へ、しめし玉へり。

○熟々思ふに、神明遠く氏子の安全をはかり玉ふ事、前の儒佛の御言を以て知るべし、我が　神明聖人とあらはれ、仁徳の恩を蒙らしめ玉ひ、佛體と現じては、慈悲の恵みを施し玉ふ、誠に尊ぶべき事なり、人々など、此の御冥加をよろこび奉らざるや、然れば　上をうやまひ、五倫和睦ならん事を願はゞ、聊か神慮にもかなふべきものぞ。

此の日本にていふ時は、唐の大聖人も、天竺の諸佛菩薩も、皆神明の（コ）化身なりと知るべし。

人々などゝは、などは何といふ事なり、諸人何として、此御冥加を悦ばぬぞやといふことなり。

冥加とは、冥慮加護也、冥は神明の冥慮といふことにて、冥はくらきといふ字なり、くらきといふは、物のわからぬ事にて、はかりしられぬといふ義理なり。

積善之家とは、易坤卦、文言傳、孔子之語、坤道其順乎、承レ天而時行、積善之家必有二餘慶一、積不善之家必有二餘殃一、臣弑二其君一、子弑二其父一、非二一朝一夕之故一、其所二由來一者漸矣、由三辨レ之不二早辨一也、易曰履レ霜堅氷至、蓋言レ順也、

善とは、天命の本心に順ひ、身の私をせぬをいふなり、其善を積める家には、きつと吉事さいはひなど來るなり、又そのうちにて、身勝手私の惡事を積む家には、きつと凶事殃などが、いで來るなり、大きにいやなるわざはひをいへば、主ころしも、親殺しも出來かねぬとなり、この災害不斗出で來ることにあらず、其始め少しの惡を、それも大事か是れも大事かとて、其惡の積り、霜をひたもの踏みかためて氷となり、其堅き事大盤石の如くになりたるが如し、是れ其始めを錯るによれり、されば人ははやく、始めに善惡をよく辨まへて、かりにも惡事はせまじき事ぞ、とのいましめなり。

○曾子曰詩云、戰戰兢兢、如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一、

論語泰伯篇　曾子有レ疾、召二門弟子一曰、啓二予足一、啓二予手一、詩云戰々兢々、如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一、而今而後、吾知レ免夫小子、

(フ)煩惱。わづらひなやむこと。

偏一念心歇得處とは、臨濟錄之語、一念歇得とは、念をやめにするといふ事なり、是れ卽ち盤珪和尙の、一念不生の事なり、念をやめんとするとも、それはならぬ事なり、此の不生といふは、我等が常々とく所の、思案なしのことなり、思案の私しがさし出ねば、念がをこりても、かまひにはならず、其念は卽ち本心の光明ゆゑ、念がをこりたりとも、思もふとも、思はぬとも覺えず知らぬなり、諸人おしなべて、步行く時、あるくべしと思はねば步まぬなり、しかれども遂にあるく時、あるこ〳〵とおもふとは覺えず、それにてしるべし、其念は無念の念とも、正念ともいふなり、又菩提樹とは、卽ち無念なれば、道心なりといふ事なり、菩提は道といふことなり、樹とは樂しみ生々して窮りなきといふたとへなり、無明とは(フ)煩惱の事なり、一念思案の私しといふ地獄をつくる時、くらやみに沈みて苦しみ、草木のひたと芽の出るごとく、つぎ〳〵てやむひまなしとて、無明樹とたとへていふなり。

○易曰、積レ善之家必有ニ餘慶一、積ニ不善一之家必有ニ餘殃一、路由レ辨レ之不ニ早辨一也、可レ恐可レ愼、可レ恐可レ愼、

○儒云　善不レ積不レ足二以成一レ名、惡不レ積不レ足二以滅一レ身、小人以二小善一爲レ无レ益而弗レ爲也、以二小惡一爲レ无レ傷而不レ去也、故惡積而不レ可レ掩、罪大而不レ可レ解、

善不レ積とは、易下繋辭五章、孔子之語、善と雖ども、一度二度五度六度などの善事ありとも、それで善事らしきものにはあらず、つとめてやまず、ひたと年月をかさねて、忠義も孝行も、其外何事も、善事が積らねば、善事らしくも忠孝らしくも知れぬものなり、是れは人がしるといふ計りにあらず、我れとも善の功が見へぬなり、惡もまた同じ事にて、少しの惡事ありて、それにて、俄に人のとがめに逢ひたり、神佛の罰があたりたりするものにあらず、惡も段々とかさなりつもれば、忽ち大きに禍ひにあふなり、故に凡夫は少しの善は利益功能なしとして、益にたゝぬものとてせず、惡事はこれほどの事は、何の傷みさはりにもならず、害もなしとて、爲し、善は一向せずしで、惡はこれも少しじや、大事が〳〵とて惡をつみかさねるによりて、後には大惡にいたりて、つゝみかくす事もならず、いひわけのならぬやうになるぞとなり。

○佛云、儞一念心欲得處、喚作二菩提樹一、儞一念心不レ能二欲得一處、喚作二無明樹一、

(ケ)違背。そむくこと。

儒敎、一貫にして、人の生れ直なりと示し玉ふ。
佛敎唯一心にして、直心是れ道場と示し玉ふ。
唯一とは神道の惣名なり。
一貫とは論語里仁篇 子曰參乎、吾道一以貫レ之、曾子曰唯、人之生、直也とは、論語雍也篇、子曰人之生也直、罔レ之生也幸而免、唯心とは華嚴經に云、三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別
直心是れ道場とは、維摩經出、略レ之、
○神國之御敎を乍レ不レ及、可二心得一、古來より儒敎を以て世事を治め、佛敎を以て内心之欲を治む、併しながらこれ正直の助力なり、御大法なり、愼んで(ケ)違背すべからず、日本にては、儒敎は世事を守るとするゆゑに、外典といひ、佛敎は心内を主とするゆゑ、内典といふなり。
○それ人は、遠く前後をはかるべからず、唯一念の上をつゝしむべし。
一念の上をつゝしむとは、つれ〲草百八段、道人はとほく月日を惜むべからず、只今の一念むなしく過ぐる事をおしむべし。

り。

右、學者萬事之愼みは不中及候、たとひ何事にても、道理に合ひたるやうに思召し候とも、此五大事において、相背き候事は、堅くいたさぬ事と、御心得なされべく候。

○語曰、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言、

論語季氏篇　孔子曰、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言、天命は、我が身にそなはりたる本心は、天の賜はりたる處なり、其本心を愼み守らずしてはづかしめけがすは、天命を恐れぬと云ふものなり、大人とは我が身より目うへは皆大人なりと知るべし、それ上々は勿論、老人又は德ある人は、天命を以て貴きなり、私のことにあらず。聖人の言、これも直に天命の仰をきくといふものなり、然れば此の三ツつかねていへば、唯天命にあらざることなし。

（敎）

神明、唯一にして正直を尊び玉ふ。

一　神明を尊び、儒佛の敎によりて、直道を可ㇾ守事、
一　主君之心父母之心に相背き申間敷き事、
一　其の身之家業を大切に可ㇾ勉事、
一　驕吝をなすべからざる事、

御高札大略、親子兄弟夫婦を始じめ、諸親類にしたしく、下人等に至るまで、これをあはれむべし、主人ある輩は、各々奉公に精を出すべき事、
一家業を專ちにし、おこたることなく、萬事其の分限にすぐべからざる事、
一僞りをなし、又は無理をいひ、惣じて人の害になることをすべからざる事、
一博奕の類、一切に禁制の事、猶ほ此外は略ㇾ之、

論語泰伯篇、子曰如有㆓周公之才之美㆒、使㆓驕且吝㆒、其餘不ㇾ足ㇾ觀也已、註驕者吝之枝葉、吝者驕之根本、故嘗驗㆓之天下之人㆒、未ㇾ有㆘驕而不ㇾ吝吝而不ㇾ驕者㆖也、たとへ周公のやうなる才智藝能ありとも、人に驕ごりたかぶり、吝くして、財寶を身の私にせんがため、きたなくをしむ時は、みるにたらずと、孔子にくみいましめ玉へり、諺にも、傾城を買ふものは、常に五斗味噌汁を吸ふと、云ふことあ

論語述而篇　孔子諸の弟子達に對して、そちたちは、何ぞわれに大事にても有りて、秘密してゐるように思もふかなれども、吾が腹の中には何にもなし、身の行ひにあらはれて、外へみな出てあるなり、吾が身に見へわたりたる外には何にもなしとなり。

○子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉、

論語陽貨篇　孔子又子貢に告げ玉ふにも、天が何をのたまふぞ、皆まき出してあるものなり、言句は本心に蓋するようなるものなり、言句にとりつくと、即ち天心がおほはるぞと示し玉へり。

○此御語を以て、唯自得を示し玉ふ事を知り、學者異議を存んすべからず。

自得とは、道を學ぶ人、われと自身によく得心して、其得心より身に行ひ、本心にそむかぬばかりにて、外にのぞみなきをいふなり。

安永二年癸巳十二月

會輔中可レ守之大事

一　御高札之表者勿論、何事も御法度急度、愼而可ニ相守一事、

孟子梁惠王下篇、孟子の玉ふは、魯侯の我れにあひたしとおもひ玉ふも、天のなす所、又俄かにいやになり、止めたまふも、魯の君、臣下の所作にはあらず、皆天のはたらきにて、人間の力にあらずと示し玉へり。

（六八）辨惑（大路）

○聖人に秘密なし。

子曰吾有レ知乎哉、無レ知也、有二鄙夫一問二於我一、空々如也、我叩二其兩端一而竭焉、

論語（マ）子罕篇　孔子の玉ふ、吾れは何ぞ能き事をも、胸中に知りたくはへて居るやうにも、おもふものあらんが、吾が腹中に、知も德も何にもかも少しもある事なしとなり、鄙夫とは愚人をいふなり、もし愚人きたりて、吾れにもの問へば、吾が腹中のありたけをはたき出して、いふてきかすばかりなりと、仰せられしなり。

○子曰二三子、以レ我爲レ隱乎、吾無レ隱二乎爾一、吾無下行而不上レ與二二三子一者、是丘也、

（マ）子罕。お弟子の名。

（十）魯侯。魯の國のきみ。

○泰平之御高恩、主君、先祖、父母等之御恩、故先生之御恩、猶この外水火なければ存せられず。

食なければ飢ゆ、衣のなければ寒ゆ、家なければ病む、藥なければ病む、藥なければ斃る、人なければ便りなし、其餘は推してしらるべし、これを以て考ふるに悉く他の大恩なり、私の作爲ある事なし、學者我意を存すべからず。

病とは、家なければ雨露風濕などにいためられて、やまひとなるなり、斃るとは、世に醫者衆、藥といふものなければ、人死ぬまじき病も、なほらずしてたをれ死するなり、便りなしとは、諸人相互にたよりとなりて用事をとゝのふる事ならぬとなり、他の恩とは、天地萬物一切のものゝ恩をいふなり、佛道に他力といふゆゑ、一概に他力といふ事、聖人の道になきやうに思もふは、あやまりなり、他といふは彼といふ事にて、近思錄その外、語錄に、いづれにも用ゆることばなり。

○孟子曰、行或レ使レ之、止或レ尼レ之、行止、非二人之所一レ能也、吾之不レ遇二（十）魯侯一天也、

本心の仁德を全ふするにあり、更に他事なし。

聖門のをしへ、朋友は貴賤親疎厚薄少しも挾む事なきを宗ぶ、今會講を定むるは德と學との撰にあらず、障りすくなき人を以て其の　とすべし。

挾むとは、我れは貴きの、我れはとしかさの、我れは金持の、我れはものしりのと、いふやうなる一物を、胸のうちにだかへたるをいふなり。

撰ぶとは、彼の人は本心のとくがすぐれたの、彼の人は學問がよいのと、いふわけをもつてゑらぶにはあらず。

障りとは君父母にゆるされざる人、家業せはしき人、代りすくなき人、朋友知音すくなき人、似あはざる人、右五等の類。

凡そ此の如きのさしつかへある人はゆるすべし、輔仁、司會、友司もこれに準ずべし、衆皆和睦して、私を存すべからず、此の三等の人、世に所謂學頭にはあらず、進學の助をなす、通達の便宜となさんためのみ。

(五) 思　恩　(大略)

〱へらず、また潔白なることは墨つぼのうちへつけても、ちつともよごれもせぬものなりとのたひしなり、常の人にても、ひたとみがき果すれば、聖人にもいたるべきなり。

(四) 都講

○君子周而不レ比、(論語爲政篇、子曰君子周而不レ比、小人比而不レ周、註周(キ)普偏也、比(ノ)偏黨也、皆與レ人親厚之意、但周公而比私耳)和而不レ同、(論語子路篇、子曰君子和而不レ同小人同而不レ和、註和者無二(オ)乖戾之心一、同者有二(ク)阿比之意一)群而不レ黨の聖教を仰ぎ、五倫の和合を旨とすべし。

(論語衞靈公篇、子曰君子矜而不レ爭、群而不レ黨、註莊以持レ己曰レ矜、然無二乖戾ノ之心一、故不レ爭、和以處レ衆曰レ群、然無二阿比之意一、故不レ黨)

右の三語を以て考ふべし、群居には私なし、偏黨は私なり、聖人の教は私をさるのみ、謹而聖教をあやまることなかれとの事なり、畢竟會輔の大意、私欲をさり

(キ)普遍。あまねきこと。
(ノ)偏黨。かたよること。
(オ)乖戾。そむきもとること。
(ク)阿比。おもねりかたよること。

（ナ）俊秀。衆にひいでたること。
（ラ）琢磨。玉をみがくこと。
（ム）しらげ。（精）白米のこと。
（ウ）陽貨。お弟子の名。

性理を正しとは、人々發明し知りたる本心の道理間違ひなきやうに、互ひにあらため正しあひ、ひたすら本心にまかせて、身勝手の私をやめ、親へ孝行につかへ下たる人へ弟の道をつくす事をすゝむべし。

○（ナ）俊秀にあらざれば、獨學はなしがたし、常に良友の親交を離るゝは、（ラ）琢磨の功を捨るに似たり、四體放蕩にして身脩らず。おもふに、黒米も舂を加ふれば、終には（ム）しらげとなる。

水車みづからうすのみづからは
するともしらで米やしらげん

此古歌は　水車で米をつければ、人の力もいらず、いつとなく米と米とが、互にすれあひて白くなる事をいへり、卽ち人も良き友達に交りいるも、それと同じ事にて、ちからいらず、樂々として善人になるのとたとへ歌なり。

○語曰不レ曰レ堅乎、磨而不レ磷、不レ曰レ白乎、湼而不レ緇、

不レ曰レ堅、論語（ウ）陽貨篇、此の語は孔子みづからの玉ひしことなり、孔子のごとく、聖徳の至極にいたり玉ひし人は、いかやうの砥にかけてとぎても、なか

（ネ）令聞。よききこえのこと。

酒つぼといふ事也、此古歌は、さけずきの人がよみたる歌なり、しゝびしほになりても、くるしからず、酒のなかにつかりたしといひたる事なり。

○詩曰既醉以レ酒、既飽以レ徳。言レ飽ニ乎仁ー義一也、所ー以不レ願ニ人之膏粱之味一也、（ネ）令聞廣譽施ニ於身一、所ー以不レ願ニ人之文繡一也。

孟子告子上篇、孟子の詩經を引き玉ひし意味は、既に酒にゑひたるごとく、十分徳にあきみちし人は、心にすこしも恥かしき所なく、安樂なるゆゑ、其のうまみにかゆるものなし、膏粱の味とは、美味の事なり、然れば世の中のくひものは、なにほどの結構でも、望みなしとなり、令聞廣譽といふは、外よりのほまれにあらず、聖人賢人に恥づかしからぬ事をいふなり、故に人の文繡といふて錦の衣を着たり、衣住の美くしき事は、凡夫の所作なるより、聖人賢人の目には、何んでもなし、されば世間にうれしがる綺羅などには聊か願ひなしとなり。

（三）輔仁

性理を正だし孝悌を勸むべし。

(ツ)かなとき。かな字でかきしときあかしのこと。

四書、近思錄、小學、都鄙問答、齊家論。

○五經要文、多くは近思錄にあり、○孝經其外要文、多くは小學にあり、○四書近思錄小學此の三部、いづれも示蒙といふかた(ツ)かなときのほんあり。

(二) 會　友

平常書を以て、互に討論し、愼獨を專らとし、事理をきはむべし。

平常、敎の書物のうちの御言をよみ、討論といふて、はなしをいたしあひ人々獨りの身の上をつゝしみ守りて萬事の道理本心にそなはりあれば、其我が本心にたがはぬやうに、いたしならふべし。

○學者常に先哲の道話を聞かざるは、飮食の養を絶つがごとし、心志飢渴して意誠ならず。

思ふに干魚も、酒にひたせば全く醯となる。

酒瓶に此の身をつけてひたさばや、しゝびしほにも骨はなるとも、酒がめとは

會友大旨

手島堵庵

(一) 會輔

○曾子曰、以レ文會レ友、以レ友輔レ仁と

古人猶ほかくのごとし、況んや我が輩須臾も會友の助けによらずば、いかで、舊染の汚れを去るべき、つゝしんで怠るべからず。

論語顏淵篇、曾子曰以レ文會レ友、以レ友輔レ仁　註、講レ學以會レ友、則道益明、取レ善以輔レ仁則德日進、

いにしへより友によらざれば、道にすゝみがたし、故に曾子聖賢の書物にいでたる言を以て、友寄り集りて、その意味を物がたりしあひて、心をみがけば、心に恥づる事、日々にすくなくなりて、我が本心の仁德、そろそろ明かになり、段々道にもすゝむ事ぞと、示し玉ひしなり。

されば生土神(ウブスナノ)は、先祖父母の重んずる所、檀那寺(だんなでら)に於てもこれ又同じ、佛法は一方の守護たり、故に（タ）先考(せんかう)の歸依(きえ)するところ、聊か麁略あるまじき事肝要なり偏に歸するもの、我が國の道理不明なるは、三寶を（レ）蔑如(べつじよ)するにいたる、これ大に神慮に（ソ）辜負(こぶ)せり、民家たらん身は、わけて此の道理を能く辨へつゝしみて守るべき事也。

手島堵庵

（タ）先考。亡父のこと。
（ン）蔑如。あなどること。
（ワ）辜負。そむくこと。

に聞くべからず、道は近きにあり、必ず遠きを思ふべからす、士人の業は、われが知らざる所故に、沙汰に及ばず、只、等輩の衆へ志を述ぶる事しかり。

(二) 邪正の辨

世間に我れこそ本心を知りたれ、我れ則ち神なり佛なりなどゝいひて、神佛を麁略に思ひ奉るものこれあるよし、これはいふに及ばぬ、以ての外の(ワ)邪見なり兼て申す如く、本心を知りたりとおもふは、はや邪見の相なり、正道といふはよく、本心を辨へぬれば、毫厘も私なきゆゑ、上を上としてうやまひ、下は下として背かず、貴賤あきらかにわかりたるをいふなり。

一體といふは、私なき天理の(カ)渾然たるうへをいふなり、流行發用のうへにいたりては、神佛にも格別その位次第あり、眼前分明にあまねく知る所なり、されば我が先生の門人たらん人は、かやうの邪見ゆめ〳〵存ずべからず、我が國は神の御國なれば、殊更に神明を重んじ奉るべし、(ヨ)人倫を存するものは、父母の心を以て心とすべし、孝子は親の尊ぶ所を尊び、親の愛する所を愛するとあり、

(ワ)邪見。ひかみのこと。

(カ)渾然。ふかきかたち。

(ヨ)人倫。人のみちすぢ。

（チ）簡易。てがるのこと。

朋友に信實をうしなへば、其本心安からず、これ心徳を欺くゆゑなり。
家業は農工商とも、我が物好きにて其家生れしにあらず、不思議にしてうけ得たる家業なれば、これ天命なり、然れば我が家業を少しも麁略にしぬれば、則ち天命に背きて、大罪なり、恐れつゝしむべき大事なり、惣して家業を怠れば渡世乏しく、父母の心安からざるの第一なり、さればをのれ家業うとければ、其本心安からず、これ心徳を欺くゆゑなり、萬事萬端、少しも無理非道あれば、本心安からず、これ心徳を欺くゆゑなり。
家内一門、惣じて人交りに、われ和合をやぶれば、直ぐに本心安からず、これ心徳を欺くゆゑなり。
右逐一は事多ければ略せり、本心を知るの徳用は、此の外無量の日用なれども、皆心内に立ちかへり見れば少しも非理不善は本心合點せぬなり、其合點せぬ事をせず、いはねば、いまだ當らずといへども遠からずして大かたは道にそむく事すくなかるべし、いかなれば本心則ち大道なり、性善なるがゆゑなり、これ甚だ（ヲ）簡易にて、下民たる身につとまりやすき敎へなり、其近き以つて、ゆるかせ

なひ、鳥獸に似たるものにも成り行くなり、人の道は本心に生れ付きしものなれば、外に求むることにはあらず、故に大學にもみづから欺くことなかれ、欺かざれば意、誠なりと教へたまふ、みづから欺むかぬとは、本心の通りに内より發る正直の念に背かず、まけぬやうにするをいふなり、此の本心をあざむかぬやうに日日平常内に省みて、身勝手をせず、いはぬを、明德をみがくとも、心德をあらたにするともいふなり、孔子の曰く、「君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言、」下として敬畏を忘れ上に背けば、その本心安からず、これ德をあざむくゆゑなり。

主君へ臣として不忠あれば、其本心安からず、これ心德を欺くゆゑなり。

父母へ子として不孝あれば、其本心安からず、これ心德を欺くゆゑなり。

夫婦の間、夫は(リ)義和を失ひ、婦は(ヌ)貞順に背けば、其本心安からず、是れ心德を欺くゆゑなり。

兄弟の交り、兄友愛にたがひ弟(ル)敬宜をわするれば、其本心安からず、是れ心德を欺くゆゑなり。

(リ)義和。義理と和睦のこと。

(ヌ)貞順。貞操と從順のこと。

(ル)敬宜。よろしくうやまふ。

會友大旨

緒言

（一）講義旨趣

石田先生、人を教ゆるは、其學を實にせんがため、初め先づ學者固有の本心のはしを知らせ、其明德の光を見うしなはざるやうに愼ましめ、日々に磨きて怠らず身を脩め、善に進みてやまざれば、終に心德の至善を成就することを旨としてさとすのみ。

抑も日々に心德を磨くとは、則ち日新の工夫をいふなり、新にするとは、古き垢を洗ひ去るをいふなり、本心を知りて見れば、心德元來新なり、赤子の時これが心の汚れたるものあらんや、垢とは（チ）人我なり、道は則ち本心なり、しかるに人我增長しぬれば、目は色に私し、耳は聲に私し、鼻は香に私し、口は味ひに私し、身は勝手に私し、此の私が意地と成りて、本心をくらませて、人の道をうし

（チ）人我。がまんのこと。

(シ)切瑳琢磨。玉を作るに、あらたまを、切るが如く、瑳みがくが如く、琢つうが如く、磨とくが如く、せよとのこと。

(ス)羿。人の名、弓の名人。

らひなさりませ、又本心を合點なされたる御人々は、見聞に付ては、御生涯の御工夫に相成まするゆゑ、不斷御工夫なさりませ、御合點の參らぬことをば、御用捨なく、御朋友方と(シ)切瑳琢磨なさりませ、

怠らず行かば千里の果も見ん、
牛の歩行のよしおそくとも。

孟子曰大匠不下爲二拙工一改中廢繩墨上、(ス)羿不下爲二拙射一變中其彀率上。

誰もみな心は父のかたみなり、
　　はづかしめなよ、おのが心を。
誰もみな此身は母のかたみなり、
　　疵をつけなよ己がからだに。

斯く思ひ取りて、本心にはづかしからぬ樣にとするがよい、忽ちに己が身を撫さするときは、心よし、捻るときは心惡し、歌にも

正直は心よくして跡もなし
　　不實のあとは氣にかゝるなり。

是故に、何事も正直にして、銘々の家業をも大切に勤むべき事で御座ります、其上、本心を聢と發明し、能々長養いたす中には、自ら勤めずして、安心の場合にも至ります、歌に

ほうろくの同じ火宅の中なれど
　　氣をいるもあり、ほうずるもあり。

返す〴〵も、見聞の二つより、能く〳〵御工夫なされ、善導の御方に聞て、御も

(サ)杣人。山にかせぐ木こりのこと

(サ)杣人のいつしか付けし斧のあと
　松はそれより雪おれとなる

譬へば七十年もあるべき松も、手斧の疵よりして雪折れとなり、六十年にて命をきられます、此の如く人の身も親々への事へ方あしければ、十年も十五年も親の壽命を縮める道理が御座ります、此處をよく／＼思ひ辨へ、身を愼む事で御座ります、歌に

撫でさすり大事にするも手焙の
　つめたうならぬ中でこそあれ

又斯くいへば、親々のなき御人は、道を學ぶに及ばぬかと思ふ御方もあらうなれど、中々さやうでは御座りませぬ、其身は卽ち御兩親樣で御座ります、天滿宮の御歌とて

父母も爰にいまそのますかとみ、
　惠みのかげをうつす此身ぞ。

かやうに心得ることで御座ります、古歌に

又成長に從ひ、行儀を敎へ、手習よ物讀みよと、御兩親の思ひ詰めなり、歌に

子を思ふ親の心は四ッ手駕籠
　しばしもやすむ息杖はなし。

かく親々の御慈悲心の凝りたまひたる同性の御心なるゆゑ、高恩ありがたきとも言ふばかりなき事なり、故に御恩報ずべきことなり、歌に

四ッ手かご、かくありがたき親の恩
　力を入れてになひかへせよ

是、我身の本を立かへり見て、其元を忘れぬやうにとすべきことなり、歌に

咲く花を歌によむ人譽むる人、
　さかせる花の本を知れかし

何につけても、元を知るべきが第一なり、其本を忘るゝゆゑに、不忠不孝となるもので御座ります、然るに敎へにも依らずして、うか／＼とするものは、不身持じやの、不行狀じやのとて、我儘と氣隨とによりて、親々を苦しめるといふは、さて／＼殘念至極なことで御座ります、歌に

畢竟我子成長の後迄も、無事息災に病なきやうにと、禱りたまふことにあらずや
其上、産にのぞめば九死一生の苦痛あり、歌に

　産むときは身ふし苦しく解けはなれ、
　　すでに生死のさかひなりけり。

斯く苦痛の中よりも、其子を心として居るゆゑに、産聲をきゝては、悦びたまふ中よりも、目鼻は固より手足の指まで、そろひたるを見たまひ、嬉しくおもひ、それ乳よ薬よと、世話手當、尿屎に穢れものゝ取扱ひに、長き月日を夜も晝も、母の手の離るゝ隙とては御座りませぬ、歌に

　寢てはぬらし、起ては乳に取付て
　　母のふところかはく間もなし

其中にも、立てよ、歩行よ物言ふやうになれかしよと、案じたまふにあらずや、歌に

　這へば立て、立てば歩行と親心
　　我身につもる年をわすれて、

主の身となりて我身はなかりけり
　　能くつかふるを忠臣といふ、
又親々に向ひ事ふるには、
　親の身となりて我身を忘れつゝ
　　能くつかふるを孝行といふ。
又夫に向ひ、婦の道には
　夫の身となりて我身を忘れつゝ
　　能くつかふるを貞節といふ
斯くの如く、我なければ、主從親子は固より、夫婦、兄弟、朋友の交りに至るまでも、一體の姿にして、主一無適ともありて、精一の道理にも合ふなり、若し又合點の參りがたき人々には、父母の實情をよく〳〵察し見るべし、先づ誰れにてもあれ、母の胎內に居る中より、父母の思ひの息む間はなし、さて父親は妻子の無事をと神佛まで、心の中に祈りたまふもあり、母は其子を心として、十月の程も晝夜に忘れず身の愼みより食事に至るまで、毒なるものは食したまはず、（コ）

（コ）必竟。つまりといふこと。

なりまする、其故は、凡そ天地の御惠みあるの意味より主親の御恩も明らかに知るに依て、不忠、不孝などの氣は忽ちに消滅し、富貴貧賤の迷ひもなく、萬物皆我に具はりたることをも知り、心は泰然と悦ばしくなりて、又は草木國土悉皆成佛なる譯などを知り、萬物は皆神の御姿なりとも知られ、萬事が大切になり、有難くなります、歌に

天地の中に生たる草も木も
神のすがたと見つゝおそれよ

かやうなる歌も、各、本心發明の後は、彼是道歌の意味、信實に味ひ見るやうになさるがよい、則ち本心を養ふといふもので御座ります、孟子には其心を存し、性を養ふは、天に事ふまつるゆゑんなりとある故に、本心の養ひが肝要の事で御座ります、我れなきことを知りたる上の歌に

扇のみとなりて我身はなかりけり
心と知るを心學といふ。

又御主人方に、御向ひ御事へなさるには、

（ケ）致知格物、知をいたして物にいたるとは大學の教をいふ。

雨霰、雪や氷を其まゝに

水と見てこそ解るなりけれ

かやうに合點して見れば、色即是空、空即是色と心經に見得たるも、面白きことなり、一休和尚も、其心を知りたるにや

死にはせぬ、どこへも行かぬ、爰に居る

尋ねはするな、ものは言はぬぞ

是等を又水中の氷に譬ふれば、萬物皆氷の浮きたるが如し、歌に

今とける、どこへも行かぬ、爰にある

打たゝくとも音はせぬなり。

それもの言ふは、氷を打て音のするに同じ、しかも氷の解けたる水去る所もなく不來不去、心とするべし、されば其儘に身なきことを知りて後に、六根につきて、見聞覺知、それ〳〵に問答の旨あり、（ケ）致知格物の窮理より、心の虛靈、知覺の道理までも明らかにして、言語文字にも及ばざる心法なり、是心を知るときは、行ひ易き道なりと、先師仰せ置かれまして、本心に逆ふことは、先づ少く

意なく必なく固なく我なしとて聖人のこと。

殺して以て仁をなすことありとも、又は仁者は壽(いのちながし)ともあるなり、歌に

仁と義と勇にやさしき武士は

火にさへやけず水におぼれず。

此燒けず、溺れざるものは何ものぞや、これ我が身の事にはあらず、尤も身はなきもの也と理窟(りくつ)めきたる歌に、

引よせて、結べば柴のいほりにて

とくればもとの野原なりけり

又は古歌に

雨霰(あめあられ)、雪や氷とへだつれど

落つれば同じ谷川の水

これ等は、其理窟にあたるなりと思ふ推量惑(すゐりやうまど)ひの歌なり、我身なきことを自得(じとく)したる時は、

引寄せて結びし芝の庵をも

解(と)かで其まゝ野原なりけり

にて見るべきの理なきこゝを、然らば、音を聞くも耳にあらず、又胸中にもあらず、此眼耳胸中ともに舍て見るものは何ものぞ、聞くものは何ものぞと、頻りに工夫すべし、發明することならば、師に參して研究すべし、糺しを受くる所なり尚ほ口傳の歌もあり。

○さて爰において、本心發明ある時は、我身のなきことを知らるゝなり、然れども身を持ながら、無と知るは、疑はしきなりと思ふ人あるべし、なれども全體、人皆身心ともに我が物にもあらず、如何とならば、或は此身老年にも及びて、身動かしも不自由なれども、我儘に、若盛りの姿を留めても、置かれざるにあらずや、兎も角も、まづは父母よりの預りものなり、其上に此身のなきことを知るときは、大安樂ともなるなり、一休の歌に

若い衆よ命おしくば死にめされ
一度死んだら二度は死なぬよ

斯の如く、二度死なぬといふは、不生の佛心となりて、無量壽佛と活きながら、一體心となりたるをいふ也、又儒にしても、(ク)意必固我なしと、又仁人は身を

(ク)意、必、固、我、

（カ）迷悟。まよひとさとりのこと。

（キ）默す。だまること。

替りたる事はなし、又は貴賤高下賢愚もなく、博學多才も、鈍才文盲も、老若男女も、知不肯（カ）迷悟もなきことなり、其扇を何ものが見るぞと問ふより、人皆目にて見ると答ふれども、それにては貫ざることなり、如何となれば是を暗中に差出しては、目あれども見ること能はず、これによりて又心にて見るべしと答ふ又問ふ、其心は何れにありやと問ふに、皆胸中を思ふのみ、答ふること能はずして（キ）默す、則ち之を思惑自力心或は意ごゝろといふ、又は人心とも云ふ、神道にて穢れ不浄心と名づく、惣じていへば、迷ひの心といふなり、歌に

心にもあらぬ心をいつの間に
　我が心とやおもひ初めけん

其胸中にあるやうに思ひ染めたるは、譬へば幼少の頃より見たり聞いたりしたる處の影法師の胸の中に殘りてあるが如きものなり、曾て胸の中より見るものにはあらず、若し又ありと思ふ人には、扇は尋ねぬなり、汝がおもひにて、汝が胸中を見よ、腸の色より一日に食ひたる所の種々のものあらん、如何なる形となれりと、予に語るべしといふに、又默して惑ふのみなり、爰を以ても知るべし、胸中

答ふのみ、又愚かなるものは、胸の中に、魂とて、玉の如きものでもありて、人が死すれば、抜け出るやうにも思ひ答ふるもあり、然れども前にもいひし如く、思惑と名目に迷ひたるにて、曾て本心など、曉の夢にも、見たるにも、知りたるにもあらず、本心を知りたしと思ひたまはゞ名もなき處より工夫したまへ、歌に

もとよりも名もなきものに名をつけて
名に迷ふこそまよひなりけれ

此歌の如く、全體に名付けたるは、天に有ては理といひ、人に在ては性といへども、人の思案なき處も、天理の無心も、同體して大なることなり、胸中ばかりの小さき事にあらず、或人發明の歌に

心とはいかなるものと思ひしに
手にも取られず、天地一ぱい

これも、天地一ぱいとはいへども、天地と限りたるものにもあらず、其心を知るべきの工夫術あり、見聞の二つより入りて、我れなきの場合を發明することとありさて此扇を指出して何ぞと問へば、扇と答ふるなり、其處に聖人神佛といへども

（オ）藍草。そめくさのあゐのこと。

西行もおやまも牛も何もかも
土の化けたるいなりかいだう

此歌の意にて、萬物形あるものを、本を推して知るがよい、形とはかた土と云て土の形といふ意味じや、先づ爰に疊となりたるは如何に、知れたる通りに藺草なり、これも土なければ生ぜぬなれば、土の化ものなり、緣にしたる麻布の類ひ、染めたる所の（オ）藍草の類ひ、其外、家居諸道具となしたる松にても、杉にても栗も柿も竹も葛も、金銀銅鐵も、虫も魚も鳥も獸も、犬猫牛馬に至るまで、有情非情ともに皆同じ化物なり、そこで前の歌の意味じや、稲荷街道にて、土人形、手遊もの商ひするなれども、是と同じ事にて、唐土も大和も、天竺も、世界中が大古より居なりの化物街道と見るがよい、此身といへども、土の化物なり、これより各の心の沙汰に至るなり、先づ以て、是迄の處、心とは如何なるものにて、何れにありと思はるゝやと問ふに、皆人の答には、是ぞと聢とは存せねども、或は靈妙の虚靈不昧の、妙の、不可思議の、氣の、心の、面目の、主人公の、無一物の、無心の、或は感と應とのみじやの、出家などには四大と心得たりなどゝ、

(ウ)不審。わからぬこと。

(エ)遍滿。あまねくみつること。

らずや、故に天といふは、眼前より大空は、日本も唐土も天竺も、何れの果といふこともなく、唯一大の天なり、かく言へば、それなれば眼前の空も青くある筈なりとの(ウ)不審もあるべし、又此理を譬ふれば、水の流れの色を見て、案ずるがよい、淺い所は色なきがごとく、深き水は青く見ゆるに同じ、空も是に同じき道理なり、然れども心を虛無といふにてはなし、空中にも物なきなれども、天理充滿して陰陽五形の氣より萬物生々して不レ息ものなり、これ故に、心を盡し性を知り、天を知らねば、中々合點の參らぬ事なり、扨天を知るといふも、天心を悟ることにて、天理といふは目には見えぬなれども、其天理は空中にも、海の中にも、土の中にも、石の中にも、有情非情、草木又は諸道具の中までも、萬物に(エ)遍滿してあるものにて、譬へて言へば、砂糖菓子などの色形は、種々に替りても、甘みは同じ砂糖のやうなる道理なり、又は種々の鹽漬ものを鹽水に漬けたやうに、鹽の味は手にも取られず、目にも見えねど、染み込みてある如く、天理と本心とは、生貫なものゆゑ、天人一致ともいふて、則ち思案分別のない所を、心は天なりと申します、又形は地にして、全く土氣の化ものなり、歌に

御座らぬが、それが思案なしにて、本心の儘なる處で御座ります、然るを成長に隨ひ、何時となく世人の迷ひ話や、又は繪草紙などにて、魂の圖や、火の玉の書を見たり、或は噺を聞込みて、それより自身一己の思ひ付きにて、胸の中に案ずるものを、何ぞ凝固でもあるやうに思ふものなれども、胸の中には、決してなき事で御座りまする、道歌にも

年ごとに咲や花野の山ざくら
木をわりて見よ花のあるかな

是等にて、人々の胸の中にも、何も無いと思ふがよい、又鰻なども同じ道理にて腹の中に魂らしい固りはない、此虚空も同體と思ふがよい、それにつき、諭し申すなり、人は一箇の小天地、心は天、身は是れ地なりといふことあり、併し天と聞くと、大空の青きあたり、ばかりを、天と覺えて居るなれども、畢竟天を知らぬ故に、遠方の事と思ふものなり、全體眼前の空より則の天なり、譬へを以て言はゞ、魚の水中に居ながら、水を知らぬが如くにて、人は天に住みて天を知らざるなり、魚が水を呑みたり吐いたりするが如く、人も虚空を呼吸にして居るにあ

極意をも知らるゝといふ譯は、先づ神書に、天照皇太神の宣はく、人は則ち天下の神物なり、須らく、靜謐事を掌るべし、心は則ち神明との本の主たりとあり、又佛經（華嚴經）にて一二を言はゞ、三界唯一心、心外無別法、是は知れたる通り、心の外に別に法はなしといふ事で御座ります、成程これ迄に委しい講釋なども聞いて見ましたが、一心の外には何も無いことで御座ります、又心佛及衆生是三無差別、又は已身の彌陀、唯心の淨土ともありて、心を知れば地獄極樂の沙汰までも、サツパリと合點が行きます、勿論、儒書にては、心を盡すときは、則ち性を知る、性を知る時は、則ち天を知るともあり、又學問の道他なし、其放心を求むるのみともあるゆゑに、三道ともに心を知るが肝要で御座います、尤も皆人胸の中ばかりを意〳〵と覺えて居るなれども、それは唯だ思惑といふものにて、心とは此樣なる事と知りたるのにては御座りませぬ、全體人々生れの儘には、思案分別するものはないものにて、相互に、母の胎內を産れ出るや、否や、産聲をあげ、手足をも動かし、乳を飲みなどし、追々匍匐し、又は立ち歩行、四ツ五ツと年を重ね、育ち來れども、小兒の時は、胸の中にすこしも思ふものはなしでは

石門 心學初入手引草

參前舍　中村德水　校

偖當流學問の儀は、本心を知り明らめるを首と致しまする、なぜなれば本心を知らざれば、書物を讀み覺えたるばかりにては、聖人の實學が解し難う御座りますそれゆゑか、古今ともに博學多才といはるゝ衆にも、道を知らぬが多く御座ります、折角に神儒佛の教に入り、學問に志しながら、本心を知らぬといふは、惜しき事で御座ります、之を知らぬ故に、其身も修まらざるは、勿論、家內を收むることも致し難うなります、然るに石田梅巖先生、性理學の手引心法を御發明なされ、かく手近き教の立ちましたことゆゑに、假令（イ）文盲にても婦人衆にても、知りたいとの志さへあれば、直に知らるゝことで御座ります、其本心を知て見れば、既に銘々の止まるべき道を知り、其上に神儒佛の極意は素より、諸藝諸道の奥儀なども、合點の行くことにて、殊の外調法な道で御座ります、心を知れば、

（イ）文盲。文字にくらきにて、文字のよめぬこと。

程子曰、心也、性也、天也、一理也、自理而言謂之天、自稟受而言、謂之性、自存諸人而言謂之心、

張子曰、由太虚有天之名、由氣化有道之名、合虚與氣有性之名、合性與知覺、有心之名、

右二子ノ語ニヨッテ見レバ、石田先生ノ知性ト示シ玉フモ、堵庵先生ノ知本心ト示シ玉フモ必竟ズル所ハ同ジ事ト明ラメ辨フベキモノナリ。

文化十一年甲戌冬十一月上梓

京兆五楽舎藏版
不許出門人之外矣

養心の辨

手島堵庵述

堵庵先生曰、本心を養ふこと、いかゞ致すべきとの尋ね承りぬ、其養ひやうをいはゞ、本心は發明なされし如く、何とも知らぬ、もとの心なり、それにて、さばけぬ事なし、見ずして見、聞ずして聞、思はずしておもひ、何としてやら動くなり、嘗て造作なし、事なき時も事ある時も、唯この何ともなき心に背かぬばかりなり、背くとは本心のきらひの事を爲たり、行ふたりするをばいふなり、本心は何となく、私欲の身勝手が甚だ、きらひかして、少しも私欲をなし、おもひもすれば、忽ち腹の中に、何とかあるなり、此何とかある時、本心をやぶりたりと知るべし、然らば私欲の身勝手せず、思はねば我とも腹の中とも、外とも、本心とも、何とも、思はぬとも、知らぬとも、知らぬが如し、其時が養ひたりといふものなりと心得たまふべし。

佛道にては、應無所住而生其心にして、無心無念の本佛此中に安置して、九識八識四禪定、五位君臣の階級の修行も、（十一）趙州の無に、世尊拈花も、卽心卽佛も、非心非佛も（十二）乾屎橛も、其餘話則公案の工夫、皆此無二私案一の外に出です。

知性の辨

石田梅巖述

石田先生、門人に示して曰、性を知らんと思はゞ、卽今見たり、聞たりする所の主は、是何者ぞ、行するものは何者ぞ、坐するものは何者ぞ、臥するものは何者ぞと、急々に眼を付けて見るべし、如是たゆみなく、年久しく功をつまば、後には、見聞覺知行住坐臥をなすの主を見得することあるべし、是卽自性なり、自性を會得すれば、只氣ありて動くばかりにして、おのづから道は我と一致ならむ。

（十一）趙州。人名。

（十二）乾屎橛。佛語。かはきしくそよせる木のこと。

(九)鄭聲。鄭は地名、いやしき音樂のこと。

(十)天淵。へだての遙なるにたとふるなり。

箇定虚底、其實道不離乎物、離物則無所謂道、故擧門の學無一不實、老氏清虚厭事、佛氏屏棄人事、故に強て老佛の説を持來て、牽強附會の説を立るは、皆老佛に淫するの徒にして、所謂、惡紫之奪朱也、惡(九)鄭聲之亂雅樂也の類なり、又吾が石田先生の曰く、凡欲澄徹于己心地、則佛教亦然也、至如修身齊家治國平天下、非儒教獨何乎、又曰如儒與佛論理大近而難分、論行則(十)大淵不啻、佛氏持五戒、我儒行五倫、因其儒、而爲佛而後爲有弊、故に儒佛の二道至りて極るところは、唯一理にして教へ導くの法術は大に異なり、然るに法に泥んで俗家にして出家の眞似するに因て、流弊となる足下熟々察焉。

三聖一理無私案之圖

此無私案之中、

神道にては、守混沌之始と云も、此私案なしの位なり、故に私案なければ、則ち内外清淨にして、天御中主尊及び八百萬神、悉く降臨鎭座し在せり、儒道にては主一無適にして大學の明德、論語の一貫忠恕、克已復禮、中庸の中和、孟子の浩然の氣皆此中に備れり。

(七)四書六經。四書は大學、中庸、論語、孟子、六經は易經、詩經、書經、禮記、樂記、春秋なり、樂記は今纔に存して禮記に入る。

(八)異端。儒敎の外の道のこと。

術の要として、其餘心性階級の論なし、然るに、佛氏心性を論ずる如き、六識七識八識九識或は四禪定或は五位君臣等の階級を立て、又は圓頓觀心十法界を圖して、初學を敎導す、其說至て精密なり是以て見れば、凡て聖敎心性の論、佛氏に比すれば麁略ならん乎、如何。

余答て曰く、是れ何の言ぞ、是れ何の言ぞや、足下未だ聖敎に通せざるが、夫れ堯舜執中の格言より以來、宋朝の諸賢に至るまで、聖敎の精密なること、(七)四書六經其餘宋朝程朱の書を觀察して知るべし、何ぞ佛氏の說を主張して聖敎を覺知せんや、若し佛氏によらずして、聖敎覺知ならざると云はゞ、佛敎は後漢の明帝の時、初めて中華に入り禪宗は梁の武帝の時達磨始めて中華に來るにあらずや、然らば漢梁以前、堯舜禹湯文武周公孔子顏子曾子子思孟子の如きは、聖敎麁略にして、心性持敬の論なしと云てよからんや、僅に鄕黨の一篇に於ても悉く聖人の持敬にあらずや、然らば聖敎何ぞ佛氏によらん、朱子曰、(八)異端虛無寂滅の敎、其高過二於大學一而無レ實、又曰知自是知、仁自是仁、孔門敎レ人、先要下學者知二此道理一便就二身上一著實踐履到中得全無二私心一渾是天理處上、又曰道非下是外二事物一有中

孟の要約、生知安行の聖人も、下學上達の君子も、唯だ是の私案なしに成遂て、萬事裁制するの外餘蘊なし、如何となれば、私案なしに成遂たるは、仁の圓無堵なり、萬事を裁制するは、義の宜きなり、故に私案なしに成遂たるは、仁義の德成就したるなり。

蓋、右の如く述る時は、容易に似たれども、左にはあらず、いかにも、一旦私案なしの位を修行工夫の功を積て見得すれども、其後知行の二つを兼て、日を積み年を累ねて、間斷なく省察存養して、成遂ることは、至て難し、語曰（六）回也其心三月不㆑違㆑仁、其餘則日月至焉而已矣と、孔門の諸賢も猶斯の如し、況や今時昏愚庸劣の者に於てをや、故に、聖人必曰㆑正㆓其心㆒、而必先誠㆑意、誠㆑意必先致㆑知、其用㆑力次第如㆑此、然後可㆘以得㆓心之正㆒而復㆗本體之虚㆖亦非㆓一日之力㆒矣、書曰、非㆓知㆑之難㆒、行㆑之惟難、と吾黨の諸子其れ焉を思へ。

私案なしと說けばやすきに似たれども
　　己れに克つのかへ名なりけり

或友余に說て曰く、今足下堵庵先生以來、私案なしの地位を見得するを以て、學

（六）回。顔子の名。

事一者也、是私案なしに成遂せて萬事を克く裁制するの位なり、論說には、克レ己復レ禮とあり、朱子曰、克勝也、己謂ニ身之私欲一也、復反也、禮天理之節文也、必有下以勝ニ私欲一而復中於禮上則事皆天理、而本心之德復全ニ於我一矣、是れ私案なしに成遂たる位なり、又曰、一貫忠恕とあり、朱子曰、聖人之心、渾然一理、而泛應曲當と、渾然たる一理は私案なき也、泛應曲當は萬事裁判する也、又曰、盡レ己之謂レ忠、推レ己之謂レ恕と、己を盡すは私案なし也、己を推すは萬事裁判する也、是又私案なしに成遂たるの位なり、又曰、無レ適也無レ莫也、義之與比とあり、適莫なきは無ニ私案一なり、義之と與に比ふは、萬事を裁制する也、中庸に中和とあり、朱子曰、喜怒哀樂情也、其未レ發則性也、無レ所ニ(二)偏倚一、故謂ニ之中一、發皆中レ節、情之正也、無レ所ニ(三)乖戾一、故謂ニ之和一、是れ中は私案なきなり、和は萬事を制裁するの位也、孟子に養ニ(四)浩然之氣一とあり、朱子曰、浩然盛大流行之貌、氣卽所謂體之充者、本自浩然失レ養故餒、と程子曰、天人一也、更不ニ分別一と、浩然の氣、乃吾氣也、養而無レ實、則塞ニ乎天地一、一爲ニ私意所レ蔽則(五)欿然而餒而知ニ其小一也と、是れ私案なしに成遂て萬事裁判するの位なり、此の如く學庸論

(二)偏倚。かたよること。

(三)乖戾。そむきもとること。

(四)浩然。かぎりなく大なるかたち

(五)欿然。あきたらぬこと。

（ツノ二）五氣。水火木金土の氣をいふ。

（ツノ三）凝聚。こりかたまること。

（一）槁木。かれきのこと。

（ツ）易に曰く、天一水を生じ、地二火を生じ、天三木を生じ、地四金を生じ、天五土を生ず、是の如し、（ツノ二）五氣（ツノ三）凝聚して形體たる也。

（ネ）詩に曰く、予れ明德を懷ふ、聲と色とを大にせず。

（ナ）詩に曰く、上天の載は聲もなく臭もなし。

三聖一理無私案の圖解

上河正揚述

正揚謹考に、右無ニ私案ーは、程子の所謂無ニ私心ーのことなり、近思錄に有レ人說ニ無心ー、伊川曰、無心便不是、只當レ云レ無ニ私心ー、注、苟欲ニ無心ー、則心一切絕ニ滅思慮ー、（一）槁木死灰而復可、豈理也哉、故聖賢未ニ嘗無心ー、特是心之所レ存所レ用者無レ非下本ニ天理之公ー而絕中乎人欲之私上耳、故に私案なしは、主一無適にして持敬なれば、即ち本心のまゝなり、本心のまゝなれば、天理のまゝなり、是を大學に明德と云ふ、朱子曰、明德者、人之所レ得ニ乎天ー、而虛靈不レ昧、以具ニ衆理ー而應ニ萬

(リノ二)衷。此語書經湯誥にあり、註に衷は、善なりとあり。

(チノ二)六根。眼、耳、鼻、舌、身、意、をいふ。

(リ)書に曰く皇たる上帝、(リノ二)衷を下民に降すと。

(ヌ)中庸に曰く、天命之を性と謂ふ、性に率ふ、之を道と謂ふ。

(ル)大學に曰く、明德を明かにす、朱子曰く、明德とは、人の天に得る所、而も虛靈にして昧からず、以て衆理を具へて萬事に應ずる者なり。

(ヲ)古人の偈に、一念生せず全體現す、(チノ二)六根纔かに動かば雲に遮らると、又偈に、這輪の心鏡元と塵なし、塵に因て照し難し本來の眞、塵盡き鏡明かにして一物なし、自然に現出す法王身と。

(ワ)此思とは即ち私案なり。

(カ)孟子曰く、學問の道他なし、其放心を求むるのみ。

(ヨ)傳心法要に曰く、心本と妄なし、那ぞ得ん心を起すを、更に妄を認むることを、汝若し心を生し念を動さゞれば、自然に妄なし。

(タ)程子曰く、仁者は天地萬物を以て一體と爲す、己れにあらざることなき也と。

(レ)横渠先生西銘に、天地の塞は吾が其體、天地の帥は吾が其性。

(ソ)孟子曰く、形色は天性なり、唯だ聖人にして、然して後、以て形を踐むべし。

(ホ)華嚴(經文(きやうもんの名)

(ヘノ二)浮屠。釋尊の一名。

(ヘノ三)澄徹。すみとほること。

(ヘノ四)籃輿。かごとこしのこと。

(ヘノ五)黎庶。人民のこと。

(トノ二)歸。きちやくてんのこと。

(ホ)華嚴に曰く、三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別と。

(ヘ)石田先生曰く、總て天地の形を觀れば昭々然たり、歴々然たり、形態變に就て法あり、法は物に就て變ず、然れば則ち(ヘノ二)浮屠と俗家と混淆すること之あらんや、凡そ己が心地を(ヘノ三)澄徹せんと欲せば、佛敎も亦可なり、修身齊家治國平天下の如きに至ては、儒敎にあらずして、獨り何ぞや、譬へば江海を渉るが如し、舟船を以て利と爲す、陸行には車馬(ヘノ四)籃輿を以て可と爲す、然るに佛法を以て世法を理めんと欲せば、猶ほ車馬を以て江海を渉らんと欲するが如し、何となれば則ち自ら五戒を持ちて刑罰を(ヘノ五)黎庶に施すこと能はず、施さゞれば則ち政令立たず、政令立たざれば則ち民手足を措く所なし。

(ト)古歌に「分けのぼる麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」雨森東陽曰く、三聖一致、而も未だ敢て三敎一法といはざるなりと、易に曰く、天下(トノ二)歸を同うして塗を殊にす、一致にして百慮なりと。

(チ)石田先生曰く、夫れ儒佛の二道たる、枝葉を論するときは、則ち紛々として分ち難し、共に根本とする所は、性理を會得するを要と爲す。

（ ）氷釋。とけてよくわかること。

（イ）伊川。二程の一人の號。

見るにあらず、聞くにあらず、來て見するにあらず、聞かするにあらずと、年來の疑ひ、一時に（ ）氷釋し、端的に本心を見得せらるべし、此卽ち私案なしの地位なり。

安永六年丁酉春二月九日書

私案なしの說細釋

上河正揚述

（イ）伊川の曰く、無心便ち不是なり、只だ當さに私心なしと云ふべしと、故に私案なしは、卽ち私心なしの義なり。

（ロ）播州網干了門寺に住す盤珪佛智弘濟禪師と號す、假名法語二卷を著す。

（ハ）傳心法要に曰く、法は本より不生、今も亦た滅するなし。

鑑智禪師信心銘に曰く、一心生ぜざれば萬法外になし。

（ニ）朱子曰く、夫れ天下に性外の物なし、而して性はあらずといふことなし。

也、元來夫人、體は地なり、其地といふも（ソ）天の固まり也、此目前の空は、天の固まらぬ處にて、固まりたるも、固まらぬも、同じ天なり、故に其天の固まりたる（ツ）此體を捻ると、忽ち痛きにあらずや、又心は目には見えねども、少も無理すると心がねぢれて苦しむ也、然らば何も無といふべからず、かやうに少しも背かれぬ、明らかな本心が、身に備はりある也、されど（ネ）色形もなく、（ナ）聲臭にも顯はれず、有とも無とも覺え知らぬもの也、覺え知らねども、背かれぬもののゝあることを、猶ほ譬へを以ていふべし、夫人、面の無きものはなし、されど我には面があると平生思ふて居る人はなし、面は自身には見えず忘れて居れば、面はなきやうなるものなり、されど面は何分へも迯も去もするものでなし、本心も此と同じく、あれども覺えぬなり、故に本心會得の修行せらるべし、耳目はあれども、自身には見えず、忘れて居れば、此身は卽空なり、其空なるものが、物を見、聲を聞くは、（ラ）何で見、何で聞くと、品々の物を出し見、品々の物をたゝきて、其聲を聞きて唯だ信心堅固にして、如何〳〵と工夫修行せらるべし、かくの如くにして、工夫熟せば、忽然として、扨は物を見るも、聲を聞くも、往て

おもはぬ時、背で鳴く鳥の聲を雀の聲とも聞かず、犬の聲を猫のとも聞違へぬは聖人も佛も今日凡庸の人も同じこと也、然るに其本心を何として失ふて居るぞといへば、衆人幼稚の時から、人の噺、又繪草紙等に人魂が飛ぶの、火玉が出たの何のかのと、奇怪のことを見聞て、其より我が腹の内に、心といふて、何ぞ固りたる一物あるやうに思ひ馴れたるよりの間違なり、此を孟子は（カ）放心といひ、（ヨ）佛氏は此を迷ひといふ也、故に左樣なる一物はなし、（タ）元來天地の外には何もなし、故に人も（レ）天を以て心とし、地を以て體として居り、其外一切萬物も同じ事にて、固りたる物は皇地、空なる處は皆夫なり、故に目に見えぬ處は皆天、目に見えた所に皆地にて、必竟する處は、眼に見えぬ所と眼に見えた物と、知れた所と知られぬ所の外は何も無し、さて其天といふは、足下の鼻の先から、仰いで蒼々たる限り知れぬ處より地の下、人間の腹の内も、一切萬物の中にも入り、充たぬ所なきものをいふなり、かやうに說くと、世智辨なるものは、直くと心得て、扨は心といふは空じや、何もないものじやと、了簡するなり、それを私案といふ也、故にこの見えぬ所を、無い者と心得たる者を小人の、凡夫のといふ

なり、此虛を盤珪は不生といへり、不生とは（ヲ）一念不生といふ事にて、念の起らぬ先にて、一切の事がよく分り捌る位ゆゑ、これを靈明ともいはれしなり、然れば、靈といふは何も無いといふことではなし、有とも無とも、何ともかとも思はぬ時を靈といふなり、思ふといふは、本心からは一段後て出るものなれども、此も卽ち靈明の德用なり、然るに足下は盤珪の不生の說を聞て念を起さぬと善ことじやと（ワ）おもはれなば、もう其れは不生にはあらぬなり、それゆへ愚老はこの私案なしの位を知るべしと說けり、此私案なき時が、虛なる位なり、念は起りても、取合さへせねば障にもならぬ也、盤珪は衆人の修行工夫に苦勞するが笑止さに、直に虛なる本心のまゝで居よと示さるれども、今時の人は、氣が馳やすく、其まゝでは得居ぬゆゑ、愚老は私案なくして、萬事よく裁制位を一度知りたまへと說示せり、此私案なき本心に一序見得すれば、それからは私案なしで居ることが出來やすし、然らば足下も早く此私案なしの位を工夫せらるべし、此を自知せんと思はれなば、今愚老が說にしたがひ修行せらるべし。

夫れ本心は知らぬ先から、元來靈明なるものゆゑ、盤珪の說の如く、夫人何とも

心學

根本草

私案なしの説

思者本心ノ用而公也。
私案者人欲ノ用而私也。

手島堵庵述

或問曰、先生平日門人に示したまふに、(イ)私案なしの位を知るべしとあり、又(ロ)盤珪和尚は常に(ハ)不生の佛心で居よと説けり、此私案なしと不生の佛心と差ありや、又無きや、好しく説示したまはるべし。

堵庵曰、(ニ)天下同一性にして、佛氏に其を(ホ)三界唯一心といふ、故に儒佛の二教、各々教へ導く法術は、大に(ヘ)異にして、至り極る所は(ト)唯一理而已、前に私案なしの位と不生の佛心と二にあらず、(チ)其一なる譯を説きかすべし、(リ)夫れ、衆人皆親の生つけて下されたるは、(ヌ)唯本心一にして、他物は一も生附けたまはぬ也、其親の生つけたまふ所の本心は、(ル)虚にして靈明なるもの

を究め、同時に陽明學を修めて自ら朱王一致說を立てゝ一家言を成せり、門人西谷良圃以下從學者多く、著書四十餘卷に上りしが、其內、平民敎訓としては「心學五則」「心の花實」及び本書あり、因に記す布施松翁は名を矩道といひ、伊右衞門と通稱し、夙に堵庵及び同門高弟富岡某に就きて心學の薀奧を究め、居を京都松原に卜して松翁と稱せり、松翁道話、松翁獨語の著あり、廣く世に行はる。

子弟訓　本書は堵庵の父手島宗義の著にして修身處世の要を子弟に說きしものなり、宗義號を益岳といひ、華頂山下に住し、學を好み道を重んじ、商人夜話草、塵とり、及び本書等の著述あり、其子堵庵を出せし偶然ならずといふべし。

敎訓我が守　本書は高田重充の編する所なり、高田氏傳逸して知るべからず、然れども其深く心學を愛して之に歸依せしものなることは、本書の序言に徵して明かなり、思ふに本書は心學の適實なるを愛して其趣味を廣く世人に解せしめんため、將又己が日常の守りとせんとて編せし所なるべし、これ敎訓我守の名ある所以なり。

以上數書は皆予の所藏本を用ひたり。

大正八年六月　　足立栗園識

前訓、爲學玉箒、ありべかゝり、知心辨疑、坐談隨筆、朝倉新話、安樂問辨、

以上の數書は手島堵庵が機に隨ひて應用自在に心學の妙味を以て通俗敎化の說法を施せしものなり、何れも今尙學校家庭の敎訓書として參考に供するに足る、右の內前訓とは堵庵が男子七歲より十五歲まで、女子七歲より十二歲までの兒童を一堂に集めて修身處世に必要なる敎訓を施せしものなり、卽ち成人以前の敎訓といふを以て前訓と名付けしものとす、後ち門人其講話を集め、安永二年仲秋始めて上梓せしを本書とす。爲學玉箒は同じく堵庵が學問の必要を說きて修身齊家上に資せんとせしもの、ありべかゝりは人としてあるべきやうの修養說法なり、知心辨疑は本心を知り、道の眞を得る爲の要を述べしもの、坐談隨筆亦た道の要を坐談せし筆錄なり、朝倉新話も之に同じく、堵庵が朝倉街に隱居せしを以てかく名付けしものなり、安樂問辨は悟道安心の要を平易に說明せしもの、皆以て其辨舌の眞摯にして周到なるを窺ふべし。

道の栞　此書は石門心學の門人にして而も陽明學者なる柳泓鎌田鵬の講話を集めたるものにして古今內外の事實を挿み、特に平易適切に修身處世上の要を說きたれは、大に學校家庭の參考に供すべし、柳泓は南紀の人にして京都に出て曲肱庵と號す、夙に布施松翁に親炙して石門心學

爲め、編述せられしものなるべし、而も之を熟讀する時は、大に道德宗教の極致を究むべく、似非淺學者の企及すべからざる妙所あるを發見すべし、其文字の平易なるを以て輕々に看過すべからざるなり。

道得問答　本書は石田梅巖の門弟慈音尼兼葭の著なり、兼葭は近江の人、幼にして身を桑門に投じ、長じて法華經禪錄を味ひ夙に開悟する所あらんと欲するも得ず、偶々梅巖の名を聞きて之に謁し、其三敎折衷の心學を聽きて、大に社會に適切なると心性を見得するに妙あるとを看取し、終に其門に入りて悟道の素志を遂げ、又心學者として下層社會を敎化するに至れり、本書は自己の經歷と自家の意見と又師梅巖の說法とを併せ載せたれば、極めて多趣にして大に咀嚼すべき點多し、當時にあつて女流にして此堅志家を出せるまた異數とすべき所なり。

本書の記する所によれば、心學の江戶に傳はりしは中澤道二に始まるにあらずして、慈音尼によりて其緒を解かれたるが如し、ただ機未だ熟せず其隆昌を見るに至らざりしのみ、されば江戶の心學は此尼によりて種子を蒔かれ、中澤道二によりて其美花を開くに至りしものとすべし、本書の著はされしは安永二年にして道二が江戶に出でし時より正に四十年前に屬す、これ珍として本編に收容せし所以なり。

せしものなり、一名を石門性理學要錄と署せり、參前舍德水の校本なり、參前舍は京都なる心學の本舍にして德水は一時其舍主たれば、かく先人性理學の要を抄出し、之を校訂して公にせしもるなるべし、然れども其上梓せしや否やを知らず、本書は寫本によりて之を收錄したり、因に記す德水姓は中村、名を內藏助といふ、廣島の藩士なりしが、夙に藩命を以て、江戶に往來し、一朝石門心學に歸依し、終に參前舍に通學し、弘化四年九月推されて同舍主となりしものといふ、後ち其子宮本愚翁名は亥三二と稱し、廣島にありて今尙ほ心學の衣鉢を傳ふといへり。

會友大旨　此書は石門心學界の孟子ともいふべき手島堵庵の著なり、堵庵は京師の人、開祖石田梅巖を師として心學を修め、石門心學の價値をして世人に了解せしめたり、名は信又喬房、字を應元といふ、小字宗吉郞、長して源右衛門と稱し、後ち嘉右衛門と改む、晚年華頂山に隱居して專ら道を說く、故に世人呼んで東郭先生と稱せり、其逸事美談の如きは甚だ多きも今之を略す、平生世敎道德を思ふこと深かりしより、實踐躬行して自ら世の模範にらんと期せし如きは言行一致の道德家と稱すべし、本書は心學の性質を窺ふに於て、最も適切の好著といふべし、そは其道統を門人に知らしめん爲め、平易に三敎折衷の眞意を說明せるものたればなり、思ふに本書は廣く世人に諭さん爲めよりも、心學の門に入るものをして、其學の如何なるかを了解せしめん

解題

根本草 此書は手島堵庵の「私案なしの說」と、其語源の註釋、及び此說を更に細釋せる上河正揚の註解並に三聖一理無二私案一の圖解を載せ、添ふるに石田梅巖の知性辨、手島堵庵の養心辨及び此二說の略解を以てせり、何れも石門心學の性質を明にすべき捷徑書なり、文化十一年京都五樂舍の上梓に係り、門人外に出づるを許さずと附記せるを視ば以て本書の如何に珍襲せられしものなるかを卜すべし。編者は右の上梓本を磯正經なる人の嘉永七年七月謄寫せるものに發見し、之を刪剟に附するに至れり、本書收むる所左の如し

私案なしの說	手島堵庵
同細釋	上河正揚
三聖一理無二私案一の圖解	同人
知性の辨	石田梅巖
養心の辨	手島堵庵

心學初入手引草 此書は題名の如く、石門心學の要を平易に說明して、初學者の啓發に便

大日本風教叢書

第六輯